

もし織斑一夏がア
リー・アル・サーシエ
スみたいな奴だったら

ナスの森

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし織斑一夏が第二回モンド・グロツソの大会で誘拐され、少年兵に仕立て上げられたら———そんなお話。

※注：この小説は一夏の傭兵やっている期間を延ばす為、第二回モンド・グロツソの大会の時期を筈と別れて直後あたりに行っていたりと設定を無理やり改変しています。
活動報告に補足説明があるのでそちらも参照に。

目次

悔

プロローグ

歪み、その始まり

1

世界が歪むまで

IS学園

33

英国貴族の分岐点

70

寮でのひと時

81

そして『白』は『黒』へと染まる

95

奪われた雫

111

とある天災の決意

132

絶望は甘い罠

148

一人の少女の想いと、一人の少女の後

妄信の病

190

亡国機業

201

貴公子の分岐点

214

その眼で見た本性

226

フランス少女の選択

248

ドイツ少女の分岐点

266

聖戦、その幕開け

290

聖戦―断頭台へ連れられる少女たち

326

聖戦―次々と切られる火種

340

聖戦―止める鍵

363

聖戦―降臨せし神

401

聖戦—英国少女の狂乱—

420

聖戦—終幕—

444

戦痕、広がる戦火

束の間の静けさ

472

地獄を見た者の慟哭

481

この世界に、神はいない

495

復讐の少女

513

歪みの大源

535

懺悔、涙

559

プロローグ

歪み、その始まり

甘い、甘い、硝煙の匂いだけが己の嗅覚を支配する。

敵と味方との絶え間ない銃撃戦の音はついで止むことがなく、その度に散らばる鮮血の音符もまた次々と挙がつていく。

硝煙の匂い、血の匂い、絶え間ない銃撃の不協和音についてこの間まで平和に暮らしていた己の在り方を塗り潰されてしまいそうな錯覚に陥る。

—— ハア、ハア……。

息が上がる。

疲れからではない。それ以上の恐怖と、それと別のナニカが己の深淵から湧き上がり、それが何も考えなくさせる。

ふと、自分の前を歩いていた自分と同じ境遇の子供を一瞥する。

一瞥したその瞬間、その子供は何処からか飛んできた銃弾によつて頭を打ち抜かれ、撃たれた箇所から鮮血と、バラバラになった何かが噴き出る。

それが何かであるかは子供である自分にも理解できた。これは、確か脳みそ、という

奴だったか。

以前、姉と一緒に人体の構造についての本を読んでいた時に記憶していた。

まだ十歳の子供が、それを目の当たりにする。

「うっ……!?!」

少年に内臓ごと吐き出してしまいたくなるくらいの吐き気が襲う。

それでも、少年はそれをぐつと堪えて走った。

仲間が銃弾に打たれて死亡したという事は、自分達が今いる所は危険地帯そのものに他ならないのだから。

走り出した途端、自分が元いた場所に、何重にも重なった銃弾の痕がある。

あと一瞬でも走り出すのが遅ければ、自分は文字通り機関銃によって鉢の巢にされた所だった。

実際、少年の後ろには既に逃げ遅れて銃弾の餌食となって屍となった他の子供たちが何人も転がっていた。

だからこそ、少年は振り返らずに走った。

敵の銃撃が止んだ一瞬の隙を突いてこちらも手に持ったマシンピストルで壁の隙間から一瞬だけ発砲する。

数秒の間に何発もの銃弾を発射する機関拳銃の何発かは何かに命中したようで、向こ

うで大きな爆発が起こる。

——爆発の規模からしておそらくRPG……おそらく装填されたロケット弾に自分が撃った弾が当たって誘爆を起こしたようだ。

この場では何が起こるのか分からない。

故に、先ほどの自分の銃撃がロケット弾を誘爆させて自分と仲間の危機を救う事になるとは、少年はついで知る事などないだろう。

そう、この戦場においては、何が起こるのか分からない。

「ハア、ハア、ハア……！」

ただ手応えを感じる間もなく残り少なくなった仲間たちと共に駆ける。

自分もこの子たちも、何故自分達がこんな事をやらされているかなんて知らない。しかし、この場において生きたいという思いは皆一緒であり、故にこの場においてこの子供たちはまさしく運命共同体であった。

それでも、現実是非常だった。

少年たちの影が物陰から現れた瞬間、またもや銃撃の嵐が彼らを襲う。

何人もが頭を抱えながら、銃弾を必死に回避している中で、一人——自分だけが敵に撃ち返していた。

機関拳銃から放たれた弾の一つ一つは皆、大人の兵士たちに命中し、彼らは次々と息

だえていく。

「——ッ!？」

なんで、と少年はそんな己に困惑する。

ここは、他の仲間たちと同じように頭を抱えて銃弾を回避すべきではなかったのか……何故自分は進んで撃ち返したのだ？

人を殺した自分の手は震えている……当たり前だ。人を殺したのだ、自分と同じ人間を殺めたのだ。

罪悪感と恐怖が湧かない筈がない。

—— 本当に、そうか？

脳裏に、そんな自問自答の言葉が迸る。

—— この感覚は、震えは……本当に恐怖と罪悪感によるものなのか？
分からない、分からない。

分からない分らない判らない解らない分らない分からないワカラナイ。
どうして、何故。

ああ、どうしてこうなったのだろう。

織斑一夏という人間の歪みの始まりは、とある誘拐事件の時だった。

『IS』——正式名称『インフィニットストラトス』。本来は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツなのだが、製作者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、人類の夢と浪漫が詰まっていた筈の『宇宙服』は、各国の思惑により『兵器』へと変貌し、本来の役目を果たせぬまま使われてしまっている哀れな機械。

しかし如何に愚かな人間であろうともある一線を超えてはいけないと判断したのか、今では女性でしか乗れないスポーツ用の飛行パワードスーツとして落ち着いている。

彼の姉は世界的に有名なISの操縦者であり、そのISを用いた世界大会——所謂『モンド・グロツソ』の出場者であり、そして前の大会での優勝者であつたらしい。

両親に捨てられ、姉一人で弟・一夏を育ててきた織斑千冬は弟を日本に置いたまま開催地であるドイツ国に行くわけにもいかず、弟の一夏をドイツに連れて行つたままその大会に出た。

そして、観客席から姉を応援する立場であつた筈の一夏はあるテロ組織に拐われたのだ。

そのテロ組織は女性にしか操れないISが台頭した事によって広まった「女尊男卑」の風潮に反発する男たちによって構成された組織であり、故に、最強のIS操縦者「ブリュンヒルデ」として恐れられる千冬の弟であつた一夏は人質に取られたのだ。

そして一夏は、その組織の隠れ家の中で様々な暴行を加えられた。

「女尊男卑」の風潮に対する不満、鬱憤、それら全て男である一夏に向けられていたのだ。

——…痛い、よ。

体を縛り上げられ、体中に大量の痣を残しながら、一夏はただそう呟く。最早助けを請う元気さえも奪われ、ただ「痛い」と呟く他なかった。

「へっ、なんだ、もうギブアップかよ。情けねえ…ぺっ」

暴行を加えていた者の一人が、そう吐き捨てると同時に一夏に向けて唾を吐く。一夏は最早微動だにしない。ただ「痛い」と呟くだけだった。

「おめえの姉のような奴等がいるからな、俺らはこうして泥すすがれてんだよ、わかってるのかオイ！」

ドン、と横つ腹を蹴りつけられる。

痛い、いたい、イタイ——そんな思いを堪えて、一夏は呟いた。

——…姉、を…か…な…。

「ああ!! 何言ってるんだ、聞こえねえよ!」

——千冬姉を、バカにするな…!

「……ッ、女に媚びてんじやねえよクソ餓鬼がよお!」

また暴行を加えられる。

何度も、何度も、それでも一夏は決して屈する事はなかった。

例えどんなに痛くとも、これ以上の痛みを抱えている姉の苦労を思えば、こんな痛みなど苦でもなかった。

「チツ、弄り甲斐のない餓鬼だ。もつと……ッ！」

「まあ待てよお前ら」

その時、隠れ家の入り口から男のモノらしき声が響き、一夏に向けられていた暴行は止み、彼らは即座にその方向を向く。

そこには一人の男が立っていた。

年齢は大体30代後半から40代前半と言った所だろうか……荒く、くしゃくしゃな赤い髪、そして赤い顎鬚を伸ばした中年の男性。

「こんな餓鬼でも大事な人質だ。しかもあの『ブリュンヒルデ』の弟だ、もつと丁重に扱え？」

「し、しかし隊長。こいつは……」

そう言つて部下を窘める中年の男性であったが、部下は尚も食い下がる。

それを見た中年の男は鬱陶しそうに肩を竦めながら言った。

「やれやれ、お前らも難儀なもんだぜ……。女尊男卑？ いいじゃねえか、争いを起こすにはもつてこいの火種だ。それでこそ戦争のし甲斐があるもんだぜ」

「あ、相変わらずの戦争好きっすね……」

「傭兵つてのは戦つてなんぼだからな。さあお前らはどいたどいた。俺はこの餓鬼に用があつて来たんだ」

呆れながらいう部下に対し、中年の男は微笑を浮かべながらそう命じる。

男の言う通りに部下たちはそそくさと下がり、男はゆつくりと傷だらけの一夏へと歩み寄つた。

「よう坊主。悪いな、急に拐つたりしちまつて」

中年の男は座り込み、俯いている一夏の顔を覗き込むようにしながら言う。

一夏もまたゆつくりと少しだけ顔を上げて男の顔を見る。

——おじさん……だれ……。

弱弱しく、朦朧とした意識で一夏は男に問う。

「ああ、おじさんの事かい？ おじさんはね、戦争屋なんだ」

優しく、耳元で囁くように語り掛けてくるにも関わらず、その内容はこれ以上にならない程不釣合いな物だった。

——……せんそう、や？

「戦争が好きで好きで堪らない。人間のプリミティブな衝動に準じて生きる、最低最悪の人間なんだよ、おじさんはね。——そして、君もまた同じ穴の貉となる」

先ほどのような気さくのおじさんと言った風な雰囲気からは一転、男は獯猛な獣のような眼をしながら一夏の顔を窺う。

——……ッ!?

その、人の悪を凝縮したかのような凶悪な笑みを目にした一夏は、先ほどのような無機質の反応からは一転して怯えた表情となる。

この男は何だ。

この男は本当に自分と同じ人間なのかと、子供である一夏ですらそう思わせる程のモノだった。

「た、隊長……まさかソイツを……」

「慌てんなよ。仮にもブリュンヒルデの弟だろう。それに——見た所体もかなり鍛えているようだ、この餓鬼は使える」

凶悪な笑みを浮かべたまま、中年の男は一夏や部下たちに背を向けて去っていく。

「それにお前らだつて見たいだろう————— 大事な大事な弟が人殺しに染まった姿を見る、ブリュンヒルデの絶望に染まった表情をなあ……」

嘗め回すような口調で、男は去り際にそう言つて去つていった。

「ハア、ハア、ハアッ……!」

気が付けば、生き残っていたのは少年——一夏だけだった。

テロ組織に拐われ、こうして1年もの間少年兵として戦わされ続けた。

汚い悪事も色々やらされた、何人殺してきたかなんて数えるのも億劫だ。

今はただ、生きる為に戦う。

必死に銃撃を回避しながら物陰に隠れる。

上がる息を必死に抑え、自動小銃を抱えながらただ生きる道を模索する。

そう——どうすればこいつ等を殺す事ができるか——

「ッ、違う!」

一瞬、己の脳裏に浮かんだ思考を即座に破棄する。

自分は今、この場を生き残る事を最優先に考えるべきの筈だ。そうでなくてはならぬ。
い。なのに——なぜ生きる為に殺すのではなく、思考が敵を殺す事を優先してしま
うのか。

こんなの、自分じゃない!

——ああ、この血の匂いを——

「……違う」

——この硝煙の匂いを——

「……違う!」

——もつと——

「違う！ 俺は……！」

悲鳴を上げるように、拒絶するように、慟哭を上げるように一人残った少年は叫ぶ。そして、それは敵に位置を知られる結果となり、戦場では致命的な命取りとなる。

「あ……」

そして、少年は自分の過ちに気付く。

こちらを発見した敵の兵士が、此方に銃口を向けてきた。

それは少年、織斑一夏がここ一年の間に積み上げ、背負っていた咎をここで裁くかのような、裁いてくれるかのような、慈悲の銃口だった。

そう、これでやつと終われる……そう思った。

「えっ？」

銃声が鳴り響く。

だが、それは自分に向けられた銃口から発せられたモノでない事に一夏は気付いた。ドサ、と一夏に銃口を向けていた兵士が頭から血を出しながら前のめりに倒れた。

続いて銃声が鳴り響く。

それは先ほど自分達が戦っていた敵の兵士によるものではない。

即ち第3勢力の介入だった。



結果として、少年兵として戦場に駆り出されていた一夏は突如介入してきたドイツ軍によつて保護された。一夏を始めとした子供たちを少年兵として仕立て上げていたテロ組織もドイツ軍によつて壊滅。

組織のリーダーだった中年の男も身柄をその場で拘束され、ドイツ軍の兵士によつて射殺された。

どうやらドイツ軍の目的はテロ組織の壊滅ではなく、初めから「織斑一夏の救出」を目的として部隊を派遣してきたそうだ。

一夏が誘拐された事を知った千冬はモンド・グロツソの大会を辞退し、ドイツ軍の部隊に一夏の搜索を依頼した。

無論、世界的に有名なIS操縦者の代表格とも言える人物の頼みをドイツ軍が断れる筈もなく、一夏が見つかるまでの間、千冬がドイツ軍で教官を務める事を条件としてそれを受け入れた。

それから1年、少年兵として紛争地帯に駆り出されていた一夏をドイツ軍は見事に保護し、千冬もまたドイツ軍の教官の籍から外れる事となった。

「一夏、一夏！」

1年ぶりに弟と再会した千冬は、今までの厳格さなど嘘であるかのように、まるで親に甘える子供であるかのように一夏に泣きついた。

千冬は知っていた、この一年間、弟がどれだけの罪を重ねてきたかを、どれだけの血を浴びてきたかを、どれだけの人を殺めてきたかを。

他人から言われずとも、弟の身体に染みついた硝煙と血の臭いですぐに分かった。けれど、千冬にとつてそれは関係がなかった。

弟が自分の所に帰ってきてくれた——本当にそれだけでよかった。

一夏が姉の千冬に護られてきたように、千冬もまた弟の一夏にその心を護られてきた。織斑千冬という人間を千冬たらしめるその大部分、いや全てと言つても過言ではない、それくらい千冬にとつて一夏は掛け替えのない存在だった。

「ああ……一夏、一夏っ！」

「千冬、姉っ」

一夏もまた涙を流しながら千冬の腕の中で姉の名を呼ぶ。

お互いに離ればなれになったこの一年間は、それはもう永遠と呼ぶことすら生ぬるい程に長かった。

お互いの気が済むまで、二人の姉弟は気が済むまで抱きしめ合った。

そして、再会した二人は日本に戻る事となった。

一夏が見つかった今、千冬がドイツに滞在する理由はもうない。

ドイツもまた短い間とはいえ、千冬を教官に命じた事によるメリットは十分に得られたため千冬とドイツ軍の契約はこれにて解除となった。

日本に帰還した二人は久しぶりの故郷の味を吸い、その幸せを二人で分かち合った。

こんな時間がいつまでも続けばいいと、一夏は思った。

奥底に、妙なモヤモヤを抱えながら。



姉と共に無事（とは言えないが）日本に帰る事ができた一夏。

モンド・グロツソを辞退した姉の千冬はISの日本代表を降り、とある学園の教職に就く事となった。まだ20代になっていないにも関わらず、織斑千冬という人材は代表選手でなくなった今でもあちこちから引つ張りだこ。それこそIS関連の職場ならばどこからでも引つ張りどころであろう。

一方、一夏はというと、表向きはいつも帰りが遅い千冬に代わって料理、洗濯などの家事を請け負って、誘拐される以前の、いつも通りの生活をしていた。

それでも、頭の中から“あの光景”が薄れる事はなかった。

今でも思い出せる——あの血の臭い、硝煙の臭い……思い出しただけで吐き気を催す程の一年間だった。

今はそんな生活から抜け出し、こうして元通りの日常を謳歌する事ができた。

だが、そんな元通りの日常も刹那の間、長く続く物ではなかった。

一夏の姉である千冬はそれはもう世界的に有名な、いや世界一有名、そして最強のIS操縦者と言つても過言ではないくらいの選手だった。

それこそ日本の誇りであり、特に日本の女尊男卑主義を推進する女性たちからは神の如く崇められており、そんな彼女がある事をきっかけに代表選手から降ろされた。

その降ろされたきっかけの原因たる一夏に、彼女たちの矛先が向いたのだ。

矛先を受ける主な場所は勿論学校。

ISという存在が世の中に台頭してから5年余りが過ぎた頃、ISの発祥の地である日本はすっかりと女尊男卑の風潮に染まっており、一夏が通っていた学校もまた例外ではなかった。

一年間の間、少年兵として駆り出され続けた一夏は周りの空気に馴染む事もできず、人殺しの日々を思い出しては周りの生徒と距離を取り続けていた。

そして、周りの女子たちがそれをいい事に一夏をイジメたのだ。

小学生の虐めとはそれはもう質の悪いものであり、先生にばれぬよう、巧妙で狡猾なやり方で一夏をイジメ続けた。

それでも一夏はそれを我慢して受け入れた。

——これはきつと、一年間人を殺し続けた俺への罰なんだ。

姉の名譽を穢し、姉を心配させ、自分は人を殺し続けた。

だから、一夏は甘んじてソレを受け入れた。どのような陰湿ないじめを受けようと、ただ耐え続けた。

それをいいことに女子たちは更に便乗して一夏を虐め続ける。

一夏は自分がただ姉の足を引っ張るだけの出来損ないの弟と罵られても、ただひたすらに耐え、耐え続けた。

だが、それも限界が訪れた。

別に一夏の精神に限界が訪れた訳ではない。

子供ながらも一夏はどのような虐めであろうと受け入れる覚悟はできていたし、それは変わる事はなかった。

問題は、いつまでも虐めても何の反応も返さない一夏に業を煮やした女子たちはつい
に大勢で一夏に暴行を加えたのだ。

それが、彼女たちの過ちだった。

そもそも彼女たちは知らなかった。

織斑千冬が現役を引退するきっかけとなった事件、その事件で一夏はただ誘拐されただけではないのだ。

如何に子供といえど、一夏は一年間外国の紛争地帯でテロ組織の少年兵として戦い続けてきたのだ。しかも子供であるが故に物事の分別が未熟であった一夏にそんな事をするなど、愚の骨頂であった。

体育館裏の倉庫に連れられ、一夏はそこで女子たちの暴行を受けようとしたその時。

一斉に迫る拳が、一斉に迫る平手、一斉に迫る蹴りが、一夏の体に眠っていた『ソレ』を呼び覚ましてしまった。

少年兵として戦い続け、その記憶が染み込んだ身体。

それが、一夏の意志とは関係なく動いてしまったのだ。

女子たちは成す術もなくスイッチの入ってしまった一夏によって一方的に倒れていく。銃弾を回避し続けてきた一夏の身体に女子たちの拳が届く事などなく、女子たちは一夏に手も足も出ずに半殺しにされてしまったのだ。

故意にやった訳ではない。体が勝手に反応してしまった。

全てが終わった時、一夏はハツとなって周りを見渡した。……そこには、ただ半殺しにされて転がっている女子たちがいた。

そして、この出来事は教師を通して即座に学校中に広まってしまった。

無論、一人の男子生徒が大勢の女子に暴行を加えた事が問題にならない筈もなく、ましてや女尊男卑の世になりつつあるこの国なら猶更だった。

勿論、これは姉の千冬にも知られる事となり、一夏は指導室に呼ばれて説教される事となった。謝る相手は勿論、一夏に半殺しにされた女子生徒達の親、その代表の人間達だった。

中には女尊男卑推進派の国会議員の一人までいた。

なるほど、こんな親の下で育つたのであればそれに感化されて男を見下すようになるのも仕方のない事か、と子供らしくない考えをしながら一夏は親達に頭を下げた。

その場にいた千冬もまた頭を下げた。

さすがに千冬に頭を下げられては大人たちも何も言えなかったのか、あっさりと許してくれた。

しかし、戦場で鍛え上げられた一夏の耳には届いていた。

無論、それは千冬にも届いていた。

その内容は躰がなっていないだの、教育ができてない、男の癖に生意気だなどなど、親達の呟きが二人の耳には丸聞こえだったのだ。

そしてその夜の帰り、二人は沈黙したまま帰路に就いていた。

千冬は何も言わない。

一夏も何も言わない。

ただ重苦しい空気のまま二人は帰り道を歩いていった。

恐る恐る、一夏は姉の千冬の方を見上げる。

千冬はそんな一夏に振り返らず、歩き続けていた。……心なしか、拳が強く握られて

いる気がした。

——また、千冬姉に迷惑をかけちゃった……。

そんな罪悪感に見舞われていた中、千冬は足を止めた。

咄嗟に一夏もまた足を止め、千冬の方を見る。

千冬表情は一夏の目線の角度からは伺えない、しかし拳は先ほどよりも強く握られており、体中が震えていた。

「千冬、姉……？」

どうしたの、と一夏は心配しながら姉の名を呼ぶ。

そして、ふわり、と柔らかく、暖かく、そして冷たい感触が一夏の身体を包み込む。

千冬が一夏を抱きしめたのだ。

「……ない、すまない、一夏……私の、せいで……！」

千冬は一夏を抱きしめ、泣きながら必死に謝っていた。

一夏や世界の人達は知るよしもないのだが、今の女尊男卑の世を作るきっかけを作ってしまったのは他ならぬ千冬とその幼馴染だった。

確かに、ISという存在を世界に知らしめるためには世界に衝撃を与える大きな出来事が必要なのは千冬だって分かっていた。幼馴染の宇宙への夢を応援していた千冬はそれに乗ってってしまった。

白騎士事件……今から五年前に起きた、日本を攻撃可能な各国のミサイル2341発が一斉に何者かにハッキングされ、制御不能に陥った。突如現れた白銀のISを纏った一人の女性によって無力化された。その女性の正体とは何を隠そう、一夏の目の前にいる織斑千冬その人なのだ。

あの頃は幼馴染もいくら天才とはいえまだ世間知らずだった。ミサイルのハッキングなども本人にとってはほんの遊び心に過ぎなかったのだが、それを使ってでのISの宣伝が世界にどれだけのISの『兵器的価値』を齎してしまうのか、その幼馴染はまだ理解できていなかったのだ、無論千冬も同様だった。

本来は宇宙に飛び立つためのスーツとして世に出す予定だったにも関わらず、あろうことか開発者本人が起こしたその事件によって、ISの宇宙開発促進する役割としての側面が極度に薄れてしまった。

いや、問題はそこではない。

問題はそれによって I S は女性しか操れないという事実が今の「女尊男卑」の世を作り出してしまった。

そのきっかけを作ってしまったのは紛れもなく千冬とその幼馴染なのだ。

そしてその弟である一夏は女尊男卑を嫌う男たちから「I S 操縦者の筆頭である千冬の弟だから」という理由で八つ当たりを受け、果てには少年兵にまで仕立て上げられて故意でもないのにその手を汚す事になり、そして今、「自分達が尊敬するブリュンヒルデがその弟のせいで名誉を著しく傷つけられた」という理由で千冬を崇拜する女性たちからも虐めを受けている。そして、その事実に関心なく気が付かなかった自分がどうしようもなく嫌いだった。

一夏がこうなってしまったのは全て、千冬のせいだった。少なくとも、千冬自身はそう思っていた。

——どうして……千冬姉が謝るの？

——悪いのは、千冬姉に護られてばかりいる、俺なのに……。

しかしそういつた事情を知らない、一夏はただそんな疑問を抱きながら千冬の腕に抱きしめられていた。

「ごめん……一夏、ごめん……！」

一夏を抱きしめる千冬の腕の力は、より一層強くなっていた。

その日の深夜、暗い街中を一夏はただ一人歩いていた。足を止め、ゆっくりと先ほど出て行った家を振り返る。

あの後、千冬は泣きながらベッドに寝入ってしまった。

食事が喉に通らない気分なのか、千冬は一夏に合わせる顔がないまま、悲痛な表情で眠ってしまった。

仕方ないので、千冬が好物の食事を作り置きして、一夏は家出をした。

さっきの帰り道、何故姉があそこまで自分に謝ってきたのか分からない。

しかし一つだけ理解した事があった。

——もしこれから先、自分が姉と一緒にいては、姉は更に苦しむだろう。

理由は分からない。

女手一人で弟の面倒を見てきたあまり、それで嫌気が刺した……といった具合ではない。少なくとも一夏が知る千冬ならば間違ってもそんな事は思わない。

ならば、姉は何故自分に罪悪感を抱いているのだろうか……罪悪感を感じるべきは、自分の方なのに、何故姉が自分に謝る必要があるのだろうか。

「……分からない」

分からない……が、姉が自分の事で苦しんでいるのは確定的に明らかなのだ。これからも足手まといで居続けるくらいなら、一緒にいない方がいいのだから。

そう思つて、再び前を向いて歩を進め、家から遠ざかる。

もう何時間歩いただろうか。

黒天の闇の中を歩き続ける。

そして、声をかけられた。

『あら貴方、織斑一夏じゃない』

『あら、織斑一夏じゃない』

『どうしてこんな所にいるのかしら?』

『あの名高きブリュンヒルデ様の弟君!? へえ、可愛いわねえ……』

『将来イケメンになるわ』

気が付けば、複数の大人女性に囲まれていた。

一見、有名人の関係者を見つけて珍しがつていたり、盛り上がつて見えるように見えるが……。

——白々しいとは、正にこの事か。

必死に演技しているように見えるが、一年間少年兵として戦い続けてきた一夏にして

みればその敵意を丸見えも同然だった。

「なんだ、あんた達？」

『え？ なくに〜』

少しドスを効かせた声で話しかける。

一見、子供をかわいがる大人のような表情であるが、その眼は心の底から一夏の事を見下していた。

だから、一夏は指摘してやった。

「とぼけないでいいよ。後ろに隠してるソレ……なにさ」

『……あら、意外に鋭いわね。さすがあのブリュンヒルデ様の弟君って言った所かしら？』

ブリュンヒルデの弟——この言葉にどれほどの皮肉が含まれているか、一夏に。

女性の眼から感じる視線……殺気、とまでは行かないようだ。

彼女ら、何処かで見覚えがあるかと思えば、みんな授業参観の時に視たような顔ぶればかりだった。

おそらく、半殺しにされた娘達の復讐……と言った所か。

『よくもウチの娘を病院送りしてくれたわね、これだから男は嫌なのよ。野蛮で、まるで私の夫みたい』

よほど自分の夫に恨みがあるのか、少なくとも単純に女尊男卑の風潮故に男を嫌っているのではなく、何か男に関して暗い過去があるようだが、生憎と一夏には関係のない事だった。

『だから……貴方も娘と同じように痛めつけてあげ……！』
女性は威圧をぶつけながら一夏にゆっくりと近寄ってくる。

「……ッ！」

一夏は顔を苦渋の色に染めながら女性を見上げる。

そんな一夏の表情を見た女性は更に口角を釣りあげる。男の恐がる表情を見るのがたまらなさと、そういった表情だった。

実際は恐怖している訳ではなく、学校での時のような事態を起こしたくないという苦悩の表情だった。

—— また、千冬姉に迷惑をかける訳にはいかない。

だから……

『安心なさい。救急車は呼んであげる……わ！』

「……ッ！」

女性が放った平手打ちを、一夏は間一髪で避けた。

—— ダメだ、反応するな！

少年兵として過ごした期間は一夏の身体を多少の害意でも反応してしまうように馴
けられてしまっていた。

そう今だって——平手打ちを放ったその隙を突けば簡単に殺せた。

(……ッ、違う。そうじゃないだろう)

つい反応してしまいそうになる身体を必死に抑え、一夏はただ回避に専念する。

女性の平手打ちを、蹴りを、拳をただひたすらに『この女性の血を見たい』という衝
動を抑えて回避し続けた。

女性とて動きからして何らかの武術を嗜んでいるのであろうが、少年兵としての地獄
の日々を送り続けてきた一夏には難なく回避できる。

しかし、今はそれが難しかった。

殺そうと反応してしまう身体と、殺人を拒絶する己の理性が反発しあい、一夏の動き
は通常に比べて遥かに鈍くなっていた。

学校の時のような二の舞は決して踏むものか、と揺らぎそうな決意をしたまま女性の
暴行を回避し続けた。

『——ッ、ああもう、ちよこまかとっ！ さっさとやられないさいよっ！』

そしてついに女性は痺れを切らしたのか、後ろに隠してた折り畳み式ナイフを取り出
し、一夏に覆いかぶさった。

一夏の口を覆うように手で押さえつける。

両手もまた女性の両膝によって押さえつけられ、身動きが取れなくなる。

身体に、ナイフが迫る。

そのナイフを振るう女性の姿が

戦場で、己に襲い掛かって来た兵士と重なった。

瞬間、一夏の思考は真つ白になった。

咄嗟に己の口を覆っていた女性の手を、頭を少し捻らせながら噛みつき、引きちぎる。

引きちぎると同時に女性の身体を己の元へと引き寄せ、その首を掴んだ。

そして。

ゴキツ。

その首をへし折った。

女性は悲鳴を上げる暇もなく、その顔は驚いたままで止まっていた。女性は、あまりの早業に自分が殺された事にすら気付かないまま、女性は息絶えていた。

へし折った首を女性の身体ごと押し上げて、退かず。

『——ツ!?!』

先ほどまで観客のようにその様子を見ていた他の女性たちは驚いた様子で倒れた女性の周りに近づいていく。

『う、そ——』

『え……え？』

『そんな……』

『死んでる……？』

周りに集まった女性は皆、口を抑えたまま狼狽えていた。

こんな平穏な日本で、死に直面することなどなかっただろう。

だからこそ、その事実は女性たちはしばらく受け入れられないでいた。

『——ッ、貴方、よくも……ッ！』

やがて一人が怒りの形相で一夏の方へ振り向いた時、その女性は絶句した。

何事もなかったように立っている一夏。

そんな一夏を見て、女性は声を震わせながら、恐る恐る尋ねた。

『あ……ああ……、あ、貴方……なんで笑ってるのよ……!？』

『——え？』

先ほどまで頭が真っ白になっていた一夏は、その言葉で正気に戻る。

——笑っている？ 自分が？

そんな筈はないと思い、自分の唇に手を当ててみる。

確かに、歪んでいた。

「あ」

言われて、やっと気付いた。

……人殺しを楽しんでいる自分に。

——違う。

……もつと殺したいと思っっている自分に。

——違う。

……あの戦場に戻りたいと思っっている自分に。

——違う！

『——ッ、よくも理子さんをおっ！』

『男の分際でえっ！』

女性たちが迫ってくる／兵士たちが迫ってくる。

彼女達は鈍器を持ちながら迫ってくる／兵士たちが銃を構えながら迫ってくる。

対して自分の獲物は一本——先ほど、自分が殺した 女性／兵士 から奪ったナイフ一本のみ。

——ああ、今日の戦場は、やけにぬるいな。



——ごめん、千冬姉……ごめん……。
もう一緒にはいられなかった。

こんな人殺しと、自分の姉は一緒にいるべきなどではないのだ。
一緒にいるには、この手は既に血に汚れ過ぎていた。

——ごめん、千冬姉。

——千冬姉が知っている織斑一夏は、もうここで死んじやうみたいだ。

薄れていく……姉との思い出も。あの日別れた幼馴染と過ごした思い出も。織斑一夏という人間を構成していた部分全てが、まるで他人事のように変わっていく。

そして残ったのは、狂気だけだった。

「ク、クク……」

「ク、アハハハハハハハハハ……!」

嗤った。狂ったように笑った。

この胸に残るモヤモヤがようやくとけた気分だった。

あの時、銃で人を撃ち殺した時、自分の腕が震えていたのは恐怖と罪悪感からではない。
い。

そう、昂揚、そして達成感だったのだ。

最初の内は恐怖や罪悪感であったが、いつの間にかそれは昂揚と達成感に置き換わっ

ていたのだ。

「アハハッ、ハハッ、ハハハハハハッ……！」

ああ、血の臭いだけでは足りない。

あの硝煙の臭いを嗅ぎたい。

銃撃の音が聞きたい。

人の悲鳴が聞きたい。

爆音をもつと聞きたい

——もつと、『戦争』がしたい！

そして、少年は行方を晦ませた。

世界が歪むまで

IS 学園

「全員揃ってますねー。それじゃS H R 始めますよ！」

黒板の前でにつこりとほほ笑む女性副担任、山田真耶は元気そうにそう言う。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますねー」

「……………」

しかし、誰も返事を返さずに沈黙が場を支配する。

真ん中かつ最前席に座る男子生徒はそんな副担任を真顔でみつめ、他はただ緊張感のあまり沈黙するだけだ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

うるたえる副担任が哀れに思えるが、このIS 学園であろうと普通の学校であろうと入学当初のクラスではこれが普通の光景である。

(それにしても……)

男子生徒は周りにばれないようにして周囲を一瞥する。

三時の方向、四時の方向、八時の方向、九時の方向……どこを見渡せどそれは自分と違う性別のものばかりだった。

(雌共ばつかじゃねえか……たくつ、これじゃあ刑務所の中の方がまだマシだったかあ?)

心の中でそう愚痴りながら、自分の名前が呼ばれるのを待つ……いや、あいうえお順から考えるに自分はかなり最初に呼ばれるに違いない。

「アイン・ゾマイルくん！」

「はい」

さつそくか、と席を立ちあがる。

というより、何故出席番号が二番目なのに真ん中&最前列なのだろうか？

事前予習が出来てない事を考慮して教員たちが態々前列に席を指定してくれたのだろうか……だとしたら有難迷惑だ、と男子生徒は心の中で溜息をついた。

「アイン・ゾマイルです。よろしくお願いします」

猫を被りながら儀礼的な挨拶をする。

自然な感じに作り笑いをしながら、自分の自己紹介を始めた。

「こう見えてもここにに入る前は傭兵をやってまして。趣味は銃器弄り、特技は射撃です。急遽入学が決まったもので I S に関する知識は皆さんと違ってまったくありませんが、

銃火器については皆さんよりも詳しいと自負しております」

周りがざわつく。

『え、傭兵って……?』

『お金貰って人殺してるの?』

『特技が射撃って、もしかして?』

二番目というかなり最初の自己紹介であるにも関わらず、傭兵だの銃火器だの射撃だの発言が為されたアインの自己紹介は周りの生徒達をドン引き、または警戒心を抱かせる。

……だが、最初はこれでいい。ここからが本番である。

「ハハ……とまあ、物騒な事言っちゃいましたが、こんだけ可愛いお嬢ちゃんたちに囲まれていますので、自分も一生徒として皆さんと共に学業に励みたいと思います。

これから一年間、よろしくお願いします」

暫しの沈黙、女子生徒たちは呆然としてアインを見つめていた。真面目な音色から一転して優しそうな声で語り掛けられ、そのギャップに戸惑っていた。

やがて、パチパチパチ、と拍手が響き渡る。

『か、可愛いって!』

『お、お嬢ちゃんって、そんな〜!』

『いっつ……出来るー！』

先ほどの警戒するような様子から一転して、女子たちは顔を赤らめながらそんな事を呟いていた。

これこそがアインの狙い。

最初に此方に警戒心を抱かせるような言葉から、向こうの心を掴むような冗談を言う事で打ち解けさせる。所謂、『下げて上げる』と言った方法である。

傭兵として世渡りするうえでアインが身に着けたコミュニケーション技術はこんな意外な所でも役に立ってくれた。



—— 東欧 ■■■ 共和国

EU（ヨーロッパ連合）に加盟せずに独立国として体裁を整えてきたこの国は今、戦場の地と化していた。大臣が率いる政府軍と、反政府組織が雇った傭兵部隊による泥沼の戦場がそこにあつた。

あちこちで銃声が鳴り響き、各地で硝煙の煙が舞い上がる。

戦況はほぼ反政府組織側に傾いており、政府軍は次々と傭兵部隊の銃撃の餌食となつ

ていた。

多くの場所を占拠され、政府軍の本拠地たる大臣邸だけが最後の砦として機能し、各所に設置された砲台も既に反政府組織側が乗っ取っていた。

その戦場のある建物に政府軍の兵士たちが避難していた。

追い詰められて切羽つまった様子だった。

「ハア、ハア……状況はどうなっている!？」

「駄目だ……東側ではぐれた部隊と連絡が取れない」

「くそっ!」

一人の男が拳を床に叩きつける。

全ての始まりは、大臣による不正の発覚だった。本来ならば国を纏める立場である筈の大統領を、裏で操っていたという大臣。

既に捨て駒だった大統領は殺され、今は大臣が直々に政府軍の指揮を取っていた。

「とりあえず、ここにいれば一先ず安全だろう。敵もそんなに近くはない」

「ああ、今の内に体勢を——」

「ところがぎつちよん!」

政府軍の舞台が体勢を整えようとしたその時、何処から声が聞こえたと同時に。

ピストルが四回、発砲音とともにその火を吹いた。

四発の弾丸は全て政府軍の兵士の額に命中し、彼らはそのまま倒れた。

「ジェイク!? くそ、どこだッ!」

「こつちだよお!」

突如、屋根裏から人影が降りて来た。

出てきたのは、まだ十五才かそこらの青年だった。

その年では不釣合いな程に、この戦場を楽しんでいるような表情で出てきた青年は獣のような眼で兵士たちを獲物として定めた。

即座にマチェットナイフで政府軍の兵士の頭を串刺しにする。

突然の事で反応できなかつた兵士はそのまま絶命し、倒れた。

「トーマス!? くそ、撃て、撃て撃てえ!」

一人の男の指示の元、政府軍の男たちは青年に向けて一斉にアサルトライフルを掃射する。しかし、それ如きで止まる青年ではなかつた。

青年は端にいた男にナイフを投げつける。

投げつけられたナイフは男の手に刺さり、アサルトライフルが手放される。

「隙ありい!」

スライディングで一気に距離を詰めた青年は床に落ちる直前だったアサルトライフルを拾い上げると同時、回収したナイフで兵士の喉元を搔つ切る。

そして奪い取った、アサルトライフルを他の兵士に向け、発砲した。

『うわあああああああああ！』

悲鳴を上げる兵士たち。

本来ならば連射力にも言わせて弾を撃つアサルトライフル。その一つ一つの弾が兵士たちの急所に的確に命中していた。

機銃の連射力を維持しながら精密射撃をやつてのける青年はこの戦場においても異常だった。

「情けねえなあ。手前からそれでも大臣直属の部隊か!? ええおい!」

楽しそうな声を上げながら機銃を撃ち尽くす。

兵士たちの息の根が止まっている事を確認した青年は、アサルトライフルを床に投げ捨てて、ナイフに付いた返り血を振り払った。

「ひー、ふー、みー……へっ、こんだけ撃ち殺せば十分なギャラも貰えんだろ」
弾も節約できたしな、と青年は嗤いながら付け加える。

と、その時、青年に腰にあつた無線機のランプがピピピ、と点滅する。

せつかく酔いの名残に浸っていたのと思いつつも、青年は無線機のレバーを上げて耳に当てた。

「何だよ！ 分け前の話なら後にしやがれ！」

「……なに、ポイントCが突破されそうだと!? 何やってやがる、橋の上にはT? 42 (ソ連の旧式重戦車) を待機させていた筈だろ!」

「IS、だど? 女にしか乗れねえあれか!? どういうこった、ISの兵器運用は条約で禁止されてるし、そもそも何故こんな辺境の国がそんなモン隠し持ってやがる!」

「……まあいい。大臣の奴もそれだけ追い詰められてるって事か。ポイントC付近に設置した砲台の数と種類を言え。そっちに関しては俺が指示してやる。今すぐポイントCの野郎共の無線と繋げ!」

仲間全員との無線が繋がるのを待ちながら、青年は愚痴る。

「ちつ、まさかISを隠し持ってやがるとはな……大臣め、もはや自分の所業を隠匿する気すらなしかよ……」

IS……女性にしか使えないと言われてる究極のパワードスーツ兵器。

現在、世界で実戦配備されているISは467機……開発者である篠ノ之束がISコアの製造を止めてしまったため、その価値は絶大なものだ。

「確か、何年か前のニュースでどこかの研究所からISが三機盗まれたつーのを見た事があるが……まさかな」

最悪の事態の想定も頭の隅に置いておく。下手すればもう二機出張ってくる可能性

もあるかもしれないのだ。

……まあ、とにかく今はポイントCの指揮に集中しなければならない。

幸い、あの地点には自分のお零れを求めて集まった部下たちがたくさんいる。分け前をくれてやるのは少々癪だが、使える奴等ではあるので同行を許していた。

そして、全員との無線が繋がった。

「おうおう繋がったか！ いいか聞けお前ら！ これはピンチじゃねえ、チャンスだ！

ISの価値はお前らも知ってるよなあ!? 蜂の巣にして裏の技術者共に売り飛ばすぞ！ 今の戦況を報告しやがれえ！」

青年の指示の下、無線を通じて仲間の士気が上がるのを青年は感じた。

——そうだ、これを待ってたんだ！

——それでこそ戦争のし甲斐がある！

士気が上がってゆく仲間たちと同様に、青年の「戦争屋」としての本能もまた疼き始めた。

結果として、ISを撃破する事に成功した。

「へっ、どうだい。101・6トンのT-42重戦車の下敷きになる気分は……って、聞

こえちやいねえか」

元々、ポイントCの守りは固かった。

元々政府軍が隠していた資金を大量に用いられて設置されていた砲台たちはこちら側が乗っ取っており、しかも砲台の種類は対空砲や高射砲、ガトリング砲、榴弾砲など様々だった。

空中に逃げれば高射砲や対空砲が襲い掛かり、近づけばガトリングの集中砲火を浴び、地上に着地すれば多数の榴弾が襲い掛かる。

無論、それだけでは戦闘機以上の機動力を持つISには敵わない。上述の戦力を用いようとも、時間さえ要すれば此方が容易に敗北する状況だった。

だからこそ、青年の指示によって戦い方を変えた。

弾を当てなくてもよい、ある場所に誘い込んで、潰せばいいのだ。

ポイントCの中心にはある高架橋があり、そこにはISによって大破に追い込まれたT-42重戦車があった。

後は簡単である、砲台の攻撃で高架橋の下までうまく誘導した後、高架橋に仕掛けた大量の爆弾をうまく順番に起爆させ、瓦礫で動きを封じ、煙で視界を封じ、最後に落下させた重戦車で押しつぶした。

いくら操縦者の身体に絶対防御やエネルギーシールド、強力なG耐性を施すISで

も、操縦者の頭に101.6トンものの重さを持つ物体を叩きつけられれば、一瞬でお陀仏となってしまうだろう。

絶対防御やエネルギーシールドで直接的なダメージはなくとも、G耐性を超える程の衝撃を与えてしまえば操縦者の命は奪えなくとも致命的なダメージを与える事はできる。……正直、操縦者の腕がそんなによくない事が幸いだった。

そして、急遽青年が立てたその作戦が成功し、青年は道中邪魔な兵士たちを片づけながらここまで駆けつけてきたのだ。

「さすが隊長。前線だけじゃなくて、まさかあんな作戦立ててしかも的確に指示してくれるなんて……俺もう！」

「んなうまい事言つて分け前を増やしてもらおう、なんて考えは捨てろよ？」
「ハハハつ。ま、まさかそんな事は……」

現地で生き残った部下とそんなたわい無い会話をしながら瓦礫をどける。

やがて、重戦車の一部が見えた。さらに瓦礫をどけ続ける。

そして、それはあつた。

「これが、IS」

「ボロボロだが、まだ機能を停止しちゃあいねえらしいな。操縦者もこの通り健在……って訳じゃねえか」

「うげえ……」

部下の力を借り、I Sを引っ張り出す。

I Sは既にボロボロだった。装甲は所々が焼け落ち、潰れていた。

それでも操縦者の身体を護らんとかろうじて絶対防御が働いている状態は機械ながら健気なものだった。

だが……

「どうやら限界みてえだな」

主の両肩に浮遊するようについてたアーマーが重力を得たかのように崩れ落ちる。続いて血まみれのぐちゃぐちゃになった操縦者の身体が崩れ落ちる。

ぱんっ、と銃声が響く。

I Sの絶対防御機能により命こそ取り留めていたものの、戦車を落とされた衝撃で脳みそはとうにいかれているみたいだった。

そんな女性に対して、青年は容赦なくその頭にピストルの弾丸を撃ちこみ、トドメをさした。

「よ、容赦ねえ……」

部下がドン引きしながら青年の方を見る。

青年のお零れを貰う自分達傭兵組は皆青年よりも一回り年上の者ばかりである。自

分達傭兵部隊を率いる青年はそれこそまだ十代半ばなのだ。

にも関わらず、こうして女子供すらも平然と撃ち殺すこの青年に軽く恐怖を覚えていた。

そんな部下の事を後目に、青年は顎に手を当ててこの I S について考えていた。

「多量の砲台に加えて骨董品の戦車まで使いつぶしちまったのが勿体なかったが……それを補って余りあるお釣りがここにある。さて何処のどいつに売ろうかねえ……」

ポロポロになった I S の装甲に寄り掛かりながら、青年は考える。売るといっても、並大抵の技術者共では話にならない。

公共の I S 研究機関はまず論外……十中八九お金を貰えないだろう。

「あの、隊長……」

「となるとやはり……なんだ？」

何処の技術者に売ろうか悩んでいる最中、部下が声をかけてくる。

「その…… I S が、反応して——」

「ああ？ 何を世迷言を……何、だと……」

瞬間、青年の意識に『情報』が流れ込んできた。

『た、隊長が I S を!?!』

『おい、大変だお前ら!!』

『隊長がI Sを起動させたぞ?!』

「静かにしやがれお前ら!」

騒いでいる部下を落ち着かせる。

まだ戦争は終わつた訳ではないのだ。

そんな風に戦争から帰ってこれた時の祝いみたいに騒がれても困るだけであつた。

「俺がI Sを起動させたくらいで戦況は変わらねえ……そもそもこれボロボロじゃねえか。適合者にはかろうじて反応してくれる……くらいものだ」

トントン、とI Sの装甲を叩きながら青年が言うと同時に、部下の傭兵たちもまた興奮状態から落ち着きを取り戻す。

そうだ、いくら通常兵器でI Sを撃ち落とすという偉業を成したとはいえ、ポイントCはもはや潰れたも同然の状態である。

戦況的に言えば結局はI Sに覆されたと言ってもいい状況だ。

「た、隊長、大変です!?!」

そんなとき、もう一人の部下の傭兵が慌てて青年の所に報告に来た。

嫌な予感を感じながら、青年は部下の報告を聞く。

「何だ、こんな時に」

「そ、それが……ISが更に二機出現……ポイントDとポイントFが落とされ、ただいま二機ともポイントAへと……！」

（やっぱりか……）

己の予期していた事態が的中し、舌打ちする青年。

となれば、やはりあの研究所からISを盗み出した者は大臣の息がかかった者なのだろう。

傭兵という立場からしてみればテロが起こる理由など二の次なのだが、こうしてみると大臣の悪事を見かねた者達がテロを起こすのも納得だった。

「ポイントA……大臣邸から一番近い位置じゃねえか……待てよ？」

その時、青年の頭にある事が浮かんだ。

青年はニヤリと嗤い、部下たちに声をかける。

「お前ら、とりあえずその二機のISは後回しだ。先に大臣邸に攻め込むぞ」

「え、隊長……ですがそれは……」

「奴さんに余裕なんて既にねえよ。条約を破つてまでしてISまで駆り出してくるのがいい証拠だ。」

それに、少しい事を思い付いた」

ニヤリと笑い、青年は部下の傭兵達を率いて大臣邸へと攻め入った。

ポイントAを制圧した二機のI Sの操縦者たちは大臣邸から火の手が上がっている事に気付き、急遽大臣邸へ急行する事となった。

二人の少女にとって、大臣は正に恩人だった。

女の力の象徴たるI Sの操縦者にしてくれた。

身寄りもない自分達三姉妹を拾ってくれて、こんな力を与えてくれた。故に、如何に条約違反であろうと、二人にとっては恩を返すべき人間なのだ。

「ミーン！ 急いで」

「分かっているわ、ニーン！」

そして、大臣邸を囲む森林に近付いたその時。

——二人のハイパーセンサーが何かに反応した。

「これは……救難信号？」

「下だ」

言って、二人は下の方向を見る。

木の下に、此方側^政の兵士^軍が此方に向けて必死に手を振っていた。

ハイパーセンサーで拡大して見てみれば、兵士が虫の息である事はすぐにわかり、そ

ここに降りた。

「大丈夫!？」

「大臣は無事なの!？」

ISを纏ったまま二人は男へと詰め寄る。

男はせき込みながらもなんとか二人の質問に答えた。

「え、ええ大臣は……何とか……それより二人とも、早くISから降りてください。早く！」

「え……ISを解けて？」

「どうして……？」

男の突然の発言に二人は呆然となった。

「高架橋の所でニーナさんがやられました!」

「っ!! ニーナがッ!？」

「うそ……そんな……」

二人にとつてその発言は信じれない事だった。

ミーナとこの二人は三姉妹の関係であり、共に大臣の命令でISの訓練を共にしてきた仲だったのだ。とうてい受け入れられる事ではない。

しかし男が言っている事は嘘には見えなかった。実際、嘘ではなかった。

「どうやら敵方は I S に有効な兵器を所有しているようでして、その兵器でニーナさんの位置が筒抜けだったそうです！ 早く！」

「っ！ 分かったわ。ミリアも……」

「ええ、そうするわ」

だから、純粹な二人はこういう事もすぐに信用してしまった。

I S をしやがませ、コックピットから降りる二人。

そのまましばらく三人は木陰で身を潜める。

二人は男に大丈夫かと心配そうに声をかける。

男は大丈夫、と息を上げながらさも満身創痍であるかのように見せつけていた。

「所で、大臣は……？」

「ごほッ、ええ、大臣は無事逃げおせましたよ。少々、無茶をし過ぎましたが……！」

「ちよ、ちよつと……！」

「……ッ、大丈夫です。貴女方に救難信号を出したのは、貴女方にこの事を伝える為です。無線機だと盗聴される恐れがあるので……」

またもやゴホッ、赤い液体を吐き出す男。

そこで二人は悟った。

——この男は、もう長くはないのだと。

であれば、せめてこの男が無茶をしても逃がした大臣を助けようではないか。

「大臣は……大臣はどこにいるの？」

まだ助けるべき大臣の居場所を聞いていなかったニーアは聞いた。

「ええ、大臣は——」

パアン、と銃声があった。

「俺が殺した」

突如、男の懐から取り出された拳銃。

銃口からは硝煙が吹きあがっていた。

「な……あつ……!?!」

突如、ミーアが後ろ向きに倒れる。

見開かれた眼の瞳孔は既に消え失せ、ISを展開していなかった彼女はあつげなくその命を落とした。

「ミ、ミーア……!?!」

「御臨終だ」

驚いたニーアがミーアの名を呼ぶが、ミーアは返事をしない。どれだけ呼びかけよう

と、彼女は既に還らぬ人となっていた。

怒りの形相で、ニーアは男を睨む。

(こいつ、怪我をしてるんじゃない……血まみれの、ウチの兵士の服を着ているだけだ……!)

先ほど吐き出した血も、飲んだばかりのトマトジュースか何かをわざと吐き出してうまく致命傷を負っているかのように見せかけていただけなのだ。

「貴様——ガッ!？」

即座に銃を抜いて応戦しようとするニーア。

しかし遅かった。I Sに乗った事しかない女と、戦場で戦い続けてきた男では生身の身体能力に差がありすぎた。

男は超高速でスライディングし、ニーアの足下を蹴りつけ、転倒させる。

転倒したニーアに向けて、男は銃口を向けた。

「アアッ!？」

パァン、とまた銃口が火を吹く。

ニーアの身体を踏みつけた男はそのままニーアの左肩にもう一発弾丸を打ち込んでいた。

対I Sスーツ用に改造された強装弾はニーアの左肩を貫通していた。

「ミ、ミーアッ……」

撃たれた肩の痛みに耐えながら、彼女はもう一方の手を、隣で息絶えている相棒の方へ手を伸ばす。

何の反応も示さない彼女の姿を目撃し、ニーアはようやく己の妹の死を認識した。

差し伸ばされたニーアの手は悲しみで無意識に震えていた。

「やれやれ、戦場でむぎむぎと妹をコックピットから降ろすたあ、美しい姉妹きょうだいあい愛だなあ」

「ッ！」

これ以上にならない男の皮肉に、ニーアは涙目になりながら苦渋の表情で、自分の身体を踏みつける男をキツ、と睨んだ。

それを見た男は余裕の笑みを崩さずに、ニーアから足をどけた。

己を踏みつける足の感触がなくなったのを感じたニーアは一瞬茫然となった。

「ほら、早く機体に乗ったらどうだ？ これじゃあ戦い甲斐がない」

「……ッ、舐めやがってッ……！」

銃を突きつけ、ISのコックピットに乗るように促す男。

ニーアは己の身体を怒りで奮い立たせ、撃たれた肩を手で押さえながらラフアール・

リヴァイヴへと搭乗した。

「いい子だ」

まるで子犬を褒めるかのような口調で男は優しく呟く。

そのからかい声が余計に癩に障ったのか、ニアは最初から最高加速で空へと飛びあがった。

その場で殺す事だってできる。

だが、怒り心頭だったニアは自分達を騙してミアの命を奪ったこの男が楽に死ぬのが我慢ならなかった。

（すぐに殺してやるもんか！ 十分に甚振って絶望させてから殺してやる！）

そう意気込み、上空からハイパーセンサーで地上を見下ろす。

そして、目を見開いた。

「う、そ………？」

突如、ハイパーセンサーに映ったその反応に、彼女は絶句した。

信じられないと思い、ハイパーセンサーで更にそこを数十倍に拡大して見る。

この場にいる I S 操縦者だったミアは先ほど撃たれて殺された、ニアも高架橋で殺されたとの事。

ならば———今、自分に向かって飛んできている I S は一体？

「ハッハア！」

それは先ほど男の銃弾によって死んだミアが使っていた I S —— 打鉄。

日本刀状の近接ブレード『葵』あおいを振るい、ニーナのラファール・リヴァイヴへと接近してくる。

咄嗟に物理シールドでガードし、ニーアはその打鉄の搭乗者の顔を見て呆然となった。

「そんな……ISは、女性にしか動かせない筈じゃ……、どうして、男が……!?!」

「慣れねえとちと扱いづらいが、武装さえ分かれば後は何とかなるつてなあ!」

背後のスラスターで一気に吹かして最高加速し、近接ブレードで物理シールドを押し返した打鉄の新たな搭乗者——先ほどミーアを撃ち殺した男は潜めていた殺意をニーアへと向けた。

「どうして……どうして男がISを……!?!」

「さあな、才能じゃねえのか!?!」

「ふざけないで、大臣はどうしたの!?!」

「脅してやったらよお、お前らの事すぐ吐いてくれたぜえ!」

ニーアのアサルトライフルの銃撃を無駄のない動きでかわしながら、近接ブレードで切り付ける男。

「そんな、大臣が私達を見捨てる筈……!」

斬撃を避け、またアサルトライフルで牽制するニーアだが、オート操縦には戻ってい

ない筈の討鉄を操りながら当然のごとく避けられる。男は武装をアサルトライフルに切り替え、ニアのリヴァイヴの装甲の隙間を的確に狙っていく。一瞬でニアの動きを把握した彼はニアの動く先を読んではそこに弾丸を撃ち込み、的確に命中させる。弾丸を当てられないニアと、ニアの動きを呼んで連射式の弾丸を的確に命中させる男。この時点で、両者の間には大きな差があった。

「同情するぜえ、可哀想になあ!!」

「この、おツ……!!」

間一髪で近接ブレードを物理シールドで防ぎ、弾き返すニア。

男はニアから距離を取る。

それを確認したニアは即座に武装をアサルトライフルからスナイパーライフルに変換しようとする。

が。

「ハッ、見えてんだよお!」

その行動を呼んでいた男は一気に急旋回。

見事な特殊無反動旋回を披露し、ニアの武装変換の間の隙を突いた男は、一気に近接ブレードで斬りかかる。

武装を変換した頃には既にスナイパーライフルの砲身の長さ以下の間合まで接近さ

れ、ニーアはあえなくその斬撃を受け入れてしまった。

バリアーは貫通し、装甲は切り飛ばされ、シールドエネルギーが削られた。

(嘘ッ)

信じられなかった。

(嘘よ、何よコイツッ!?)

ISの技量はその稼働時間こそがものをいう。稼働時間で言えばニーアと男とではそれこそ天地の差がある筈だった。

なのに、至近距離からのアサルトライフルの銃撃をとんでもない反応速度で回避、そして武装の量子変換のタイムラグを咄嗟に理解し、その隙をつく戦法。

この男は間違いなく、ニーア以上にISを使いこなしているのだ。

(そういえば、なんでこいつは高架橋でニーアが死んだって知ってるんだろう?)

大臣邸に攻め込んだ際にこちら側の誰かを脅して情報を得たりでもしたのだろうか、ポイントCで、ではなく高架橋で、と死んだ場所を具体的に言っていた。

それは、つまり。

(まさか、こいつがニーナをツ……!?)

そう考えれば、納得がいった。

つまり、彼こそが、ニーナを殺した張本人。

自分の姉妹を二人も奪ったのはこの男なのだ。

(よくも……よくもミアとニーナをツ……)

「お前……お前があつ!!」

激昂し、叫ぶ。

呪詛のように叫び始めた。

「殺す……殺す殺す殺す殺すころすころすころすコロスコロス……!! お前のような男につ!! たかが男で I S を操縦できたぐらいでいい気になってるお前につ!! ミーアとニーナはツツ……!!」

イクニツシヨン・ブーレスト
瞬間 加速

近接ブレードを展開して驚異的なスピードを出しながら直線距離で一気に肉薄する。
しかし。

「御託はあー!」

こちらも近接ブレードを構えて瞬時加速。いや、言うなればそれは二段溜セカンド・チャージ瞬時加速放出する高等テクニク——と呼ぶべき代物だった。

通常の瞬時加速すらも実践していない段階で、しかも相手の瞬時加速を一度見ただけで、そのプロセスを身体で理解した男は、更にその上を行く加速方法をその場で編み出

し、実践してみせた。

マルチスラスターを搭載したラファール・リヴァイヴの瞬時加速と、二段溜瞬時加速を行った打鉄の突進力が合わさり、お互いの得物の斬撃はより威力を増す。

そして――

「沢山なんだよお!!」

リヴァイヴの近接ブレードを角度を変えて受け流し

その斬撃は

装甲を貫通し

『絶対防御』すらも切り裂き

ニアの右腕を、リヴァイヴの装甲ごと切り落とした

「――え?」

ハイパーセンサーが、ISの装甲が解除されたニアの右腕が林の中へ落ちていくのを捉えた

(嘘、どうして……?)

真つ白な頭のまま浮かんだ疑問に答えてくれる者はいなく、そしてその暇さえもなかった。

「逝つちまいなあ!」

切断面にアサルトライフル『焰備』の銃口が突きつけられる。

「——ッ!?!」

それに気付いたニーアは顔を青ざめる。

アサルトライフルの銃口が火を吹く。

身体の切断面に向けて連射される弾丸は、次々とニーアの体内へと押し込まれていく。

「あ……、あ……あ……ああああアアアアアアアアッ……!?!」

銃口を斜め上から切断面に刺し込み、心臓に直撃しない角度で、身体全体に流し込むようにして銃弾を連射していく。

身体の中に鉛の異物を次々と押し込まれ、ニーアは苦しみに悲鳴を上げる。

I Sを纏っていない状態でなかったら、これほど苦しむ暇もなく逝くことができたろう。

だが、I Sには操縦者保護機能というものが搭載されており、その効力によって操縦者の身体を肉体を常に安定した状態に保つのだが、今回ばかりはそれがニーアを余計に苦しめる要因となっていた。

体内へと次々と押し込まれる弾丸、その度にそれが機能し、出血時の止血などといった応急処置が機能していた。

操縦者の安全を考慮したその機能は、ニーアの苦しみを余計に助長していたのだ。

「いい声で泣くじやねえかお嬢ちゃん！ もつと聞かせろやあつ!!」

そんな少女の悲鳴すらも戦場の悦として捉える狂人戦争屋はその口角を一層釣り上げながら、笑う。

「イ”ヤ”ア”アアア”アア”ア”ア”ア”ア”アアアアア”アアアアやめでええ”ええ”

ええ”ええ”え”え”ええええツツツツツツ”

絶叫が響き渡る。

!!?!?!?!?

流し込まれた無数の銃弾は、ニーアの体中のありとあらゆる内臓を破壊し、やがて銃弾が詰め込まれていくあまりに体は歪に膨張していった。

——痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い……!!

——助けて、ミーア、ニーナあツ!!

——助けてよおおおおおお……!!

口、耳等、人体のあらゆる穴から弾丸による血が飛び出す。次々と体内に潜り込んでいく弾丸が内臓という内臓をズタズタにしていき、その度にあるゆる穴から血が飛び出していった

そして、アサルトライフルのマガジンの弾が切れた。

「ア…………アア…………」

燃え尽きたように崩れ落ちるニーア。

最早人とは呼べぬ程の肉塊に変貌した彼女。しかし、I Sの搭乗者保護機能はそんな彼女が死ぬのを未だに許してはいなかった。

そんな彼女に止めの一閃が迸った。

再び武装を近接ブレードに切り替えていた男が、満身創痕となったニーアの身体をリヴァイヴの装甲ごと真つ二つに切り裂いた。

バラバラ、バラバラつと切り裂かれた断面から体内に押し込まれたアサルトライフルの弾丸が袋詰めされた米が溢れ出るように一斉に飛び出す。

ズタズタになった内臓器官と血液、そして弾丸を雨のように散らしながら、少女はI Sと共に地上の森林へと墜落していった。

「フハハハハハアツ！ こいつはすげえ!! 凄すぎて戦争にならねえぜえっ!!」
そして残ったのは、銀の鎧を纏いし『戦争屋』だけだった。

まさかあの瞬間をカメラに撮られていたとは思わなかったアインは内心で、そのカメラの撮影者を恨んだ。

(そもそも、I Sのハイパーセンサーで視た限りじゃ周りにそんな奴なんていなかった

ぞ。……一体何処から撮ってやがったんだ？)

あのあと、そのカメラの映像が誰の仕業かは分からないが世界中の一部のお偉いさんに流出してしまい、自分はI Sを兵器として使用した罪にかけられて国際刑務所に閉じ込められて刑を待つ、筈だった。

たまに偉い技術者たちが『身体を調べさせてくれないか』と強請ってきては一睨みで追い返ししながら(金を払ってくれるのであればまだ考えたが)の刑務所生活を送っていたある日、スーツを着た男たちが刑務所の看守に連れられて入ってきて、何故かI S学園の入学書類を投げ渡され、こう言い渡されたのだ。

『I Sを兵器として使った罪を免除してやるからI S学園に入れ』

一瞬、耳を疑った。いくら男性で初めてI Sを動かしたからと言って、それだけでこの人殺しを真つ当な女子たちの学園に入れてなるものか。

(冗談じゃねえぞ、つたく……)

命が助かったのはまあ儲けものと考えましょう。

だが、何の報酬もなしに勝手に学園に入学させられたのは納得が行かなかった。これから三年間の学園生活を終えて傭兵生活に戻っていいというのであればまだ納得した。

だが、それについて聞いたところ、向こうはまったく何も答えてくれなかった。

それだけでアインは向こうの思惑が分かってしまったのだ。

何処の国のお偉いさんも自分を欲しがっているのだ。

もはや世界の中心と言っても過言ではない。ISを男性の身でありながら稼働させるなど、まったくなかった事例だ。

おそらく、このまま卒業すれば自分は傭兵生活になど戻れなくなる。国のお抱えのIS操縦者になるなど何がなんでも御免だ。

自分がしたいのは戦争である。それができなくなるなど真つ向から願ひ下げだ。今でさえまともな報酬を提示されないままこの学園に居座らされている。

(まあいい、隙を見て逃げさせてもらおうとするさ。それに……存外、『火種』の臭いがするしな、ここは……)

まあ、その『火種』の筆頭は世界初の男性操縦者たる自分なのだが、それはそれでいい。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく訊き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私のやる事は弱冠十五才を十六才まで鍛えぬく事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

(だから精々、楽しませて貰おうとするさ。なあ、千冬姉)

最大の『火種』を目の当たりにし、アインはほくそ笑んだ。



悪夢のような映像を見せつけられた。

映像に映っていたのは、とある紛争地帯で自分の弟に似た誰かが違法投入されたＩＳを奪い、他の操縦者を殺している姿。

初操縦であるにも関わらず、打鉄をいとも容易く乗りこなし、果てには瞬時加速やその上を行く高等テクニクすらもその場で編み出して見せた傭兵。

戦場で投入された三機のＩＳはまだまだ調整段階のまま研究所から強奪されたものであるため、『絶対防御』などの防御機能が不安定な場合があったそうだ。

だからこそ、あのようにＩＳがエネルギー切れの状態を起こさなくとも、操縦者の身体が生死が関わるような攻撃を受けても『絶対防御』はうまく機能せず、結果として相手のＩＳは左腕を切り落とされていた。

だが、それは彼が乗っている打鉄にしても同じ条件だった。

更に言うのであれば、打鉄の機動力はラファール・リヴァイヴより低い。武装もラファールの方が豊富であるため、使いやすさでいえば明らかにこっちの方がいい。

にも関わらず、彼は初操縦で打鉄のパイロットからISを奪い取ったのだ。

しかもそれで、ある程度操縦訓練を受けているであろうラファール・リヴァイヴのパイロットを圧倒したのだ。

武装の展開すらも一瞬のタイムラグすら確認できず、相手の武装変換のタイムラグすらも理解してその隙を突いたりなどしている。

それだけではない、彼はISスーツを着てはいなかった。

初操縦で、それも奪い取ったばかりのISで、ISスーツもなしにこれほどまでに乗りこなして見せるその技量は、さすが千冬でも目を見開いていた。

彼の名はアイン・ゾマイル。本名は不明。

アイン・ゾマイルとはおそらく傭兵としての名前なのだろう。

そしてアインはドイツ語で「一」、ゾマイルの「ゾマー」は「夏」を示していた。

これが意味するのは一体なんなのだろうか……。

(そんな訳、ない)

脳裏に浮かんだ考えを千冬は即座に破棄した。

(一夏が、あんな顔しながら人殺しをするわけないっ！)

だから、これは何かの間違いなのだ。

あれが弟である筈がない。

だって、弟はいつだって自分を氣遣ってくれて、優しい子だった筈だ。

ようやく取り戻せたと思ったのに、目を離してしまった瞬間にまたどこか行ってしまうった。

必死に探した。

あらゆる伝手を通じて探した。

だけど見つからなかった。

どれだけ探しても、一夏の痕跡を辿る事はできなかった。

そして今、この映像がIS学園に送られてきた。

送り主は篠ノ之束、千冬の幼馴染にして、現在絶賛逃亡中のISの開発者だった。

全世界の一部の上層部に送られることになったこの映像は、一番最初に千冬がいるIS学園へと送られてきたのだ。

(何故束は、こんな映像を送って来たんだ?)

また何かの遊びだろう、そうやってまたからかおうとしているのだろう。映像を見せてからには何度もそう思った。

だが、千冬は知っていた。

そもそも篠ノ之束という人物は自分が身内と認めた人物にしかまともに会話せず、そして興味を抱かない人物であると。

——そんな束がこんな映像を送って来たという事は、つまり……。

「……そんな訳、ない……」

「またもや同じ考えを抱いては、破棄する。」

心の中で何度もそう思った。

もしあれが一夏であれば、ようやく見つかつたと肩の荷が下りるのであろう……しかし認められない。

認められるものか。

あれは別人だ。戦争を楽しんでいた。いや、戦争そのものを楽しんでいたような顔だつた。

もしあれが一夏であるというのであれば、箒にどのような顔をさせて会わせればいいのか。

（一夏……お前がいなくなつてから、私の部屋は見る見る酷くなつていたぞ）

（あの日から、私の人生は全て灰色になつてしまった。いや、灰色になりかけて、取り戻してようやく色が戻つて来たと思つたら、突然また真っ白になつてしまったんだ）

頑張れたのは、お前がいたおかげなんだ。

そんなお前が、あの映像の向こうにいる「あいつ」である訳がないんだ。

だから、私は——

「私、は……」

そんな葛藤を抱えたまま、*“ある決断”*をする。

結局の所、彼が昔生き別れた弟か、それとも別人かを確認するためには、懐に置いておくしか手段がないのだ。

その決断が、あの『戦争屋』を『火種』の宝庫たる学園に入れる事が、どれだけ最悪の結果を招くのかと、この時の千冬は思いもしなかった。

英国貴族の分岐点

二時間目と三時間目の間の休み時間、周りから突き刺さる視線を無視しながらアインは考え事に耽っていた。女子との人脈を築く事も信頼を得るという上では大切であるが、それ以上に彼にとって後悔すべき事があった。

(つたく、勿体ない事しちゃったぜ)

というのも、あの東欧の紛争地帯で撃墜させた二機のISを裏の技術者たちに売るという算段が頓挫になってしまったのだ。ISの価値はコアだけでも、否、コアこそが世界中の兵器の価値を足し合わせても足りぬ程の価値があるのだ。損傷の度合いなどは問題ではない。コアさえあれば高値で売れる筈なのだ。

それなのに、自分が落とした筈の二機のISは元の研究所へと収容され、自分が強奪した打鉄も同じ所へ戻されてしまった。

(やれやれ、スコールの大將あたりにも売るときゃ、高値で買ってくれただろうによお……)

かつての雇い主の顔を思い浮かべ、アインは内心で溜息を吐く。まあ、彼女が所属している組織は神出鬼没な上にそもそも組織名さえも自分には知らされてなかった。組

織名を教えない代わりとして報酬を上乗せするという形で手を打ってもらったのであまり気にしてはいない。だが、彼女ならISを高値で買ってくれるだろうという確信がアインにはあつたのだ。

……とはいえ、終わつた事を悔いても仕方がない。とりあえず、今やるべき事はこの学園から抜け出せる準備をいつでも整えておく事だ。もちろん、すぐに抜け出す訳ではない。ここの学園のノウハウをある程度吸収してから出て行つても損ではない事は確かだ。

ISの操縦は大体「感覚で」掴めたものの、完全ではない。多少は理論も学ばなければならぬだろう。

実際使つてみて分かつた——^{アレ}ISはとんでもない兵器だ。あれを戦場に持ち出せばどれだけ戦争のし甲斐がある事か……想像しただけで自然と笑みが零れてしまふ。

「ちよつと、よろしくて？」

「……ん？」

……そんな事を考えていたら、いきなり声をかけられた。

話しかけてきた相手は地毛が金髪の鮮やかな女子だった。白人特有の透き通つたブルーの瞳がやや釣り上がった形でアインの事を見下すように見ていた。

またこの手合いか、とアインは内心で溜息を吐きながら、身体を動かして金髪の少女の方に向き直った。

「何か御用でしょうか？ イギリス代表候補生、セシリア・オルコットさん？」

「あら、貴方の前で名乗った覚えはなくてよ？」

「おっと、こいつは失敬。入試主席の名前欄に貴女の名前があつたので、自己紹介ですぐに覚える事ができましたよ。英国貴族、オルコット家の名声は世界を転々としていた私にも届いていました。こうしてオルコット家の者とお話できるのは、私にとつても光栄ですよ」

「まあ！ 金でしか言う事を聞かない犬の分際かと思いましたが、中々に礼儀を弁えているようで安心しましたわ。そう、この私こそイギリスの国家代表IS操縦者、その候補生、エリートなのですわ！」

営業スマイルのような顔を浮かべながら、アインは社交的な挨拶と同時に彼女の家を盛大に褒めたたえる。……あくまで彼女自身の事は褒めてないのだが。

この手の輩……とくに女尊男卑の思想に染まっている女性の相手を何回も相手にしてきたアインにとつて今更この程度の罵倒は気にも留めなかった。……いや、むしろそれで戦争を煽ってくれるのであれば是非とも公の場で大声で叫んでほしいとさえ思っている。

雇い主が女尊男卑主義者であろうとそうでなかつたら、傭兵が雇い主から信頼を得る手段はただ一つ……『手柄』なのだ。それなりに戦果を上げさえすれば信頼は得られる。

そして傭兵は信頼が命であるが故、こうして自分が男である事をいい事に罵倒してくる輩が相手でも意に介さずに会話を進めるコミュニケーション能力をアインは身に着けたのだ。

……裏社会でも狡猾に立ち回れるように。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくする事だけでも奇跡……幸運なのよ。その現実を少しは理解できているようで安心しましたわ」

「ええ、それはもう……」

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ？」

別に優しさなどいらぬ、自分がやりたいのは戦争だ。

そんな本音を心の内で飲み込みながら、彼女の言葉に相槌を打つ。

「I Sの事で分からない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差しあげてもよくつてよ。何せわたたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、というのはおそらく女子で、という事だろう。

何せ……自分も教官を相手に圧倒して倒して見せたのだから、そうでなければ辻褃が

合わない。が、どうやら本人はその点については気付いていなさそうなのでアインは向こうに合わせる事にした。

「そ、そいつあまた……さすが代表候補生。教官すらも倒してみせたそのずば抜けた手腕、恐れ入ります」

わざと目を見開き、いかにも感嘆しています、といった風な口調でアインは言う。

その言葉に彼女、セシリア・オルコットはフン、と得意げに腰に手を当てながら鼻をならした。

そうしている内にキーンコーンカーンコーン、と三時間目開始のチャイムがなった。

脱出する算段を考える時間を取られたな、とアインは内心で愚痴りつつも、営業スマイルを保ったままセシリアに席に座るように促す事にした。

「おっと……時間のようですし、早く席を座られては如何が？」

「ふふん、どうやら貴方とはうまくやっていけそうですね。それでは」

彼女は上機嫌そうに鼻を鳴らしながらアインに背を向け、自分の席へと戻っていく。優雅な仕草で戻っていくその様は如何にもいい所のお嬢様、という感じの風格を見せていた。

(クククク……それにしても、 “オルコット” ねえ……)

そんな彼女を見つめながら。

アインはそつと口角を釣り上げてほくそ笑んだ。



「それではこの時間は実践で使用する各種特殊武器について説明する……が、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなきゃいけないな」

言つて、織斑千冬は説明する。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るためのものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

随分とまあ面倒な事をするものだ、千冬の説明に対してアインは真顔でそんな感想を抱く。

まあ、自分がそのクラス代表者とやらになる事はないだろう。いや、あつてもしてやるものかとアインは思う。ただでさえ何の報酬を提示されないまま、この学園に居座らされているのだ。

それにこの学校から脱出する準備をする時間も削れてしまう。それだけは何として

も避けたい。

(いや、待てよ?)

そこまで考えて、アインはそれを改めた。

ただひたすら脱出する準備をすれば如何に自分といえど怪しまれるのは当然の事。何せ自分は世界で唯一の男性操縦者……否が応でも周りの視線を浴びてしまう。

だったらいつその事その生徒会の開く会議や委員会への出席権を得て、先に学園の動向を探りながらの方が脱出する算段が付きやすいのではなからうか。

幸いここはIS学園……普通の学園とは文字通り訳が違う。

何より戦争を起こしやすくなるかもしれない。

……そう考えれば、クラス代表者になるのも視野に収めておくべきだ。

「はい! アイン君を推薦します」

(来たか……!)

さつそく自分への推薦が上がった事にアインは内心でガッツポーズをする。

それに触発されてか、周りの女子たちが次々と手を上げて自分を推していく。やはり珍しい男性操縦者という事もあってか、その勢いは止まる事を知らなかった。

「では候補者はアイン・ゾマイル……他にはいないか、自薦他薦は問わないぞ?」

千冬が心なしに複雑な面持ちながらも、アインの名前を紙にメモを取る。

これはいい傾向だ、とアインは表情に出さないうながらもほんの少し口を歪めていた、その時だった。

「待つてください！ 納得が行きませんわ！」

パンツと机を叩いて立ち上がったのは、先ほど二時間目が終わった後の休み時間であるアインと話していた金髪の女子生徒、セシリア・オルコットだった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

(ほう、こいつ面白い)

若干、口角を釣り上げるアイン。

いずれあの女に何気なく煽って差別的な発言をさせて戦争の火種にしてやろうかと思っていたが、態々自分が煽るまでもなくこうして喋ってくれるとは思わなかった。

……惜しむべきは、ここに男のお偉いさんがいない事であるのだが。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由でこんな金で動くような猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国まで I S 技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」
(そうだ、もっとだ、もっと吐き出せ……)

「いいですか?! クラス代表はトップがなるべき、そしてそれはわたしですわ!」

大体、文化としても後進的に国で暮らさなくてはいけない事自体、わたくしにとつては苦痛で——」

(足りねえな、もつとだつ!)

本来の彼であつたのなら、ここで彼女の発言に激昂し、お返しにと英国を貶めるような発言をしていたが、彼は違つた。

彼は戦争を煽るためなら、例えば自分をこのような『戦争屋』に変えた主たる要因である女尊男卑の主義主張発言なども簡単に容認した。

この世から戦争がなくなる可能性などないのだ、であればその戦争を全力で楽しもうではないか……彼のそのような思考が彼女の差別的発言を容認しているのだ。

ここに彼女の発言を止める主人公ヒーローは存在しない。

いるのは、原作とは違い更に差別的発言を加速させていく彼女を白い目で見る女子生徒達と、その光景をほくそ笑んで眺める主人公戦争屋だけだつた。

「——であるからして、わたくし、このセシリア・オルコットがこのような未開な極東の地に足を踏み入れる事自体を奇跡……光栄と思うべきでありましてよ!! よつて、わたくしはそんな猿がクラス代表になる事は断じて認められません!!」

もう一度、机をバンツ、と叩いて彼女は論破する。

せり上がった熱が冷えてきたのか、ハアハアと息を上げながらも彼女は段々と落ち着いて、それでも未だに得意げに胸を張っていた。

(よく言った、お嬢ちゃん)

(これでまた戦争の種が増える……！)

例え自分を貶めるような発言をされようが、それでも彼は火種が増えた事を嬉しく思っていた。そもそも、戦争とは拒み合い故に発生するもの、故に自分も全力で拒まなければ戦争にならない。

今はまだ大事にはならないだろうが、それでも後々こういふ発言は響いてくる。何せ、今の彼女の発言を聞いた生徒がこの場に29人もいる。

ここはI S学園……彼女たちとて狭き門を潜りぬけてここまで辿り着いたのだ。その中の半分以上は日本人の女子生徒。彼女の発言をよく思う者がいる筈がない。

彼女の発言を止める者がこの場にいなかった。

それが、彼女の分岐点だった。

「候補者をもう一人追加……セシリア・オルコット。他は……いないみたいだな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。ゾマイルとオルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打ち、千冬は話を占めて授業を始めた。

途中で、気付かれないようにアインを一瞥しながら、特殊武器についての説明をして
いていった。



(やっぱり、一夏じゃない)

先ほどのやりとりを思い出し、千冬は心の中でそう言い聞かせる。

(弟だったら……一夏だったら……あそこで言い返していた筈だ！)

だから、この前列中央に座っているこの青年は断じて一夏ではない。

一夏ではないのだ。

(決して……一夏である筈が、ない……)

寮でのひと時

あの快感は今でも覚えている。

織斑一夏が既に死に、『戦争屋』としての狂気だけが残り、少年傭兵として活動を続けてきたから約一年半が立っていた。

最初は様々な雇い主から、何故こんなガキンちよが、何故男の分際が、等々言われ続けてきたが、自分には関係のない事だ。

——いいから、戦争をさせろ。

——人を殺させろ。

——できれば貴族か偉い立場の人間あたりがいい。

——戦争を煽れるから。

人と人の拒み合い、争い、それを眺めるのは至極最高な事だ。自分もその和に入り込めるのであれば尚いい。

人種差別問題、行き過ぎた信仰——様々な要因が重なってそれは狂気となり、争いという最高の遊戯を誘発するのだ。

仮に、それを『歪み』と仮定しよう。

ならばその『歪み』とは如何なる事を以てしても発生するか……まずはその発生する要因がある。

ならその要因はなぜあるのか……つまるところ、人は皆己の中に大なり小なり『歪み』を抱えている事に他ならない。

——ほら、簡単だろう？

その『歪み』を刺激してやれば、いつの間にか争いの出来上がりだ。

今回だってそうだった。

女尊男卑社会以前から女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めてきた女性がいた。まさしく女傑ともいうべき、貴族として超然としてあつた女性だった。

——けどさあ、人間だから、死ぬんだろう？

そいつが乗っていた列車を、ボタン一つでほら……あつさり逝つちまった。

——ああ、呆気ない。

——呆気なさすぎる。

嗚呼——やっぱり戦争は、最高だ。



放課後の特別授業を終了させ、山田教員から寮の部屋割を配られたアインはその部屋へと向かった。

部屋は案の定、一人部屋だった。

それもそうか、とアインは肩を竦めてベッドの上に寝転がる。

おそらく、この学校で高い地位にいる教員辺りにはあの映像を見せられているだろう。いくら学園に入る事でその罪を免除されているとはいえ、自分はISで人を殺したのだ。

しかも初操縦で乗りこなし、少なくとも瞬間^{インクニツション・ブースト}加速を使える程度には訓練を受けている他の操縦者を圧倒した上で殺したのだ。

いくら条約の規約に違反したとはいえ、男性操縦者、しかも初操縦でそれ程の操縦技術を発揮した自分を上層部や学園が放っておく筈もない。

だからといってそんな人殺しを同じ学園の生徒の部屋と一緒にするわけにも行かないだろう。

とはいえ――

「あ、アイン君の部屋ここだ！」

「(ハ) (ハ) よ(ハ) (ハ) ー！」

「アイン君、いるー?」

やはり、この女子率99%の学園の中で自分という男子というのはそれはもう珍しいわけで、彼がこの学園に入学した真相も知らない女子たちがドアをノックして自分を呼んできた。

とりあえず“戦争屋としての思考”から“一男子生徒としての思考”に切り替え、アインは部屋のドアを開けた。

「こんにちはー、アイン君!」

「やっぱりここの部屋だったんだね!」

「一人部屋なんだ……ちよつと羨ましいかなあ」

「ねー!」

ドアを開けたそこにいたのは四人の女子生徒達だった。

どの子もクラスで見覚えのある女の子たちであったため、アインは彼女達の名前を分かる事ができた。

「これはこれは、皆さんお揃いで……。自分に何か御用でしょうか?」

訝しげな表情を作りながら、アインはドアの前にいた四人の女子生徒達に聞く。

「いやだなーアイン君つたら!」

「だって世界で唯一の男性操縦だもん、何処の部屋かぐらい知りたくなっちゃうじやな

「いー！」

「そうそうー！」

「ねー！」

元氣そうに四人の女子生徒達は答える。

四人ともただ自分が男だから珍しいという理由で来ているだけで、それ以外の他意はないようだった。

ここで早々に追い返してしまえば自分に対する彼女達の印象も悪くなるかもしれないので、アインは敢えてここで彼女達を招き入れる事にした。

「とりあえず、今は何もありませんが中に入りますか？　ここで皆さんが来られたのも何かの御縁ですし……！」

「えーいいのお!？」

「やったー！」

「女の子を部屋に入れるなんてアイン君ったら大胆ー！」

「お邪魔しまーす！」

優しく笑みを浮かべ、ドアを更に開きながらどうぞ、と手を置いて彼女達を招き入れた。

女子生徒達は喜びながら、部屋へと入っていく。

凶々しいと思わなくはないが、人は好奇心の強い生き物だ、この年頃となれば猶更の事である。アインとて男性操縦者である自分の価値を理解できない程馬鹿ではない、そうでなければ少年傭兵の分際で傭兵集団の隊長など務められる訳などなかった。

「わー、広ーい！」

「やっぱり一人部屋だと広く感じるよね！」

「今は五人もいるからそうでもないけど……」

「ねー！」

まるで子供が初めて博物館にでも着たかのような燥ぎっぷりを披露する女子生徒達。彼女達の元々の明るさもあつてか、そんなに違和感はなかった。

そんな彼女達に内心で溜息を吐きつつも、このままではいかな、と思ったアインは話を薦める事にした。

「ところで、皆さんはどうしてここに？ 男性操縦者である自分が珍しいというのは分かりますが、それよりも自分のルームメイトとの交流を優先すべきでは？」

「大丈夫だよ、アイン君！」

「私と、この子！」

「この子と、私！」

『それぞれルームメイトさんだもんね〜！』

四人の女子生徒達が二組に分かれ、互いに指をさして自分達はルームメイトだから大丈夫だと言った。

ルームメイトになったばかりにしては息が合いすぎだろうと思いましたが、まあ別にいいかとアインはその疑問を流す事にした。

「ハハ……そうですね、これは失礼。では、せっかく皆さん来られた事ですし、何かお話でもしていきましようか？」

「え〜？ いいのー？」

「うーん……私、男と何を話したらいいのか……」

「私も、お父さんとお母さんと離婚しちゃったからあまり……」

「り、離婚って……」

どうやら男とあまり話した経験がないようで、三者三様の反応を示す四人の女子生徒達。

まあ、この子たちは学園に入る以前から男が関わる事がまずないIS関連の勉強をしてきたこともあり、男と縁がないのは当然の事であろう。こんな女尊男卑の世の中では尚の事だ。

「心配ありませんよ。自分、これでもここに入学する前は戦場せかいを回って旅してましたから、話のネタに困らないつもりです。何なら、皆さんが夏休みなどで家に帰った時に御

家族への土産話にでもなればよいかと……」

「わく、楽しみっ！」

「ちよ、ちよつとドキドキするかも……」

「男の人の話なんて久しぶりだなあ、楽しみ！」

「何か今……不吉な単語にルビが振られてたような……」

そんな彼女達を眺めながらアインはベッドに座り込み、四人の女子生徒達もまた床に座り込んでアインの思い出話を聞く。

アインはなるべく戦場や物騒な内容などを極力省いてかつ嘘のないようにその思い出話を彼女たちに聞かせた。

何時、何処で、どんな事をし、何を思ったか……それらを頭から引つ張り出し、そして語った。

そんなアインの話を彼女達は面白そうに聞き、時々自分の知っている知識に引つかかのような話に反応しては、「あ、それ知ってる!」、「いいなく、私も行きたいなく」などと言つて盛り上がっていた。

……そんなこんなを話している内に、時間が過ぎていった。

「それでその雇い主が……おっと、もうこんな時間に……。皆さん、そろそろ自分の割り振られた部屋にお引き取りした方がよろしいかと。皆さんもまだ夕食も済ませていな

いでしようし……風呂に入らないのも女性の肌によくない」

「あゝ、もうこんな時間か……」

「もつと聞きたかったな、アイン君のお話」

「けど面白かったね！」

「うん！」

これでお開き、と言った感じのアインの言葉に四人の女子生徒は名残惜しみつつも、満足そうな様子で立ち上がった。彼女達もまさか男子との会話にここまで熱中してしまふとは思わなかっただろう。

うまく世を渡っていくためにアインが身に着けたコミュニケーション能力はそれほどの物だったのだ。

四人の女子生徒が部屋のドアが出ようとしたその時、そのうちの一人が立ち止まってアインの方に振り返り、しどろもどろし始めた。

「あ、あの……」

「? どうかしましたか?」

何か言いよどむ一人の女子生徒達に対し、アインは首を傾げながら聞く。ドアの前に立っていた他の三人もまた振り向き、その女子生徒を見た。

やがてその女子生徒は顔を俯かせ、謝った。

「ご、ごめんね、アイン君。まだこの部屋に来たばかりで、荷物の整理とかし終わっていない筈なのに、こんな時間まで……」

女子生徒のその言葉に、他の三人もまたハツとなった。

確かに考えてみれば自分達はこのアインという男に対して大変失礼な事をしていた。

自分達は荷物の整理を終えてここにやってきたにも関わらず、この男はまだ部屋に来たばかりでそれすらも終えていなかった。

……それなのに、この男はこんな時間まで自分達に面白い話を聞かせてくれたのだ。

「あの……えつと……」

「私達、かなり失礼だったかなあ……」

「ア、アハハハ……」

謝った女子生徒達に続き、他の三人も気まずそうにしながらアインの方を見る。実際はアインのコミュニケーション能力に引き摺られてここまで来てしまっただけで、彼女達自身には何の非もないのだが。

そんな四人に対して、アインは優しく微笑みながら言った。

「別にはしていませんよ。むしろ、自分は皆さんに感謝してます」

『えっ?』

ベッドに座りながら笑みを浮かべてそう言うアインに対し、四人全員はきよんとし

た顔でアインを見つめる。

「自分、こう見えてもこの学園で男身一人ですからね。正直、セシリアさんの言葉もあつて片身狭い思いをしまして……こうして皆さんが何の蟠りもなく自分に接して来てくれた事は——大変、嬉しかったですよ」

『……………』

安心したような、嬉しそうな笑みを浮かべてアインは女子生徒達にその顔を向けた。女性たちは呆気に取られた後、赤面しながらあたふたし始めた。

「い、いや、そんな……私はただ、その……」

「う、嬉しいって……」

「そ、そんな……!」

「ああ、うう……」

しばらくして彼女達は正気に戻り、やがてこの自分以外の全てが異性という環境に放り込まれているアインの苦しみ（表面上）を理解したのか、同情の視線を向けてきた。

「そう、だよね……」

「アイン君、男一人なんだよね……」

「私達、珍しい物を見に来るのようになここに来ちゃったけど……」

「というか、考えてみればセシリアさんもあそこまで言う事ないのに」

—— 人心掌握、完了。

心の中でそう呟き、アインはそつと口を歪めた。

まず手始めに自分に彼女達の心を許させる事から始めようとしたが、中々うまくいくものである。

後は彼女達を通して自分の人となりを広めてもらえれば自分もこの学園で何とかやっていけるだろう。

彼女達は自分達こそが一番最初にこの男と親しく話したという自慢話を学園中に広げるだろうという事は想像に難くないし、男性操縦者であるという立場を利用して人脈を広げる事もできる。

「それでは皆さん、時間も押してる事ですし、そろそろお引き取りを……」

「あ、うん、またねアイン君！」

「明日一緒に朝食食べよう！」

「あくずるい！」

「私も〜！」

そんな事を言いながら彼女達はドアを開けて部屋から出て行った。そんな彼女達の背中を見送ったアインは付けていた仮面を外して素面に戻ってまた考えに耽った。

「さてと……」

顎に手を当て、顔を俯かせて真剣な表情に変わる。

この学園のセキユリティは中々のモノ、しかもあの映像のせい、裏で自分を監視している者の目線も時々感じるの、やはりそう表立つて動く事はできない。

そうなると思自分がここから脱出する算段として有効なのは、この学園で起こる大きなイベントや行事などで派手な騒動を起こした隙に逃げ出す事だろう。

そして……その騒動を起こすには特大の『火種』が必要である

「人脈を築くのはいいが、火種とするにや今の雌共ではちと足りねえな。もつとこう……代表候補生クラス、できれば外国の操縦者を『洗脳』して……待てよ？」

そこまで考えて、アインはふとある人物が脳裏に浮かんだ。

つい先ほど、三時間目の時間にクラス全員の前で差別的演説を大声で言つてのけた一人のイギリスの代表候補生……彼女の事が頭に浮かび、アインは笑いかみ殺しながら呟いた。

「クククク、いるじゃねえか……特大の『火種』がよお。しかもあの嬢ちゃん、『オルコット』と言えば昔、俺が——」

三年前の事を思い出し、アインはまた面白おかしそうに笑う。

「一先ず、一週間後のクラス代表決定戦であの嬢ちゃんの心を折つてやる事から始めるとするか。ああ、一週間後が待ち切れねえ……！」

まるで明日の遊園地を楽しみにする子供のような黒い笑みを浮かべながら、アインは部屋の荷物整理に取り掛かった。

夢き英国貴族の少女が『戦争屋』の手に堕ちるまで、あと一週間。

そして『白』は『黒』へと染まる

クラス代表の立候補から一週間が立った月曜日、アインは第三アリーナAピットへと足を運んでいた。

アインにとっては正に千載一遇の好機とも取れる、今回のセシリアとの決闘の日だった。

「ゾ、ゾマイールさんゾマイールさん！」

アインのクラスの担当教員であった山田真耶がアインのセカンドネームを二回呼びながら、駆け足でアインの所へやってくる。

最初はアインの事をくん付けで呼んでいた彼女であったが、彼のずば抜けた猫かぶりによるコミュニケーション能力によって、背丈の関係もあつてか、無意識の内に年下と認識できなくなり、いつのまにかさん付けで呼ぶようになっていた。

「何でしょうか、山田先生？」

「来ましたよ、ゾマイールさんの専用機っ！」

「……ッ、ようやくですか」

待ってました、と言わんばかりの表情を作って山田教員にその表情を見せる。

それが嬉しかったのか、慌てたような表情からパツと一転して太陽のような笑顔を見せる山田教員。

「はい、まもなく到着します！」

彼女がそう言うと同時に、ゴゴゴんつ、という鈍い音と共にピツト搬入口が開く。重い稼働音を響かせながら、ソレは現れた。

「ハ、ハ、ハ、いつが……」

「はい！ ゾマイルさんの専用IS『白式』です！」

「ところでゾマイル、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「準備……それはもしかして自分に専用機が用意される、という事ですか？」

「……察しがいいな」

表向きは厳格な教師を装っているものの、その眼の奥は複雑に渦巻いている己の姉を席から見上げるアイン。……いや、彼女を姉と呼ぶにはアイン・ゾマイルという存在は織斑一夏からあまりにもかけ離れ過ぎた。

故に、姉と呼称すべきではないかもしれない。

「本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属している人間にしか与えられない。」

が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意にされる事となった。尚、専用機の製造自体は日本の I S 企業である倉持技研が担当する」

「日本の I S 企業……しかし、大丈夫なのでしょうか？ 自分が言うのも何ですが、世界初男性操縦者である自分を欲しがる国は沢山ある。自分も傭兵故に無国籍なのが余計にそれに拍車にかけるでしょうし、それなのに一国の I S 企業に専用機を作らせても……」

「己の立場を理解しているようで何よりだ。一応、各国の上層部の間ではお前が最初に強奪した I S が倉持技研製であった事から、今回の専用機の製造も倉持技研が担当する事に一応は落ち着いたそうさ。……とはいえ、大分揉めたようだがな。おかげで遅くなって今日まで伝えられずにいた。そこは教師として謝罪しておこう」

うごかした、という所を地味に強調しながら言う織斑千冬。

アインはそんな彼女の目を見据える。

余計な真似はするな、そんな事を物語っているような気がしたアインは、内心で舌打ちをした。

(ちつ、さすがに千冬姉あたりにはあの映像も見せられているか……当たり前えつちやあ当たりめえだが……)

「織斑先生が謝る事はありませんよ。自分の立場は、自分が一番理解しているつもりで

す。それに、こうして実験体にされたり解剖されそうになった自分を、態々学園に入れて下さった織斑先生には感謝していますよ」

ピクリと、彼女の眉が曇った気がした。

その僅かな変化を、弟であるアインが見逃す筈もなかった。

「とにかく、予備機がないから専用機が来るのを待て。今、倉持技研の方々がお前がクラ

ス代表決定戦に出場すると聞いて急ピッチでお前の専用機を組み立てている筈だ」

「分かりました。倉持技研の方々には、後で感謝の言を述べなければなりませんね」

「それは学園側から言っておく。お前は目の前の戦いに集中するといい」

「お氣遣い、感謝致します」

目と目が合う。

一見、教師と生徒が一对一で対面しているだけの状況に見えるが、それは違う。いかなれば、それは腹の探り合い。

アインは何事もないかのように、しかし真っ直ぐと千冬の目を見据え、千冬もまた訝しと混乱を潜めながら鋭い目付きでアインを見る。

「……話はこれで終わりだな。授業を始めるぞ。山田先生、号令！」

「は、はい！」

そんな二人の空気を生徒が察せない中、山田先生だけは何かを感じ取り、無意識に二

人の間に流れた空気に怯えていたようだったが、それでも彼女は気を持ち直して講義の説明にあつた。

山田先生の授業を聞きながら、アインは先ほどの姉とのやりとりを思い出し、考えに耽つた。

(どの道、俺の本性は向こうに知られているのをいい事にカマを掛けてみたが……当たり前みてえだな。直接的な決定権があつたかどうかまでは分からねえが、俺がこの学園に入学させられた要因に千冬姉は間違いなく一枚噛んでやがる。となれば、この俺が直接動く事は益々避けなきやならねえ)

となると、やはり『洗脳』して駒を増やす事は必須だと改めて実感するアイン。

幸い自分は男性操縦者……物珍しさに寄ってくる女子はたくさんいるのでそれを利用しようという結論に至つたアインは、とりあえずこの考えを頭の隅に置いといて山田先生の授業を聞き続けた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思つていなかったでしょうけれど」
休み時間、早速自分の席へとやってきたセシリアに対し、アインは内心でほくそ笑んだ。

(やれやれ、ここまで分かりやすい女つてのもそういねえな)

そんな事を考えながら、身体の向きを変えて彼女と向き合つた。

「まあ？　一応勝負は見えていますけれど？　さすがにフェアではありませんものね」

「フェアではない……ですか。そういえばイギリスの代表候補生であるセシリアさんも専用機を持っていましたね、名前は確か——」

「『ブルー・ティアーズ』ですわ。我が祖国イギリスが開発した第三世代IS……それを譲り受けたこのわたくし、セシリア・オルコットは、謂わばイギリスの看板を背負ったエリートなのですわ！」

——ほら、こんな風にかまをかけるだけでべらべらと喋ってくれる。

おそらくIS操縦者としての訓練を受けてはいても、こういった事への躰はされていないのだろう。

本当に扱いやすい雌だ、とアインは心の中でそう評し、彼女の言葉に耳を傾き続けた。「本来ならばお互い専用機同士になった時点でまったくのフェア……と言いたい所ですが、貴方はISに関してはまったくの素人ですし？　このセシリア・オルコット、そんな相手に本気を出す程小さな器はしていませんわ。……何なら、其方にハンデを差し上げてよろしくてよ？」

「ハンデ、ですか……。ではハンデと言っては何ですが、一つだけ……」

「何ですか？　何でも仰つてよくてよ？」

フフンと、鼻を鳴らし、腰に手を当てるセシリア。

何でもどんと来い、といういうな態度……しかし、次のアインの言葉でソレは崩れる事となった

「もし、わたくしが勝てればの話ですが、その時は——貴女の専用機のデータを、こちらに寄越して頂けないでしょうか？」

声のトーンを低くし、眼つきを鋭い物に変えてそうアイン。

一瞬、時が止まったかのような感覚を、セシリアは感じた。

——この男は今、何と言った？

——国の看板たる専用機のデータを寄越せすだと？

「……貴方、どういうつもりですか？」

先ほどのような緩慢を思わせるような態度とは一変して、表情を険しい物へと変えるセシリア。そこには、ただ単純に代表候補生である事に誇りを持つ女の姿があった。

「どういうつもり、とは……」

「どうもこうもありませんわ！ 専用機とは謂わば我々代表候補生の誇りそのもの！ そのデータを寄越せなどと、気が狂っていると思えませんわ!!」

パンツ、とアインの机を叩きながらそう言うセシリア。

その目には代表候補生という立場を遠回しに馬鹿にされたという怒りがありありと見えていた。

そんな彼女に対し、彼は臆する事もなく声のトーンを低くしながら弁明を述べた。

「ご存知の通り、自分はこう見えても傭兵の身でして……何等かの報酬がなければやる気が出ない質なんですよこれが。ほら、例え勝機が絶望的だとしても、出来れば全力で抗いたいでしょう?」

「ふん! 所詮は金でしかものを聞かない猿という事ですわね! ああ、本当に穢わらしい、何でこの私が必要な男と一緒にクラスなのでしょう! 我が祖国の情けない男子だつてもう少しは……」

「セシリアさんの祖国、といえばイギリスでしたね。わたくしも三年前に依頼で行ったことがありますが、確かにあそこはいい所だ。この学園に入学する前に回った日本の名所にも勝るとも劣らない——」

「我が祖国をこんな未開な極東の地と比べないで下さらないかしら!? これだから男は——」
喋り続けるセシリアを見て、アインは内心で更にくつくつと嗤う。

——ああ、本当に扱いやすい。

本当に少しカマをかけるだけで女尊男卑の差別発言から、一気に国際問題発言へと持ち込ませることが出来る。おかげで戦争も煽る事が出来る。

今までこのような輩は何人も相手にしてきたアインであったが、ここまで分かりやす

く、扱いやすい女というのもそういなかった。

「まあ、貴方がどのような専用機を使つてくるのかは知りませんが？ どちらにしてもこのクラスで代表に相応しいのはこのわたくし、セシリア・オルコットである事をお忘れなく」

ばさつと髪を手できれいにはらい、去り際にそう言い残して彼女は自分の席へと戻つていた。

……己に向けられた陰口に気付かぬままに。

『何よあの女……』

『アイン君がどんな思いでこの学園にいるかも知らないで……』

『というか、落とした教科書位拾いなさいよ……』

『私達の国まで馬鹿にして……』

陰口を発していたのは、昨日、アインの部屋に押しかけて来た四人の女子たちだった。

アインは昨日、寮の部屋で彼女達とひと時を過ごした後、今朝の朝食を彼女らとともにすることで更に親しくなっていた。

少なくとも彼女達の認識では既に「友達」という関係までにある彼女達からしてみれば、自分達の国を馬鹿にされた上に、友達であるアインの事も馬鹿にされた事をよく思う筈もなかった。

他のクラスメイト達もまた、陰口とまでは行かずとも、セシリアの事を白い目で一瞥していた。

……そんな中、アインだけは内心で笑い続けていた。

原作本来ならば、彼女の発言を止める立場にあつた主人公が、戦争を煽れるからという理由で敢えて彼女の差別的発言を止めずに言い切らせ、そして今回もカマをかけて彼女の差別的発言を煽っていたのだ。

そしてクラスメイト達が彼女達に白い目を向ける一方で、アイン自身はその巧みなコミュニケーション能力で着々と人脈を広めつつあつた。

彼女の味方が減っていく一方で、彼の人脈はそれに反比例するかにように広がっていく。

儂き英国貴族の少女は、彼の手に墮ちるその前から、彼の掌の上で踊らされ続けていた。

「体を動かさせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。分かったな」

いつの間にかいた己の姉にせかされ、アインはその純白のISに触れる。

……触れて、妙な感覚を感じた。

(何だ、この気持ち悪い感じは……?)

初めてISを強奪した時や、試験の時に感じたすつと収まるような感覚ではない。

まるで拒絶されるかのような電撃のような感覚だった。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じがいい。後はシステムが最適化をする」

その言葉に従い、装甲を開いているIS——白式に身を任せる。

その瞬間——とてつもない程の電撃が走った。

「……………、それは……………ぐうッ……………」

「ゾマイール、どうした!？」

咄嗟に苦しみだすアイン。

そんなアインに千冬は慌てて声をかけた。

が、そんな声はアインには聞こえていない。……ただ、苦しむだけだった。

「が……………あ、ぐう……………」

先ほどの拒絶されるような電撃。

白式のコックピットに乗った瞬間、それは確かなモノとなってアインに襲い掛かってきたのだ。

何故、こうなっているか、その理屈はアインには分からなかった。

しかし、『兵器の扱い』に関しては天性の才を持つアインには直感的に理解することができた。

——白式が、自分を拒んでいるのだ。

まるで、お前のような奴は使い手には相応しくないと言わんばかりに、アインという存在そのものを拒んでいるのだ。

「う——うあ……!」

「無事かゾマイル!? 返事をしろ!」

(……ッ、何がどうなつてやがる!?)

まともな声を出せぬほどの苦しみを受けながらも、彼の精神は健在であり、内心で悪態を付けていた。

初めてIS強奪し、操縦したときはまるで馴染むかのように動かせたにも関わらず、この白式は自分の意思に答えてくれなかった。

(くそっ! 動けつてんだよっ!)

そう念じてみるも、白式は答えてくれなかった。

何故だ、なぜ『兵器』がここまで自分を拒むのだ。

この自分が、アイン・ゾマイルがお前を兵器として最大限に使つてやるというのに、なぜ反応しないのだ。

(待て……”兵器”だと?)

そこまで考えて、アインは苦しみに耐えながら別の思考を働かせた。

ISというものはそもそも操縦者の操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになる性質を持っているらしい。

ならば、このISを兵器としてしか考えないアインの情報を、この白式が現在進行形で理解し、拒絶しているという考えはあながち嘘ではなからう。

ならば、とアインは白式へ問いかけた。

『何故俺を拒む、白式』

――

返事はなかった。

しかし、確かに反応はあった。

『ハッ、兵器の分際ですくまあそんなに偉そうにできるもんだぜ。お前もしや――
自分が特別だと勘違いしちやあいねえだろうなあ?』

――

『無視かよ。だがまあいいぜ、今のでお前が俺の何を知ったかはしらねえが……そんな
に知りてえなら見せてやるよ――俺の全てをなあ!』

白式にそう念じるや否や、アインは頭の中で今まで己が見てきたものを想起した。

「——ッ」

アインの頭の中に様々な映像が浮かび上がる。

始まりは——女尊男卑の風潮によって死んだ織斑一夏……彼という人間の中にただ一つ残った狂気、『戦争屋』という自分。

様々なモノを見た。

女尊男卑の風潮により、次々と続出する男の孤児。

IS適正が高いという理由だけで裏の研究所にさらわれ、体を色々弄られては廃棄される女子供たち。

男は弱きものとして虐められ、強き女は実験台として扱われる。

その他いろいろ——アインは自分が見てきた闇すべてを白式に見せつけた。

『どうだい、自分が変えた世界を見せつけられた気分はあ?』

「——ッ、……ッ——、ッ……ッ」

いつの間にか、己を拒絶するような電撃は感じなくなっていた。

ISがアインを拒絶するのをやめた訳ではない。

今度は白式の方が苦しんでいた。

『分かるだろうがよお、手前らは特別な存在でもなんでもねえ。見ろよ、世界は何処も変わっちゃいねえ。手前らはただ単に“歪み”を助長したに過ぎねえんだよお!』

「——ッ……ッ——ッ……ッ、——ッ」

一見、何の反応もないように思える白式。

しかし、アインには手に取るように分かった——白式は今、悲鳴を上げていた。目の前の光景が認められないと、自分はそのような存在ではないと、必死にアインが頭に思い出していた映像を否定していた。

『そして、手前らが生み出した “歪み” は『戦争』という最高の遊戯を誘発する』

「……ッ、——ッ」

『人の手によって作られた^{手前ら} I S が、人の世を変えるたあとんだ笑い話だ。手前の “前の使い手” がどんな奴だったかは知らねえが、これが現実だ！これが世界だ！手前は戦争のし甲斐のある兵器以上の何物でもありやあしねえっ!!』

「……」

『理解しやがれえ！ テメエも俺もその為にあんだよオツ!!』

「——フォーマツトとフィツティングが完了しました。確認ボタンを押してください」

そして、白式はついに染まった。

もはやアインを拒絶するような電撃を発する事はなく、アインが見せた闇に押し負けた白式は文字通り、アインの闇に染まってしまった。

「うそ……一瞬でフォーマットとフィッティングをッ!?」

「……ッ!」

アインの様子を見ていた山田真耶は驚愕の表情を表しながら形状を変えた白式を見た。千冬も言葉には出さなかったが、その眼は大きく見開かれていた。

『さあ、始めようじゃねえかつ!』

誰にも聞こえることはなく、しかし青年は大声で自分の扱う兵器に呼びかけた。

『IS 同士による、とんでもねえ戦争つてやつをよおつ……!!』

純黒の鎧を纏った『戦争屋』は、アリーナへと飛び出していった。

奪われた雫

ピットから漆黒の機体が飛び出してくる。

原作 本来の白式のカラーを反転させたダークレッドの機体……デザインもより鋭角的で攻撃的なものとなった反転禍々しいした白が、セシリアのブルー・ティアーズの前に立ちはだかった。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアはまたふふんと鼻を鳴らしながら、腰に手を当てたポーズを取って立ちはだかったアインを見下した。

そんなセシリアを前にしても、アインはまったく動ずる事はなくセシリアのIS——
——ブルー・ティアーズを観察した。

「其方が貴方のIS——ブルー・ティアーズですか。いいですねえ、その王国騎士のような気高さ……まるで貴方そのもののようだ」

「ふふん、お分かりで？　そういう貴方のISは随分と禍々しいですね。まるで獣みたい……金でしかモノを聞かない傭兵風情にピッタリですわ」

「ハハハ……こいつあ辛辣な事で……」

試合開始の鐘が鳴っているにも関わらず、そんな他愛のない会話を始める2人。

傲慢な態度でアインを罵倒するセシリアと、それを軽く流すアイン。

そんなアインの態度にセシリアは眉を曇らせつつも、その傲慢な態度を保ったまま口を動かし続けた。

「最後のチャンスをおあげますわ」

セシリアは腰に当てた手をピシッとアインの方へ人差し指を突き出す。貴族であれば他人に指を差す事は失礼である事くらいは教わっている筈であろうに、その動作だけで彼女がアインという男を見下している事がありありと伝わってきた。

「チャンスとは、一体？」

「わたくしが一方的な勝利を得ることは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげない事もなくてよ？」

そうやってセシリアは目を笑みに細める。

【警戒、敵I S操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認。速やかに『戦争』の用意を、ご主人様】

I Sから送られてくる情報を整理したアインは、コチラに六七口径レーザーライフル《スターライトmkⅢ》を向けるセシリアに返答を返した。

「残念ですが、それはできません。あれだけ可愛いお嬢ちゃん達の期待を背負って自分

はここに立っているんです。貴女と違つてね」

「……ッ」

そんなアインの返答を聞いたセシリアは、今度こそその余裕な笑みから一転して口を歪ませた。

代表候補生である自分が他の生徒から他薦で立候補されなかつた事が、彼女の中で何よりの屈辱であつたようだ。

(どうして、こんな男が……)

小さく歯軋りしながら、セシリアはアインを見据える。

この一週間、いつもそうだつた……周りに聞こえる人間の名前はいつも「アイン・ゾマイルル」、「アイン・ゾマイルル」と、ただ珍しい男性操縦者というだけで周りから期待されて……代表候補生である筈の自分は見向きもされない。

あの時だつて、クラス代表の立候補の時だつて、周りの女子たちは皆彼を他薦し、自分を他薦する者は誰一人としていなかった。

(どうして、このような男が……)

今回の勝負だつて、周りがセシリアが勝つであろうと言われてはいるものの、それは当然だ、当たり前だと受け止められて、大して注視はされていなかった。

これからの期待という意味では、セシリアに向けられる視線よりも、アインに向けら

れる視線の方が圧倒的に多かったのだ。

(どうして……!!)

しかし、セシリアは肝心な所に気づいていなかった。

こんなにも自分に期待の目線が送られていないのは、他ならぬセシリア自身の自業自得であるのだと。

あの時、自分が他薦されない事に腹が立って、代表候補生の身でありながら世界初の男性操縦者である彼を猿と見下し、果てにはこの地……日本さえも後進的な国と罵倒したのだ。

本来とは違い、彼女の発言を途中で止める主人公ヒーローが存在しなかった、それが彼女の分岐点だったのだから。

対して、アインに期待の目線が寄せられているのは、単に世界初の男性操縦者だからというだけではない。彼はその巧みなコミュニケーション能力を活かして、男一人の身でありながら女の集団の中に溶け込む事ができた故、そんな彼女たちからの『信頼』があるが故に期待の目線を注がれているのだ。

その事に、今のセシリアが気付く筈もなかった。

……それさえもが、アインの計算尽くであるという事も。

「そう。残念ですわ。それなら——」

(どうしてわたくしではなく、貴方のような男が……!!)

嫉妬の感情が籠ったエネルギーが、エネルギーライフルへと装填される。

「お別れですわね！」

耳をつんざくような独特の音と共に、エネルギーライフルの銃口から放たれた閃光がアインへと迸る。

その閃光をアインは、機体をほんの少し横にずらし、紙一重で回避した。

自動姿勢制御に頼らず、己の意思で機体を完璧に制御し切った動きでその閃光を避けていた。

「まだまだですわー！ さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テイアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

射撃、射撃射撃射撃射撃。

アリーナ中を飛び回るアインの白式をセシリアは的確に狙いながら、その銃弾の嵐を浴びさせる。

しかし、当たらない。

全て紙一重で躲されていく。

そして閃光をまた紙一重で躲すと同時、アインは武装を何のタイムラグもなく取り出し、セシリアのISへと撃ち返した。

「なっ!？」

咄嗟の事に驚くセシリア。

武装を呼び出した事に驚いたのではない、呼び出しをするその速さである。通常一〜二秒は掛かるはずの量子構成を、セシリアのエネルギー弾の回避と共に一瞬で行い、なおかつ撃ち返した。

どう考えても初心者や素人ができる芸当ではなかった。

(あの武装の形状は……銃? いえ、銃剣!?)

アインが呼び出した武装は片刃の近接ブレードと拳銃が一体化したような形状を持った銃剣だった。

そして、その銃口が、セシリアに向けて正確に連射されていた。

「くっ!？」

咄嗟の事に驚きを隠せないながらも、スラスターを吹かして回避行動を取る。

射撃のエキスパートであるセシリアは勿論、敵の弾丸の回避だって造作もない……咎だった。

しかし、回避行動を取ろうとするセシリアを、銃剣の銃口から吹かれた弾丸は的確にセシリアへと、しかも全弾が装甲のない生身の部分へと命中する。

セシリアの持つライフルに比べれば遥かに口径が小さいその銃弾も、アインの正確な

射撃能力によってセシリアの装甲のない生身の部分へと命中し、彼女のISのシールドエネルギーはガリガリと削れていった。

(なんて正確な射撃ですの!?)

セシリアは先程から驚愕を隠せなかった。

向こうはこちらの射撃を正確に回避し、そして、回避行動をするこちらに向けて正確に当ててくる。しかも白式の機動力を用いて、必死に回避行動をするセシリアのISに張り付き、セシリアの回避行動に合わせて銃口を移動させて的確にセシリアの生身へと当てているのだ。

これが成す意味とは——セシリア・オルコットの射撃能力よりも、アイン・ゾマールの射撃能力の方が遙か上を凌駕しているという事実^に他ならなかった。

「ッ！ そんな事——」

認められない、と頭の中で思いつつも、セシリアは己のISの主武装であるBT兵器『ブルー・ティアーズ』を四機展開し、多角方面からの射撃でアインを押そうとした。

どうせ早く動いたところで彼の正確な射撃によってこちらのシールドエネルギーは削られていく、ならばいつその事立ち止まって複数のビットで押し切った方が良いという、彼女なりの英断だった。

「閉幕です。落ちなさい！」

B T兵器《ブルー・ティアーズ》——本機と同じ名前を冠した四つの移動砲台が、上下左右を移動しながらアインの白式を狙い撃つ。

しかし、当たらない。

掠りもしなかった。

そもそも、流れ弾が飛び交う戦場で戦い続けてきたアインにとつては、四人のライフを持った兵士が移動しながら自分を撃ってくるのと同じような感覚だった。

その移動速度こそ段違いであるものの、今回は自分もISに搭乗しているのだ。避けられぬ道理がある筈もなかった。

やがて。

「チヨイサーッー！」

そんな掛け声と共に、B T兵器の発射間隔の間に、一機のブルー・ティアーズに接近したアインが、その砲身を蹴りつけた。

エネルギー弾を発射される直前であったその砲身は、セシリアのIS本機へと向けられ。

「ッ!？」

B T兵器を操って動けないセシリアに、ビットの銃口から放たれた閃光が直撃した。咄嗟の衝撃で体制を崩してしまおうセシリア。

すぐに体制を立て直すも、眼前には既に銃剣を振りかぶって接近していたアインの姿があった。

「きゃあっ!?!」

白式の機動力も相まって、回避は間に合わないかと判断して咄嗟にライフルを下げた腕でガードをするも、装甲の一部をすれ違いざまに切り飛ばされた。

切り飛ばされた装甲の破片を目にするのも束の間、更なる銃撃がセシリアへと襲いかかる。

「くっ!?!」

すれ違いざまにセシリアのISの装甲を切り裂いたアインは、その速度を保ったまま急旋回、そのまま銃剣の銃口をセシリアへと向けて発砲していた。

咄嗟にビットを本機へと戻して、回避行動を取るセシリアだったが、無意味だった。

元より、中々遠距離向けのブルー・テイアーズの機動力が近距離特化の白式の機動力に敵う筈もない。

しかも相手はその機動力に振り回されることなく、機体を完全制御していた。

回避行動のために機体を動かすも、持ち前の機動力で張り付かれ、先程と同じように生身の部分を的確に速射される。

——いつの間にか、セシリアの機体は中破レベルまでに追い込まれていた。

ついにライフルの砲身の長さ以下の間合いまで接近されたセシリア。
「またもや銃剣を振りかぶるアイン。」

回避は不可能と判断し、防衛行動を取ろうとするが――

セシリアに襲ってきたのは、斬撃ではなく、衝撃だった。

「くっ!?!」

アインはセシリアに向けて銃剣を振りかぶって斬撃をお見舞いすると見せかけ、スラストを吹かしてその衝撃でセシリアのＩＳをアリーナの地面へ蹴り落とした。

咄嗟に受身を取り、セシリアはそれでも戦意を滾らせながら、此方を見下す漆黒のＩＳを纏った男を睨みつけた。

『クハハハハハッ、どうしたどうしたあ!?! 機体がよくても操縦者はその程度か!?!』

ええ、代表候補生さんよお!』

突如聞こえてきた声に、セシリアは耳を疑った。

「声――個人間秘匿通信!?!」

この声は、間違いなくあの男の物だった。

しかし、今までのような穏やかな感じの声ではない。

その口調や態度は正に粗暴そのもの。今まで自分や周りの女子生徒に接していたような気品と礼儀を感じさせるようなあの態度とは似ても似つかなかった。

『これならあのニーアって嬢ちゃんの方がまだマシだったかあ!』

言つて、漆黒のISを纏つた男は銃剣の切っ先をセシリアに向けたまま急降下してくる。

このままでは敗けると思つたセシリアは咄嗟に機体を動かして回避し、再び空に飛び上がつてライフルを連射しようとするが、遅い。

それに反応するように張り付いた白式がセシリアのエネルギーライフルの砲身を蹴り上げ、照準が逸れてしまう。

その隙をついたアインは、再び切っ先をセシリアへと向け、突進攻撃を行う。

何とか機体を下に逸らすことで肩の装甲に掠るだけにとどめたセシリア。

すれ違つたアインの方へ振り向き、言い放つた。

「それが……貴方の本性というわけですわね!?! この、野蛮人っ!」

またもや急接近してくるアイン。

セシリアはそんなアインを待つ。

もう、容赦などしない。

セシリアの間合いに入ったアインは、再び展開されたビットを切るのではなく回避し、残り一つのビットを掴んでぐり抜けるように綺麗に跳ね除けた。

ライフルの砲口は間に合わず、確実に一撃が入るタイミングで、彼女はニヤリと笑つ

た。

「——かかりましたわ」

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起がはずれ、動いた。

「お生憎さま、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

至近距離からミサイルが発射される。

しかし、驚愕したのは黒の鎧を纏いし『戦争屋』ではなく、青き鎧を纏った貴族の少女の方だった。

「なっ——」

その光景に、セシリアは今度こそ度肝を抜いた。

至近距離からのミサイル……アインはそのミサイルを難なく躲してのけたのだ。

まるで宙返りをするような動作で機体を一回転させながら後退し、紙一重でミサイルを回避した。

（なんて、反応速度……!?!）

しかもそれだけではない。あれだけの動きをしてみせながら、その完璧な機体制御を以てあつという間に元の体勢に戻っている。

だが、これだけで驚くにはまだ早かった。

咄嗟に後ろに振りかぶったアインは、背後に向けて銃剣の銃口から弾丸を二発発射し

た。

一体何を、と思ったセシリアだったが、その時――

彼の後ろで、ミサイルの爆発音が起こった。

「う、そ――」

セシリアが発射したミサイルは二発。彼が発砲した弾丸も二発。

そしてミサイルは二発とも爆発四散した。

呆然となるセシリア。

そんな彼女を嘲笑うかのように、彼のプライベート・チャンネルがかかる。

『よく聞こえなかったなあお嬢ちゃん！ ブルー・ティアーズが何だつて!? ええおい

!?!』

「……………っ！ ブルー・ティアーズ！」

激昂したセシリアは六機のビット全てをフル稼働してアインに攻撃を始めた。

四機のビットからレーザーが、二機のビットからはミサイルが飛び出す。

(許しませんわ…………)

セシリアはかつてないほど激昂していた。

(許すものですかっ！)

……ここまでコケにされて、彼女はもう退くわけにはいかなかった。

彼女はこれまで、彼に一発も弾丸を喰らわす事は敵わなかった。

それは自分が出し惜しみして四機のビットだけで攻めていたからだ、だから六機ならもう負けない——そんな思いが、彼女の心の最後の支えとなっていた。

ミサイルとレーザーの包囲弾幕を軽々と避けていくアイン。その反応速度と操縦技術はセシリアのそれなど比べ物にならない……そんな事くらい、セシリアも十分に理解していた。

(ですが、隙は必ずありますわ！)

事実、セシリアのその考えは正しかった。

いくらISに乗っついていようが、乗り手は所詮人間である。

反応が一番遅い角度という物が必ずある筈なのだ。

そして、セシリアは捉えた。

(ここですわ！)

彼の一番反応が遅い角度に一機のレーザービットを設置する事に成功したセシリアはニヤリと口角を釣り上げ——

「——え？」

そして、敵にレーザーを当てる筈だったビットの砲身が自分の方へ向いて、彼女は思わず啞然とした。

レーザーやミサイルの発射音が飛び交う中、それらと変わらない一発のレーザーが、セシリアに迸った。

「——っ！」

ビットの制御に集中している中で、回避をする余裕を持たなかったセシリアは、そのレーザーをそのまま受けてしまった。

「どっ……して……」

かつてないほどのショックを受けるセシリア。

それも当然だった。

何せ、今まで共に走ってきた相棒……その一部に裏切られたのも同然の事態だったのだから。

信じられないと思い、セシリアはもう一度眼前の光景を見直して……絶句した。

「……なん……で……っ！」

次に目撃したのは、先程自分を攻撃したブルー・ティアーズが彼に向けられて放ったミサイルを撃ち落としている姿だった。

その隙に彼はもう一機のブルー・ティアーズに接近し、その砲身を掴み、一瞬何かに集中するような動作の後にすぐに手放した。

そしたら、彼が掴んだもう一機のブルー・ティアーズがまた他のブルー・ティアーズ

を一機落としていくではあるまいか……。

「まさか、うそ、そんな……」

信じられない、これは夢だと思った。

だが夢ではない———これが闇に落ちた白式が発現したもう一つの
ワンオフ・アビリティ 単一使用能力———フォーシング・アンロック 『強制使用許諾』。

本来、他の I S の武装はその I S の操縦者の『使用許諾』アンロックがなければ使用はできない。

この能力はそれを無理やり行い、相手からその武装を奪うというものである。

戦場で生き残るため、その場にある物全てを利用するというアインの特性を、白式が理解し、発現させたものだった。

「ブルーティアーズの制御が……奪われ……た……う？」

———何時だ？ 何時奪われた？

先程の一個は掴まれた事によって奪われたものだと仮定して、最初に自分に攻撃をしてきた方のブルー・ティアーズは何時奪われたのか、セシリアは必死に思い出す。

そして、思い出した。

(あ……あの時!?)

そう、自分が彼にミサイルで奇襲しようとする前、彼は四つのブルー・ティアーズの内の一つを掴んで躲していた。

その時に……奪われたのだ。

(じゃ、じゃあ……私が彼の一番反応が遅い角度のところに設置していたブルー・ティーズは最初から彼の手にあつたって事に……え？ え？ どういう事ですか？)

セシリアは気づいていないが、アインには分かっていた——彼女が敵の一番反応が遅い角度に設置する時に、彼女がどのビットをよく使う癖があるのかを、今までビットの弾幕を見極め、それに気づいたアインはミサイルに奇襲される前のあのタイミングでそのビットを態々選び、制御を乗っ取ったのだ。

そして自分の反応が遅い角度にわざとそのビットを設置する事で、彼女に未だにそのビットは自分の制御下にあると錯覚させていたのだ。

ふと、セシリアは、再び眼前の光景を見つめる。

そこには——自分から奪った二つのブルー・ティーズを従えた、漆黒の鎧があつた。

「き——」

それで、セシリアの何かがプツンと切れた。

「キサマあああああああああああああああああああああああああああああああッッッ!!?!」

セシリアはもう何がなんだか分からなくなっていた。

何も考えられなくなった。

己がなんだったのか、どうしてここにいるのか、何故今戦っているのか……そんな思考さえも破棄した。

「ブルー・ティアーズうツ!!」

残りの制御下にあつた三機のブルー・ティアーズ——ミサイルビットが二機と、レーザービットが一機。

それら全てを総動員して、ありつたけの弾幕をアインにぶつける。

しかし、アインに奪われた二機のブルー・ティアーズによつてミサイルは次々と落とされ、レーザーもまた紙一重で躲される。

それを見て、セシリアは更にその怒りの色を濃くした。

「返せ！ 返せ還せ返せ返えせ変えせ解せ替えせ代えせ飼えせ換えせカエセかえせツツ!! 返しなさいいッ！ わたくしの誇りをツ!! わたくしのプライドをツ!! わたくしの『ブルー・ティアーズ』を返しなさいいッツ!!」

『知らねえなあ！ 気が付いたら動かせるようになってたもんでよお!!』
「ふざけるなあツ!!」

棒読みでそう答えるアインに対し、セシリアは更に吠えて残りのブルー・ティアーズを使つてアインを必死に攻撃するが、当たらない。

アイン自身が紙一重でレーザーを回避し、残り二つのミサイルビットから発射されるミサイルも、アインが奪ったビットによって撃ち落とされる。

「返しなさいいッ!! 貴方のような野蛮な男が、ブルー・ティアーズをおッ!!」
『ハッ! テメエの許可がいるのか、よっ!』

瞬間、漆黒の鎧は動いた。

……セシリアから奪ったブルー・ティアーズを制御したまま、銃剣を構えてセシリアへと接近してきた。

「う……そ……!?!」

その光景に、先程の怒りが打ち消されてしまう程の衝撃を、セシリアは受けた。

ブルー・ティアーズを遠隔で動かす場合、その制御に集中力を割かなければならなくなるため、本体は自然と他の行動ができなくなってしまう。

なのに、この男は何だ?

——どうしてブルー・ティアーズを制御しながら、先程と遜色ない動きで此方に近づいて来るのだ?

『隙ありい!』

「くうッ!?!」

ビットの制御に集中力を割き、動けないセシリア。

ビットの制御をしているにも関わらず、高速で動くアイン。

——この時点で、どれだけの差がある事か。

セシリアは移動のために制御下にあったブルー・ティアーズ三機を本機へ戻そうとするが、それさえも遅かった。

アインが奪った二機のブルー・ティアーズが、セシリアの下へ戻ろうとしていた二機のミサイルビットを、レーザーで的確にそのクリスタル状のコンデンサパーツを撃ち抜き、撃ち抜かれたブルー・ティアーズは奈落へと落ちていった。

そして、残り一機のブルー・ティアーズも、咄嗟に旋回したアインによって真つ二つに切り落とされた。

それらは一瞬かつ、同時に行われた動作だった。

「あ……ああ……」

もはや、泣き崩れるように、震えるセシリア。

射撃能力でも負けた。

ISの操縦技術でも負けた。

そして——ビットの操作技術でも、負けた。

彼が自分から奪った二機のブルー・ティアーズは、自分が操っていた時よりもすごく活き活きしていて、動きのキレもあつた。

ブルー・ティアーズを制御している時はそれ以外の行動ができなかったセシリアとは違い、彼に奪われたあの子達は、文字通り、使い手と見事な円舞曲を踊っていたのだから。

ただ踊らせていただけの、まがい物の自分とは違ったのだから。

二つのブルー・ティアーズを従えながら、黒き鎧が迫り来る。

もう、どうでもよくなってしまうた。

だって——もう自分が彼に優っているところなど、何処にもなかったのだから。

アインの手に握られていた銃剣の刀身が、眩い光を放出しながら、セシリアへと迫った。

そして。

『これでお陀仏!!』

眩き光を放出した銃剣が、彼女のISのシールドバリアを切り裂き、そのシールドエネルギーを根こそぎ持っていく。

『試合終了。勝者——アイン・ゾマイール』

試合終了のブザーが、アインの勝利を淡々と告げた。

とある天災の決意

「す、凄い……」

ピットのリアルタイムモニターで試合を見届けていた山田真耶は目を見開かせたまま、呆気に取られたような表情で呟く。

試合内容は本場に一方的だった。

セシリア・オルコットのブルー・ティアーズはアインの白式に弾を一発も当てられない事がなく、逆にアインが操る白式は近距離特化のISであるにも関わらず同じような距離からほとんどの弾丸をセシリアの生身の部分に命中させるという荒業をやつてのけた。

そしてそのセシリアに当たっていない残りの弾丸の方も、ブルー・ティアーズから放たれたミサイルを正確に撃墜させている。

この試合で、彼が外した弾丸は一発たりともなかった。

機体の驚異的な機動力もいとも容易く制御し、そしてその機動力を維持しながらの急旋回を難なく成し遂げ、更には単一使用能力で彼女からBT兵器を奪い、そしてそのBT兵器を彼女以上にうまく扱うという芸当もこなしている。

まさしく完璧試合とも言うべき結果だった。

真耶自身、教師がこう言つては失格であるが、正直アインが負ける事はないだろうと思つていた。

何を隠そう、入試試験で彼の相手を担当したのは他ならぬ彼女自身だった。

手を抜いたつもりなどなかった……しかし、完膚なきまでに叩きのめされた。通常、入試試験は教官のシールドエネルギーを400削つてしまえばそれでもう合格ラインだ。

にも関わらず、真耶が駆つたラファール・リヴァイヴは彼の駆る打鉄に成す術もなく敗北した。

だから、アインは負ける事は正直ないと思つていた。

よしんば負ける事があつたとしても、それは癖のある専用機の性能に引つ張られてのものによる敗北しかないだろうと考えていた。

しかし、そんな真耶の予想を大きく超えていた。

本来ならば実戦の途中に済ませる筈だったフォーマットとフィッティングを、搭乗した瞬間にそれを済ませ、そして初めて乗る専用機をまるで己の手足……いや、まるで己の身体そのもののように操つて代表候補生から勝利をつかみ取つた。

祝福すべきだろう……彼の勝利を。この女尊男卑の世の中を覆すその一步とも取れ

る、最高の初陣であろう。

敗北した彼女の方も、今回の敗北を機に今までの態度を改めるかもしれない。

なのに――

――何でしょうか、このモヤモヤは……。

何故か、何故か違和感を感じる。

どう言うべきかは分からない、少なくとも白式の名を冠したISが漆黒に染まった事に關して、では決してない。

真耶はアインの人柄をよく知っている。

何事にも礼儀正しく、そして真耶の授業も席の一番前でいつも真面目に聞いている品行方正な生徒だ。

彼以外の周り全員が女子という環境の中でも、その人柄で瞬く間に女子たちの輪に入り込んでいたため、その順応性の高さも計り知れない。

……そんな彼が、こんな戦い方をするだろうか？

いや、そもそも何故こんな戦い、と思ったことすら真耶には分からなかった。

とにかく、少し違和感があるという事が分かるだけだった。

「どうした、山田先生？」

そんな真耶の何とも言えない表情を見た千冬が、若干心配そうに彼女に声をかける。

「あつ……いい、いえ、なんでも！ 勝ちましたね、ゾマイルさん」

「……………そうだな」

微妙とも取れる表情を持ち直し、真耶は再びモニターに映る黒い白式を見つめ、千冬にそう告げる。

暫しの沈黙の後に、千冬も彼の勝利を認めた。

「それにしても、セシリアさんのビットを奪ったあの単一仕様能力は一体……?」

「おそらく、本来ならば操縦者からの『使用許諾』^{アンロック}がなければ使えない他のISの武装を、強制的に使用許諾させて奪う能力だろう。しかも、それだけじゃないな」

「そう……ですね。ただ強制的に使用許諾させるだけでは、セシリアさんのブルー・ティーズのコントロール権が奪われる道理がありません」

「その通り。おそらく使用許諾させると同時に奪われた側からの使用権までも剥奪しているのだろう。使い所こそ限られるが、状況によっては凶悪なアビリティだ。だが……重要なのはそこじゃない」

「……………」

千冬の言葉に真耶は首を傾げる。

そんな真耶を見た千冬は一歩前に踏み出して、先ほどのモニターの最後の部分を再生し直した。

そこは試合終了直前の映像、アインが銃剣を構えてセシリアに止めをさす場面だった。

「よく見る山田先生。ゾマイルがオルコットに止めの切り付けをする瞬間——刀身が光っていただろうか？」

「それが……ッ!?! いえ、けど、そんな筈は……!?!」

言われて、真耶も驚愕を露わにして気付いた。

あの刀身が光るのではなく、刀身が光を纏うようなあの形状……間違いなく、かつての千冬が使っていた近接ブレード『雪片』と同じタイプだ。

そしてその刀身が光っている状態は、間違いなくある単一仕様能力が発動している時のものだ。

そう、間違いなくアレは——。

「この私が見違えるものか。あれは間違いなく『零落白夜』だ。しかも私の時とは違って銃剣状になっている事から、おそらく弾丸に纏わせて撃ち出す事も可能になっているのだろう」

「けど……」ファーストシフト「次移行の時点で単一仕様能力を獲得する事すら異常なのに……一気に二つも、しかも一つは織斑先生と同じ……!?!」

「分かったでしょう、山田先生。瞬時にして一次移行を済ませ、単一仕様能力を二つも、

しかも一つは既存のモノを習得し、そして代表候補生であるオルコットですら不可能だったビットと自機の同時制御すらも奪ったその瞬間に成し遂げた、奴の異常性が」

「……………」

真耶はもはや何も言えなかった。

映像を見ただけでも彼の強さは計り知れないものであったが、こうしてI Sの達人から順序だてて説明されれば、嫌でもその異常性を思い知ってしまう。

いや、それだけではない——彼はまだ初心者なのだ。

初心者であるにも関わらず、あれだけの強さを発揮してみせたのだ。

操縦者の腕はその稼働時間こそがモノを言うにも関わらず、瞬く間に手足のように乗りこなしてしまう、彼の異常性は計り知れないものだった。

「はつきり言う——白兵戦はともかくとして、奴はこと『兵器の扱い』に関してはこの私すらも凌駕している」

「……………」

それは世辞でも賞賛でもない、紛れもない事実であると千冬の目は語っていた。

事実、千冬はこれ以前にも彼の異常性を目撃している。

東欧の紛争地帯でI Sを強奪し、初操縦で他の操縦者を圧倒し、果てには瞬間加速イクニションブースト、そのもう一段階上の加速方法を独自に編み出して実践してみせたのだ。

しかもISの「操縦者保護システム」すらも把握し、ソレを利用して相手を最大限まで苦しめて殺すという残酷性も垣間見せた。

——ある意味、人間の枠を超えているのではなからうか……。

勿論、強さだけではなく、彼のその「在り方」も含めてでの話ではあるが。

(それにしても奴め、明らかに遊んでいたな)

普段の品行方正な生徒の演技しか見せられていない山田真耶は先ほどの彼に少し違和感を抱く程度であったが、あの映像を通して彼の本性を知っていた千冬は内心で忌々しげにそう呟く。

まず、アインはセシリアに勝とうとなどしていなかった。

いや、最終的な目的は「勝つ」事にあつた事は間違いないが、もし彼が本気を出せばものの数秒で片は付いていた筈である。

それなのに彼はまったく本気など出していなかった……瞬時加速も、彼自身が編み出した二段溜瞬時加速も使用していないのが何よりの証拠だ。

態々一気に接近して片を付けずに、銃剣による射撃でセシリアをジリジリと追い込み、更には斬撃を緩めてその機動をセシリアに見せつけたり、果てには彼女の誇りであるBT兵器『ブルー・ティアーズ』を態々奪い、その上で彼女を上回って見せつけるような戦い方をしている。

それだけではない。

態々全てのB T兵器を乗っ取らずに、ある程度の本数を彼女に制御させたままにすることによって、何方がよりB T兵器使いに相応しいか競うような真似までしてみせた。

彼は、勝つための戦いをしていない。

彼は、セシリア・オルコットの心をへし折るような戦い方をしていたのだ。

(悪趣味な事だ、その上で計算されているのが余計に質が悪い)

無論、最初の所で初心者だの男だのと侮って手を抜いたセシリアの方もどっこいと言えどどっこいなのだが、『狡猾』である分その質の悪さの比重はどちらに偏っているかは火を見るより明らかだった。

「……随分と、彼に入れ込んでるんですね」

「事実を言ったまでだ」

一瞬、山田真耶の核心を突くような言葉に、ドキリとしてしまう千冬であったが、何とか平静を装った。

言える筈もなかった……実は彼が入学した経緯が、とある紛争地帯で違法投入されたISを強奪し、他のIS操縦者を殺害している所を、現在絶賛逃亡中の篠ノ之東博士によって捉えられたカメラで捉えられ、その映像を各国の一部の上層部に流され、その罪を免除する変わりとしてこの学園に入学したなどと、口が滑ってもこの山田真耶という

教員に言える筈がなかった。

もし彼女に伝えてしまえば必ずソレが表情に出てしまい、真ん中前列に座っているアインにもそれが筒抜けになってしまうだろう。

(奴とて、自分の本性がこの私に知られている事くらいは分かっている筈だ。それに、この間の奴のカマ掛けからして私が奴をこの学園に入学させた事に一枚噛んでいる事はおそらく奴も気付いている。そう大きくは動けない筈だが……)

そして、こうやって変わり果ててしまつてもお互いの考えている事がある程度分かる辺り、一夏と千冬はやはり姉弟であつた。

その事に、千冬自身は気付いていないでいる。

いや、気付こうとしていないのが、正しかった。

—— あんなのが、一夏であるものか。

あれは弟ではない。

弟に似た誰かなのだと、千冬は常に己自身に言い聞かせていた。

親友がどんな悪戯のつもりであんな映像を送ってきたのかは知らないが、惑わされるつもりはないと、必死にアインという存在を否定していた。

「一夏で、ある筈が……」

「織斑先生、どうかしましたか？」

山田真耶に言われて、千冬はハツとなる。

いつの間に、口に出ていたようだった。

「いや、何でもないさ。それより、試合も終わった事だ。私は席を外すでしょう」

「あつ、はい！ お疲れ様です、織斑先生！」

「……ああ」

山田真耶の自分を見送る時のその純粹な笑顔が、逆に辛くなる千冬。

それでも何とか平静を装って返事を返し、千冬はいつもと変わらぬ様に、しかし内心は逃げるようにしてピットのモニター室から去っていった。



「アハハハハツ、見てよクーちゃん！ じっくりつたらあんなに楽しそう！」

「束様……」

とある移動式のラボ、その一室のモニターにて二つの映像を並べて見ながら、それを指を差してゲラゲラと笑う一人の女性科学者と、その懐で悲観を秘めた目をしながらその科学者を見つめる少女がいた。

「それにしても……じっくりつたらすごいなあ……。理論上可能とはいえ、まさか

瞬間 加速をすつ飛ばして、二段溜セカンド：チャージ・イグニッション瞬間加速をその場で編み出して実践しちゃうなんてさ、さすがちーちゃんの弟だね♪」

「はい……そうですね……」

左側、東欧の紛争地帯で撮った映像を、女性の科学者は率直に感心するような様子で興味深そうに眺めた。

そこに映っていたのは、ラファール・リヴァイヴの装甲を近接ブレード『葵』で、操縦者の左腕ごと切り落とすアインの姿が映っていた。

「うん……理論上、可能とはいえこれは結構タイミングがシビアなんだよね。何せ一段階目に溜めるエネルギー量も調節しなきゃいけないし、普通の瞬間加速を使う他の有象無象の操縦者がそういう細かい事考えるわけないしな。圧縮した瞬間に溜められるエネルギーの容量が再び空くから、その分をもう一回エネルギーを溜めて再圧縮して放出……ふむふむ、これはちーちゃんでも無理かなあ……文字通り、『兵器の扱い』に長けたいっくんだからこそ成せる技って事だね♪」

一見、単純な原理に思えるが、これは既存のテクニクではなく、文字通り映像の中の青年が編み出した、青年だけの高等テクニクなのだ。

通常の瞬間加速は一度放出したエネルギーをもう一度内部に取り込み、その際に圧縮して放出する事で瞬時的に大加速をするというものだが、この二段瞬間加速はまず一段

目に放出したエネルギーを取り込む際に、圧縮してもすぐには放出しないギリギリのエネルギー量まで調節しなければならず、この段階でミスってしまえばその時点で二段瞬時加速は失敗となる。

一段階目の圧縮が終わり、溜められるエネルギーの容量が空いてすぐにまたスラスタ翼から放出したエネルギーを取り込み、再圧縮して放出する事でようやく二段溜瞬時加速が出来上がる。

……これらの工程を、一瞬の内に繰り返さなければならぬのだ。

そんな超高難易度の高等テクニクを、映像の中の青年はまだ通常の瞬時加速すら試していない段階で、それをやってのけた。

これにはさすがの天才女科学者——篠ノ之束といえど、さすがに舌を巻いた。

故に、普段は飄々としている彼女でも、これは素直な驚愕と賞賛を抱いていた。

「それにしても……驚いちちゃったなあ……この天才束さんが送り出した白式が、あんなに黒くなっちゃうなんて……。束さん、ちよつと……。いっくんの闇を舐めてたかも……」

先ほどのような上機嫌な様子からは一変して、束は今度は悲哀そうな笑みを浮かべながら、右側の映像のクラス代表決定戦の場面を見て呟いた。

そんな束が見ていられなくなったのか、束がクーちゃんと呼ぶ少女、クロエ・クロニ

クルが声をかけた。

「束様……ほんとうに……本当にこれでよかったですか？」

「良いんだ、これで……いや、良くは……ないだろうね、絶対」

「それでも、やるのですか？」

「うん……もう、決めちゃった事だから、後には……引けないよ」

クロエの問いに対し、束は諦めたような笑みで笑う。

彼女には一人の幼馴染がいた。幼馴染には弟がいた。

二人とも束にとっては大切な人間だった。かけがえない存在だった。

束が妹以外で唯一まともに接していた人間もこの二人だけだった。

——なのに、その二人の間を、他ならぬ束が裂いてしまった。

「……う……て、どうして、こう、なっちゃんだらうね……」

思い出すのはあの光景。

あの日、戻ってくれた幼馴染の弟が再び危機に合っていると知って、慌てて駆け付けた束。

……そこにいたのは、複数の屍が転がる地獄絵図と、その中心に立つ、幼馴染の弟の変わり果てた姿だけだった。

狂気に染まり、ゲラゲラと狂笑、駆けつけた束に気付かず、そのまま闇へと消えてし

まった彼。

“……いつ……くん……?”

狂ったように笑いながら闇に消える彼を、東はただ呆然と見つめる他はなく、ようやく現実を受け入れた頃には彼は東の視界から既に消えていた。

そして、東欧の紛争地帯に送り込んだナノマシンカメラの映像から、再び彼を見つける事ができた。

そして、またもや驚愕した。

「東さん、驚いちゃったよ……。やっと、見つけたと思ったら、まさかISを起動させてるんだもん。しかも違法投入されたISを強奪して、初操縦で他の操縦者をあんな風に笑いながら苦しめて殺しちゃうんだもん……。もう……。箒ちゃんやちーちゃんが知ってるようないつくんは……。いないんだ……。って、思い知らされちゃった……。」

後悔するように、懺悔するように、今にも泣きそうな声で東は独白する。

いや、もしくは誰でもいいから、聞いてほしかったのかもしれない、自分の胸の内を。だからといってそこの他人に話してやるものかと、東は養子のクロエにそう話す。

「だから……。もう、これしか……。ないんだ。今のちーちゃんを救うことは、いつくんを取り戻させる事。いまのいつくんを救う事は……。多分、戦いの中で死なせる事……。いや、いつくんは現在進行形で戦争を楽しんでるから……。ちよつと……。違う、かな……?’」

「……」

「だから……そのためには、ちーちゃんにはまたひどい事したけれど……今のいっくんを分からせないといけない、見せつけないといけない。本当に……ひどい幼馴染だよね、私ってさ……」

罪悪感に締め付けられ、痛み軋む胸を必死に押さえつけながら、東は言い続ける。

「分かっているよ……こんなの……救いですらない……ただの私の自己満足なんだって……けど、もう……これしか、ない」

東はひたすら自己嫌悪の言葉を脳内で繰り返しながら、それでも言い続けた。

「映像を見て……確信、したの……このままなら、いっくんは瞬く間に……ちーちゃんに追いつける。同じ、土俵に……立たせてあげられるの……それで、ね……」

それ以上は、言葉が続かなかった。

その後続く言葉は、あまりにも残酷で、言ってしまうえば、東自身が重圧で押し潰されてしまおうだろう。

「もう、いいです……言わなくて、分かります……から……」

これ以上は、聞いているクロエの方も耐えられなかった。

もう、言わなくても分かってしまった……東が二人にさせようとしている事……それがどんなに残酷で、どんなにひどいものなのかを。

束にとっては、この世界を変える事すら生ぬるい……そんな鬼畜な所業なのだ。

それでも彼女は止まらない。止まらない。既に賽はなげられてしまった。他ならぬ束自身が投げてしまった。

だから、彼女が退く事はもはや許されなかった。

——ごめんね。

彼女は懺悔し続ける。

——二人とも、ごめんね。

懺悔し続けても、止められない。

——恨んでもいい、憎んでもいい、いくらでも罵倒してくれたって構わない。

あらゆる咎を背負う覚悟もできていても、それでも懺悔せずにはおれなかった。

それでも、彼女は止まらない。

——それでも、私は……

——いっくんと、ちーちゃんを……

彼女は既に決意していた。

故に、彼女は必ずそれを実行する。

——二人を、同じ場所で、一緒に終わらせてあげたいの。

絶望は甘い罨

翌日、朝のS^{シヨット・ホーム・ルーム} H Rが始まるより少し前の時間帯、セシリア・オルコットはIS学園の屋上にいた。

普通、高校の屋上といえれば生徒立ち入り禁止であるが、ここIS学園でそんな事は一切ない。うつくしく配置された花壇には季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いていた。

そんな光景に囲まれて佇む彼女は、その美しい容姿と見事なプロポーションも相まって普段よりも余程その美しさが際立っていた。

周りの小さな花に囲まれてこそ、中心の大きな花は美しく咲きほこれると言うが、まさしくそれが当て嵌まるに相応しいだろう。

しかし、そんな光景とは裏腹に、彼女の心はそれ以上に荒み、泣き叫んでいた。

彼女の頬にはもはや数えきれない程の本数の涙跡が迸り、重なり合っており、彼女はここで幾度と、何時間と泣き続けたのかすら、彼女自身も分からない程に泣き続けていたのだ。

こうして涙が枯れて尚、彼女の心は絶望と悲しみに染まっていた。

(昨日の、試合——)

昨日のクラス代表決定戦を思い出し、セシリアはまた暗いどん底の闇に落とされるような感覚に陥った。

完敗だった。完膚なきまでの敗北だった。

手も足も出なかった。

いや、手と足を出した所で全てが無駄だった。

(わたくし、は……)

昨日、彼と戦って、思い知った。

自分がどれだけ無謀な勝負に挑んでいたのかを。

自分が挑もうとしていたのが、どれだけ鬼畜な外道で、そして強い人間だったのかを。

普段の彼の温和な態度に騙されて、女に媚びへつらうだけの弱い男と侮って、蓋を開けてみればこの様だ。

「わたくし、は……」

敗北して、頭が冷えて、周囲が自分をどのように見ていたか、ふと周りを見渡してみたら——皆、自分の事を冷たい目で見ていた。

考えてみれば当たり前だと、セシリアは今になって痛感する。

この一週間、彼にあれだけの大口を叩き続けておきながら、実際はセシリアの敗北という形の完全試合。

「あ、ああ……わたくし、は……なんて、こと、を……」

彼に叩きつけた大口は何も彼への罵倒だけでは飽き足らず、果てにはIS発祥の地である筈のこの国さえも馬鹿にする始末。

本来なら、あそこで彼女の発言を止めていた主人公ヒーローがいたにも関わらず、この世界線では彼女の発言を止めるどころか彼女にカマ掛けをして差別発言を一週間煽り続けた主人戦争屋公しかいなかった、それが彼女の分岐点に他ならなかった。

「あの男……アイン……ゾマイル、あの男は、アレは——」

敗北して冷たい視線に晒される自分とは裏腹に、勝利を経て他の女子たちから歓声を浴びる彼を見て、咄嗟に手を伸ばして叫びたくなった。

騙されるな、あれは虚構だ、あれは貴女たちが思うような理想の男ではない——
 アレはケダモノと形容するにもきれいなナニカであると、頭の切れるバケモノだと、叫びたかった。

……だが、そんな事を叫べるような立場になど、彼女は既になかった。

それもその筈だ、セシリアが見た彼の本性はあくまでISの個人プライベート・チャンネル間秘匿通信を通してのモノ、傍から見れば真面目な試合にしか見えないのだから。

だから、自分が彼の本性を知っていた所で、それを周りの女子生徒達に伝えても、今まで大口を叩いた上で敗北した自分の言葉など彼女達には届きもしないだろう。

「う…………う、あ…………」

いや、そもそもその事を懸念している余裕など、セシリアにはない。

セシリアにとつての一番の恐怖——それは昨日の試合映像を本国へと見せられる事だった。

ただ普通に敗北するだけならまだなんとかなったかもしれない。

セシリアはあくまでB T兵器搭載I Sの試験パイロット的な意味合いでこの学園に入学させられてきた為、あくまで優先すべきは勝敗の有無ではなくB T兵器のデータ収集である。

しかし、今回の場合に限っては違う……相手は、自分のB T兵器を奪って、しかもそのB T兵器を用いた上で自分を上回って来た。

例え反応速度やI S操縦技術が負けていたとしても、B T兵器の扱いだけは誰の追従も許してなるものかと……そう、思っていたのに、相手は自分からB T兵器を奪ったその瞬間から、自分よりも高度なB T兵器制御をやつてのけたのだ。

B T兵器制御と同時に立ち止まって射撃するだけならまだ分かる。セシリアはそういう芸当ができる訳ではないが、百歩譲ってまだ許容できる。

だが、手にしたばかりのB T兵器を、しかもI Sの初心者がそれを操りながら、白兵戦を何の遜色もない動きで仕掛けるなど、もはや化け物としかいいようがない。

そんな試合映像をイギリス政府が見れば、どんな結果が待っているかは想像に難くなかった。

「あ……いい、ヤツ……！」

故に、セシリアはその結果を恐怖しながら待ち続ける。

こんな時間が続くくらいならば、いつそのこと早く自分に決裁を下して楽にしてくれと思うくらい、セシリアにとってそれは恐怖と絶望の時間だった。

一応、彼は専用機こそ日本のI S企業が製造したものであるものの、彼は厳密には何処の国にも所属していない上、無国籍だ。しかも世界で唯一の男性操縦者、彼を欲しがる国はたくさんいる。

そんな彼が……B T兵器適正がAと一番高い自分よりも、B T兵器を上手く使ったと本国が知れば、今までもよりも余計に彼を欲するようになるだろう。

(そうなれば、わたしは……もう……)

既に用済みだ、とセシリアの思考は悪循環に陥っていた。

実際、彼は何処の国に所属するかまだ決まっていないので、望みはまだあるのだが、彼女はそんな正常な思考すらできない程の状態にあった。

「どう……し……てッ……！」

彼の顔を思い出し、セシリアは悔しそうな声を出して叫ぶ。

「どうして……あなたはいつもそうやってッ……!!」

わたくしの居場所を奪っていくのですか、と口にして、セシリアはハツとなった。

この一週間……いつもそうだった。

最初のクラス代表の候補で、周りから他薦されていた彼と、他薦されなかった自分。

代表候補生であるにも関わらず、クラスメイトから話しかけられない自分と、ただ男性操縦者というだけで人の和を広げていく彼。

そんな彼に抱いていた感情は果たして……侮蔑、だけだっただろうか？

「わたくしは……彼に、嫉妬していた、とでもいうのですか？」

考えてみれば、当然の事だった。

両親を失い、手元に残った莫大な資産を守るためありとあらゆる勉強をし、その一環でI S適正テストでA+をたたき出した。政府から国籍保持のために様々な好条件を出され、両親の遺産を守るため、即断した。そしてありとあらゆる努力の末、第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜されたのである。

三年前に鉄道事故で両親を亡くしてから今に至るまで、彼女はそれらの過程や死にも
の狂いの努力を経てここにいるのだ。

……なのに、ただ世界初の男性操縦者という理由だけで、IS学園に入学でき、そして自分が死にももの狂いの努力を経て手に入れた専用機を、彼はただそれだけの理由で手に入れていた。

それだけじゃない、自分とは違い、彼はその巧みなコミュニケーション能力を活かして瞬く間に女子たちとの和を広げていっていた。

ああ、なんで気付かなかったのだろう。

男に、嫉妬などという醜い感情を抱いていた自分に。

「あ……うあ……ッ」

ようやく、彼に抱いていた感情を自覚したセシリアは再び涙を流し始めた。

英国の気高き貴族ともあろうものが、ただ一人の男に嫉妬していた、そんな醜い自分を自覚してしまったセシリアの精神はどうとう耐えきれなくなった。

「あ……あ、あああああああッ……!!」

所詮は男性操縦者というだけでチャホヤされているだけの人間。

そんな奴に現実を見せつけて思い知らせてやろうとした。

なのに、それすらも打ち砕かれてしまった。

残ったのは、そんな惨めな己を自覚した自分自身だった。

「ぐすつ、え……あ……あああああッ……!!」

これからの未来に、そしてなにより醜い己自身に絶望して、泣き続けたその時だった。
「何してんだい？」

「え？」

突如、聞き覚えのある声に振り向く。

「よっ」

気さくに手を上げてそんな挨拶をする彼はまさしく、昨日漆黒のISを纏ってセシリアを打ち負かした男、アイン・ゾマイルその人だった。

普段、周りの女子に見せている穏やかな紳士のような態度ではなく、何方かと言えば昨日、セシリアの試合で見せた態度に近かった。

「あ、貴方は……ッ!？」

言いとどまり、ハツとなるセシリア。

「……もしや、見られていた？」

「……よりもよって、この男に……!？」

「昨日ぶりだなあ、嬢ちゃん。元気にしてたかい？」

「い……」

「ん?」

「何時からそこにいましたのっ!？」

「何時つて、今だよ。屋上に来てみたら、嬢ちゃんがなんか項垂れてたから、気になって声をかけたつて所だ……つていうのは、まあ建前に過ぎねえがな」

「え？」

アインの思いもがけない発言に、呆然となるセシリア。

今さきほど言つた経緯が建前に過ぎない……という事は、このアインという男は今まで自分を探してここにやってきたという事になる。

それが何故なのか、セシリアには分からなかった。

「……私を、笑いに来たのですか？」

「いや、そういう訳じゃあ……」

「ではなんだと言うのですか！ 滑稽だと言えばいいでしょう!! あれだけ人を馬鹿にしておいて、大口を叩いて、蓋を開けてみればその相手に手も足も出ない。きつと学園中でも今頃私はあなたのかませ犬として噂が持ちきりでしょうよ、決闘なんて挑んで、私は、わた、くし、は……っ!!」

こんな、一番自分の底を明かしたくないような相手にすら、簡単に底をぶちまけてしまふようになってしまった自分自身に、セシリアは情けなく感じてしまった。

自分は今や負け犬だ。

敗者がどんなに吠えた所で、目の前の男がそれを目に留める筈もないだろうと、そう

思っていた。

「違えよ、セシリア・オルコット。俺は謝罪をしに……つていうのは柄じゃあねえか、話をしにきたんだよ」

「……え？」

彼のそんな発言に、セシリアはまたもや呆然として彼の顔を見つめる。

何処となくバツが悪そうな顔で、少なくとも自分に対して後ろめたい思いを抱いている事は分かった（正確にはそう見せているだけだが）。

「悪かったな、その、テメエの誇りを好き勝手扱っちゃまって……あん時はどうかしていたとはいえ、やりすぎちまった」

「……何故ですか？」

「あん？」

「何故貴方が謝るのですか!! 今まで一週間の行動や言動を省みても、貴方に非など何処にもないじゃないですか!! 周りの生徒の視線を見れば分るでしょう!! 悪者は十中八九わたくしですよ!!」

はあ、はあつと息を上げながらセシリアは叫び出す。

この男は何処まで自分を馬鹿にしてくれるのだと、そんな風に叫びそうな所をぐつと堪えて、それでも耐えきれない部分を吐き出すように叫んだ。

それを、アインは否定しない。

「そうだな。これに関しちゃあテメエの自業自得だ。言い訳のしようもねえ。だが、俺がお前自身にしちまった事についてちやあ別だ。そうだろう?」

「別に……何も、思いませんわ。わたくしは敗者、貴方は勝者。過程はどうあれ、その結果は変わりません。だから、わたくしが貴方に恨み言を言う資格も、貴方がわたくしに謝る道理もあるわけ……」

「んな顔で言われても説得力ねえよ、つたく……」

「……ッ!」

頭をガシガシと搔きながら呆れたようにそう言うアインに対し、セシリアは益々苛立つ視線をアインにぶつける。

もう自分に構うな。敗者は敗者らしく大人しく隅っこで消える。勝者は勝者らしく中心で堂々としていればいいのに、とそんな持論を頭の中で繰り返しながらセシリアはアインを睨み付けた。

「考えてもみろよ。そもその話、何故俺があんな戦い方をしたのか、いいやできたのかお前にはあ分からないだろう?」

「……何の話ですの?」

「いいから聞けよ。仮にも代表候補生と戦おうってんだ。傭兵として戦場で生きてきた

この俺が何の策もないままメエに挑む訳ねえだろう。例えば、一週間前にお前にカマ掛けして専用機の名前を聞き出したりなあ？」

「——ッ、あの時……!？」

言われて、ハツとなるセシリア。

一週間前、彼に専用機が届くと聞いて彼に話しかけた時、確かに勢い余って自分の専用機の名前を言ってしまった記憶があるが、まさかはこの男に誘導されてのものだと気付かなかったセシリアは内心で自分を殺したい気分になった。

「お前の専用機の特性を調べる序で、俺はお前自身の事も調べたさ。生憎、傭兵として世界を飛び回っていたおかげでその手の伝手は沢山いたんでな。おかげで、お前の専用機の弱点も、お前自身の事もすぐに知る事ができた」

「——ッ!? だから……予め、わたくしがブルー・ティアーズを制御している間は他の行動ができないと知っていなければできないような戦法を取って……いえ、それよりもわたくし自身の事……まさか……」

「ああ、全て……とは断言できねえが、知ったよ。お前の両親の事も……その上で俺は、あのようなお前の誇りを穢すような行為を犯しちゃった。普通に戦って、普通にメエを叩きのめせば、それでよかつたのによお……」

「……」

確かに、とセシリアは思った。

その身に実感したからこそ分かる——彼はあのような姑息な手を用いずとも自分などいとも簡単にねじ伏せる事くらい造作もなかった筈だ。

なのに、態々セシリアのピットを奪い、それを彼女以上に扱う事で彼女の心を折るような真似をしてきた。

それについてセシリアは恨み言を言うつもりはない。

いや、すごく言いたいのが、敗者である自分は何も言えないのだから……そう思っていたら、男は意外な話をし始めた。

「俺はよお、国籍も本名も今はありやあしねえが、生まれは日本こになんだ。正真正銘、れっきとした日本人ってわけよ」

「——ッ!? じゃあ、貴方は、わたくしが自分の出身国である日本を馬鹿にしたから……あのような事を、でしたら……」

謝るのは、むしろ自分の方ではないのだろうか、とセシリアは考えてしまった。

だったら、態々自分をすぐに叩かないであんな自分の心をへし折るような戦いをしてくるのだって当然ではなからうか。

しかし、目の前の男はそれを否定した。

「いいや、生憎だが俺はお前みたいな愛国心なんていう大層なもん持ち合わせちゃあい

ねえよ。むしろ、この国が女尊男卑の風潮に染まっちゃまったおかげで、俺と姉さんは生き別れちゃった。だから俺はこの国が正直嫌いだ」

まるで底から憎悪するような目でそんな風に告げるアイン（勿論そう見せかけてるだけである）。

それを見たセシリアは今度こそ唾然としてしまった。彼が自分が日本を罵倒した事に怒っていないと分かっていたにも関わらず、むしろ罪悪感が増すばかりだった。

「俺と姉さんはな、ごく平凡な家庭に生まれた姉弟だったんだが……ある事情で、両親が俺ら姉弟を捨ててどっかにいっちゃまってよお……そして姉さんは、俺を女一人で育ててくれた」

「——ッ!?!」

「そしてな、ISが世に台頭してからは、姉さんはIS関連の技術を学んでその職に就いて俺を養おうとしてな、勿論、幼かった俺もできる事はやったさ。料理、洗濯などの家事は俺が全部やった、少しでも姉さんの負担を減らそうとな……。だけど、姉さんが職に就いてからは、その有能さ故に段々と名が売れ始めてな、そしてこんな女尊男卑の世の中になりつつあった中で、俺が姉さんの足手まといと周囲から罵られ始め、そんな環境もあって俺と姉さんは生き別れる羽目になった」

「……そんな、事が……」

「んで、あろう事がさ、俺はそれでもいいって思っちゃった。俺がいなくなる事が苦しまなくなるならそれでもいいって……思ってたんだ……その時まで、な……」
自己嫌悪するように、伏し目がちになりながらアインは言い続ける。

セシリアはそれをただ呆然と聞く他ない。

「けどよお、別れる直前、俺はそれが間違いなんだって思い知らされちゃった。別れちゃう直前、姉さんは……泣いていたんだ」

「……泣い、て……？」

「ああそうさ、泣いていた。もう手に届かない距離にいる俺に必死に手を伸ばしながら何度も叫んでいた。行かないでくれ、置いてかないでくれってな」

「……ッ！」

「それを見て、やっと気付いたのさ。俺が姉さんに護られていたように、姉さんもまた俺を必要としていたんだって。気付いた時にはもう遅かった。もう手の届かない距離にいて、慌てて手を伸ばしても、世間は俺達姉弟を引きはがしちゃった……！」

悔しそうに、後悔するように、齒ぎしりしながらアインは項垂れた。

セシリアもここ一週間、彼に言った事に余計罪悪感を抱きながら彼の言葉を聞く。あそこまで彼を罵ってしまった以上、聞かなければならないと必死に耳を傾き続けた。

事実、彼は嘘は言っていなかった。

「いや、世間が引きはがしたっていうのはちげえか……。俺は姉さんの事何一つ分かるうともしないまま、姉さんを置いていっちまった。俺一人の自己満足で、姉さんを独りにしちまった」

「……では、傭兵を始めたのは……世界を飛びまわって、貴方の姉を探すため……だったのですか？」

そんなセシリアの問いにアインはハッ、と鼻で笑って自嘲しながらその問いに答えた。

「それだったらどんなに良かった事か。実際は己の不甲斐なさを戦場で誤魔化してただけさ。八つ当たりみてえなもんだった。殺して、犯して、屈服させて、そうする事で自分を誤魔化し続けてきた」

「……」

「けどよお、機会が巡って来たんだ。傭兵として自分から逃げてるだけの人生だったが、あるIS関連の企業に雇われて、そこにあったISを気紛れで触れて、ISを起動させちまった」

「そんな事が……だから、この学園に入学させられて……」

「勿論、己の身を護るためつてのもあった。だが、それ以上にまたとないチャンスだったんだ……!! 傭兵として世界を渡り始めてから姉さんの名前はもう聞いてねえ、何処に

いるかもわからねえ。けどよお、これ以上ないチャンスなんだ！俺の本名はもう使えねえから、姉さんにその存在を知らしめる事ができねえってのは分かってる！だが、俺は男性操縦者、姉さんはIS関係者……だったら、俺の名を売りまくって、餌でおびき寄せてやってくる虫共の中から姉さんを見つけ出す事が出来れば……!!」

決心したような、強い瞳でそう語るアインに、セシリアは罪悪感のあまり益々いたたまれなくなった。

こんな……こんな強い男を、自分は金でしかモノを聞かない猿と罵り、果てには何の事情も知らないままこの男に嫉妬してしまっていた。

自分が彼に誇りを穢されていた？違う、彼の誇りを穢していたのは自分の方ではないかと、セシリアは自分の今までの行いを後悔していた。

「勿論、こんな人殺しに成り下がった男を、姉さんが今更弟として見てくれるかは分からねえ。だが、だからと言ってもう逃げ続ける訳にはいかねえのさ。俺自身が後悔しないためにも、必ず姉さんを見つけ出す！そして、婿さん貰って、無事に生活できてるなら、それでいいさ……」

そんな時だったさ、とアインは続ける。

「テメエみたいに女尊男卑に染まった女なんざあ、傭兵やつてる俺からしちやあその手の輩の相手は慣れてる。だから、テメエが何言ったって最初は何も思わなかった……思

わなかつた、だが——」

「……………」

「ふと思つちまつたんだ——もしかしたら姉さんも、テメエみたいに女尊男卑の思想に染まつちまつてるんじゃないかねえかつて……テメエを見てたら何故かそう思つちまつた。俺と姉さんを引きはがした、女尊男卑の思想にだつ!!」

瞬間、憤怒の目で此方を見据えてくるアインに、セシリアはビクツと体を震え上げさせるも、それでも自分は彼にそれだけの事をしてしまったのだから、当然だと何とか受け入れた。

「そこからさ、テメエの悔しがる顔が見てえと、その高慢ちきな顔を歪ませてえと、その誇りをへし折つてやりてえと思つたのはさ……」

「……………」

「だが、今にして思えば、ただの八つ当たりだった。テメエにもテメエなりの事情があるって知つていたにも関わらずな。だから……そこは謝つといてやる。その……悪かつたな」

バツが悪そうに顔を背けながら、アインは小声でセシリアに謝つた。

そんな彼を見た、セシリアは。

(ああ、何だ……)

そつと目を閉じて、このアインという男を理解した。

(彼も、同じだったのですね……)

自分と同じように、醜い感情に流されて、結果として己の醜悪さを曝け出してしまった、一人の人間。

(いえ、違いますわ)

そこまで考えて、セシリアは己の中の邪な考えを切り捨てた。

(彼の行いは、ただ一人の姉を思ってこそそのもの、それに比べてわたくしは……)

自分と彼を見比べ、ここ一週間の己の醜さをセシリアは痛感した。

彼の行いは醜い行為ではあったものの、それは一人の姉を思つてのものから来ているのに対し、自分はどうかだつたらどうか？ ただひたすら彼が己にないものばかりを持っていると勝手に勘違いし、勝手に嫉妬した。結果としてそれは彼の誇りを穢してしまった。自分よりもずっと強い、この男の誇りを。

「わたくしも……貴方に謝らなければならぬ事があります」

「ん？」

「わたくしこそ、IS 操縦者として、IS 関係者としてそれ相応の振舞いをしなければならなかったにも関わらず……貴方と貴方の誇り家族を穢すような真似をして、その……ごめんなさい」

精一杯の誠意をもってセシリアはアインに頭を下げた。

別にこれをした所で何が変わる訳でもない。

これをしたところで、セシリアの未来が変わる事はけつしてないだろう。

それでも、意味はある。

両親が死んでから虚勢を張る事ではか己を保てなかつたセシリア、そんな己を自覚してから益々と精神が崩れていく一方であつたが、それでもそんな己と向き合わなければならぬのだと、彼女の心は強い決意に固められた。

……それさえもがアインの思い通りだとは知らずに。

「ハンツ、別にテメエが謝る事じゃねえよ。俺の話聞いて分かつただろう？ 俺がI Sに乗る理由はテメエみてえな大層な誇りから来るもんじゃねえ、ただの手段に過ぎねえんだ。そんな理由でI Sに乗ってる俺なんざあ、テメエから見りやあ傍から馬鹿にしているようにしか見えねえだろうよ」

「そ、それでも……」

「それによ——」

気にするなど言つた風のアインに対し、セシリアが反論しようと言ひ淀むも、それはまたアインによつて遮られてしまつた。

「テメエだつて頑張つて来たんだらう。どんなに辛かつたかは分からねえ、どんなに苦

しかつたかも分からねえ。テメエの経歴を一瞥するだけでもどんな辛い思いをしてきたのか想像も付かねえ。そんなテメエに対して謝れ……なんて、口が滑つても言える訳ねえだろうが」

「……………」

その言葉に、セシリアはどれだけ救われた事だろうか。

気が付けば頬は火照り、更なる甘い言葉が彼女を『甘い罨』へと誘う。

「何も知らねえ俺が言うのも何だが……その、よく頑張つたな、そしてお疲れ様」

「あ……………」

気が付けば、また涙が零れていた。

悲しみと絶望からではない……そんな、当たり前な事を言ってくれた事に対する、嬉しさのあまりに涙がまた零れてしまった。

「泣けよ。俺はテメエの苦勞も苦しみも理解できる訳じゃねえ、同情する事なんざできねえ。だから、分かち合つてやることだつてできない。だが、一方的にぶちまける事くらいできるだろう？ 今までのようにな」

もう耐えられなかった。

やつと……自分を認めてくれる人が現れてくれた。

こんな、何気ない言葉をかけてくれる事が、自分をオルコットとしてではなく、セシ

リアとして見てくれた事が、堪らなく嬉しかった。

そして彼女は、『甘い罠』へと飛び込んだ。

「グスツ……う、あ、あああああッ、うわあああああッ……!!」

彼の胸の中に飛び込み、思いつきり泣いた。

今までの全てを吐き出した。

今まで支えてくれる人物はいたが、吐き出せる人物まではいなかった。

だから、セシリアは今までの全てを、その涙で洗い流すように吐き出した。

そして彼女は、『甘い罠』にかかった。

「さてと、取り合えずひと段落ついたって所か……」

朝のSHRのチャイムが鳴る前に先に『洗脳』した彼女を教室へと行かせたアインも、ゆつくりと歩きながらこれからの事について考えていた。

既に彼女の良き先輩のサラ・ウエルキンという二年生生徒も自分の手の中にある。これでとりあえずセシリア・オルコット関係についてのものは粗方こちらが掌握したと言ってもいい。

それに白式の『強制使用許諾』で彼女から一時的に奪ったBT兵器『ブルー・ティアー

ズ』のデータも既に取ってある。

（ここから抜け出したら……まずはこいつのデータをどっかに売って生計を立て直さなきゃな。あの映像のおかげで薄れちまった傭兵としての『信頼』も取り戻さなきゃならねえ……）

こうして考えると仮に学園から抜け出せた後もやる事は山積みだとアインは内心で頭を抱えた。無論、自分の思う通りに事は運んでいる。クラス代表になるという目的も、セシリア・オルコットを手中に収めるといふ目的も達成はされた。

問題は、自分の行動に粗があつたかどうかである。

おそらくこの学園で己の本性を知っているのは少なくとも己の姉一人という事は絶対に在り得ない。

必ずどこかで監視の目を光らせている筈だ。

だが、逆に言えば監視の目が自分に行く分、他に対する警戒の目線が薄れるという事にも繋がる。それを考えれば、こうして自分が高度な『洗脳術』を身に付けていた事は大いに僥倖だったと言えるよう。

「それにしても、セシリア・オルコット……」

くつくつと笑いかみ殺しながら、アインは彼女の名を呟く。

彼女の人生を大いに狂わせたきつかけである事件……越境鉄道での横転事故、その列

車の中にいた彼女の両親はその事故に巻き込まれて命を落としたのだ。

最初はオルコットの名を聞いてもしかして、と思つて調べてみたら、思つた通りだった。

何を隠そう、あの事件の主犯はここにいるアイン・ゾマイルに他ならなかったのだから。

そんな彼女が今、その事故をきっかけに人生を狂わされて、その過程でIS学園にやつてきて、そしてその事件の主犯である自分の手に落ちたのだ。

彼女の周りには既に味方などいない、味方はこの自分だけなのだと思わせて、その心の隙を突いて彼女を『洗脳』する事は造作もなかった。

人生とは全く以てどうなるか分からないと、改めてアインは実感したのである。

「まったく、これだから戦争つてのはやめられねえ……!」

そんな事を呟きながら、アインもチャイムが鳴る前に教室の中へと急いだ。



「やつぱり、思つた通りだわ。彼はただの戦争バカじゃない……傭兵という立場を最大限利用して、その時流に合わせて自分の立ち位置を変えている」

I S 学園の生徒会室で、机の上に並べられた資料に目を配りながら、一人の二年生の少女が深刻そうに呟く。

その目付きは明らかにその年の少女がするようなものではなく、正に裏の世界で生きてきたその道のプロそのものの目付きであった。

「はい、お嬢様。裏から取った資料を見る限りでは、彼は様々な組織を渡り歩いては、その組織の人員以上の成果をたたき出し、かつ戦地での強奪や虐殺、そして強姦などを辞さない事から、彼の周りには絶えず甘い蜜を吸わんと彼のお零れを求める傭兵達が集まっていたそうです」

そこにティーカップを持ってきた三年生の生徒が、入れた紅茶を彼女の机の上と置き、更に資料を追加にと置いてきた。

「まったく……たかが十歳半ばの少年傭兵に大人たちが寄って集って、しかもただの戦争屋じゃなくて狡猾でもあるなんて手に負えないじゃない……。ここ一週間の彼の行動を省みても、怪しい所は特にならない。その手慣れた世渡り能力で周囲の女子生徒達の輪へと自然に入り込んでいる……何者なのよ一体……」

歪んだ口を開いた扇子で隠し、ゾクリ、と思わせるような眼つきで資料を睨む。彼女の名は更識楯無……I S 学園最強の称号である『生徒会長』の肩書の持ち主だった。

「後それと、もう一つ追加情報が」

「……何かしら」

「東欧の■■■■共和国の大臣が盗んだ三機の I S の内の一機——紛争地帯で彼が強奪した I S、打鉄——が、元の研究所からまた盗まれたようです」

「彼が強奪した I S が？　なら目的はおそらく一瞬の内でも彼が動かした I S のデータを取るため、けどそんな情報を知っている者がいるとなればかなり裏の世界に通じている組織の仕業か……該当するものがありすぎるわね」

男性操縦者、という彼の価値を考えればどここの組織が彼、もしくは彼の I S 稼働データを狙ってもおかしくはない。

更識の者達もできる限り情報工作に努めたが、突き止める側にもその道の情報家がいるのは当然の事、完全な秘匿などできはしない。

「やはり、『例の組織』か——」

一人の少女の想いと、一人の少女の後悔

「ふうん、ここがそうなんだ……」

時刻が既に卯の刻を過ぎた夜、小柄な体に不釣り合いなポストンバッグを持った少女――
フアンインリン
 鳳 鈴音は、IS学園の正面ゲート前に立っていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ……」

上着のポケットから学園の案内地図を取り出し、そこを凝視しながら目的地を探す。
 ……が、あまりにも詳細に書きすぎているあまりに鈴音――鈴は思わず紙をくしゃくしゃにして叫んだ。

「ああもうー!! 複雑すぎて分かんないわよー!! もっと大雑把に書きなさいっての!!
 そもそも異国にこんな十五歳の少女を一人放り込むって時点で有り得ないわよ、仮にも代表候補生なんだから案内人の一人や二人くらい寄越してくれたっていいじゃない!!」

一見、少女が言っている事は傲慢な言葉に聞こえるかもしれないが、あながち間違いでなかつた。彼女は世界に467機しかないISの、その代表候補生。曲がりなりにも国の重要人物なので、護衛や案内人の類の人間が一人くらいいいなくてはおかしいの

だ。なので少女の怒りは至極真つ当な物であった。

「はあく、まあ、こんな事言つたつて仕方ないか……。誰かいないかな、教師とか、生徒とか、案内できそうな人」

出来ればこの学園に入ったばかりの一年生などではなく、この学園にある程度通い続け、かつ自分と年が近い二年生や三年生の先輩に案内して貰えないだろうか、という希望を抱きながら少女はあたりをキョロキョロと見回す。

……が、それに該当する人物は愚か、一人の影さえ見当たらなかつた。

(……まあ、そうでしょうね……)

落胆するように肩を落として鈴はハア、とため息を吐く。

そもそもこんな時間に学園の外を歩く生徒や教師などいないであろうし、いとすれば学園を巡回する警備員くらいのもものではなからうか。

一応、訓練施設らしき所から声が聞こえたりはするので、クラスによつてはまだ授業があるのか、もしくは自主訓練用に開放されているかのどちらかであろう。

できれば後者が望ましいと思いつながら、鈴はその訓練施設に足を運ぶ。

そこには、訓練機——日本製のIS・打鉄を纏い、日本刀状の近接ブレードで素振りをしている少女がいた。

歳は鈴音と同じ位、おそらく鈴音と同じIS学園の一年生生徒だろう。

そして、何より鈴音の目に止まったのが……。

（お、おつきい……）

自虐のつもりではないが、胸部が貧相である鈴音の身からしてみればそれはもう呪い殺したくなるくらいに嫉妬してしまいそうな巨乳の持ち主だったのだ。

……とはいえ、あれだけ大きければ戦闘中にむしろ邪魔しているのであろうからIS乗りという観点からしてみれば自分の方が得をしていると、無理やりそんな負け惜しみを自分に言い聞かせながら、ISを纏ったまま素振りをする少女の方へ歩み寄る。

「むっ？」

さすがに途中で止めるのは失礼なので、彼女の素振りが終わるまでしばらく待っていていようと思っていたのだが、そんな鈴音の思いに反し、相手は此方に気付いてISの武装を解いて此方に向き直った。

「失礼ながら、私に何か用か？」

大和撫子を思わせるような見た目とは裏腹に、男らしく凛々しい口調で問いかけるそのギャップに鈴音は内心で少し面食らいつつも、彼女の問いに答えた。

「ええつと……鍛錬中失礼するわ。その、ちよつと聞きたい事があるんだけど……」



「へえ、それじゃあ箒は、あの篠ノ之博士の妹って訳なのね」

「ああ。だが済まないが、あまり姉さんの事は……」

「分かつてるわよ。お姉さんの話をしている時の箒の顔、とても見れたもんじゃないしね」

そう言いながら鈴音はラーメンを啜る。

鈴音がIS学園に来てから翌日の事、訓練施設で出会ったこの篠ノ之箒という同級生に出会い、彼女に本校舎一階総合事務受付所に案内してもらい、無事入学手続きを済ませる事ができた鈴音は成り行きのまま食堂で食事を共にすることにした。

この篠ノ之箒という少女は他人と積極的に関わろうとするような性格ではないものの、実は箒と鈴音は昔同じ小学校に通っていて、箒がとある事情で引越した後それと入れ替わるように鈴音が転校してきたのだと知るや否や、その話絡みでなんだかんで意気投合した二人なのであった。

「それにしても、この時期に転校などおかしいとは思ったが、まさか代表候補生、それも専用機持ちだったとはな。ウチのクラスといい、世界とは存外狭いものだな……」

「そういえば箒のクラスって専用機持ちが二人もいるのよね。一人は忘れたけど、もう一人は色々噂になっているそうじゃない」

「まあ、な。何せ世界初の男性操縦者だ。希少価値で言えばそこいらの代表候補生より

ずっと高いだろう。……果たしてそれが、本人にとっていいのか悪いのかはともかくとしてな」

「……箒?」

「いや、何でもない。気にしないでくれ」

一瞬、箒の表情が暗くなった事に鈴音が訝しげに聞くも、箒は何でもないとほぐらかした。思い出すのは……政府の重要人物保護プログラムを受けていた頃の日々。更にその保護プログラムを受ける原因となった姉が失踪した事により執拗な監視と聴取を受け、結果として箒は半ば人間不信に陥っていた。ろくに自由を許されず、ただ安全、命の絶対保証という名の檻に拘束されていた頃の自分、その虚ろな日々を思い出してしまった箒は無意識にその暗い思いを表に出してしまっていた。

箒は無意識の内に自分と同じクラスの男性操縦者に自分を重ね合わせていた。無論、あつというまに周りに順応していった彼を見て、その思いは彼方へ吹き飛んでいったが。

（羨ましいものだよ、まったく……）

次に彼に抱いたのは、同情ではなく羨望だった。彼とて初の男性操縦者、表面上は平気そうに振舞ってはいるものの、内心は各国の政府からの期待と圧力を寄せられていることくらいは想像が付く。

初めてI Sを起動させてしまつてからこの学園に入学するまでどんな事を上層部からさせられていたのかは分からないが、おそらく自分以上の事をされている事は間違いないと箒は思っていた。

……なのに、未だ周りと打ち解ける事ができない自分と違い、彼はあつという間に周りの異性たちと打ち解けていたのだ。その紳士的な態度からクラスの女子たちからの人気は高く、当初は彼を敬遠していた女子生徒たちも彼と何気ない会話をする程度には心を許すようになっていた。

(私と大違いだよ、まったく……)

かくいう箒自身も、積極的に彼と関わろうとはしなかったものの、それでも何気ない会話くらいは交わした事がある。確かにアレは簡単に心を許せてしまいそうになるものだった。その紳士的な態度は、距離が近すぎる訳でもなく、遠すぎる訳でもない。他人と会話をしやすい距離感を作り出す事が、彼は得意なのだった。

これが女尊男卑の世の中でもやってこれた男性の強かさなのかと、箒は感心していた。

「そういうえば、箒はさ。何であんな時間に訓練機使つてたの?」

「?」はI S学園だ。I Sを使つて訓練する事に何もおかしくなどない。まあ、思いの外早く使用許可が下りた事には驚いたが」

「ああ、ごめん。言い方が悪かったわね。何で打鉄で素振りなんかしていたの？ それなんかするよりは、空を飛んでみたりとか、機体の制御のしかたとか、そっちの方を先に訓練してみた方がよくない？ 打鉄って分類上は近接両用型ってなってるけど、それは標準装備であればの話よ？ 実際はその安定性の高さから多くの武装との相性の良さ、それによる換装^{パッケージ}装備の豊富さが打鉄^{アレス}の最大の利点なんだから」

「……少し、な」

再び目を逸らしては考える筈。

実際の所、筈にもはつきりとした理由は分からなかった。

いつから自分はISに乗って素振りをしたと思うようになっていたのか……きつかけは間違いなく入学したばかりの頃に見たクラス代表決定戦の試合を観戦してからのだろうと、筈は今になって思った。

それ以外のきつかけが思いつかなかった。

ならその試合の中の何を見て自分は素振りを、それもISに乗ってしてみたいと考えたのか、筈は必死に思い出してみる。

(そうだ、確か……その試合に出ていた男性操縦者……)

イギリスの代表候補生からいちやもんを付けられ、彼女と決闘を行ったあの男性操縦者を思い出す。

(アイン・ゾマイル……奴の太刀筋がどことなく、アイツに似ていて、それで……)
幼い頃、共に道場で剣で励んでいた幼馴染を思い出す筈。小学四年生の頃に天才すぎた姉が原因で引き離され、再会する事がないまま筈を置いて行方不明になってしまった男の子。

それを今更ながらに思い出した筈は、内心でそんな己を嘲笑った。

(何を馬鹿な。毫碌しちやったかな……何の関係もない赤の他人の太刀筋に想い人のソレを重ねてしまうなんて……未練がましいにも程がある)

つまるところ、筈が打鉄で素振りを始めた理由は単に、“一瞬の気の迷い”だったのだ。剣道こそが、今の筈に残されていた想い人との唯一の繋がりだったのだ。そしてあの時のクラス代表決定戦で見せたアイン・ゾマイルという男子生徒が見せた太刀筋が、想い人の太刀筋と重なってしまい、衝動的にI・Sで剣道をしたくなっていた。

(一夏……)

I・Sで素振りをしたくなった理由が分かった筈は、それと同時に己の中にある彼への想いをより一層自覚し、彼の名前を心の中で囁く。

(会いたいよお、一夏あ……)

続けるように、依存するように想い人の名を心の中でも囁くも、それに反応を返してくれない存在はいない。

あの時と同じ、政府からの保護プログラムから一時的に逃れようとしてIS学園に入ったものの、箒の心は変わらず暗闇の中に閉じ込められていた。

「なあ、鈴……」

「何？」

「もしお前に大切な人がいて、ソイツと別れた後、ソイツが行方不明になって二度と会えなくなったらとしたら、どうする？」

「ど、どうしたのよいきなり……」

急に深刻な、というよりはドラマチックな話を振られ、少し戸惑いの表情を見せる鈴であったが、即座に目を天井に向けて考え始める。

「そうねえ、相手にも依るわね。私にはまだそういう相手がいらないから分からないけれど、お父さんに二度と会えなくなったらちよつと嫌かしら……。ただでさえこのご時世で会い辛いのに、もしそうになったら余計にね」

「お母さんの方は——」

「どうでもいいわ、あんな女」

箒から母親の事について聞かれた途端、鈴は箒がそれを言い終わる前に即答した。鈴にとつては最早顔も見たくない相手である。

「それよりも、何でそんな事聞いたのよ。さつきから様子がおかしいわよ、貴女」

訝し気に鈴は箒に問う。

結局、何故 I S で素振りをしていたのかという自分の質問をはぐらかしたままで、この箒という少女が他人と距離を置きがちである事は薄々と勘づいてはいたが、それにしてもやけによそよそしかつた。

……いや、よそよそしいというよりは、まるで遠くにいる誰かを想っているような、そんな目だった。

「実はな鈴。私には一人、幼馴染がいたんだ」

「『いた』って?」

「今はもう、何処にいるか分からないんだ。何処で、何をしてるかも……。お前と入れ替わりで引越した際、ソイツと別れて、そして暫く経ってからソイツが行方不明になったと知って、それでな……」

ドクン、と鈴の胸の内が鼓動を鳴らした。

「……その子って、男の子?」

「ああ、行方不明になる直前に、周りの女子たちから虐められていたみたいだな。それで……ッ!」

突如、ガタンと立った音に箒は驚愕のあまり言葉を中断してしまった。

恐る恐る、その音がした方に顔を上げてみると、そこにはテーブルに手を付けたまま

席から立ち上がった鈴の姿があった。

ラーメン鉢の中にはまだ麺とスープが残ったままであり、どう見ても御馳走様といえる状態ではない。先ほどまで美味しそうに麺を啜っていた鈴を見ていた箒からしてみれば何事か理解できなかった。

「……ごめん。先にここを出ているね」

「あ、ああ」

顔を俯かせたままそう言う鈴に対し、箒は半ば無意識にそう返す。

鈴は麺が残ったラーメン鉢をお盆に乗せたまま食器返却所まで運び、食堂の出口へ向かっていった。

箒はその背中はまだ見ることしかできなかった。

「……………ごめんなさい……………」

食堂を出て行く際に鈴が呟いた言葉は、箒には聞こえなかった。



見てる事しかできなかつた。

虐めを受ける辛さは理解していた筈なのに、自分以上に虐めを受けていた男子を助ける事なく、虐めていた女子たちを止める事もしなかつた。

その時の自分は、臆病だったから



「ハア、あたしつたら何やってるんだろ」

箒から逃げるように食堂から立ち去り、鈴は校舎の壁に手を付いてそつと溜息を付いた。箒が言っていた幼馴染……自分の予想が正しければ、間違いなく「例のあの子」だったからだ。

しかも箒の口ぶりから察するに、箒が会いたいと思っている幼馴染というのは明らかにその子であると分かつて鈴はいても立ってもいられなかつた。

「これだから嫌なのよ。女尊男卑っていうのは……」

別段、鈴は世を女尊男卑の風潮に変えたISを嫌っている訳ではない。むしろ浪漫があつて好感すら持っている。

問題はそれを自分達にしか使えない力だと勘違いして凶に乗る人間の心というもの

だ。初めてI Sに乗った頃、鈴でさえそんな彼らの気持ちを理解してしまえそうになってしまった。

だが鈴は知っていた、女尊男卑の世であるが故に、その悪意を一身に受けていた男子を。

そして鈴は思い知った、彼女の母親が女尊男卑の世に流され、結果として自分と父親が別れる事になってしまった事を。

女尊男卑の闇を一度垣間見え、そして己自身もその闇を体験した。

だから、鈴はあの時虐めを止めてやれなかった事を余計に悔いていた。

「今更後悔しても仕方ない、か……」

もう一度溜息を吐き、鈴は壁に付けていた手を離した。

(……そういえば、元気かなあ……千冬姉さん)

日本にいた頃、とある縁で知り合った一人の女性を思い出す。

彼女と知り合うきっかけとなったのは、鈴がまだ日本の小学校に転校してから一年、新学期に入って自分と同じように転校してきたとある男の子だった。

既に女尊男卑の世に染まりつつあり、居心地の悪さを感じていた男子生徒達は、その憂さ晴らしとして、中国人だからという取って付けたような理由で鈴を虐めていたのだ。結局の所、自分の周りにいた男の子も周りで女尊男卑を歌っていた女子たちと何ら

大差はないのだと思ひ知つた鈴は、小学四年生の一年間を、苦痛な思ひで過してきた。……しかし、そんな思ひすらどうでもよくなつてしまふ程に、その新しく転校してきた男子は女子たちからはるかに陰湿な虐めを受けていた。

その男子はかのブリュンヒルデの名で有名な織斑千冬の弟であり、その尊敬すべき織斑千冬の名を穢す男の子という理由で、自分が受けたソレよりも遙か上をゆく陰湿な虐めを受けていたのだ。

助けようと思つた。

けど、今と違つて当時は気が弱かつた鈴は、中々己が思つた通りに行動ができず、ただそれを傍観する事しかできなかつた。

いや、「気が弱かつた」というのは今にしてみればただの言い訳にすぎないだろう。

幼いながらに小学生の虐めの陰湿さを既に味わつていた鈴は、その男の子を助ける事でその矛先が自分にいつてしまふのを恐れてしまった。

故に、そこに入り込む事ができなかった。

入り込む事ができぬまま、その男の子はそのまま行方不明になつた。

その男の子を助ける事が出来なかつた事が、よほど罪悪感を感じてしまつたのかは今でも分からなかつた。

いや、感じてはいたのだろう。

しかし、結局の所同情するだけで助ける事をせず、後になってただ罪悪感を抱くだけの自分が嫌になったのは覚えている。

家を訪れたのがその延長でしかと分かつてはいたものの、それでも鈴は訪れた。

……ついこの間まで男の子——織斑一夏が住んでいたであろう、そしてブリュンヒルデとして崇められている女の人が住んでいるであろうその家。

そこいらの一軒家と何ら変わらない、思っていたよりも普通の一軒家である事に半ば呆然としていた幼い鈴の後ろに、一人の女性が立っていたのだ。

“……そこで何をしている？”

その声を聴いた途端、突如として己の心臓を強く掴まれたかのような錯覚に鈴は陥った。下の地面に映っている影は、今雑誌などで有名になっている女性のシルエツトと瓜二つであり、そして雑誌などで見るよりも遥かに恐ろしい鋭き視線がその恐怖を増大させた。

体中を空間に固定されてしまったかのように硬直してしまった鈴は、ただ後ろにそびえたつ本体を直視できぬまま、地面にある女性の影に恐怖し続けるしかなかった。

その後、なんやかんやあって仲良くなつてしまったのだ。

鈴の後ろに立っていた人物——織斑千冬は雑誌やTVで映っていた姿から想像していた姿よりも自生活に關してはまったくのダメダメで、今まで家事全般を担当していた

弟がいなくなった事でそれに余計に拍車がかかっていた状態だった。

おまけに弟が失踪した原因が学校の女子生徒達であったがために、家の前に立っていた鈴に対して無意識に殺意を向けてしまっていたらしい。

己の未熟さに対する後悔と生気を感じさせない顔のまま謝罪する千冬を、鈴は見てすらいられなかった。

その時からだったかもしれない。……鳳鈴音の中で、織斑千冬という人間に対するイメージが「ブリュンヒルデ」から、「何処にでもいる一人の姉」に変わったのは――。

妄信の病

クラス代表決定戦の一回戦目に中国の鳳 鈴音と当たり、拳銃一体型近接ブレード『雪片式型』と大型ブレード『双牙天月』が切り結んでいる最中に突如、アリーナの天井を突き破って異形の無人機 I S が襲い掛かって来た事件から一か月以上が経ち、六月の頭、月曜日に迫った頃、アインは I S 学園の外の町の商店街を散歩しながら考えに耽っていた。

如何に世界初の男性操縦者といえど、アインの出身地は元よりこの日本にほかならず、そしてアイン自身も純粋な日本人であるため、人並みにうまく紛れ込んで目立つことなく歩くことができた。

(この間の無人 I S……明らかに俺を狙ってやがったな。それにしちやあ——明らかに俺が攻略できる範囲での強さに設定されていたようにも見受けられる。誰の差し金だ、一体……)

この間のクラス別トーナメントで突如として乱入してきた無人機を思い出し、アインは考える。勿論、振り返ちにしてやり、女子生徒達からの株を結果的に上げる事ができたのは幸いであったが、どうも他人の手で踊らされている感覚が拭えなかった。

(無人IS……俺が考え付く限りじゃああんなケツタイなもん作れる奴なんざ一人しかいねえ。おそろく千冬姉も大体辺りを付けちやいるだろうが……)

——だとしたら、自分がこの学園に入学させられた大本の原因も、おそろくは……。

そこまで考えて、アインは内心で溜息を吐く。

一体あの兎女は何がしたいのであろうか、しかもよりよつて姉が教職として働いているIS学園にまで入学させて、一体に自分に何をさせたいのだろうか。

生憎と金にならない戦争はしない主義であるアインにとって、今回、自分をIS学園に入れた元凶が己の予想通りの人物であるのなら、この学園から抜け出すハードルは高くなる。

この学園に入学してから二か月近く——既に学園から抜け出す算段をほとんど完成させていたアインであつたが、やはり傭兵一人ごときがやるには不安があつた。

(せめて、バックに何か付いてくれりやあな。戦場も、クライアントも、スポンサーも何もかもが在りやがらねえ……これだから金にならねえ面倒事は嫌いなんだ)

早く戦場に戻りたい、とアインは空を見上げて思う。

硝煙が舞う空、飛び散る血、飛び交う弾丸、犯される女の悲鳴、どれもこれもがこの国では無縁だった。

IS 発祥の地という事だけあって、女尊男卑といった、戦争の火種になり得る要素は十分にそろっている筈なのに、腐ってもこの国に根付いた平和主義がそれをさせていないみたいだ。

—— 嗚呼、戦争が恋しい。

三年前までは欧州のとあるPMC（民間軍事会社）の少年傭兵として、ついこの間までは東欧の反政府組織に所属していた頃が酷く懐かしく思えてくるくらいに、この国には紛争という要素が足りてなかった。

こんな国が自分の出身地だったという事を考えると、この国から自分のような『戦争屋』が生まれるのは極めて特殊なケースだったのだと思わざるを得なかった。

そんなこんなでこんな平和な空気を毛嫌いしていた、その時だった。

「ちよつといいですか?」

「ん?」

自動販売機の前に立って何のドリンクを買おうか考えていたら、ふと声を掛けられた。

「失礼しました。私、こういう者です」

振り向いたその先にはロングヘアーが似合うスーツ姿の女性だった。

「IS 装備開発企業『みつるぎ』 渉外担当・巻紙礼子さん……ですか?」

(妙だな。IS 装備開発企業に『みつるぎ』なんていう会社なんざ聞いた事がねえ……それにこの女、明らかに裏の臭いがしやがる……)

名刺を渡してきた女性——巻紙札子を見やり、アインは表情に出さずに訝しむ。とりあえず渡された名刺をよく見ると……下の部分に見覚えのある小さい暗号が書かれていた。

その暗号を見たアインは、少しばかり目を見開き、再び女性の顔を見た。

「はい。ゾマイルさんにぜひ我が社の装備を使っていただけないかなと思ひまして」
見事に今まで自分に接触してきた IS 装備開発企業の者とまったく同じ言葉を吐く女性に対し、アインは内心で溜息を吐く。

演技としては上等なものであるが、生憎とアインにその手の類は通じない。

——最も、向こうもそれを試してきている節もあるが。

あのクラス代表決定戦以降、手に入れたばかりの武器を即座に使いこなす実力をアインが持っている事が広まった途端、こうして自分の会社の製品の広告にアインに自社が開発した装備を使ってもらおうという輩が増え始めていた。

目の前の女性も態々、そんな輩に倣ってこうして自分に接触してきたのだろう。

とりあえず目の前の女性と同じように猫を被りながら、アインは優しげな笑みを浮かべながら対応した。

「ハハハ、まさか貴女のような美人な方がIS装備会社に勤めていらつしやるとは……。もう既にご存知でしょうが、男の身でありながらIS学園に通わせてもらっている、アイン・ゾマイルと申します。以後お見知りおきを」

「フフフ……煽てが上手いのですね」

「いえいえ、其方こそ」

互いに意味深な部分を強調しながら、二人は口角を釣り上げるような笑みを浮かべる。懐からみればそれは、大人の女性と学生のただの会話にしか見えなかった。

「それで、其方のIS装備を使わせていただくという件ですが、残念ながら学園の許可がなければそういうのは禁止されているのです」

「いえ、そう言わずに！」

「ええ、分かっていますよ。自分としても、前々から貴女方のIS装備に少し興味がありました。機会があればぜひ使ってみたいと思っていました」

「では我が社の装備を使つて頂けると？」

「ええ。学園の許可さえ下りれば、それも可能になるでしょう。何なら後日、学園に連絡してみればどうでしょうか？ 教員には予め、『自分のみつるぎ社の装備を使いたい』という趣旨を伝えておきますので」

「はい、分かりました！」

さも嬉しそうな表情を浮かべながら、巻紙礼子という女性は返事をする。

「後それと、許可を貰う前にこう言うのも何ですが、出来たら貴女方が開発した装備を見せて頂けたら有難いのですが……」

「では、彼方の喫茶店で、我が社の製品を紹介させて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ええ。では、30分後に彼方の喫茶店で落ち合ひしましょう」

「はい、分かりました」

三十分後に喫茶店で待ち合わせという約束を取り付け、アインは女性に一礼して去っていく。

何故三十分後というのを態々付け加えたのか、答えは明確だった——ここには監視の目がありすぎたからだ。

「……へっ、よくウチの暗号を覚えていたな、ガキ」

そんなアインの背中を見つめるスーツ姿の女性、巻紙礼子——否、フアントム・タスク亡国機業の
オータムは不気味な笑みを浮かべる。

彼に渡した名刺の下の部分に小さく書かれていた暗号、それは彼女が所属している組織が使っている暗号であった。

『アイン・ゾマイールへ。』

貴方を再び雇いたい。三十分後に、喫茶店にて待つ。 BY スコール』

暗号の内容はそれだった。



「——という訳でありまして、アインさんのビットの扱いはそれは素晴らしいものです」

『そうですか。ますます我がイギリスに欲しい人材ですね。BT二号機が盗まれてしまった今、セシリア・オルコット、貴女をIS学園に送り込んで再び一号機のデータを取り直す手筈だったつもりが、とんだ掘り出し物を見つけたものです』

「はい。アインさんは、それはもう素晴らしい方ですわ」

『その調子です、セシリア・オルコット。貴女の役割は理解していますね』

「はい。アインさんをイギリスに取り込んで、あわよくばイギリスの代表候補生にする事ですよね？」

妄信的な笑みを浮かべながら、金髪の少女、セシリア・オルコットは携帯電話をに本国のIS整備部門担当者に国際回線で、報告を入れていた。これは整備部門の担当者に対する報告だけではなく、本国のIS関連、ひいてはイギリス政府への報告も兼ねていた。

クラス代表決定戦でセシリアからB T兵装を奪い、そして彼女以上にB T兵器を使いこなして見せた男性操縦者——アイン・ゾマイルとの試合内容を見たイギリス政府は、セシリアの学園での差別発言に対する懲罰を取り下げる代わりに、アイン・ゾマイルと親密な関係を持って彼をイギリスに引き入れるという命を下した。

いくら彼女以上のB T兵装使いが現れたとしても、彼女とてB T適正がAの、優秀な人材である事には変わりはなく、イギリスもそんな彼女は簡単に手放したくはないだろう。なので、イギリスは彼女にそんな任務を与え、懲罰はなしとした。

そこまでして、イギリスはアイン・ゾマイルという人材を欲していた。男性操縦者としても、優秀なB T兵器使いとしても、何とんでも欲していた。

『よろしい。本来ならばあの場での貴女の発言は、彼の貴女に対する、ひいては我々本国に対する印象を悪くするものであった。その責任は貴女にある。代表候補生として、責任は果たしなさい、セシリア・オルコット』

「はい、承知しておりますわ」

本来ならば整備部門の担当者ならぬ高圧的な言い方にも、セシリアは眉一つ変えずに答える。その妄信的な目は、電話の向こうの相手など見えておらず、ただひたすらに己の投げ所になつてくれた男のみを幻視していた。

『引き続き、定期的なデータ送信を頼みます。では——』

ツー、ツー、ツー

電話の相手が切った事を確認したセシリアは片手で携帯を閉じ、ポケットにしまう。

「フフフ……」

顔を伏せ、恍惚的な笑みを浮かべる。

あの屋上での出来事以降、本国からそんな任務を言い渡されたセシリアは、放課後に定期的に彼にB T兵装を貸し渡しては、彼のB T兵器使用データを本国へと転送していた。

彼もまた自分の価値を知らしめるチャンスだと言つて快く承諾し（実際は自分が傭兵に戻った時のための信頼回復の一環としてだが）、セシリアから貸し渡されたB T兵装を放課後の訓練所で使用し、データ取りに協力していた。

彼はB T兵装の制御と同時の射撃や白兵戦を軽々とこなした他、瞬く間に今まで誰もが為し得なかつた高等テクニク——フレキシブル 偏光制御射撃すらもものにしてみせた。

そんな彼の雄姿を見られる時間、彼と一緒にいられる時間こそが、この学園でセシリアが唯一楽しみにしている時間だった。

普段の学校生活の中で、セシリアはもはや周りの女子生徒達から見向きもされていない。される事があるとすれば、それは「初日に大口で男性操縦者に対して決闘を挑んでおきながら、手も足も出ずに負けた無様な代表候補生」として侮蔑や嘲笑を送られる時

だけだった。

一方で、その彼女達はセシリアの依り所であるアイン・ゾマイルと楽しそうな会話をし、アインもまた紳士的な態度でそれに応じていた。

しかし——セシリアは知っていた、アインが彼女達に見せているのは、あくまで表向きの顔でしかないのだと。

彼は、アイン・ゾマイルは、自分にだけはこの学園で唯一、素を見せてくれるのだと。彼が自分を曝け出せる人物は自分だけであると、普段から彼と楽しそうに会話している女子生徒達を見ては優越感に浸っていた。

セシリア・オルコットは幸せだった。

情けない父親を持っていたセシリアは、ようやく強い男を、意中の男性を見つける事ができたのだから。

セシリア・オルコットは満たされていた。

普段から仮面をかぶっている彼は、自分にだけは、素の口調で接してくれるのだから。セシリア・オルコットは未来への期待で一杯だった。

もしこの任務を成功させれば、本国の自分へのお咎めは消され、更には意中の彼がイギリスへと来てくれる。IS学園を卒業してからもずっと一緒にいられるのだから。

セシリア・オルコットはまだ知らなかった。

この先に待っている———真実という名の“絶望”を。

亡国機業

喫茶店の入り口を潜り抜け、「いらつしやいませ」と挨拶する店員の声を横に流し、アインは喫茶店の店内を見渡す。

友人同士で楽しく会話している客、会社の交渉で来ているサラリーマン、仲睦まじく砂糖をまき散らすカップルなどを一瞥しては目を逸らし、そして奥の目立たない席の所にその女性はいた。

長い金髪の美しい女性が、そこにいた。

その女性が目に入ったアインはそこへ足を運ぶ。

女性もまた得意そうな笑みを浮かべながら、歩み寄ってくるアインを見る。

「ご相席いいかい、大将？」

「ええ、構わないわ。その為に呼んだんだもの」

「クク、そうかい」

既に顔見知りであった二人。アインは金髪の女性の向かい側の席に腰掛ける。

金髪の女性はすぐにウェイターを呼んで二人分の珈琲を注文し、やがてテーブルの上に二カップのブラックコーヒーが運ばれて来た。

金髪の女性は珈琲カップを手に取り、一口飲んでテーブルの上にまた置き、話しを切り出した。

「久しぶりね、アイン。ウチの暗号を覚えてくれていて嬉しいわ」

「ハッ、如何にも俺ら戦争屋ようへいを使い捨てるような任務で俺だけ生かされたとあっちゃあ嫌でも覚える」

「やっぱり気付いていたのね。そうよ、あの時私達——いえ、私は貴方たちを切り捨てるつもりだった。そして切り捨てたつもりだった……なのに、その中で貴方だけが残った。最初はそこらにいる少年傭兵と思つて高を括つていただけけど、あんな状況の中で貴方は楽しそうに笑いながら銃を握つて大量の屍の上に立つていた。その時よ……私が貴方を生かそうと決めたのは」

最初は使い捨てにするつもりで集めた傭兵達……その中でただ一人生き残つて、虐殺し、強奪し、強姦し、戦争で出来る限りの悦を貪りし尽くしたあの少年兵の姿は、金髪の女性、スコール・ミューゼルに深く焼き付いていた。

集めた傭兵達の中で一番大人しそうで、いかにも戦場に向いていなそうな子供が、戦場に放たれた途端その狂気をむき出しにして暴れまわった姿をスコールは決して忘れなかつた。

気が付けば、最初から払うつもりなど毛頭なかつた筈の報酬を渡していた、組織の名

前を教えない代わりに報酬を上乗せまでしておいた。本来ならば此方側の暗号を知っていた時点で切り捨て決定である筈なのに、スコールは敢えて彼を見逃した。

そして期待通り——彼はその暗号を覚えていた。

しかもそんな彼が今では世界で唯一の男性のIS乗りになったと知った時、スコールはもう彼をもう一度雇いたいという衝動に駆られ、気が付けばこの地に来て彼をここに誘い出していた。

「ソツチの望み通りにこの三十分の間に俺に付いていた鼠は撒いといてやったぜ。もう一人の方は……まあ、それはあの姉ちゃん次第と言った所か」

「オータムの事なら心配ないわ。彼女、逃げ足に関してはお私よりも優秀だから」

「そうかい。ま、あん時俺を使い捨てしようとしやがった件に関しちやあもう水に流してる。報酬もたんまり受け取った事だしな。それよりも——」

アインの目付きが変わる。

まるで獲物を今か今かと待ちわびる狼のように、その視線はスコールという人間を射抜く。

「戦争、させてくれるんだろう?」

「あら、何故そう思うのかしら?」

「勘だよ。『戦争屋』としての勘が叫ぶのさ、コイツは俺に戦争をさせてくれるってな」

「……」

「俺を使い捨てにしようとした事を態々話してきたんだ、今度は真つ当に戦争をさせてくれるんだろうな？」

「ふふふ……」

既にスコールがアインを戦争屋として雇うという事を前提に話をすすめようとするアインに、スコールは思わず笑ってしまった。

この四年間で、彼の戦争屋ぶりにより磨きがかかっている。しかもスコールが何のためかここに彼を呼んだのかさえ見抜いている。

スコールが欲してくれるのは使える駒、アインが欲しているのは己を好きだけ戦わせてくれるクライアント……この時点で両者の利害は一致していた。

「貴方がISを動かしたと聞いた時、耳を疑ったわ。男が、それもよりによって一番ISに乗ってはいけないであろう貴方が動かしたと聞いた時はね。戦争屋の貴方が一国家の代表候補生になるなんてのは在り得ないでしょうし、そんな貴方がIS学園に入ったとなれば……戦争屋である貴方が戦場に、そしてクライアントに飢えているであろうことは想像が付いたわ。だから私はここに来た。貴方が言った通り、貴方を戦争させるためにね」

「……」

「それに、一部の上層部にはいえ、貴方がアラスカ条約に反してISで人を殺害した事は既に広まっている。貴方が傭兵として信頼を回復するには時間がかかるでしょうし、この状況の中では、男性のIS操縦者である貴方にとってISを持つ私達は最高のクライアントになるはずよ?」

「大将の組織つてのは?」

「あの時は教えなかつたけれど、今明かすわ。私達は亡国機業フアントム・タスク——今の貴方にとってはクライアントとしても、隠れ蓑としても最高よ」

「……フアントム・タスク、ねえ。んで、そのフアントム何たらさんは俺にどんな依頼を寄越すつもりだ?」

スコールの言った通りだとしたら、確かに今のアインにとってその亡国機業という組織は、最高のクライアントにしてスポンサーと言えよう。アイン自身、傭兵としての信頼が地に墜ちているこの状況で彼女から依頼が来た事はまたとない幸運である。

だが、それでも一度は自分を使い捨てようとした組織である事も確か、ここで依頼の詳細を聞いておかなければならない。

「まず貴方には私が率いる亡国機業の実働部隊に加わってもらおうわ。直接の依頼主である私の私兵として、だけど。それと——」

スコールは一瞬だけ間を置き、ギラつくような眼でアインを見る。

ここから本題である、とスコールの目が語っているようにアインは見えた。

「貴方の白式を、私達亡国機業に譲渡してもらおうわ」

一瞬、アインは少しだけ眉を曇らせた

しかしすぐに呆れたような、余裕の笑みを浮かばせて見せた。

「フツ……！ 言うに事欠いて……」

「……思ったより動揺が少なさそうね。もつと取り乱すのだと思ったのだけれど」

「戦争屋の質つてやつでな、報酬の話が終わるまで引きやしねえよ」

まだスコールは依頼の内容の一部しか話していない、その段階で交渉を決裂させてしまふのは些か早計である。

果たしてこの亡国機業という組織が自分にとつてふさわしい職場であるか否かは、依頼の内容と報酬の話を最後まで聞いてからだとアインは思っていた。

「そう、じゃあ次ね。貴方の白式を貰い受ける代わりに、貴方に新しい専用機を譲渡するわ」

「何？」

一瞬、目を疑うような眼でアインはスコールを見る。

戦争屋にしてIS乗りである自分の所に態々出向いて来る事からして、このスコール・ミュゼルという女性もまたIS乗りであるという予想をアインは立てていた。

先ほども亡国機業の実働部隊を率いているという発言から彼女自身の組織内の立場も相当なものである事は確かだ。

彼女の発言からしてISも何体か保有している事は確かで、彼女自身も凄腕のIS乗りである事は想像が付く。

しかし、ISのコアが限られている中で、規模はともあれ一テロ組織がISの製造技術まで持てるかどうかは甚だ疑問であった。

そんなアインの疑問を見越していたスコールは、アインが口を出すまでもなくその答えを言った。

「貴方の伝手にある裏の技術者たちを集めて、近々貴方が亡国機業に所属する趣旨を伝えておいたのよ。貴方、傭兵の身でありながら様々な裏の技術者たち——それもIS関連の技術者たちと繋がりがあったみたいじゃない。少し驚いたわ」

「ISの数つてのは至極限られてるからなあ。だからといって生身でISの武装を使える奴なんざそうはいねえ。その関係で俺は奴さんたちの依頼でよくISの武装の実験に付き合ったんもんさ。その関係の伝手は嫌でも増える」

裏の技術者、その中でもIS関連の技術者たちは自分達でISの武装を作ることができて、コアを作ることとは出来ない。そしてほとんどISコアは国の公共機関などに回されているため、自分が開発した武装を装備させるISはほとんど存在しない。そのた

め、裏の世界で生身でISの装備を使える人材は彼らにとってはまさしく神様ともいえる。

アイン自身もそういった人材の一人であったため、そういった関係でのコネは嫌でも多く出来上がっていた。アイン自身が意図した結果では決してなかった。だが今回はそれがプラスに働いたらしい。

「ISの武装はISに量子変換インストレルされてなければ理論上は生身の人間でも扱える。それが男でも女でもね。貴方がISを動かしたと彼らに伝えた時、まるで水を得た魚の如く飛び付いてきたわ。だから、私は貴方を雇うと決めた。貴方を取り込む事ができれば、敵は多くなるけど、その分箔も付く。その内の一つが彼らよ」

「……」

さすがのアインも、目を見開いた。

このスコール・ミューゼルという女は、自分を依頼の交渉の場に誘い出す前から、裏で手を回して自分を雇い入れる準備を用意周到に備えていたのだ。

そこにはどうしても貴方を雇いたい、貴方を雇い入れる準備はいつでも出来ている、というスコールの意志が感じられた。

もしここで自分が依頼を蹴るうものならそれこそ、彼女はその裏の技術者たちからバッティングを受けるであろう状況であるにも関わらず、だ。

「貴方に専用機として提供する I S のコアは既に確保してあるわ。貴方が東欧の紛争地で強奪した打鉄……私の部隊が研究所から秘密裏に盗み出して、貴方の専用機として改修中よ」

「……」

「それに、貴方は今イギリスの代表候補生の B T 兵器のデータ取りに協力しているそうじゃない、イギリス I S 整備部門に私達のスパイを潜り込ませているから、そこから盗み出した貴方の B T 兵器使用データを基にして、貴方の専用機のプランも既に完成させてあるわ。専用機のデータは後で渡しておくから、見たら消して頂戴ね」

スコールから次々と告げられる言葉は正に驚愕の一言だった。根回ししたただけでなく、既に自分の専用機のプランまでも完成させて、制作中であるという事実。

まるでアイン・ゾマイルをいつでも雇い入れる事ができるように準備していると、言外に語られているようだった。

実際、そうなのだろう。

「後は報酬の話ね。前払いで——、後払い——と同時に契約解除後も専用機は其方の所有物とする。更に個々の任務に応じて歩合制で追加報酬を支払う。

—— 一生遊んで暮らせる額を用意してあるわ。どう？」

ヒュ、と口笛が聞こえた。

「そいつあ、大いに魅力的だな……」

こうして、最悪の犯罪組織と最悪の戦争屋は手を組んだ。



スコールと別れ、喫茶店を後にしてIS学園に戻るアイン。

先ほどまでの退屈そうな様子とは違い、彼の心は多いに昂揚していた。

先ほどまで遠くまでいってしまった戦場が、もう目の届くすぐ傍に迫っている事に興奮を覚えていた。

(面白くなってきやがった……！)

白式を向こうに譲渡してしまう、というのは些か惜しかったが、それは何も向こう側の利益だけを考えた結果ではなかった。

(あの無人機、俺の考えが正しければ……)

クラス別トーナメント一回戦に中国の代表候補生との戦いで乱入してきたあの無人機、下手人はおそらく――

(篠ノ之 東……)

今回の、スコールとの交渉でアインは確信に変わった。

——まるで自分という存在の株を上げるためだけに送られて来たかのような無人機。

——この白式というI Sのピーキー具合

——そして、自分がI S学園に入学させられるまでの一連の流れ。

全て、自分の元姉の幼馴染にして、I S開発者である篠ノ之 東の仕業であると、アインは気付いた。

まずは自分がI S学園に入学させられる過程で、そのきっかけとなったのが「ハイパーセンサーでも捉えられないカメラ」、そんな物を作るのは彼女以外に在り得ない。

それに加えてこの白式の性能……一応は倉持技研が開発したI Sだとアインに伝えられているが、一企業が作ったI Sにしてはやけに個人の趣向が入り過ぎている。零落白夜にしても、自分が最初に白式に乗った時に発動したシステムトラップについてもそうだ。しかも倉持技研は白式とは別に元々は打鉄式式という第三世代型のI Sの開発を進めていたにも関わらず、自分という男性操縦者の出現で突如として新しいI Sの開発に着手したという。

この時点で、既におかしい。

そのくらいであるのなら既に開発が進められていた打鉄式式を完成させて、自分に譲

渡した方がよほど効率的である。勿論、そうしたら元々その打鉄式式を持つ筈である日本代表候補生の件で問題なるだろうが、既に開発されているISであるのなら同じものをもう一機作ることもくらい、少なくともまったく新しいISを開発するよりはずっと効率的な筈である。

そもそも、日本の代表候補生が心待ちにしていた専用機の開発を一方的に打ち切る時点で企業としては終わっている。アインからしてみれば、そんな企業からの依頼があつても受ける気になどとてもじゃないが出来はしない。

にも関わらず、政府は倉持技研からIS開発ライセンスを取り上げてはいない。ならばたどり着く結論は一つである。

——篠ノ之束が、倉持技研に自分が開発した白式を譲渡し、その後の開発とデータ取りを収集するように脅している。

結果として倉持技研は白式のデータ取りに専念をせざるを得なくなり、打鉄式式の開発は断念された。

つまる所、アインはずっと彼女の掌の上で踊っているのである。

アイン自身も以前からそれに勘づいて、彼女の妹である篠ノ之箒を洗脳の対象から敢えて除外していた。

——このまま、彼女が開発した白式を使い続けるのは、危険だ。

そのくらいなら、性能が落ちるとはいえ自分の戦闘スタイルにあったISに搭乗した方がマシだと、アインはそう考えていた。

戦争もできないままこの身が朽ちる事など、アインにとってはこのうえなく受け入れがたい結末である。

学園から脱出するための洗脳した生徒達駒は取り揃え、その時期も間近に迫ってはいたものの、やはり彼女の掌の上で踊らされている感覚にあつたアインは何処か不安を感じていた。

だが、今は違う。

アインにとって、とっておきの最高のスポンサーを得る事となつた。

後は機会を待つだけ。

時期は今度行われる学年別トーナメント。

そこには学園関係者だけではなく世界各国からのIS関係者のお偉い方が大勢訪れる——正に火種を起こすのに絶好のチャンスであると同時に、かつ混乱に乗じて学園を脱出し、クライアント側に馳せ参じる事もできる。そこにはクライアントのバックアップも付いている。

(人の商売を邪魔してくれたツケ、その命で払ってもらうぜ、お偉いさん方よお!!)
運命の歯車はもう、誰にも止められない。

貴公子の分岐点

「やつぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハツキのつてデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイの方がいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝、クラス中の女子がワイワイと談笑をしていた。皆の者がカタログを手に持ち、あれやこれやと意見を交わしている。

そんな彼女達の輪に自然と入り込んでいる一人の男がいた。

「ねえ、アイン君はどう思う？」

「そうですねえ、デザインだけを言うのであれば武骨なミューレイか、シャープ曲線的な美しいデザインを持つハツキか。これに関してだけは好みの問題としか言えませんが、やはり性能だけで言うなら其方の方が言ったようにミューレイを取るべきでしょう」

凶悪な本性を隠し、そして巧みなコミュニケーション能力を以て、男という異性であるにも関わらず、違和感なく女子たちの輪に入り込んでいる少年——アイン・ゾマイー

ル。

多くの戦場を生き抜いてきた経験とは別に、生身でISの装備を扱える腕を持つ事から、多くの裏のIS技術者が作ったIS武装を扱ってきたアインはその方面の知識も豊富であり、その知識量はIS学園に入る前からISについて学んできた彼女達すらも凌駕していた。

故に、装備に関して困った事があれば彼女達は迷いなく彼に相談していた。

「しかし、傭兵の自分から言わせれば間違いなく性能のミューレイを取りますが、ISの試合は強さや性能を競う他にも、見栄えや演^{エンターテイメント}出を観客に見せつける趣もあるでしょうし、性能ばかりを選んでも味気がないと思われてしまうかもしれないですね」

「ふむふむ……」

「なるほどねー、そういう見方もあるんだー」

「ですので、そこ等辺は皆さんの匙加減にかかってくるので、何とも言えませんね。同じ機種^{パッケージ}のISでも換装^{パッケージ}装備の違いによって見た目の印象がガラリと変わることも多々ありますし、そこらへんを模索してみるのもいいんじゃないでしょうか？」

丁寧、かつ柔らかな口調で、女子が一番会話しやすい空気を作り出し、うまくこの学園の女子の心を掴んでいくアイン。

今生、誰とも分かり合う事が無いであろう男が、このように誰とでも打ち解けるよう

な能力を持つているのはこれ以上ない皮肉といえよう。

「うん、有難うアイン君！」

「参考になったよ！」

「いえ、皆さんのお役に立てたのであれば、それで」

謙遜しながらも彼女達からの礼の言葉を受け取る姿勢を示すアインを、山田真耶も微笑ましいものを見る顔で見ている。やはり教師としては、生徒がちゃんと周りの皆と溶け込んでいるかは気がかりなものであり、そんな中でたった一人の異性であるアインが彼女達とうまく打ち解けられるか心配であったが、それも杞憂であった事を知った彼女は心の底から安心していた。

……無論、彼からしてみれば、戦争をするための布石でしかないのだが。

その後、真耶によるＩＳスーツの説明がなされ、生徒達がそんな教師である筈の真耶をからかつては弄って遊んだりの時間が過ぎた後、教室の中に入ってくる千冬の姿がクラスの子供たちの目に止まった途端、彼らはシンと大人しくなった。

「諸君、おはよう」

『お、おはようございます！』

まるで軍隊整列をするかのような空気で、女子生徒達の皆が声を揃えて挨拶をする。

（おうおう、相変わらず厳格な……）

内心で茶化しながらも、アインもまた女子生徒達に合わせて挨拶をし、そのまま元姉に目を合わせる。

彼女もまたアインを一瞬だけ一瞥しては皆の方へ視線を戻す。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるが、ISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うように。忘れたものは代わりに学校指定の水着で授業を受けてもらう。ISスーツの恩恵なしでISを動かしてみるのもいい訓練にはなるだろう——なあ、ゾマイル？」

ギロリと、その眼を見ればそれだけで射殺されるような千冬の視線がアインへと向けられる。実際、初搭乗でISスーツも着ずに代表候補生クラスのIS乗りを葬っている実績をアインは持っている。

そしてそんな彼が危険な思想の持ち主である事を知っている千冬は牽制の意味でアインを周りの女子生徒達に気付かれないように睨む。

「ハハハ。織斑先生ならISスーツはおろかISなしでもIS乗りを仕留められそうですけどね」

肩を竦めながら、そんなジョークで返すアイン（アインとしてはジョークのつもりでは決してない）。

牽制の意味を込めた睨みをジョークの一つで流された千冬は内心で舌打ちをしつとも、副担任の真耶に声をかける。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はい！」

連絡事項を終えた千冬からのバトンタッチを受けた真耶は、拭き終わつた眼鏡を慌てて掛け直し、いつものような明るい笑顔をクラス生徒達に向ける。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

『えええええっ!?!』

いきなり転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。

そんな中で、アインはただ一人眉を潜ませながら考えた。

(この間隣のクラスに転校してきた中国の代表候補生の事を考えりや、この時期になつて普通の生徒が転校つーのは有り得ねえ。となれば、特別な待遇を持つ奴か、代表候補生以外に有り得ねえ……しかも分散させずにこの組にまとめて来るって事は、狙いは俺か、白式か……)

だとするならば、近々行われる学年別トーナメントまでは何としてもこの白式を死守せねばならぬとアインは意気込む。新しい専用機を得る上で、白式は貴重な取引材料なのだ。

亡国機業は東自らが制作した白式を欲し、アインは篠ノ之束の掌に在るといふ不安要素を少しでも取り除くために白式を放棄して新しい専用機を得たい。

これらの利害の一致があるがためにアインと亡国機業は契約の關係が成立したのだ。スコールから渡された新しい専用機のデータを観覧したアインは、即座にその新しい専用機が白式よりもはるかに自分に合つた機体だと確信していた。

自分の大好きな白兵戦向けの武装を備えている上に、B T 兵装で中距離でも十分に戦える性能は、戦場を引つ掻き回すアインにはうつつけの専用機と言えた。しかも素体となつたのが自分が強奪して最初に乗つた打鉄であるといふのであれば、愛着の一つも湧こうものであつた。

(どちらにせよ、火種が増える事に代わりはねえ、か)

入ってくる相手が代表候補生であるのだとすれば、戦争を起こす火種がまた増えるという事になる。代表候補生とはいつても、専用機持ちかそうでないかで火種の大小は変わるであろうが、出来る事であるのなら扱いやすい女である事を祈るばかりだとアインは思つた。

ガラツ、と教室のドアが開く音がアインの耳に入る。

「失礼します」

『……………』

クラスに入って来た二人の転校生を見て、ざわめきがピタリと止まった。それもそうだった。

その内の一人は、少なくとも女子生徒達から見れば、明らかに男だったのだから。「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国には不慣れな事が多いかも知れませんが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人であつた金髪の少年、シャルルはにこやかそうな表情でそう告げて一礼する。

クラス全員があつけに取られる。アインもまた別の意味で呆気にと取られていた。

人なつっこうそうな顔。礼儀の正しい立ち振る舞いと中性的に整つた顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色のそれを首の後ろに丁寧に束ねている。体はともすれば華奢みたいにスマートで、しゅつと伸びた脚は女子生徒達から見れば恰好よく見えるだろう。

「きゃ……」

「……」

「きゃあああああああ——っ！」

クラスの起点を中心に、女子たちの歓喜の叫びはソニックウェーブの如くあつという間に伝播していった。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもウチのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜〜！」

後ろと横から一斉に聞こえる鬱陶しい叫びを横に聞き流しながら、アインはシャルル・デュノアと名乗った転校生を見つめる。

（あの体つき……どう考えても女じゃねえか）

男とは無縁の、もしくはアインのような美形男子としかまともに縁のなかった女子生徒達からしてみればこのシャルル・デュノアという転校生は男子に見えなくもないが、アインからしてみれば明らかに違和感しかなかった。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬が面倒くさそうにぼやく。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

転校生はもう一人いる。

シャルルの登場に歓声を上げるクラスメイト達を絶対零度の視線で見下す銀髪の少女。左目には黒い眼帯、腰のベルトにはナイフのホルスターを引っ提げ、その低身長の見ただ目からは想像の出来ない程の冷たさを感じさせる少女だった。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。だから腰にあるソレを外せ。ここは訓練所ではない」

「……了解しました」

ほんの少し、渋々といった様子を見せてラウラはナイフのホルスターを千冬に預け、クラスメイト達の方へ向き直った。

「ラウラ・ボーデヴィッツだ」

『……………』

沈黙してクラスメイトの言葉を待つクラスメイト達であったが、ラウラと名乗った少女はそれつきり何も言わず、そしてラウラが放つ雰囲気の原因で、クラスメイトの女子たちからも先ほどのシャルルの時のように騒ぐことも、声をかける事すらままならなかった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

できる限りの笑顔でラウラに問う山田真耶であったが、ラウラは取りつく島もなくそう返す。無慈悲な即答に真耶は内心で意気消沈しつつも、彼女を空いている席に座るよ

そんな真耶にラウラは一瞥もくれずに指定された席へ赴いた。そんな彼女の素っ気ない態度に真耶は心底で更に落ち込む事となった。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で訓練を行う。解散！」

ぱんぱんと千冬が手を叩き行動を促す。

そんなHRの解散の挨拶と共に、アインが座っている席に、転校生の一人であったシャルルが近づいてきた。

「君がゾマイル君？ 初めまして、僕はシャルル・デュノア。君と同じ男性操縦者だよ」

「此方こそ、初めまして。自分の名はアイン・ゾマイル。ここに来るまではしがない傭兵をしていました」

言つて、アインは握手をしようと、シャルルに手を伸ばす。

シャルルもまたにそれに応じて、手を伸ばし、アインと握手をする。

……そこには、僅かだが、男に不慣れな、女特有の落ち着きのなさがあつたのを、アインは見逃さなかつた。

「いやあ、それにしても、正直ほつとしましたよ。まさか私以外の男性操縦者が来てくれるとは、貴方が来てくれたおかげで、当分は気が楽になりそうです」

「……え？ それってどういう——」

「アイン君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はアメジスト！」

「きやああつ！ 見て見て！ ふたり！ 手！ 繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！」

女子たちが騒ぎ出す。

それを見越していたアインは、その上でもう一回シャルルの反応を見る。

「な、なに？ 何で皆騒いでるの？」

状況が呑み込めずに、シャルルは困惑顔でアインを見る。

アインはにこやかな表情を崩さないまま、シャルルを気遣うような素振りを見せた後、周りで騒いでいる女子たちに声をかけた。

「皆さん。興奮する気持ちは分かりますが、シャルルさんも困っていますので、続きは授業が終わってからにしましょう。シャルルさんも、それでいいですね？」

「う、うん……」

未だに何故自分に向かって女子が騒いでいたのか理解できず、そして今でさえアインと握手をしている状況に落ち着きがない。

それを見たアインは、そつと口角を釣り上げた。

(この女、使える……！)

セシリア・オルコットに次ぐ、シャルルが抱えている火種の大きさを感じ取ったアインは、女子たちの視線に晒されながらシャルルと一緒に男子更衣室へと向かった。

その眼で見た本性

シャルル・デュノアと同室になつてから三日が経つた昼休みの時間、アインは食堂へ向かつていた。食堂での食事は自分の駒を増やす、または選別するために女子たちと会話をするのに良い機会の一つとなつていた。

ここ最近ではシャルル・デュノアと行動を共にする事が多いため、寄ってくる女子たちの人数は増えたものの、シャルルという存在のおかげで以前より洗脳が行いにくくなつていた。別に火種になりそうな女子は大方手中に収めたつもりなのでこれといつて問題は無いのだが、やはり巻き込む人数は大きければ大きい程火種が増す事に変わりはないため、こうして一人になる機会がやってきたアインはこうして食堂へ向かつていた。とはいへ、あまりに洗脳して駒を増やし過ぎるのはよくない。

駒を増やし過ぎると逆に騒動は起こせない。

大群衆の中で一部の者達が異質な行動を取るからこそそれは騒動となる。だからこそ、その異質な行動をさせる女子たちの選別をここ二か月の学校生活でアインは行つてきた。

その時は既に近づいてきている。

クライアントのバックアップもあって準備は完璧だ。

後は自分の立ち回り次第……そんな事を考えながら歩いていたら、一人の三年生の先輩と肩をぶつけてしまった。

「おっと、すみません」

「いや、コッチも悪かったな。今度からはお互い気を付けようぜ」

そう言つて、アインとぶつかった三年生の女子生徒——ダリル・ケイシーは去つていった。それを見届けたアインは、また食堂へと足を動かし……ふと、自分のポケットの中を見る。

先ほどぶつかった先輩が、自分のポケットの中に何かを入れたようだ。

その様子を見逃さなかったアインはポケットに入れたソレを覗き見る。

そして、僅かに眉を潜めた後、ほんの少し、口元を歪めて後、また何事もなかったかのように歩き出した。

「ツヘへ、態々前払いで渡してくるたあ気が利くねえ……！」

誰にも聞こえないように、そんな独り言を口ずさみながら。



「そういえば、アインってIS初心者なのによくあんな動きできるよね。セシリアさんとの試合もそうだったけど、中国の鳳^{ファン}さんの衝撃砲をあんな体勢で避けるなんて」

あたかも自分が初心者ではないかのようない方にアインは内心でこのシャルルという少年（少女）に呆れつつも、シャルルの賞賛に言葉を返した。

「ああいう風に機体を後ろ向きに倒しながらの方が弾を避けやすいんですよ。戦場なんかでも匍匐前進やスライディングをしていれば弾に当たりにくいものと同じ理屈です。要は相手から見て自分のISが見えにくい体勢にすればいいことです。幸い、ハイパーセンサーのおかげでどんな体勢からでも周囲を確認できますし、生身でやるよりもずっと効率よく弾を避けれますよ」

「言われてみれば確かにそうかもね。だけど、僕はこの改造したリヴァイヴによる高速戦闘に慣れすぎちゃって、弾を避けるときとかウイングスラスターの機動力に頼りがちだったから、そういう避け方はまだできないかなあ」

「無理してやる必要はないと思いますよ。自分もシャルルさんのように高速機動に頼って弾を避け続けられればよかったですけど、何せ自分のISはワンオフアビリティがあれですから、その使用も考慮してスラスターの乱用による戦闘は極力避けてます。苦肉の策として考え出した避け方がアレなワケです」

シャルルが転校してきてから五日が立ち、すっかり（表向きは）仲良くなった二人は、

同曜日の午後の自由時間を使って、解放されたアリーナでお互いのISを展開させ意見交換をしていた。

「けど、それで避けれるんだから凄いや。さつきだつて僕の射撃が全然当たらなかつたし、よく動いているようには見えないのに避けられるっていうのは本当にすごいと思うよ」

「フランスの代表候補生にそう言ってもらえるのは光栄だ。で、次は何をしましょう？

また手合せでもしましょうかね？」

「アハハ、アインって意外に好戦的なんだね」

「こー見えても傭兵ですから。戦いには惹かれるというものですよ」

五日間同じ部屋を過ごして分かった事であるが、このシャルルという少女、どう見ても狙いは自分の白式だとアインは確信していた。今もこうして自分と手合せしたりして何処か自分の動きや白式のスペックなどを観察している節がある。どうせ直ぐにクライアントに引き渡して新しい専用機に乗り換える予定なので、白式の情報を引き出されたところでそんな痛手にはならないが、白式そのものを譲る訳にはいかない。

既に前払いとして受け渡されているのであればなおさらだった。

「アインの『白式』って後付装備がないんだよね？」

「ええ。どうにも拡張領域が空いてないようでした、代わりに食わせ物のワンオフ・アビ

リティーが二つもありますがね。おそらく容量が其方に持つていかれてるのでしょう。厄介な事ですよ、まったく」

肩を竦ませて、やれやれと言った感じで両手を上げるアイン。

片や諸刃の剣としてシールドエネルギーを消費してしまふ代物、武装を増やすにしてももう一つの方のアビリティーを使用する事でしかそれを行えないという不便な仕様のI Sである。

「でも普通は第二形態セカンドフォームから発現するものだよな？ それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特異能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型I S。オルコツトさんのブルー・テイアーズと鳳さんの衝撃砲がそうだけど……」

「倉持の技術者方さんもそこら辺で未だに議論してしましてね。白式はそのワンオフを最初から使える仕様だから第三世代だとか、マインド・インターフエイズ武装がないから結局は第二世代型だとか、拡張領域の狭さを考慮すればむしろ第一世代型まで型落ちするのではないかとか、散々ですよ」

「アハハハハ……第一世代型はさすがに極端じゃないかなあ？」

苦笑しながらそう言うシャルル。

『ブリュンヒルデ』が使っていたワンオフ・アビリティーを備えているI Sの割には散々な言われようだな、とシャルルも思ったらしい。

とはいえ、一次移行の時点でワンオフを、それも二つも発現させるのは紛れもなく異常であり、操縦者が世界で唯一の男性という事もあつて欲しがらる国はたくさんある。……最も、既にテロ組織からの先約が入っているのは内緒だが。

「二応、織斑先生が使っていた雪片とは違って、そつちの……『雪片式型』っていうのかな？ そつちには近接ブレードと射撃兵装が一体化した武装になつてるから、幾分か戦いやすくはなつてはいるとは思うけど……」

「それでも決め手が『零落白夜』以外にこれといつてない、というのが痛い所ですかね。射撃を決め手にしようにも結局は『零落白夜』を使わなければいけない。通常の弾丸が実弾だつていうのがせめてもの救いです」

「うくん、とてもじゃないけれど普通の初心者に扱える代物じゃないよね。はつきり言つてアインだから扱えているようなものだよ、それ」

「ハハハ、世辞は喜んで受け取つておきますよ。今は考えても無駄でしょうし、そのことは置いておきましょう」

「どうせ乗り換える予定だしな、と心の中で付け加えながらこの話を置いておくアイン。」

「あ、うん。それもそうだね。じゃあ、次は射撃訓練で勝負しようか。はい、これ」

そう言つて、シャルルはアインに呼び出ししたアサルトライフル《ヴェント》を渡し、

シャルル自身もまた同じ銃器をもう一丁呼び出して構えた。

違う武器で勝負しては公平性に欠けるといふシャルルなりの配慮であった。

「ちゃんと使用許諾アンロックは発行してあるから。アサルトライフルは使えるよね？」

「ええ。IS装備は幾度となく触った事がありますから、これくらいどうって事はありませんよ」

渡されたアサルトライフルがちゃんとセミオートモードになっているかを確認しながら、アインは答える。その表情に余裕を感じたシャルルはよし、と頷いてアリーナの中心に表示された的に両者は銃を構えた。

「時間はどうしようか？」

「一本三分。三本勝負で二点先取した方の勝ち、どうでしょうか？」

「よし、乗った……！」

ニヤリと、好戦的な笑みを浮かべてアサルトライフルを構えるシャルル。スタートの合図と共に、両者の銃口から同時に弾丸が飛び出した。



「……………」

先ほどこからお互いにISを展開しながら仲が良さそうに一緒に訓練している男性操縦者二人を、セシリアは遠くの背後からハイライトのない目で見つめていた。お互いに男性操縦者という事もあつてか、二人の相性は抜群のようだった。

少なくとも、セシリアにはそう見えていた。

未練がましくも青色のISスーツを身に纏い、いつでも『ブルー・ティアーズ』を展開できるように待機するようなその姿は、彼女を待ち受けている真実の事を考えれば実に滑稽であつた。

彼女は嫉妬していた。

同じ男性操縦者という立場だけで、自分から立ち位置を奪ったフランスの代表候補生、シャルル・デュノア。

実際、アインとセシリアがBTデータ取りの訓練で付き合うのは放課後の夜中であるため、別にシャルルはセシリアの立ち位置など奪つてはいないのだが、アインが関わる的正常な思考ができなくなる、アインに『洗脳』されているセシリアにはそう思えて仕方なかった。

それでも、とセシリアはぐつと堪える。

このぶちまけそうな感情を抑えて、そしてこの絶対零度の視線地獄を乗り越えればまた、あの時間がやってくる。

『ブルー・ティアーズ』が、セシリアが使っている時よりもより活き活きとする時間が、彼の雄姿を見る時間がやってくるのだ。

(耐える、耐えますのよ、セシリア……)

あの時間の事を考えれば、こうして自分に一瞥されて送られる絶対零度の視線でさえ、心地よくなってくる。

その心地よさは決して妙な性癖だとかそういうものではない、優越感だ。

彼だけが素で自分に接してくれている現状が、彼が自分に素を見せてくれる時間が、彼が自分にだけ心を許している事が、何よりの優越感だった。

(あの場所に最後に立っているのは私、そこに曇りはありませんわ。最後に、卒業するまでに、国に連れて帰るまでに、私が彼の傍に立っていれば——)

——もし、立てなかつたら？

そんなネガティブな思考がセシリアの脳裏に迸る。

入学してから初日——自分は彼に何をした？

彼を男という異性だけで差別し、彼の生まれ故郷を差別し、彼の誇りを一週間もの間穢し続けた自分が、こうして踏みとどまっているだけで彼の懐に立っているのか？

——“本来ならばあの場での貴女の発言は、彼の貴女に対する、ひいては我々本国に對する印象を悪くするものであった”

不意に、技術部門の顧問から言われた冷淡な言葉がセシリアの脳裏に響く。そうだ、このままでは自分は彼の懐に立てない。

彼の懐に最後にいるべきなのは自分の筈なのに、このままでは立てない。

表向きではセシリアに気さくに接していようとも、内心ではセシリアの事をまだ疎ましく思っているかもしれない。

(そんなのは……嫌……)

ふと目を上げてみる。

そこにはアリーナの奥に続々と表示されては消える的の中心を次々と撃ち抜いていく、互いに切磋琢磨する二人の姿があった。

その瞬間、セシリアの心は爆発する。

(嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌否否否否否否否否否否否否厭厭厭厭厭厭厭厭厭厭いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや!!)

セシリア・オルコットは考える。

絶望が待っている運命にどうすればずっと囚われ続けていられるかを必死に考える。

このままでは駄目だ。

彼を狙う生徒はたくさんいる。

一人増えてその分希少価値が下がったとはいえ、男性操縦者である彼を欲しがる国は

イギリス以外にもたくさんある。彼を欲しいと思う女子生徒もこの学園にたくさんいる。

どうすれば、彼が自分を見捨てずに済むかを必死に考える。

予て本国から命令されている「ハニー・トラップ」を実行するか、いや、それは許されない。

その程度では、彼は自分を見てくれない。

どうすれば、どうすればいいか、そしてセシリアは考え付いた。

(ああ、簡単な事ですわ)

恍惚的な笑みを深ませる。

(彼の、道具になればいいんですわ)

道具——それは絶対に裏切らない、裏切りようがない。

それになればいいのだとセシリアは考える。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ……」

彼女はもう既に手遅れだった。

この学園に潜む、洗脳された女子生徒達、その中でも彼女はもうどうしようもない、手のつけようのない程の洗脳を施されていた。

この世界に、神はちゃんといえるのだから。



「アイン、今日はもう上がろう。四時を過ぎたし、もうアリーナの閉店時間だ」

「結局三本に終わらず熱中してしまいましたね。周りのお嬢ちゃんたちの声も聞こえないくらいに」

「アハハ、僕は少し五月蠅かった……かな？」

難易度MAXの、一瞬で現れては消え、一瞬で現れては消え、それらによる残像を作り出していたのを当て続け、どちらか一方の点数が上がっていくたびに上がる女の子たちの歓声に、シャルルは相変わらず慣れないのか困惑気味だったようである。

「えつと……じゃあ先に着替えて戻ってて」

何処かよそよそしくそう言うシャルルに対し、アインは内心で「こいつ隠す気あんのかよ……」と呆れつつ、了承する。

「分かりました。それと自分も少しの間用事がありました。部屋に着くのは其方より遅くなりそうです」

「うん……分かったよ」

シャルルにそう言って、アインはゲートへと向かう。

チラリと、先ほどから背後でじつと自分達二人の様子を見つめていたセシリアを一瞥し、ほんの少し微笑を浮かべ、ゲートへ戻ったアインは更衣室の中へと入る。

白式は待機状態のガントレットに戻し、素早く身支度をして更衣室を出る。

四時過ぎに山田先生から職員室に来るように言われていたアインは、真つ直ぐに職員室を目指して足を運ぶ。

白式の正式登録に関する書類に関する用事であり、もう直ぐ乗り換えるのに登録するのもどうかと内心で疑問に思いつつも、今は一生徒として先生の言う事は絶対なので、アインは山田先生の所へと向かった。



「………………。はあっ……………」

ドアを閉め、寮の自室に自分一人だけになった所でシャルルは吐き出すように溜息を漏らした。それでも我慢していたせいだろうか、無意識に出たそれは思ったよりも深く、シャルル本人が驚くくらいだった。

「…………何をしてるんだらうね、僕は」

アリーナでの彼とのやり取りを思い出し、シャルルは再び溜息を吐く。

彼のデータと白式を狙ってここに来ていた筈なのに、何故自分はこの学園生活を楽しんでるのだろうか。

さつきだつてそうだ。

本当は白式を観察してデータを取ろうと思つていたのに、いつの間にか彼と射撃訓練での勝負に熱中をしていた。それこそ周りで騒ぐ生徒達に対して「集中できないから黙つててくれ」と叫びたくなるくらいには、熱中していた。

「こんな負けず嫌いだっけ、僕つて……？」

楽しかった、ただ純粹に楽しかった。

偽りの関係とはいえ、誰かと切磋琢磨する事が、今までになかったその体験はシャルルにとつてとても新鮮なものだった。

それだけではない。

ここ五日間、アインが見せる気遣いにシャルルは救われてきた。

頑なに一緒に着替えようとしないうちに特に深く事情を聴く事もなく、この学園で右も左も分らない事を教えてくれた。

男性操縦者という理由で騒ぐ女子たちとの上手い接し方やあしらい方も教えてくれて、自分が女性である事を隠さなければならぬ立場にあったシャルルはそれで幾分か

氣を樂にすることができた。

そんな彼に、自分はひどい事をしようとしている。

そんな事したくない。

自分はシャルル・デュノアなんていう名前じゃない、れつきとした女らしい名前を母親から貰った正真正銘の女子なのに、何で、それも自分に良くしてくれた人物に対してこんな事をしなければいけないのだらうと、シャルルは葛藤していた。

「……そういえば、彼って……傭兵だよな？ だったら——」

幸い自分は代表候補生。

スパイとしてここに送られてきたとはいえ、政府から提供された貯金はたくさんある。

——ならば……その貯金で彼を雇って、そして……。

「やめよう、こんな事考えるの」

彼とて今は一生徒。そんな事ができる立場ではないだろうし、何より難しいだろう。

そんな事を考えながら、この五日間一緒に過ごしてきたルームメイトの机に目を置いて——奇妙な物を見つけた。

「……あれは？」

座り込んだベッドから立ち上がり、アインの机の上に置かれたそれを近くで見つめ

る。

それは普段彼が身に付けている白式の待機状態であるリストバンドと形状がよく似ており、シャルルは思わずそれを手に取り、突如として顔色を変える。

「これって、もしかして……!」

そういうや否や、シャルルは自分のバッグから端末を取り出し、そこから伸びたコードを手取る。

「差込口は……あつた!」

端末から伸びたコードをリストバンドについていたコード差込口に差し込む。

すると端末に「このデータを閲覧しますか?」というメッセージが現れ、シャルルは即座にその下にあつた「はい」のボタンをクリックし、そのデータを閲覧する。

そこに表示されたのは、ISのデータだった。

「打鉄……改……カスタム……zweiツヴァイ」

(白式……じゃない!?)

表示されたISの名前を呟いたシャルルはもう一度、手に取ったガントレットを手で角度を変えながら見つめる。

(まさか……このデータのISの、待機状態?! どうしてアインの机の上に!?)

そんな疑問を抱きながら、シャルルは端末を動かしてそのデータの詳細を見る。

どうしてアインの机の上にあったか以前に、ここに待機状態のISがある事自体が問題なのだ。

彼の白式でない、だからといって学校の訓練機でもないのだとしたら、一体このISはなんなのだろうか、そんな疑問がシャルルにはあった。

(武装は……大型ブレードに、BTエネルギーハンドガン……フアング・ビットが八つ、装甲はBTエネルギーに対応した耐貫性スライド・レイヤー装甲、更に機動力の底上げのために特殊軽量化を施し、改造した第三世代型のスラスタを搭載……そんな、どうして日本製のISにイギリスのBT技術が……!?)

映像データに映っている「緋色の打鉄」を目にしたシャルルは今度こそ驚愕を隠しきれなかった。日本とイギリスが共同でISを開発したなんていう情報は聞いた事もないし、そもそもデータベース上ではこんな機体なんて乗っていなかった。

見た感じ強固なアーマースカウトは、牙状らしき何かを納めたサイドアーマーに換装されており、さらに頭部装甲まで追加されている。右肩の物理シールドの裏上部にマウントして背負った大型の近接ブレードが特徴的だった。

(国籍は……不明。一体どこでこのISを……!?)

画面をスライドしていき、やがてこのISの詳細が記載された項目を引き当てた、シャルルは目を見張ってそのデータを閲覧する。

『元はとある研究所から盗まれた三機の I S の内の一機。この三機が東欧の紛争地帯に■■■■共和国の大臣が違法投入……その内の一機が敵の傭兵に強奪された。研究所に戻されはしたが、それを『我々』が再び強奪。来るべきときに雇う傭兵の専用機として改修……紛争地帯で強奪した傭兵……もしかして……!!』

更に画面を下にスライドしていったら、そこに一つの映像があった。

これを見たらもう後戻りはできない、そんな予感に苛まれつつも、シャルルは恐る恐るヘッドホンを付けてその映像の再生ボタンをクリックする。

そこに再生されたのは、正に悪夢の映像だった。

一人の傭兵が二人の内一人の女性操縦者の心臓を撃ちぬいて殺害し、更にもう一人の操縦者を地面に転がり倒して、その肩にピストルを発砲。

傭兵は彼女で遊ぶつもりなのか、手負いの状態のまま彼女をあえて I S に搭乗させる。

相棒を殺された女性は憤怒の表情でラファール・リヴアイヴのスラストを吹かして空中に飛び立ち、地上にいる男の傭兵を殺さんと見下して、その表情は一瞬で驚愕の物へと変化する。

男が、撃ち殺した女性の I S を奪い取って、彼女に襲い掛かってきたのだ。

『どうして、どうして男がI Sを!?!』

『さあな、才能じゃねえのか!?!』

『ふざけないで、大臣はどうしたの!?!』

『脅してやったらよお、お前らの事すぐ吐いてくれたぜえ!』

『そんな、大臣が私達を見捨てる筈……!』

『同情するぜえ、可哀想になあ!』

そんな対話の応酬の中で、男の傭兵は初搭乗とは思えない程の動きでリヴァイヴの搭乗者を追い詰める。

搭乗時間だとか、そんなものが意味を成さない程に、両者の間には圧倒的なセンスの差があった。

やがて、怒り狂ったリヴァイヴの搭乗者が近接ブレードを展開して、瞬時加速で男に肉薄しようとするも――

『御託はあ!! 沢山なんだよお!』

まるでカウンターの如く瞬時加速を繰り出した男の傭兵によって右腕をリヴァイヴの装甲ごと切断される。

そして。

『逝つちまいなあ!』

かってしまった。

「うおえ……ア、ア、エ……」

口からぶちまけそうになる嘔吐物を必死に喉に押し戻す。辛うじて吐かないのは代表候補生として訓練されたメンタルの強さのおかげ故だった。もし何もいままこの映像を見ていれば、シャルルは間違いなく壊れていただろう。

「ア、ア……どう、ひい……て……」

どうしてアインが、と言葉にする事が出来なかった。

映像に映っていたあの傭兵を自分はよく知っている。おそらく自分がこの学園で一番信頼している人物であり、そして一番罪悪感を抱く人物。

そんな彼が、あんな顔で人を殺している事実を、到底受け入れる事ができなかった。

「……」この、IS、ア……？」

恐ろしかった。

ただただ恐ろしかった。

あのリヴァイヴの搭乗者にあそこまで苦痛を与えた凶器¹が、今自分の目の前にあるという事実²に。

「……？」

ふと、背後に気配を感じた。

恐る恐る、振り返る。

そこには。

「へっ……！」

あの映像と同じように、凶悪な笑みを浮かべるアインの顔を見たシャルルは、顔を青ざめて声のない悲鳴を上げた。

フランス少女の選択

まるで、時が止まったと感じるような瞬間だった。

とく、とく、と荒ぶる鼓動とそれに連なる恐怖の感情は、一瞬の時間さえも長く感じさせる程であり、それは少しでも長く生きていると感じていたいという己の気持ちであらうか。

「どうかしましたか?」

何せ、目の前には――

先ほどみた映像で残虐非道の所業をやってみせていた傭兵、アイン・ゾマイルが立っていたのだから。

口調こそこの五日間でシャルルに見せてくれた紳士的な物であるものの、その表情は正に映像で見た彼の残虐の笑いそのもの。まるでシャルルを飯の種を見るかのようなその目は間違いなく、アイン・ゾマイルのものだった。

「……あ、あ………い………」

震える唇を必死に動かして彼の名を呼ぼうとするも、それすらも恐怖のあまりまとも

に口にできない。崩れ落ちた足もまた震えるあまり立ち上がる事ができず、本能が逃げろと警告してきても体がそれを受け付けなかった。

「先ほど、白式の正式な登録に関する書類を書いてきましたね。これでようやく貴方と同じ正式な専用機として認められるようですよ。いやはや、同じ男性操縦者ですから、貴方とお揃いになるのは嬉しい限りです」

「……ッ、……ッ?!」

無理だった。まともに彼の声を聞けない。

この五日間は心地よく受け入れる事ができた彼の声音が、今ではただの悪夢トラウマだった。

その声を聞きたびに、自分もまた、あのリヴァイヴの搭乗者と同じような事をされるのかと、どうしても頭がそう連想してしまう。

シャルルは裏世界の闇を知っている。世の中には正論や常識、人道ではまかり通らない所がいくつもあって、シャルル自身もまたそれを味わった。

本来ならばISというモノに関わる事無く、フランスの田舎町で母と穏やかに暮らす事を望む、ただ一人の娘だった。

母親が亡くなり、あの男が来るまでは。

だから、それにはもう慣れた。慣れた、つもりだった。

しかし、シャルルは裏社会の闇は知っていても、「戦争の闇」に関してはまったく無

知だった。会社の存続の為に仕方なく自分を男と偽ってスパイとして送って来たあの男と違い、ただ純粹な悪意だけで人をあそこまで苦しめて殺す人間が存在する事を、シャルルは知らなかった。

そして、その人間が今自分の目の前に立っているという現実が、シャルルの恐怖をこのうえなく増幅させた。

「どうしました？ そんなに震えて、何か悪い夢でも見ましたか？」

「……………い、あ……………ッ」

口調はそのままに、しかしその歪んだ表情は、此方の反応を見て遊んでいる事が伺える。

沈黙が場を支配する。

悪趣味な笑みを浮かべながらシャルルを見下ろすアイン、未だ恐怖のあまり立てずに膝を突いたまま項垂れるシャルル。

シャルルの顔は既に冷や汗でびっしょりであり、更に目から流れた涙も混ざり、青筋を立てたその表情はとでもではないが目視できるものではない。

やがて、心臓が停止しそうなタイミングに陥った段階で、アインの表情はいつものにこやかな柔らかない物となった。

「……………え？」

突如、アインから感じる冷たい雰囲気がなくなつた事に呆然としたシャルルは、金縛りから幾ばくか解放されたのか、ゆっくりと顔を上げる。

そこにはいつもの頼もしい笑みを浮かべているアインの姿があった。

「ハハハ、すみません。＼それ」、大切な友人から預かっている代物でして、シャルルさんが手に取っているのを見てついカツとなつてしまいました。ほら、立てますか？」

「う、うん……」

アインが差し伸べた手を、シャルルは無意識の内に取る。

そこに暖かさを感じたシャルルは、呆然とした後、内心でほつとした。

(よかつた、いつものアインだ)

先ほど見た映像は、おそらく他人の空似に違いないとシャルルは思った。

この世に似たような人間など腐る程いるし、世の中にはああいう事をする人間だつて。その人間の容姿が偶々、このアインに似ていた

ただそれだけの事なのだ、そう思い込もうとした(男なのにISに乗れている時点でアイン確定なのだが、正常な思考を破棄したシャルルはそれを考え付かなかつた)

「それで、そろそろ話して頂けませんか？」

「え？」

アインの唐突な質問に、シャルルの身が固まる。

さっきのようなルームメイトとしての、不変のやりとりを望んでいたシャルルにとつて、それは思いがけないものだった。

「私に何か隠し事をしているのでしょうか、シャルル、いえ——シャルロット・デュノアさん？」

「!？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「シャルロット・デュノア」

しばらく間をおいて、ようやく言われた単語を理解して、シャルルは再び顔を青ざめさせる。

「な、何の事かな？ 僕の名前はシャルル・デュノアだよ!? ほら、君と同じ男性操縦者

……」

「シャルロット・デュノア。故郷は南フランスの田舎町。父親の名前はアルベール・デュノア、そして母親の名前は——でしよう？」

「!？」

「そして肝心のアルベール・デュノアの妻は貴女の母親ではなく、ロゼンタ・デュノアという女性。貴方の母親はアルベールの愛人であり、貴女はその愛人の子供。違いますか？」

「そ、それは……」

何処で知られたかも知らない己の出生を言い当てられ、俯いたままシャルルは言い淀んでしまう。

アインは「そろそろ」と言っていた。

という事は、以前から自分の正体に気付いていたという事になる。

だとすればもう誤魔化す事は不可能に近い。

どうする、どうやってこの場を乗り切る……そう考えたら、アインの口から衝撃の事実が語られた。

「私は以前、フランス外人少年兵部隊に所属していた時期がありまして、そこで貴女の名を聞いたのですよ、シャルロット・デュノアさん？」

「外人……少年兵部隊!？」

その単語に、シャルルは驚愕を隠せない様子でその単語を復唱する。

フランス外人部隊——フランス陸軍所属の外国人の志願兵で構成される正規部隊であり、兵卒を外国人応募者の中から選抜して合格した者を契約という形で採用している部隊である。

そこまではフランス出身のシャルルも知っていたが、「フランス外人少年部隊」という名は聞いた事がなかった。

「ちよ、ちよつと待つてよ!! 外人部隊への入隊資格は十八歳以上から四十歳未満の成人男性の筈だよ!」 それなのに少年兵部隊つて、まさか……!?!」

「非公式の部隊つて奴ですかねえ。何、この女尊男卑の世の中じゃあそんなもんができてのもの珍しくはありませんよ。中東のテロリストが子供たちを洗脳して少年兵に仕立て上げるのと同じ。それと同じことをフランスの陸軍がやったまでの事です」

「そ、そんな……」

アインの口から淡々と語られる女尊男卑の闇にシャルルは思わず口を噤んでしまう。シャルルとて、自分の祖国の軍がそんな非道の行いをしていたという事実に、どうしてもシヨックを隠せなかった。

——なんて、この世界は歪んでいるのだろうか？

「とはいっても、非公式ではありませんが非正規軍という訳ではないので、少々難しいですが手柄を上げれば表向きは無理ですが階級も貰える。そこで貴女の名前を聞きましてねえ。隠し子ならまだしも、アルベール・デュノアに息子がいたなんて話は聞いた事がありません。ならば、貴女が娘のシャルロット・デュノアであるならば辻褄も合う。……違いますか?」

「……隠しても、無駄みたいだね」

「先ほど私の机の上に置いてあったモノ。貴女の人柄ならそれが何なのか分かった途

端、普通は詮索しないものです。にも関わらず、貴女は「ソレ」を見た。そうせざるを得ない事情があった。……良ければ、話して頂けませんか？」

「うん。全部、話すよ」

そしてシャルル、否、シャルロットはアインに話した。

己の事、デュノア社の事、全てを話した。

アインの言う通り、自分の父親はデュノア社の社長であり、自分はその社長と愛人の娘である。

二年前にちょうど母親が亡くなったタイミングで、父親の部下が家を訪れ、色々と検査をする過程で高いＩＳ適正がある事が分かり、非公式ではあったがデュノア社のテストパイロットをする事となった。

父親に会ったのは二度くらいであり、会話は数回くらい。普段は別邸で生活しているが、一度だけ本邸に呼ばれた事があり、そこで本妻、つまりロゼンタ・デュノアから『この泥棒猫が！』と殴られた事もあった。

それから少し経ち、デュノア社が経営危機に陥った。

いくら世界でのシェアが三位のリヴァイヴでも所詮は第二世代型。しかもそのシェアでさえ日本の打鉄や他国のもう一機の量産型ＩＳに負けている始末である。

基本、ＩＳの開発というものはほとんどの企業が国からの支援を受け取ってようたく

成り立つ者。そのおかげでフランスは欧州の統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されてしまった。

なまじりヴァイヴの性能が安定してただけに、「第三世代型の開発」の依頼があつてもデュノア社にとつてみればとても急務であつた。資本金で負ける国が最初のアドヴァンテージを取らなければ悲惨な事になるというが、今のデュノア社がまさしくそれだった。

このままではIS開発のライセンスを取られる事を恐れたデュノア社長、アルベル・デュノアは突如発表された世界初の男性操縦者のデータ、および白式を盗むために自分を『二人目の男性操縦者』としてこのIS学園に送り込んだ。要するにスパイなのである。

また、態々男性操縦者として入学させたのは、同じ男性であればアインに近付きやすくなり、かつ一時的な広告にもなるという事だった。

「そう、白式のデータを盗んで来いって言われてるんだよ。僕は、あの人にね」
「……」

「とまあ、そんな所かな。でもアインにはバレちゃってたし、きつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どの道今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいい事かな」

「……」

アインは何も言わずに黙ってシャルロットの話の聞いている。

(嫌われちゃった、かな?)

そんな後ろ向きのを考えながら、最後に、自分がずっと彼に言うべきと思っていた言葉を口にする。

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメ——むぐッ……!?!」

その台詞を言い終わる前に、アインの手がシャルロットの口を抑え込んだ。

咄嗟に慌ててその手を振り払おうとするシャルロット。

「シーツ」

が、その前にアインが人差し指を口の前に立て、静かに、とシャルロットにそう命令する。

呆然としながらもシャルロットは思わず頷き、それを見たアインはシャルロットの口から手を外し、周囲を物色しはじめた。

ベッドの下や横、床下や天井、机の中、ありとあらゆる箇所を物色し、やがてそれらからある “極小の物体” が複数見つかった。

見た事もない代物。

しかもただ取り付けるだけでなく巧妙に隠されており、もしアインでなければ全てを見つかる事は適わなかっただろう。

そして、「その物体」が何なのかを悟った、シャルロットは、顔を青ざめていった。しかもアインがそれを潰していく姿を見て、シャルロットの中でそれは確信に変わる。

「ア、・ア……アイン、それって、もし、かし……て……？」

「盗聴器ですよ。中々巧妙に隠したものです」

顔を青ざめていくシャルロットに対し、未だに平然とするアイン。

そんなアインの様子を見て、シャルロットの中で何かが崩れそうになった。

今まで、裏切り続けていたルームメイト。

そして、最後まで信頼していたルームメイトは、最後の最後に自分を裏切ったのだと。

「ア、・アイン、もしかして、最初から僕を……？」

思えば、おかしかった。

机の上にこれみよがしに待機状態のISを置くなんて、正気の沙汰などではない。

つまり、アインがシャルロットを嵌めたのだ。

しかも、ご丁寧に盗聴器まで仕掛けて……そう思った。

「何を勘違いしているんだか。そもそも——この盗聴器を仕掛けたのは私ではありませんよ」

「……………え？」

しかし、シャルロットが思い描いた予想を即座に否定するアイン。

そして、次に発せられた言葉は、シャルロットにそれ以上の残酷な運命を決定づけるものだった。

「『アレ』を見たのなら分かるでしょう？ 学園側^向が一番警戒しているのは貴女ではな

く——この私である事をね」

潰した盗聴器を手の中で遊びながら、アインはそつと振り向く。

あの映像と同じ、残酷な笑みを覗かせて。

「……………ツ?!?!? あッ…い……………」

そして、シャルロットは再び顔を青ざめさせる。

アインの台詞が本当であれば、あの映像に映っていた傭兵は紛れもなくアイン自身だったという事だった。

その事実を再確認したシャルロットは、体を震わせながらアインを見る。

「ど、どう、いう……………」

「外人少年部隊にいた頃ですがね、お偉いさん達が汚れ事を押し付けてくるもんで、そりやあもう楽しかったですよ。殺して、犯して、蹂躪して、手柄を立てて行けば階級が貰える。最も、任務に駆り出されたほとんどの少年兵たちは息絶え、生き残るのはいつも自分でした。少年兵つてのは使い捨てをされてなんぼですからね。なもんで、階級を貰った少年兵も私くらいなものでしてね……ツククク……」

面白そうに、笑いをかみ殺すアイン。

そこには、人間としてあるべき「罪悪感」がなかった。少年兵として駆り出される事への疑問や不満も存在しなかった。

いや、むしろそれを楽しんでたかのような、そんな顔だった。

「そ、そんな……だって、そんなの……アインだって、辛かったでしょう!? まだそんな歳、いやそれより低い時に少年兵なんかやらされて、望まない事を一杯やらされて、使い捨てにされて、それでツ……!」

「外人部隊には、自分から入りました」

「ツ!?!」

その、衝撃的な事実にも、シャルロットは目を丸くする。

まるで、アインを、在り得ないような物を見るかのような目で、彼を見る。

「三年も前の事です。自分が少年兵として所属していた欧州のP M Cが、ある鉄道事件

をきっかけに容疑をかけられ、ついには倒産してしまいましたね。スポンサーを失った私は、次なる戦場までの中継ぎとして、フランスの外人少年兵部隊に入隊しました」

「あ……………あ……………」

「そして、東欧という次なる戦場を見つけた自分は、部下たちともに外人部隊を抜け出し、そして東欧の紛争地帯でドンパチやった。その後は、あの映像を見た通りです」

「……………い……………ッ?!?!」

次々と語られる事実に、もはや言葉すらなくしてしまふシャルロット。

この男は、戦争をさせられていたのではない。自分から進んで戦争をやっているのだ。

何の思想も、信条もなく、ただ「戦争をしたい」という理由だけで、戦っているのだ。「ついでにですね、そのPMCが崩壊するきっかけとなったその越境鉄道の横転事件。あそこにはあのイギリスの代表候補生、セシリアさんの両親が乗っていましたね。その事件を起こして彼女の両親を奪い、あまつさえこの学園に来た彼女をクラス代表決定戦で叩きのめして洗脳して、あんな風にしたのは、何を隠そうこの私なんです」

「い……………、いあぁッ……………?!?!」

次々と、アイン自身の口から語られる残虐非道の行為。それらを楽しそうに笑いながら語り掛けるアインに恐怖を覚えたシャルロットは震える体を引きずって壁際に後退

する。

壁に寄り掛かりながら、シャルロットはその狂人を震えながら見る。

まるで、化け物を見るかのような目で。

「き……」

震える口を、必死に動かす。

「き、きみは……いつ……たい……!?!」

必死の問いかけだった。

震える喉を抑え、腹からでる声を何とか絞り出し、その存在に問いかける。

この、世界の歪みそのものともいえる、この男に。

「戦争屋です」

男はそう答えた。

まるで、これからコンピニに行くかのような平然とした声音で、答えた。

「戦争が好きで好きでたまらない。人間のプリミティヴな衝動に準じて生きる、最低最

悪の人間ですよ……!」

まるで、この世全ての歪みを凝縮したような黒い笑み。

その目には、戦と欲の脂あぶらが渦巻いており、様々な戦争犯罪に手を染めてきた男の生涯

全てが、そこに詰まっていた。

「——ッ!!!」

その笑みを見て、ついに耐えきれなくなるシャルロット。

アインに目もくれずにすれ違い、一目散に扉の方へかけようとする。

扉の方へ全速力でかける、その刹那でさえ、この空間では長い時間のように感じて、そして。

「待てよ」

それはあつけなく阻止された。

シャルロットが懐に隠し持っていた折り畳み式ナイフを奪い、足払いで転倒させ、拘束して首に突き付ける。

それは、一瞬にして、刹那の動作であった。

「あ…………いゝや、あ…………!」

首筋に突き付けられたナイフを見て、シャルロットは小さな悲鳴を上げる。

喉元を軽く押さえつけられ、大きな悲鳴を上げられないようにされていた。

「ツヴァイのデータを見たんだつたら分かっただろう? 俺の事も、俺のスポンサーの事もな。なら、俺はテメエをこのまま生きて帰すわけにやあいかねえ」

「……………ッ!?!」

「ところがどっこい。肝心の学園側にも自分のスパイ行為がバレた。となりやあ、テメ

エの逃げ道はもうどこにもねえってわけだ」

まるで確信犯のような笑いを浮かべるアインを見て、シャルロットは全てを悟った。自分は嵌められた。

学園側が自分達の部屋に盗聴器を仕掛けている事も看破して、あえて専用機の待機状態を自分の机の上において誘い込んだ。

そして自分に事情を吐かせて、それを敢えて学園側の盗聴器に聞かせて己の逃げ道を断つと同時に、アイン自身の事をシャルロットがそのデータを観覧して知る事によつてアインがシャルロットを見逃すつもりがないのだと暗に悟らせ、もう一つの逃げ道もなくした。

文字通り、今のシャルロットには希望の一筋も見えない状態となった。

……たった一つを除いて。

「嬢ちゃんに希望があるとすれば、俺が『傭兵』であるという事だ。さあ、選びな。俺を雇って、専用機を持ってスポンサーの元へ馳せ参じるか、それともここで死ぬか。まあ、どちらにしる戦争だがな……!」

「ああ……ぼく、は……」

逃げ道を断たれたシャルロット。

最早混濁してしまった頭で、それでも必死に選択を選び取ろうとしていた。

(僕は……僕には、選ぶ権利がなかった。最初から、最後まで……必死に、自分が生きるためには仕方のない選択ばかり強いられて、今回……だって……)

あの日、自分に名を与えられた母親が死んでしまったのが、全ての始まりだった。

そのシャルロットという名前を与えてくれた母親に恥じない生き方をしようとして、その選択肢は他ならぬ自分の父親によつて潰された。

(死ぬ……このまま、何も、選択、でき、ないで……)

自然と、拳が強く握られていた。

(嫌だ……嫌だ厭だ否だイヤだいやだ!!)

こんな———こんな世界で、こんな『歪んだ世界』で、ただその歪みに巻き込まれて、何もできずに、何も許されずに死んでいくなんて、絶対に嫌だ!

「ぼく、は……!」

そして少女は、悪魔の手を取った。

ドイツ少女の分岐点

「ただいまつと……ん？」

定食を乗せたお盆を片手で持ちながら部屋に入ってくるアイン。

その途端、彼の眼に入ったのは、未だベッドの上で気持ち悪そうに俯きながら座っているシャルル、否、シャルロット・デユノアの姿があった。

「おいおいどうしたあ？ 今更になつて契約が不服になつたかい？」

「……それは、僕に選択の余地がない事を分かつた上で言つてるのかな？」

「ツクク、分かつてんなら僥倖。まあこれでも食え」

意気消沈しながら、畏怖の感情が混ざつた目でアインを睨み付けるシャルロットを鼻で笑いつつ、シャルロットのベッドの隣にある鏡台の上にトレイを置く。

選りすぐりのエリート達が集まるIS学園の食堂のコックたちが手掛けたそれは正に絶品の味を誇る代物であつた。

「……」

しかし、そんな代物を前にしてもシャルロットは顔色を一切変えず、むしろ青筋を立てたまま目を逸らす。

「おい、せめて食事くらい取れよ。でねえと戦争の一つも出来やしないぜ?」

腹が減つては戦もできぬつて言うしな、と言いながらドカン、と自分のベッドの上に座り込むアイン。脱ぎ捨てた上着の下からは、右肩の紺色の刺青が顕になる。ついさつきまで優等生に振舞つていた面影は微塵もなく、その様はまるでヤクザのような雰囲気醸し出していた。

「僕は、戦争がしたい訳じゃない……! 君と一緒にするなあ……!」

「わーつてるよ。つたく、融通の利かない雇い主なこつて……!」

「……ッ」

我慢できずに立ち上がり激昂しながら反論するシャルロットであるが、まるでどうでもいいと言わんばかりに手を横に振りながらそう答えるアインに対し、やりきれない気持ちになりながら再びベッドに座り込む。

この男にはどんな事を言つても無駄だと分かっているから、それ以上は言えなかつた。

この男とは、決して分り合える事などないだろうから。

「大体、食おうが食いまいが僕の勝手だし、君には関係ないだろ? どうしてこんなものを——」

「何、大事なクライアントだ。健康体でいられなきやこつちが困るつてもんよ。それに、

テメエをその専用機付きで連れてスポンサーの元へ馳せ参じれば報酬金もたんまりと貰えるだろうしなア」

「二重契約かい？ 傭兵の隅にも置けないね」

「こちとらボーナスがかかってんだよ。それに、つい最近スポンサー様が大勢取り込んだ裏の I S 技術者共には I S コアとそのテストパイロットが絶賛不足中だ。テメエの I S 操縦技術とその専用機は向こうさんにとってみりやあ喉から手が出る程欲しいだろうぜえ？ オメエにとつても悪い話じゃねえと思うがな」

「……ッ」

そう、これだ。

この男の厭らしいところは、ただ単にこちらを脅迫するだけではなく、ちゃんとしたメリットを提供してくる所だと、シャルロットは心の中で毒づく。

彼女の専用機は他の代表候補生のような第三世代型、つまり一点特化型の機体ではなく、汎用性の高いリヴァイヴを更に磨き上げたカスタム機体である。

そしてそのスペックを十全に引き出せるシャルロットの操縦技能と、デュノア社でのテストパイロットとしての経験を考慮すれば、シャルロットの有用性に疑いの余地はない。

アインの伝手を探って大勢の裏の I S 技術者を取り込んだ彼のスポンサーからして

みれば、彼女のような人材は喉から手が出る程欲しいだろうし、同時にシャルロット自身の生命も保障される事となる。

そしてアインは彼女を連れて来た報酬としてポーナスが貰える。

あくまでお互いにウィンウィンな契約関係なのである。

……そのスポンサーが大規模なテロ組織であるという点を除けばだが。

「という訳だ。冷めねえ内にとつとと食いな。せつかくフランスの田舎料理のメニューを探して持ってきたんだ。精々故郷の味でも楽しむんだな」

「——ッー 君ってやつはどこまで……いー」

まるでもう二度と味わえないだろうから有難く思つて食べ、と言わんばかりのアインの言い草に激昂しかけるシャルロット。故郷の実母を亡くした彼女からしてみれば遠回しに精神を抉るような言葉である。

そして、同時に箸がうまく使えない事を考慮して態々故郷の料理を探してくるという気遣いを見せるこの男に対して、何とも言えないような気持をシャルは抱いてしまう。

この五日間の思い出補正もあるのだろう。

「……………」

何処までも、やりきれない気持ちだった。

もう後戻りはできない。

後戻りができる選択肢など、とうに父親によつて奪われている。

先ほど見た映像のせいでもないち食欲のわかなかつたシャルロットであつたが、もうヤケになつてアインが持つてきた食堂のフランス料理に手を付ける。

フォークを突き刺し、口の中に入れ、咀嚼する。

「……ッ!!」

瞬間、シャルロットの脳裏に、かつて母親と暮らした故郷の思い出が鮮明に思い浮かんできた。

生い茂つた緑に包み込まれた美しい家が建ち並ぶ田舎町。

自分に名をくれた母親との思い出、地域の人々との暖かい繋がりが。

とうに忘れかけていたあの日の思い出が、まるで走馬燈のようによみがえつてきた。

「……ッ、グス……」

——ムシヤ、ムシヤ。

更にながつく。

先ほどの食欲のなさなど嘘のように、シャルはこの懐かしき味を味わわんと、次々とお盆に並べられた故郷の料理を口に入れては何度も噛み、それを繰り返す。

その度に涙が流れ、それを食欲で誤魔化そうとしてもそれは逆効果で、辛さと嬉しさが混ざつた感情を胸にシャルロットはそれを食べ続けた。

(どう、して……)

シャルロットは思う。

自分はルームメイトの男に嵌められ、こうして余儀ない選択を強いられ、こうして日陰者への道を歩もうとしているのに、何故……。

「ムシャ、ムシャ……グズツ……どう、じで……！」

今この場に一緒にいること男に対して、畏怖している彼に対して、この最低最悪の間というべきこの男に対して、頼もしさと有難さを感じてしまっているのか。

それが何よりシャルロットにとって悔しくて、やりきれなかった。

そんなシャルロットの心情を察していたアインは、ベッドに寝転がり、天井を見上げながらニヤリとほくそ笑んだ。



「……お嬢様」

「ええ、してやられたわね、これは……！」

IS学園の生徒会室で、ザザー、と鳴るノイズを耳に入れた楯無は、苦渋の表情を浮かべながら、悔しそうに無線機を机の上に置いた。

——やられた……！

不覚、と書かれたセンスで口元を隠しながら、届けられた資料に映っている写真を悔しそうに眺める。

アイン・ゾマイルル、フランス少年部隊に属していた頃はカミーユ・バルザック少尉と呼ばれており、非公式の少年部隊の所属でありながら唯一階級を貰った人物でもある。

そして、本名は——

「織斑、一夏……」

更識の情報網をフル活用し、ようやくたどり着いた真実。

しかもその事実は酷いもので、彼があのような「戦争屋」になってしまった経緯も楯無は知ってしまった。

要は、この国の大人たちがその、最初の火種を作り上げたのだ。

この国の闇こそが、彼という戦争屋を生み出したのだという事実には、楯無は頭を抱えざるを得なかった。

「家族という居場所を断たれて、戦場にしか己の居場所を見いだせなくなり、戦いだけを求めるようになった……いつしか戦いを己の居場所としてではなく、生き甲斐として見るようになった……最悪のパターンね。通りで今まで彼の戦う理由が見えなかった訳

だわ……！」

「最初はただ居場所を求めてやっていた、今では生き甲斐になつてゐる。戦い以外にも生かせる能力をたくさん持っているのに、それを戦いでしか生かさないと、戦いの中でしか生きられない。いるんですね、本当にそんな人間が……」

彼女の従者であつた布仏虚もまた、幾分か影を落としたような表情でアイン・ゾマールに関する資料を眺める。

戦いの中に必死に己の居場所を求め、戦い以外でも多くの所で生かせる能力を身に付け、戦い以外の居場所を作れるようになったというのに、戦いの中で磨かれたその戦い以外で生かせる能力を身に付けた頃には、彼の中にはもう戦いしか既になくなつてゐた。

彼の中には戦う理由も、そして神もない。

ただ戦争をしたいという欲求に従つて戦う、ただの「戦争中毒」になり果てた。

それが今の彼、織斑千冬の弟という、その末なのだ。

「……ねえ、虚」

「何でしょう？」

「もしも、もしもよ？　もし私がつと有能で、あのブリュンヒルデのような、世界から名声を受けるような人間だったら、簪ちゃんは、かんちゃんは……この男のようになつ

ていたかしら?」

「お嬢様?」

急に弱気になった楯無の声に、虚はふと楯無の目を見やる。

そこにはいつもの、更識楯無としての彼女ではなく一人の姉、「更識刀奈」としての彼女がそこにあつた。

完璧な姉と、出来損ないの弟という背景は、刀奈にとつても他人事ではなかつたのだらう。

それを見た虚はハア、とため息を吐き、彼女の質問に答えた。

「おそろくはないでしょう。そもそも、簪様がお嬢様を疎む理由は優秀な姉と比較される事を嫌つたから。彼の場合はそもそも比較されてもそれを気にせず姉と一緒にいる事を望み続け、その姉と一緒にいられない事に絶望してあなつたのですから、簪さまとはそもそもが正反対です」

「そう、よね……けど……」

それでも、その「姉」と「弟」を比較し続けた人間が原因であなつたのなら、いつか簪も同じようになるのではないかという不安を、刀奈は拭いきれなかつた。

「付け加えるのなら、彼がああなつたのは、ドイツでテロ組織に誘拐されて少年兵として駆り出された経験がそもそもの一旦ですから、間違つても比較されるだけではああはな

りません。お嬢様は心配される事は一切……」

「それでも、不安なのよ。あの時、かんちゃんを突き放した事が、本当に正しかったのか……」

そんな刀奈を見た虚は内心で、これはよくない傾向だ、と思い始める。

一刻も早く彼女を「刀奈」から「楯無」に戻さねば、ゴホンとわざとらしく咳を吐いて彼女に助言を送った。

「ならば、一度話し合ってみてはどうですか？」

「話し合う……？」

「簪様とです」

「けど、それは……」

「少なくとも、お嬢様が簪様を彼のようにしたくないと思うのであれば、行動すべきだと私は思います」

念を押すように、アインの事を引き合いに出し、虚は言う。

簪が彼のようになる可能性は万が一にもないだろうと虚は思っているが、それが刀奈の不安要素であるというのであれば、遠慮なくそこを突かせてもらおうと虚はそれを行った。

「……そうよね、話しあわなきゃ、何も分からないもの……」

さすがにそれが効いたのか刀奈は決心したような目で顔を上げる。

「やっとか、と小さく息を吐いた虚は『楯無』に再び机の資料に向き合うよう促す。

「ではお嬢様。まずは彼の対策に取り掛かりましょう。残念な事に、私達は彼に一本取られてしまいました。一刻も早く対策せねば……」

「分かってるわ。まさか此方が仕掛けた盗聴器を逆手に取られるなんて……少々見縊り過ぎたわね」

「これでシャルロット・デュノアの安否を確かめに行こうものならそれこそ向こうの思う壺です。いつその事、彼を雇ってしまうのはどうでしょうか？」

「駄目よ。私達には彼に提供できる戦場なんて用意できないし、そもそもこの間の様子からして、彼に接触してきた組織もあるみたい。彼が既にスポンサーを得ている可能性も考慮しなきゃならないわ」

「亡国機業、でしょうか？」

「その可能性が高いわね。彼のIS稼働データを目的に研究所から打鉄を盗んだのもおそらくは彼らの仕業。接触が見られた時も、両者ともに更識の監視員を巻いている。契約を結んだタイミングとしてはその後の可能性が高いわね」

資料や情報をもとにアインについての現状を整理していく二人。

亡国機業、アイン・ゾマイル……両方とも相手にするには厄介な存在である。特に

このアイン・ゾマイル——もとい織斑一夏に関しては何を仕出かす分かったものではない。

信条も、信念もなく戦う輩というのはこれ以上ない厄介な存在なのである。

戦う理由がないという事は、それだけで行動の特定がしづらいのだから。

「もし彼が行動を起こす時期があるとすれば、月末に行われる学年別トーナメント」

「各国の幹部までも視察に来るこのイベント、火種を起こすには、十分すぎますね」

「彼の正体を考慮すれば、織斑先生にも頼れない可能性がある。もつと人員を増やさなければ……」

「亡国機業が絡んでくる可能性も十分に考えられます。アイン・ゾマイルとシャルロット・デュノアだけでなく、外部にも気を配らなければなりませんね」

彼女達は考える。

彼らを止める方法を、この学園の生徒達を護る策を、生徒会の名にかけて、更識の名にかけて考える。

彼女達は知らなかった。

敵は、アイン・ゾマイルや、亡国機業だけではないということ。

事はもう既に手遅れになっているという事を、彼女達は知らない。



「まったく、あの兎女のせいで……!」

学園内で男子が使えるトイレが三か所しかない現状、授業終了のチャイムと同時に早歩きでトイレに行かなければならない事に、自分をこの学園にぶち込んだ要因を作ったであろう人物に恨み言を吐くアイン。

「何故こんな所で教師など……!」

「やれやれ……」

急いで教室へ戻ろうと早歩きで廊下を歩いていると、ちょうど曲がり角の先から声が聞こえる。

アインは速度を落とさず、かつ彼らの会話を聞き取った。

会話の主は自分の姉とあのもう一人の転校生、ラウラ・ボーデヴィツヒであった。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

どうやらラウラ・ボーデヴィツヒは織斑千冬の現在の仕事についての不満や思いの丈をぶつけているらしい。口ぶりからしてかつての彼女が教官を務めた部下の一人であるらしいが、アインにその詳細は伝わっていない。

彼の傭兵としての活動範囲は主に欧州が中心であったが、ドイツで雇われた事は少なかったため、ドイツでの情報にはいまいち疎かった。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている」

——だからこそ、扱いやすく、洗脳しやすいんだがな。

アインは内心でラウラの言い分に賛同しつつ、そう付け加えた。

「そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど——」

「——そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……」

凄みのある千冬の声に、ラウラは思わず押し黙る。

かつて教えを受けた事もあり、やはり彼女には敵わないのだろう。

その声に含まれる覇気に疎んでしまい、続きの言葉が出ない様子だった。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

その声は震えていた。

まるで神に見捨てられることを恐れる信奉者の如く、その目は恐怖と、そして尊敬の目が入り混じっていた。

(クククツ……)

それらの一部始終を聞きながら通りすぎたアインは内心で、二人の事を考えておかしそうに嗤った。

まるで悪戯事を思い付いたかのような笑いで、アインは先ほどの二人のやりとりを思い出す。

(ハハハ、やつぱり「 teme era」は最高の火種だなあ、千冬姉え……)

まさかドイツの地で作った信奉者すらもここに連れて来るとは、いやはやブリュンヒルデの名には恐れ入る。

——そして、この火種を使わない手など、ないに決まっている。
そんな事を考えながら、アインは教室へと急いだ。



「……アイン。今日も特訓するの?」

シャルロットが気弱な雰囲気醸し出しながらアインにそう聞く。

「ええ、勿論。今日は使用人数が少ない第三アリーナを使いましょう。今日は使用人数が少ないと聞いているので、空間が空いているのであれば模擬戦もできるでしょう」

——よくまあこんなに猫を被れるものだよ、まったく……。

シャルは内心でアインの猫かぶりの上手さに呆れる。

今までこんな凶暴な人間が生きてこれたのもこういう狡猾さがあるが故のおかげなのだろう。

“それで、今度の学年別トーナメントでのタッグを組んだのはいいけれど、結局僕は何をすればいいの……?”

“何もなくていい。待っていればその内楽しいパーティがやってくる。とりあえず俺とテメエは学年別トーナメントに向けてチームプレイの特訓をしてりゃあい”

“対戦相手の情報とか集めなくていいのかい?”

“無論、それもやってるさ。俺がテメエとタッグを組んだ理由は、奴さんらの監視の目線を俺らに集中させるためさ。つまり、囷って訳よ”

“僕達が脱出するために僕達が囷になるなんて、変な話……”

ひそひそと周りに聞こえないように会話する二人。

シャルロットは彼の言う「パーティ」が何の事なのかは分からなかった。しかし、も

う後戻りはできない以上、彼に従うしかなかった。

戦場で生きて来た彼の戦術指揮官としての手腕に疑いの余地はないのだし、シャルロットはそんな彼を頼るしかなかったのだ。

やがて第三アリーナへと入った二人。

二人は同時にISを展開し、武器を呼び出し^ルして、訓練開始の合図を待つ。

「では——」

——その瞬間、いきなり声を遮って超音速の砲弾が飛来する。

「!?!」

アインとシャルは咄嗟に緊急回避を取る。

砲弾はアリーナの壁に激突し、その轟音をアリーナ中に響き渡らせる。

緊急回避の後、アインとシャルは揃って砲弾が飛んできた方向を見る。

そこには、漆黒のISが佇んでいた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

警戒するような表情でシャルがその名を呟く。

対してはアインは何事もなかったかのように、冷静に突然の乱入者を見つめていた。

「いきなり撃ってくるなんて、ドイツの人は随分と血の気が多いんだね」

「ふん……」

シャルロットの挑発に対し、ラウラは鼻で笑う。

「フランスの第二世代アンティークごときと模擬戦とはな。随分と情けない専用機持ちな事だ。なあ、アイン・ゾマイール」

まるでシャルロットの事は眼中にないみたいに、ラウラはアインの方を見つめる。この様子からして、彼女は最初からアインに用があつてここに来たようだった。

「何か御用かな？」

そんな喧嘩腰のラウラに対して、アインは表情を変えず、あくまで平然としてラウラに問う。それが余計に気が障つたのか、ラウラはその眉をわずかに潜ませる。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「生憎と、貴女と戦う理由は此方にはありません。何せ、私は今フランスの第二世代アンティークの相手で手一杯ですから」

「貴様にはなくても私にはある」

ラウラは聞く耳を持たないのか、右肩のレールカノンの砲身をアインへ向ける。そこには明確な殺意があり、まるでアインを親の仇と見るかのような目で睨む。

「理解に苦しむ。何故貴様のような輩が、よりにもよつてあの人と同じ力を使っているのか。何の、何の接点もない貴様が……！」

——なるほど。

彼女が自分達を襲ってきた理由にようやく得心がいったアイン。

ようするに、自分があのブリュンヒルデと同じ「零落白夜」を使っているのが気に食わないのだろう。

「世界初の男性操縦者が、第一回モンド・グロツソの大会で優勝したブリュンヒルデの力を使う。世論に対するいいプロパガンダになると思いしますがねえ」

「貴様、教官の力をそのように……!」

彼女の千冬への信仰心を押し量るためにあえて彼女を挑発するように言ったアインに対し、ラウラはそれが許せなかったのか、アインに向けたレールカノンの砲身を――

――咄嗟にシャルルの方へ向け、放った。

「……ッ!?」

咄嗟の事に驚きつつ、シャルロットは物理シールドを二枚重ね呼び出し、防ごうとするが、その前に。

アインが、飛来してきたレールカノンの砲弾を、真つ二つに切り裂いた。

「なに……!?!」

咄嗟のアインの神業に驚愕するラウラ。

しかも切るだけにとどまらず、破片がシャルロットの方へ飛ばないように、完全に切るのではなく、あくまで切り込む形で砲弾を停止させたのである。

「やれやれ、シャルルさんの言う通り、血の気の多い方だ」

先ほどのような穏やかな雰囲気とは一変、アインは警戒するような眼つきでラウラを睨む。

——ボーナスが台無しになったらどうしてくれる、まったく……。

そんな悪態を込めつつラウラを睨んだ後、アインは可笑しそうに笑いかみ殺した。

「ク、フフフ……」

「……何が可笑しい?」

まるで此方を小ばかにしたような笑いにラウラは静かに怒りつつ、再びレールカノンの照準をアインに合わせる。

「羨ましいですか?」

「何だと?」

アインの質問に、訝しげに眉を潜めるラウラ。

「貴女が憧れたブリュンヒルデの力。それを一介の生徒が、それも男子風情が使っている事に……」

「……ッ」

途端に、ラウラの表情が明確に険しい物へと変貌する。

どうやら凶星であるらしい。

それを見たアインは更に口角を釣り上げ、彼女を挑発する。

「貴女が崇拜したその力を、貴女が手にしたかった力を、私が使っている事が羨ましいですか？」

「……………ま……………れ」

「貴女が憧れた力、貴女が望んで止まない暴力、貴女が信じる神、その力を使っている私は、貴女からしてみればさぞ妬ましいでしょう」

「黙れと言っているッ!!」

言つて、ラウラはもう一発、アインに向けてレールカノンの砲弾を発射する。

しかし、アインは先ほどと同じように砲弾を真つ二つに斬り、同時に――

無拍子で、棒立ちの状態から、イグニッション・ブースト瞬時加速をかけ、一気にラウラの元へと接近した。

「なッ……………!?!」

その神業に反応しきれず、アインの接近を許してしまったラウラは信じられないような目で驚愕する。

通常の瞬時加速であるのなら彼女にだって反応できたかもしれない。

しかし、彼が行ったのは、東欧の紛争地帯で見せた瞬時加速の上を行く瞬時加速、セカンド・チャージ・イグニッション二段溜瞬時加速。

四基のウイングスラスターを用いたダブル・イグニッション二段瞬時加速とは違い、一つのスラスターを用い

て、二段回のエネルギーチャージを経て発動する、アインが編み出した特技。

しかもそれを白式のウイングスラスターを用いて行われたのだからその速さは言うに及ばず、しかも棒立ちからの無拍子でそれを行ったとなれば、さすがの遺伝子強化体アドヴァンストたる彼女といえど反応できなかつた。

「欲しいですか、これ？」

「なに、を……」

接近した状態で、そつとラウラの耳元で、まるで誘うかのような甘い声音で語り掛けるアイン。

差し出されたその手には、雪片式型が握られていた。

それを目にしたラウラは、突然の事に戸惑ってしまう。

「貴女が望んで止まなかつた力。それが今日の前にあります。欲しいでしょう、これ？」
「あ、ああ……！」

差し出されたその雪片式型を前にして、ラウラはまるで新しい玩具を前にするかのような子供の眼つきになる。

本来ならば使用者の『使用許諾』がなければ使えないにも関わらず、ラウラは思わずそれに手を伸ばしそうになる。

「貴女が望むのであれば差し上げますよ、この力……」

「あ、ああ、ああ……！」

アインの甘言に釣られるままに、ラウラはソレに手を伸ばそうとし——
『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

突如、アリーナにスピーカーからの声が響いた。

騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師だろう。

その声にハツとなったラウラは——

「……ッ！！」

とつさに腕のプラズマ手刀を展開し、アインへ切り付ける。

アインはそれを余裕の表情で後退して避ける。

「き、さ、ま……！」

そして、今までに比較にならない程の殺気を出しながらアインを睨む。

アインに弄ばれたのが我慢ならないようで、今か今かと必死にプラズマ手刀を構え——

——思いとどまった。

「今日は、引いてやるッ！ 覚えていろよ、貴様ッ！」

ご機嫌斜めの様子でアリーナのピットへと入っていった彼女を見送ったアインは、悪趣味げにほくそ笑んだ。

それを見たシャルロットは、嫌な予感を感じた。

(いいぜ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。テメエの願い、叶えてやるよ)

こうして、ドイツの儂き遺伝子強化体の少女は、戦争屋に目を付けられる。

(テメエの信じる神とやらに、ならせてやろうじゃねえか)

誰も、彼の手から逃れる事はできない。

聖戦、その幕開け

六月の最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色へと変わる。ISを学びにやってきている生徒達にとってはこのうえなく重要なイベントの一つであり、その慌ただしさは尋常なものではない。現に、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやっと解放された生徒達は急いで各アリーナの更衣室へと走る。

そんな中で男子更衣室で二人締めをしている二人の生徒がいた。

「おうおう、皆さんご苦労なこつて」

モニター室から観客席を舌を舐めずりまわしながら様子を見るアイン。

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、中には外交官までもがそこに居座っており、更にはアインが見た事のある顔ぶれすらも散在していた。

「ツクク、やはり今日にして正解だったな。これでたつぷり借りを返す事ができる。そうは思わないか、クライアントさんよ？」

「……」

隣にいたもう一人の男子生徒、いや、男子生徒として入学したスパイ、シャルロット・

デュノアにアインは問いかけるが、シャルロットは依然としてアインに目を合わせないまま、映像に映っているとある人物を見つめていた。

その人物のスーツに付いていた名札をシャルロットはずっと凝視している。

「デュノア社の関係者、か。見知った顔かい？」

「知っているも何も、あれは……！」

そう聞いて来るアインに対し、シャルロットはその男性から目を離さぬまま、拳に力を込める。もしそこにいたのがデュノア社の関係者どころか、自分の父親であったのなら、シャルロットは我慢できずにその映像を叩き割っていただろう。

関係者にすぎないから、まだ彼女は理性的にいった。

「あれは、あの人は、デュノア社のエージェントだよ。僕が本当は女性である事を知っている。おそらく、父さんに言われて僕の男装がバレてないか見張りにきたんだ……！」

「フツ……」

憎々しそうにそのデュノア社のエージェントを睨むシャルロット。そんなシャルロットを見たアインは面白可笑しそうに笑みを浮かべ、シャルロットにこう言う。

「なら丁度いいじゃねえか。雇い主の鬱憤を晴らすのもまた傭兵の役目。あのエージェントさんも火の渦パルティに放り込んでやれるぜ？」

「……勝手にしなよ。どっちみち、僕が頼まなくなつてやるつもりなんでしょ？」

「まあな」

ここまでできて半ば思考を破棄するシャルロット。

もうどうなるうが、自分にはどうする事もできない。

彼の言う「パーティー」というものがどういうものか想像できないし、したくもないが、それが碌でもない事で、それにあの観客席にいる来賓たちを巻き込もうとしているのだけは分かった。

その来賓にデュノア社のエージェントが含まれている事に、僅かな昂揚を覚えている、そんな己の心にシャルロットは気付こうとしないまま、チラリとアインを一瞥する。「さて、間もなく神が降臨せし聖戦の幕開けだあ……！」

まるで遊園地を楽しみにするかのような、それでいてどす黒く悪意に満ちたその言葉に、どのような思惑が渦巻いているのか、シャルロットには分からなかった。



——気に入らない男だ……！

それが、クラス代表決定戦の映像を見て、ラウラがアインに抱いた第一印象だ。

零落白夜——それは彼女が敬愛する教官、織斑千冬が使ったIS、暮桜に搭載されて

いた彼女の単一仕様能力であり、同時に彼女を第一回モンド・グロッソの優勝に導き、彼女をブリュンヒルデたらしめた力である。

自身のシールドエネルギーを犠牲に、相手のエネルギーシールドを無効化して大ダメージを与える能力——一見、軍人からしてみれば実戦では使い物にならないようなその能力、だからこそ彼女が敬愛する織斑千冬がだけが扱える能力であり、彼女しか使えない唯一無二の暴力なのである。

それを、どこの馬とも知れない第三者が、使いこなしている。

その事実が、ラウラ・ボーデヴィツヒにとってこれ以上のない憤怒と憎悪を抱かせる。

あれは彼女の敬愛する教官だけが使っているいい力だ、教官だけが持つ力の筈なのだ。

それを持って余して使いこなせていないならいざ知らず、それを完璧に使いこなしている様は、彼女の中にある教官の価値を貶められているようにしかラウラの瞳に映らず、ラウラにとってそれはまさしく「神を冒瀆する行為」なのだ。

故に、我慢しきれなくなったラウラは、その教官の力を使っている男、アイン・ゾマールとフランスの代表候補生、シャルル・デュノアの模擬戦に乱入した。

己の怒りの言をぶつけ、それに対して何の思う風もなく、ただ涼しげに言われたその言葉を、ラウラは忘れなかった。

『世界初の男性操縦者が、第一回モンド・グロッソで優勝したブリュンヒルデの力を使う

——世論に対するいいプロパガンダになると思いそうですがねえ」

清々しく言い切ったその時の顔を忘れない。

まるでラウラが尊敬しているものを、ラウラの全てを嘲笑うかのようなその顔を、ラウラは一秒たりとも忘れなかった。

この男にとって、彼女が尊敬する教官の力は、その程度のものでしかないという事だった。

たったその程度の認識で、織斑千冬の力を使っていたのだ。

正直に言えば、織斑千冬の力を使っているという点を除けば、ラウラのアインに対する評価はそんなに悪くはなかった。

——奴は、戦いを、力というものを知っている。

ラウラはあくまでドイツの正規軍であり、アインは何処にも属さない傭兵だ。

お互いそういった違いこそあるものの、自分と同じ、『戦う事しかできない者の気配』をアインから感じ取っていたラウラは、少なくともこの学園の女子生徒達よりはましだと、アインを評価していた。

ISは戦うための兵器だ。いかに宇宙開発用のパワードスーツとして開発され、その趣旨から外れてスポーツとして用いられていようと、その点は覆らない。

よしんばそれで宇宙開発が進もうとも、宇宙での戦争が勃発するだけだとラウラは考

えている。

それ故に意識に疎く、ISをファツションかなにかだと考えているこの学園の生徒達よりかはまりましたとアインの事をそう評していた。

使えるものは使い、使えないものは捨てる。

兵器とはそういうものであり、執着を持つて身に付けるものでもなければ、ファツションとして扱うものでもない。

人を殺すための道具、それが兵器だ。

彼、アイン・ゾマイルはそれをよく知っているのを、ラウラは感じ取っていた。

戦いに使えるものは何でも使う。

それは戦いに生きて来たものなら誰しもが身に付ける考え方であるし、ラウラにとつての「シヴアルツェア・レーゲン」もまたその程度の認識でしかなかった。

問題は、彼が「その戦いの中で使える物」の中に、あろうことか彼女の敬愛する織斑千冬の力までもが入っているという事だった。

——それだけは、決して許されるものではないっ!!

どんなに使える力であっても、“その力”は別なのだ。

あれはその程度の認識で使つていい物ではない、あれは如何な有象無象であっても使う事を許されるものではない。

あれは教官、彼女が敬愛する織斑千冬だけが持つ力であり、まさしく彼女の象徴であるべき力の筈なのだ。

その乱造品を、後継機を、その力に誇りも持っていない者が使っているという事実には、ラウラは一点たりとも許容できなかった。

（アイン・ゾマイル——。教官の力を使い、その存在を貶める張本人……）

あの男の存在を認めはしない。

（叩きのめしてやる、どんな手を使つてでも。己が如何な冒涇を犯しているか、如何に前に過ぎたものであるか、その身で思い知らせてやる……!!）

その力を使つていいのは——

教官と——

《Valkyrie Trace System》……stand by……

——ワタシダケ……！



「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

今か今かと待ちわびた様子で、ラウラは目の前に現れた怨敵を睨む。

その隣にいるシャルルには目もくれず、ただ己が打倒すべき相手を好戦的な笑みで睨んでいた。

「此方としても、貴女と戦うのを楽しみにしていましたよ。それと箒さん、今日はよろしくお願いします」

「あ、ああ」

自分のパートナーと違い、ちゃんともう一人の相手に対しても礼儀を忘れないアインに少し戸惑いつつも、箒はそれに相槌を打つ。

試合開始まで五秒前

——一人は黒い思惑を。

——一人はただその時を。

——一人はその疑念を。

——一人はその怒りを胸に——

四、三、二、一——開始。

「叩きのめす」

「お手柔らかにね」

そんな言葉の応酬と共に、ラウラはシユヴァルツエア・レーゲンの右肩のレールカノンをアインに向け、撃つ。

ドオン、という轟音と衝撃とともに放たれた強力無比の砲弾は、真つ直ぐにアインへと肉薄し、アインはそれを紙一重で避けた。

「弾け飛べー！」

そんな言葉と共に、ラウラはレールカノンのリボルバーマガジンを回してレールカノンを連射するがアインは紙一重で避ける。

体を後ろ向けに仰け反り返らせ、ラウラからみて己が見えにくい体勢を維持しながら、激しく動くことなく静の動作で砲弾を紙一重で躲していった。

だが、忘れてはいけない。

これは一対一の勝負にあらず、チーム戦である。

「私を忘れてもらつては困る」

レールカノンを避け続けるアインに、横から打鉄を駆る筈が近接ブレードを構えなが

ら突っ込んできた。

ここにははラウラの砲撃の邪魔にしなければならないというのに、それでもお構いなく箒は突っ込んできた。どうやら彼女はのっけからアインとかち合う事が目的のようである。

キーン、と金属と金属が触れる音が鳴り響く。

「……………!?!」

コンマ一秒も罹らずに拡張領域から拳銃一体型近接ブレード『雪片式型』を取り出していたアインは、取り出すと同時に箒の斬撃を受け流し、隙を見せた箒に対して一閃を加える。

ガギーン、と金属同士が触れ合うのと似たような音で彼女の打鉄のエネルギーシールドがガードする音が聞こえたが、どうやらアインが振るった斬撃はそれを突破したらしく、その際に打鉄の右側のスカートアーマーが宙を舞った。

(防御型である打鉄のスカートアーマーの接合部だけを正確に切り裂くだ?!? 何という技量をしてるのだ!?!)

零落白夜を使っていないにも関わらずここまでの斬撃を見せるアインに対して驚愕しつつも、箒はアインに向き直る。

その眼にはただ一筋の闘志と、疑惑が宿っていた。

この試合の直前に、箒はパートナーであるラウラとのやりとりを思い出す。

『アイン・ゾマイルと一騎打ちをさせろ、だと?』

『そうだ』

『聞けない相談だな。私にも奴に用がある』

『なら少しの間だけでもいい。奴と一度手合せをさせてほしい!』

『……私には奴と戦わねければならない理由がある』

『……理由?』

『貴様がそこまでして奴に挑む理由はなんだ?』

『……確かめたい事がある』

『……何だと?』

『一つ、確かめたい事があるんだ! どうしても確かめたいことが、だから少しでいい

……! 少しでもいいからアイツと……!』

『……いいだろう。それ以外で私の邪魔はするなよ?』

『ハアッ!』

再度、アインの駆る漆黒のISに近接ブレード『葵』を構えて踊りかかる。

こう見えても箒は剣道の全国大会の優勝者である。

並大抵の剣の使い手では彼女に敵う事など決してないだろう。

ガキイン、と装甲がまた切り裂かれる。

「ぐうっ……！」

——それが並大抵の使い手であれば、の話だが。

「——っ、まだだっ！」

（私は、確かめなきやいけないんだ！　こいつが……この男が……）

最初は、クラス代表決定戦で雪片式型を振るう彼の太刀筋を見て、少し違和感を抱いた程度だった。

昔、共に道場で切磋琢磨し、自分よりも強かった男の子がいた。

ただ、その男の子の太刀筋と、今の目の前にいるこの男の太刀筋が重なっただけだった。

「そこだあつ！」

またもや箒が振るった一閃はものの見事に受け流され、カウンターにと左側のスカートアーマーも接合部と共に切り捨てられる。

切り飛ばされたスカートアーマーは宙に舞い、そのままアリーナの床へと突き刺さった。

それに構わず箒は迷いのない、達人の如き太刀でアインに剣を振るうが、まるで箒の太刀筋が読まれていたかのように避けられた。

この間、アインは一度もスラストを吹かずに箒の太刀筋を捌いていた。

「——っ!? 今……」

その動きに違和感を感じた箒は、再度アインに攻撃を仕掛ける。

しかし、避けられる、受け流される、その繰り返しだった。

そこには性能の差という概念は存在せず、まるで箒が次に何をしてくるのかを分かっているかのように避けられる。

（動きが、読まれている？ それにこの太刀筋——）

ガキーン！

「——!!」

もう一方のスカートアーマーを切り飛ばされ、両肩の物理シールドを除いて丸裸となった彼女に迫って来た剣閃を、箒は間一髪で受け止める。

バチバチ、と刃同士の摩擦による火花が飛び散る。

「あ、ああ……!」

雪片式型の刃を葵で受け止めながら、箒はその疑念をアインにぶつけた。

「やっぱり、お前……は……!」

思えば、おかしかった。

何故織斑千冬と何の接点もない彼に、『零落白夜』を搭載された専用機が与えられたの

か、その時点で疑うべきだった。

まじまじと見れば、確かにその面影もあった。

そして『アイン・ゾマイル』……ドイツ語には疎い箒でも、IS学園の入学に向けて勉強してきた彼女になら少しくらいは分かる。

アインは「一」、ゾマイルのゾマーは「夏」を意味する。

そして——この太刀筋。

「いち……っ!?!」

いちか、と叫ぼうとしたその瞬間。

箒の足下に何かが絡みつき、それは中断される。

一体なんだ、と頭の思考が疑問を口にした瞬間に。

箒のISは、宙を舞った。

その足には、シユヴァルツエア・レーゲンから射出されたワイヤー・ブレードが絡みついており、箒と入れ替わるようにラウラがアインに肉薄してきた。

「なっ、何をする!?!」

「契約切れだ。もう十分だろう?」

床に叩きつけられた箒はラウラに向けて怒声を発するが、そんな箒に目もくれずにそう返した後、両腕のプラズマ手刀を展開し、アインに左右からの攻撃を仕掛けた。

斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃。

しかしそんな攻撃に対してもアインは焦る事無く、いやむしろドイツの代表候補生と白兵戦を興じられることに對する喜びを表すかのように、好戦的な笑みを浮かべながらラウラとの激しい攻防戦を開始した。

両腕のプラズマ手刀を的確に操るラウラ。

近距離での速射と斬撃を交えて銃剣を振るアイン。

そして、その白兵戦は次第にアインが押していった。

「ちいっ!？」

少しでも距離を取れば射撃が、次には正確無比な速射が。

その猛攻にラウラはワイヤー・ブレードでシャルルを牽制する余裕もない。

A I Cで動きを止めようにも、A I Cは発動の瞬間にほんの少しだけ隙が生じてしまい、その僅かな隙がアインの前では一瞬でも命取りになってしまふのをラウラは理解していた。

零落白夜——認めたくはないが、この男はそれを使いこなしている。

クラス代表決定戦の映像を見た時でも、彼が零落白夜を発動したタイミングはまさしく絶妙であり、本当にあのセシリア・オルコットの駆るブルー・ティアーズの装甲と雪片式型の刃が接触したその瞬間に発動させていた。

つまり、この男は教官の力の使うタイミングを一切誤らない。

本当に警戒すべきは零落白夜にあらず、戦いの中で磨かれてきたこの男の戦闘技術に他ならないのだ。

「ぐうっ!？」

ワイヤーブレードを受け流され、地面にしゃがみ込むような低い体勢になったアインによる回し蹴りを受けるラウラ。

その回し蹴りと同時に、胴体に斬撃を受けてしまった。

エネルギーシールドを突破され、ダメージを負ったラウラは、それでも自分が大してダメージを受けてない事に啞然となった。

(零落白夜を、発動させなかっただと……?)

馬鹿な、信じられないと、ラウラは疑問に思う。

この男が、この絶好のチャンスに零落白夜を使わない筈がない。

つまり――。

「――ッ、舐めているのかあ!？」

咄嗟にA I Cを発動させる。

その瞬間、アインの白式はピタリとそのまま静止し、動かなくなる。

しかし、とうのアインの表情はまるで余裕。

まるでわざと捕まってやったといわんばかりのその表情に、ラウラはその感情に余計に火を注がれ、レールカノンをアインへと向ける。

レールカノンへ装填されたその砲弾が——撃たれる事はなかった。

「隙だらけだよ!」

「——ッ!?!」

シャルルの援護射撃を受け、アインに発動したA I Cを解除せざるを得なかったラウラは、アインをその拘束から解いてしまう。

彼を仕留める、千載一遇のチャンスを、ラウラは失ってしまった。



「邪魔をするな!」

己のパートナーにアインから引き離されて激昂した筈は怒りの形相のまま、立ち上がるシャルロットへと肉薄する。

そんなに彼との勝負を邪魔されたのが気に食わなかったのか、それとも——。

(まるで、想い人との時間を邪魔されたかのような怒り方——いや、今のぼくには『どう

でもいい』)

ガギイン！ 箒の刀を、シャルロットは瞬時に呼び出した近接ブレード『ブレット・スライサー』で受け止める。

そしてそのまま左手の『レイン・オブ・サタデイ』が火を吹いた。

「くっ……!?!」

次々と己に当たる銃弾とその衝撃に、耐えられず箒はどんどんと後退していつてしま
う。

(まったく、彼女を仕留めずにわざわざスカートアーマーを削いで丸裸にするなんて、相
変わらず趣味が悪い。そのおかげでやりやすいけどさ……)

打鉄のメイン防具の一つである強固なスカートアーマーがアインによって切り離さ
れた今、箒はそれを使って防ごうにも防げず、頼りになるのは両肩の物理シールドだけ
であるが、それすらもシャルロットが放つ銃弾の雨の前では、その防御範囲は些か狭す
ぎた。

シャルロットの『高速切替』ラビット・スイッチによる高速の武装切り替えにより不用意に近づくことが
出来ず、箒のシールドエネルギーはガリガリと削られていった。

このままでは箒は何の術もなく負けてしまう。

(かくなる上は……!)

箒は考える。

最早己の剣術だけでは目の前の『二人目』の男性操縦者を突破する事は不可能だろう。IS操縦者としての技量も、何より向こうが専用機持ちである以上、しかも此方が得意とする分野は剣術のみ。

勝機は絶望的である。

しかし、それでも箒は諦めなかった。

ようやく核心に迫る事ができたのだ。こんな所で足止めを食うわけにはいかない。

(射撃武装は慣れないが……牽制程度にはなるだろう)

「ハアアアアアアアッ！」

体を横に向け、肩の物理シールドを前に向け、そのままスラスターを吹かして突っ込む。

同時に拡張領域からアサルトライフル《焰備》を呼び出し、物理シールドの狭い防御範囲をカバーするため、腰の位置からそれを連射する。

上部は物理シールドによる防御、下部はアサルトライフルによる牽制。

この状態を維持したまま、箒はもう一方の手に刀を握ってシャルロットへ突撃した。

「切り捨て、御免っ！」

ようやく己の刀の間合までシャルロットに接近した箒は、マガジンが切れたアサルト

ライフルをアリーナの床に投げ捨て、直前に体を横向きから前に変え、刀を両手で持ち、シャルロットへ振るった。

しかし、その渾身の一撃すら無意味だった。

「はい、お疲れ様」

箒の刀を振るう速度。

それよりも速く、武器をショットガンへと切り替えたシャルロットが、至近距離からその弾を炸裂させ、箒のシールドエネルギーをゼロにした。

「そん………な………」

「じゃあ、またね」

まるで眼中にないかのように、己を放ってアインの援護へ向かうシャルロットの背中を見た箒は、アリーナの隅で悔しそうに膝をついた。

(やつぱり、アインが調べた通りみたいだね)

援護射撃により、ラウラのA I Cに拘束されたアインを救ったシャルロットは、そのままアインの隣に並ぶ。

目の前には、ラウラ・ボーデヴィツヒの駆る「シユヴァルツエア・レーゲン」が立つ

ていた。

「貴様……」

突如乱入してきたシャルロットを睨むラウラ。

「ようやくその目で僕を見てくれたね。今までアインしか眼中になかったみたいだし」

「ふん……教官を貶める不躰者と、フランスの第二世代アンティークごときが、まとめて潰してやる！」

そう言うと同時に、ラウラは六本のワイヤー・ブレードを射出し、四本をアインへ、残る二本をシャルロットへと向ける。

「ちっ……っ！」

複雑な軌道を描きながら四方から迫るワイヤー・ブレード全てを的確に撃ち落としてみせたアインの技量にラウラは舌打ちをする。

パートナーは元より期待していなかったとはいえ、あつさりやられる始末。

しかも目の前には代表候補生クラスの手相手が二人。

如何なラウラといえど、同時に軍人でもある彼女には、どちらが有利でどちらが不利かぐらいの判別は付く。

——明らかに、ラウラが不利である。

特にアインに限っては、白兵戦では自分すら上回る。

白兵戦で勝つことはできず、更にはフランスの代表候補生による援護射撃が邪魔に入る。

「だが……」

ラウラは動く。

決めたのだ。

例え試合では負けようとも、この男だけは叩くと、そう心に決めていた。

「私は、教官の教え子だあ！」

それが、彼女の誇りだった。

残り二本のワイヤー・ブレードを射出し、シャルルを牽制すると同時、アインにむけてレールカノンを連射しながら、プラズマ手刀を展開して肉薄する。

己の持ちうる全ての武装を一度に使ってでも、ラウラはアインを葬る気でいた。

A I Cで動きを止めようとしても、それを察知したアインによって躲されていく。

しかし、動きを止められなくても、それで隙を作る事はできる。

やがて、絶えず連射されるレールカノンと、設置されるA I Cを避け続ける内にその隙を晒したアインに、ラウラは踊りかかる。

「そこだあつー！」

咄嗟にシャルルへの牽制に使っていたワイヤー・ブレードを呼び戻し、全ての武装を

アインへとぶつける。

——それが、仇となった。

「がら空きだよっ！」

ワイヤー・ブレードによる猛攻から解放されたシャルルが、呼び出したロケットランチャーを構え、ラウラへと撃ち込む。

激しい噴射音を立て、放たれたロケット弾はラウラへと肉薄していく。

(この男ごと私をやる気か!?)

プラズマ手刀と雪片式型が切り結ぶ最中、ハイパーセンサーで確認したラウラは、咄嗟にその場を離れようとして。

その手を、アインに掴まれた。

(まづっ！)

咄嗟にラウラはA I Cを発動させ、そのロケット弾を受け止める。

間一髪の差でロケット弾による直撃を避けたラウラであったが、彼女は失念していた。

A I Cを発動させれば、それに集中力を割かなければならない。

瞬間、ラウラは見た。

距離を取ったアインの白式が、雪片式型の銃口を此方に、否、A I Cによって停止し

たそのロケット弾に向けている事を。

その雪片式型の刀身が展開され、眩い光を放っていた。

「——ッ!?!」

それを見たラウラは、表情に青筋を立てるが、時は既に遅い。

《零落白夜》——発射。

エネルギー無効化攻撃、零落白夜のエネルギーを纏った弾丸は、ロケット弾を拘束していたAICを無効化し、爆ぜた。

「ぐ、アアアアアアッ!!」

至近距離でのロケット弾の爆発を直に受け、悲鳴を上げるラウラ。

通常よりも比べ物にならないダメージを受けるシユヴァルツエア・レーゲンであったが、まだまだ彼らの攻撃は終わりではない。

「この距離なら、外さない」

ロケット弾の爆風による煙幕が晴れたと同時に、シャルルの駆るリヴァイヴカスタムIIがラウラの眼前まで迫っていた。

アインからこっそり教わっていた瞬間^{イタニツション・ブースト}時加速を使つて一気にラウラの眼前まで接近したシャルロットは、肘の物理シールドに内蔵していたソレを展開する。

「『盾殺し』……!」

焦りの表情を見せるラウラ。

先ほどの爆風のダメージでうまく動けず、しかもこの至近距離でそれを見せつけられれば、もはやどうしようもなかった。

ズガンツ!!

「ぐううっ、あぁッ!」

成す術もなく、ラウラはパイルバンカーの一撃を腹部に受け入れてしまう。

ISのエネルギーシールドが集中し、絶対防御を発動して防ぐものの、その衝撃までは殺し切れず、まるで内臓を抉られるかのような感覚を味わうラウラ。

表情が苦悶に揺らぐ。

しかし、シャルロットはそんな彼女に慈悲を見せる事無く、バンカーのリボルバーを回して次弾炸填し、続けざまに三発、彼女にその一撃を叩きこむ。

誰もがアインとシャルルのチームの勝利を確信したその時、異変は起こった。



(「こんな……こんな所で負けるのか、私は……!」)

苦悶の表情の中で、認められないとラウラは内心で連呼した。

（私は負けられない！ 負けるわけにはいかない……！）

敗北——それは彼女が最も忌み嫌う言葉であり、一度挫折したが故の、その言葉への途轍もない恐怖を彼女は抱えていた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それが彼女の名前であり、識別上の記号。

故に、その名前に意味はなかった。

——あの人に、会うまでは。

遺伝子強化体として生み出され、そこで優秀な成績を納め続け、常に最高の性能を記録し続けた。

しかし、ある事をきっかけに彼女の地位は地に墜ちる事となった。

『ヴォーダン・オージェ』——脳への視覚信号の伝達の爆発的な速度上昇と、超高速戦闘下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン処置。

この処置によって彼女の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のまま制御不能の状態へと陥ってしまった。

この『事故』により彼女は部隊の中でもIS訓練において遅れを取る事となり、同時にそれまで納めていた目覚ましい成績、そしてその性能も鳴りを潜める事となってしまった。

なまじ今まで最高の成績を納めていただけに、その悪意に慣れていなかった彼女の心は一気に崩壊寸前までに追い込まれた。

彼女が悪い訳ではない、彼女をこのようにした大人たちと、そんな彼女に慰めをかけずに嘲笑した部隊員こそ原因があるだろう。

そんな時、彼女の世界はまた一変した。

「……最近の成績が振るわないようだが、なに心配するな。一か月で部隊内最強の地位に戻るだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

なにをばかなと、突如やってきた彼女の言葉を嘲笑った。

しかし、その言葉に偽りはなかった。

彼女の課した訓練を忠実に実行する——ただそれだけで彼女は再び最強の座へと輝くようになった。

そして——あの人、織斑千冬に憧れた。

——ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

やがてその感情を抱くようになってからは、織斑千冬がドイツでの教官を解任され、日本に帰国するまで、ラウラのその憧れの感情は止まなかった。

あの人のようになりたい——ただその感情を胸に、彼女がいなくなった後の虚無の時間を過ごし続け、やがて彼女を連れ戻すチャンスがやってきた。

ドイツの代表候補生として、IS学園に入学しろ。

その命令が渡された時、彼女は心底歓喜した。

——また、あのお方に会える。あのお方を連れ戻せる！

そんな感情を胸にIS学園に入学して、そしてそこで知ったのがある男の存在。

アイン・ゾマイル……織斑千冬と何の接点もないにも関わらず、織斑千冬の力を与

えられ、そしてその力を使いこなして見せた不屈き者。

彼女の価値を、存在を貶めるその男を、ラウラは許せなかった。

(敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまで叩きのめすと！)

ならば、こんな所で負けるわけにはいかない。

いまだにあの男が教官の力を使って、教官の価値を貶め続けているのであれば、絶対に負ける事は許されない。

(力が、ほしい)

ドクン……と何かがうごめいた。

『——汝、神を信奉するか？』

(なに、を……)

『汝が信じる神、即ち汝が信奉する力、より強い力を、望むか？』

それはまるで、甘い甘言のようで——

(神だど？ そんなもの——)

『汝の神は、ここにいます』

その時、ラウラの眼前に、ある人物の影が現れる。

忘れもしない、その光を。

その力を、ラウラは忘れられなかった。

(教官——？ 私にとって、教官は神なのか？)

『汝、望むか？ この神を冒瀆する存在を叩き潰す力を、この神に代わり、アレに鉄槌を下す力を欲するか？』

(ああ)

言われるべくもなかった。

(寄越せ、ソレを。あの男が使っているソレを、私にも……！)

彼女はそれを求める。

(その力を使って神を冒瀆するなら、その力を使ってその存在を叩き潰して、神に認めてもらう!!)

《Valkyrie Trace System》……boot.



「アアアアアアアアアアッ!!!」

突如、ラウラは身を裂かんばかりの絶叫を発する。

それと同時に、シユヴァルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、シャルロットの体が吹き飛ばされた。

「ぐっ。一体何が……。——!?!」

「来たか……。!」

戸惑うシャルロットとは対照的にまるで、ようやくかと言わんばかりに笑みを浮かべるアイン。

そんなアインを見たシャルロットは、アインは何か知っていると、彼に問いかけた。

「アイン、アレは一体?!」

「見てなあ! 間もなく我らが神の誕生だあ!」

ハイテンションでそう語る彼。

シャルロットは視線をラウラの方へ戻し、それを見る。

「なっ!?!」

そこには変形していくラウラのISがあった。

装甲は泥のように溶け、黒いぐにやぐにやになったそれはラウラの全身を包み込んでいく。

あたかも、神の生贄にされるかのように……

そして、
ブリュンヒルデ
神は、降誕した。

「ツクク、さあ、いよいよだ! 戦争だ、戦争!」

狂ったような喜びの声を上げるアイン。

周りが何か騒いでいるが、今更遅い。

賽は既に投げられた。

後は、号令するだけだ。

『みんな、よく聞いてくれ——』

洗脳した駒たちに、秘匿通信を使って、彼は笑いながら、しかし口調だけは猫を被つてその聖戦の火種を切った。



「山田先生、レベルDの警戒体制を」

変質していくラウラを映像ごしにみた千冬は真耶にそう指示をする。

かつての教え子に起こった異変に今すぐにもここから飛び出したい衝動を抑えつつ、それでも彼女は冷静だった。

「はい……ッ!? そんな、セキュリティが作動しない!？」

「なにつ!？」

しかし、その冷静さもあつという間に崩れ去る。

そして、次のトラブルが発生する。

「——つ!? 織斑先生、緊急事態です! アリーナのピットに待機させていた訓練機の複数が無許可で使用されています!! 操縦者は……嘘、全員代表候補生……!？」

「なっ、どういう事だ!？」

『きやああああああああああああああああアアアアアアッ!?』

身を乗り出して真耶に聞く千冬であったが、またトラブルは続けざまに起こる。観客席から聞こえた悲鳴を耳にした二人は、急いで映像を観客席へと変えた。

そこに映っていたのは――

「な……………なんだ、これは……………」

「え……………あ……………これは……………」

その光景に、二人は呆然とした。

何故なら

来賓の観客席には、来賓たちが学園の生徒達に銃を突き付けられたまま、拘束され、あるものはどこかへ連れていかれていく。

生徒達の観客席には複数の爆弾跡が見受けられており、その周囲には大勢の生徒の死体がある。

そして、その映像に唾然としている暇はなく、学園中から、爆音が響いてきた。



「きやああああああああっ!?!」

「助けて、助けてお母さんっ!!」

「何、何が起こってるの!？」

アリーナの観客席以外の場所、学園中でその地獄はあった。

各学年、各クラスの代表候補生の生徒が訓練機を駆り、虐殺していく、

血が飛び交う、硝煙が舞う、悲鳴が飛び交う、爆音がそこかしこに響く。

「あ、あなた……代表候補生の、サラ・ウエルキンさん？ どうして……ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!?!?!?!」

手足を潰され、そのまま拉致される用務員。

他の生徒達も学園の半数の訓練機に蹂躪され、殺され、ある者は神の元へと拉致されていく。

ISに乗っている代表候補生以外の生徒の中にも、異質な行動を取る者がいた。

何か大きな包みを抱え、やがて人込みの多い所にたどり着いては——その包みが炸裂し、大勢の死者を出す。

それらの地獄のようなやりとりが、あるうことか学園内の生徒達によって行われている。

彼女達には何も聞こえない。

今まで共に過ごしてきた学友たちの悲鳴も、何もかもが聞こえていなかった。

『みんな、よく聞いてくれ』

聞こえる声があるとすれば、それは一つだけ。

『ラウラ・ボーデヴィツヒは自らの身を贄にし、我らが神、ブリュンヒルデをこの地に呼び出した』

よく聞き慣れた声。

その声はまさに、彼女達の全てであり、彼女達が生きる意味。

『彼女は神の為に生き、神の為にその身を捨てた。これで彼女の魂は、神の御許へと誘いざなわれるだろう』

故に、彼が信じる神は、彼女達が信じるも同然。

『しかし神はまだ本当の姿を取り戻してはいない。神を完全にこの地に降ろすには、更なる贄が必要だ。故に——』

その宣告は、彼女達にとっては絶対のもの。

『この戦いは、神の御前に捧げられる聖戦である！』

『伝統を軽んじ、神を冒瀆せし不信仰者共に！』

伝統とは、それ即ち『IS』

ISを何と心得ず、ただファッションとして乗りこなすその行為はまさしく、
ブリュンヒルデ
 神への冒瀆。

『我らが神と共に鉄槌を下すのだ！』

最後の最後に、その声の主は、『己の姉』という最大の火種すらも切っていた。

聖戦―断頭台へ連れられる少女たち―

走る、ただただ走る。

この悲鳴と血が飛び交う地獄の中を、二機の I S がその中を駆け回っていた。

無断での I S 展開は禁止というのがこの学園の規則であったが、生憎とこんな状況ではそんなものへつたくれもない。

「ちっ！」

アメリカ製の第三世代 I S、ヘル・ハウンド Ver 2.5 に搭乗する代表候補生、ダリル・ケイシーは、忌々しげに舌打ちをしながら、怯えて動けない己の後輩、フォルテ・サファイアを抱っこしてこの地獄の中を駆けていた。

辛うじて I S の展開までは出来ている後輩であったが、この地獄のような光景に怯えてただ愕然とするだけであった。

専用機、コールド・ブラッドを辛うじて展開できているのも、せめてもの防衛本能が働いたおかげだろうか。

『この戦いは、神の御前に捧げられる、聖戦である』

「あの野郎……！」

突如、聞こえて来た個人間秘匿通信。
プライベート・チャネル

その聞き覚えのある声を聞いたダリルは、忌々しげな表情を見せた。

この秘匿通信が彼女にも聞こえている理由は単純明快——彼女をスパイとしてこの学園に送り込んでいる組織が、この声の主と契約を結んでいるからに他ならなかつたからだ。

この契約の前払いとして彼女にその声の主に新しい専用機を譲渡するように言い渡したのもこの組織であり、その組織の言い付け通りに彼女は彼に新しい専用機を渡した。

この騒動には首謀者である声の主以外にも、そのバックには彼女の組織が付いている。

この学園中の場所から拾える自爆テロの爆音こそがその証だ。

『伝統を軽んじ、神を冒瀆せし不信仰者共に、我々が神と共に鉄槌を下すのだ！』
(何が神だよ！　どんな祭りを開くかと思えば、こんな悪趣味な……!!)

反吐が出る、こんな男を自分の組織は引き入れようとしているのかと思うと吐き気がした。ただ騒動を起こすだけならばともかくとして、こんな無垢の少女たちを洗脳して人殺しをさせるといふのは、さしもの彼女であつても身を毛立つ所業である。

『不信仰者に屈服する事があつてはならない』

幸い、彼女達は彼に自分、ダリル・ケイシーもまた『ブリュンヒルデを信仰する者』と
刷り込まれているのか、ダリルに攻撃を加えてくる様子はない。

だが。

「……………ぱ、い、ダリル……………せん……………ッ」

この自分の後輩、フォルテ・サファイアに関しては別である。

ダリルと親しい仲にある後輩である彼女であるが、彼女自身はダリルの組織とはまっ
たくの無関係、ただの代表候補生なのだ。

ダリルのように人殺しを知っている訳ではない、知ってはいても、彼女自身はそれを
したことがないし、このような戦場に巻き込まれた事もない。

故に、彼女はこのような光景を見た瞬間、愕然としてまともに動けない状態となつて
しまった。

『この戦いは、神の御前に捧げられる、聖戦である』

「……………ッ」

同じ言葉が復唱される。

秘匿通信を介して流れるソレは目の前の後輩には聞こえず、自分と洗脳された彼女達
だけが聞こえているものである。

『伝統を軽んじ、神を冒瀆せし不信仰者共に、我らが神と共に鉄槌を下すのだ!』

「いやあああああッ!!」

「やめて、離して! 何処へ連れて……ヒイツ!」

悲鳴が聞こえる。

今まで共に学んできた学友たちが、ある者は洗脳されて虐殺行為をし、ある者は自爆し、ある者は断末魔を上げ、ある者は怯えながら助けを求める。

『不信仰者共の存在を許してはならない』

『我々は戦いでのみ示すことによつて、神に認められる事だろう』

「黙れつつてんだよっ!!」

? 八百をアジる男の言葉に思わず大声で返してしまう。

「ヒイツ!」

しかし、事情も分からないフォルテはそんな先輩である彼女の怒声に怯えてしまった。

そんな彼女の怯え顔にハッ、となるダリル。

「……すまねえ、フォルテ」

本当なら、彼女を置いて安全な所へ避難するのが一番だった。

何故なら洗脳された生徒達がダリルを狙ってくることはない。

ダリルが己のスポンサーの一員であることを知っているアインは、彼女達の攻撃対象にダリルを加える事などまずない。

だから、そのまま自分だけどこかへ避難すればそれでよかった。

筈だった。

「……………あつ……………アア……………」

しかし、ここ三年間の学園生活でダリルも感化されてしまったのだろうか。去年の四月ごろに入学してきたギリシャ代表候補生、フォルテ・サファイア。

あまりにも純粹に自分を慕ってくれる彼女の心に、ダリルはいつの間にか感化されてしまっていた。

おかげで、こんな有象無象な生徒達ならまだしも、このフォルテ・サファイアという後輩を見捨てる事はついぞできなかった。

「アイン・ゾマイール……………」

それでも、それを抜きにしても、あの男に対するこの嫌悪だけは絶対だった。

「あの悪趣味野郎が……………」

そんな悪態を吐きながら、ダリルはフォルテを安全な場所へ運ばんと、スラスターを吹かした。



「な、何だ……何が起こって……!?!」

次々と聞こえる爆音、そして何より異様な姿へと変貌を遂げたシユヴァルツエア・レーゲンに箒は啞然となる。

気が付けばトーナメントの対戦相手であった二人の男性操縦者の姿は見えず、取り残されたのは箒と黒いISのみ。

「あれは……暮桜。千冬さんのISか!?! どうして……ッ!?!」

その時、アリーナの下の出口（ISのピットではなく、人が使う出入口）から、ぞろぞろ女子生徒達が入って来た。

しかし、その様子はとてもではないが尋常なものではない。

「や、やめて! 離して!!」

「ねえ、一体どうしたの!?! 早く逃げようよオッ!!」

「い、イヤあッ!!」

一人の生徒とそれを無理やり連れて来る二人の生徒、それらの組が一斉に列を為しながら、黒い暮桜へと迫ってくる。

それはまるで、罪を犯した者達をギロチン台へと連れてくるような、死神の列だった。

やがて、一つの組が黒い暮桜の眼前へと到着する。

すると、二人の生徒は無理矢理連れて来た一人の生徒をその暮桜の前へ突き出した。

そして、その黒い暮桜はゆっくりと雪片を振りかぶり——

(まさか……)

その光景を見た箒に、ある光景がフラッシュバックとなつて脳裏に蘇る。

「や、やめ……ろ」

蘇つてきた光景は全国大会でただひたすらに『誰かを叩きのめしたい』という衝動に駆られ、ひたすら剣を振るっていた己自身。

そして優勝して、ようやく己の力の在り方の醜悪さを自覚させられたあの日の思い出。

「やめるんだッ!!」

そんな自分と、あの黒い暮桜、一体どんな違いがあるというのだ？

太刀筋は己を映す鏡。

あの暮桜はまさしく、箒自身だったのだから。

力を使うのではなく、力に使われて、己を見失ったあの少女は、まさしく箒にとつては昔の己自身だったのだから。

故に、止めなくてはならない。

そのあまりにも惨く、グロテスクな光景に、箒はその足をピタツと止めてしまった。さつきまで勢いよく走っていたせいで体勢を崩し、転んだ体を手で支えてその光景を見上げる。

そこには、無惨な死体だけが転がっていた。

「あ……ああ、い、あ……」

その光景が一体何なのか分からなかった。

止められなかった後悔よりも、それ以上に非日常的な光景に、箒は何が何だか分からずに、愕然としてしまった。

そして時間は、そんな彼女を待つてはくれなかった。

「伝統を侮辱する不信仰者共に神の雷を!!」
いかずち

「ああ、神様、ブリュンヒルデ様、贄を持ってきました。どうかこの冒読者に裁きを！」

「そしてその眼差しをどうか私達へ!!」

妄信盲目。

正にこの一言に尽きる、狂った少女たち。

そんな少女たちに拘束された女子生徒達は、一番前の女子生徒がその鮮血を散らした光景を見て、あまりの恐怖のあまり助けを求める言葉すら失ってしまった。

それはまさしく、彼女達にとってブリュンヒルデという存在が、崇拜すべき存在から、

畏怖すべき死神に置き換わった瞬間でもあった。

そして、次は後ろにいた女子生徒の出番であった。

黒い暮桜がその剣を振りかぶる。

かのブリュンヒルデが見せた、居合のような構えからの一閃、その一閃でまた一つの命が途絶える。

無惨に、無意味に、無価値に、その生を断絶させられる。

その次も。

その更に次も。

次も次も次も次も次も次も次も次も次も次も次も次も次々と、その更に次も。

ブリュンヒルデという処刑台に運ばれた女子生徒達は、他ならぬ学友たちに拘束されたままその生を一人ずつ終えていく。

中には自身すらも贅と考える者がいるのか、拘束した女子生徒ごと己を切らせる狂信者までもが混ざっていた。

そして、その捕まっている者達の中には、このIS学園に招かれていた来賓すらも混ざっていた。

その地獄のような光景を、箒は見せつけられていた。

狂気の沙汰、そんな一言で済ませていい物ではない。

ただ声のない悲鳴が飛び交うその地獄を、箒は延々と、それが何なのかを理解しないまま見せつけられた。

やがて——

「はい、箒ちゃんはこっち〜♪」

そんな気の抜けた声と共に、箒の姿はそこで消えた。



黒い温もりの中に、ラウラ・ボーデヴィツヒは包まれていた。

まるで母親のお腹の中で眠る赤子のごとく、その母性の香りに包まれた泥の中で、ラウラはただ心地よく狂っていた。

否、赤子ならばいずれは自力でその腹の中から抜けようとするが、その選択肢すら、そんな自己すらも今の彼女にはなかった。

ただ、夢を見ていた。

それは憧れのあの人になった己自身だった。

強く、凜々しく、気高く、何者にも負けない、何者をも恐れない、何者をも寄せ付けない、そんな己の夢をラウラは見ていた。

ある時は強者を、ある時は弱者を、もしくは何の力も持たない無力な者をその剣で裁き、恐れ、崇められる自分。

それは果たしてあの人なのか、それとも己自身なのかはもう定かではない。とにかく、ラウラの夢はどんな形であれ叶っていた。

あの人になる、ブリュンヒルデになる。

己がずっと信じ続けていた神に、ラウラはなることができたのだ。

“伝統を侮辱する不信仰者共に神の雷を!!”

“ああ、神様、ブリュンヒルデ様、贄を持つてきました。どうかこの冒瀆者に裁きを

!”

“そしてその眼差しをどうか私達へ!!”

今まで己を下してきた奴隷達が、己をあの人貶める不躡者を押さえつけながら連れて来る。

その光景は、とても心地よい。

(ク、ククク——)

力無き無能共が、ただひたすらに命を乞う。

信奉者たちはかつての己があの人に抱いていた感情を体現するかのように頭を下げ、不躡者は己に下されるであろう罰を怯えながら待ち続ける。

(ク、ハハ、アハハハハハハハハハハハッ!!!)

ああ、心地よい、何て心地よい。

これだ、これが私が入れたかったもの!!

神を侮辱せし者に、神の力を持って、その雷を持って断罪を下す。

ずっと己が求め続けてきた事ではないか!!

さあ、下さなければ、断罪を、雷を、鉄槌を。

あの人を自分貶める存在を、伝統を軽んじし冒瀆者を、この剣雷片を持って制裁を下さなければ!!

そうすれば、そうし続けければ「私」はずっとあの人と一緒に、あの人で在り続ける事ができる!

(ああ、ブリュンヒルデ。私こそがブリュンヒルデ——)

そこまで考えて、一瞬だけ、ラウラの思考に空白が過った。

(私、ワタシ……「ワタシ」とは……ナンダ?)

しかし、そんな懐疑的な思考も一瞬で彼女の脳裏から消え去る。

(まあ、ドウデモイイコトダ)

そんな事はほんの些細。

自分があの人となり、あの方は自分となつて、その力で無力という罪を断罪する。

それが、「ワタシ」の願いだっただけから。

私があの人であるとか、あの人が私であるとか、そんな事はどうでもいい。

———どんな形であれ、「ワタシ」はあの人と一緒にいければ、それで———

聖戦—次々と切られる火種—

アリーナのピットに残された残り半数の訓練機。

そこには大慌てで訓練機のコックピットに搭乗する教員たちの姿があった。

少なくとも、全員並の代表候補生以上の実力はあり、そこいらの操縦者では手も足も出ない腕の持ち主である。

「教員部隊、急いで出撃しろ!!」

一人の教員の指示の下に大勢の教員たちがコックピットに付く。

「くそつ、リヴァイヴは全部持つていかれてる!! 残った打鉄で何とかするかしかない!!」

「良い!! むしろ都合だ!! 打鉄の防御力を生かして生徒達を護るんだ!!」

「だがそれではリヴァイヴに乗った候補生たちを止められない!」

「生徒達を護りながらでは無理だ!」

「無理でもやるしかないだろう!! 我々は教員だ! 教え子を護らずしてどうする!」

現在学園にある訓練機は全部で三十機ほど。

そしてラファール・リヴァイヴ全機含むその半数が代表候補生たちによって奪われて

おり、生徒達を虐殺している。

それにとどまらずその他諸々大勢の無名の生徒が火器などで武装し、虐殺に参加している始末だった。

「何て事よ……ウチのクラスの代表候補生が!？」

「こつちも同じよ! 何で、どうしてあの子があんなことを!？」

そして、教員たちも出撃直前であるにも関わらず冷静にはなれなかった。

当たり前である。

彼女達でさえこんな事態は初めてなのだ。

自分の生徒達がこのようなテロ行為を起こす事、そして何よりこの学園が戦場になる事自体が、彼女達にとっては未知の出来事なのだ。

「何かの間違いだ!」

「こんな悪夢よ……!」

そう言いながら、訓練機に搭乗した教員部隊は出撃する。

二機は『処刑』が行われているアリーナへ、残る全機はアリーナ外の学園の敷地で暴れまわる生徒達を止め、出撃した。

出撃した教員たちがその地獄を目にした瞬間、途端に吹かしていたスラスタターが止まる。

それは彼女らにとつて、あまりにも非日常的な光景だった。

「な、なによ……これ」

「あ、ああ……こんなのつて……!!」

そこにはあつたのは、ただひたすら惨い死体が転がる血獄の地。

学園の生徒達も、学園に招かれていた来賓達も、揃つてここで虐殺され、無惨な死骸が散らばっていた。

虐殺は未だ続いているにも関わらず、その光景だけで彼女らの心はへし折れそうになった。

「何をぐずぐずしている！ さっさと行くぞ」

そんな中で先頭にいた教員が彼女達に発破をかける。

その教員も目に見えて動揺を隠せない顔であったが、それでも後続の教員たちよりは己の役目を忘れてはいなかった。

その教員の掛け声に続き、呆然としていた教員たちもハッ、となつて訓練機のスラスタ―を吹かして生徒の救援活動へ赴いた。

「キヤアアツ、ガツ、ハあッ!」

「ギイ、あつ……」

「だれか、たすけ……!!」

銃弾の嵐の前に成す術もなく倒れていく生徒達、

爆発に巻き込まれ、瓦礫の下敷きとなり、必死に助けを求める来賓たち。

その他有象無象の悲鳴や喚き声が教員たちにメンタルショックとして襲い掛かってくる。

彼女達としてその地獄は未知の光景、今まで外部から幾度となく生徒達を護った事はあれど、こんな戦場で生徒達を護る経験は彼女達にもない。

故に、そこでの対応は普段のように上手くはいかない。

『い、いや、助け!』

『だ、誰かあ!』

リヴァイヴの銃口を向けられ、怯える生徒達。

その間に、訓練機を駆った一人の教員が割って入る。

「その生徒! 今すぐ訓練機から降りなさい! 今なら、今ならまだ間に合う!」

「……」

しかし、そんな教員に対して、リヴァイヴに乗った候補生は物怖じした様子を見せず、尚も銃口を下ろさず、教員とその後ろにいる生徒達をハイライトのない目で見つめる。

「何をしている!?! さっさと——」

「……下さなければ」

「何?」

「神よ、この不信仰者共に鉄槌を下す許可を!! この聖戦に参加し、どうか私達を御認めにい!!」

「何を言ってる……ッ!?!」

その時、教員はハイパーセンサーで目撃し、それに思わず絶句してしまった。

後方にいる、怯える生徒達。

その中に——大きな小包を抱えている生徒が一人いる事に、教員は気付いてしまった。

それが何なのかを、教員が理解できない筈もなかった。

「やめッ!?!」

思わず、後方に機体を向けて、その生徒に呼びかけるが、時は既に遅かった。

瞬間、その小包を抱えた女子生徒を中心に、爆発が起こった。

無数の破片を肉片と共にまき散らし、生徒達は悲鳴を上げる暇もなくその爆発に巻き込まれた。

煙が晴れていく。

晴れていくと同時に、見えてたのは世にも凄惨な光景だった。

「……………う、そだ……………?」

その光景を、惨景を、地獄を、受け入れられる訳がなかった。

「うそだあああああああああああッ!!」

その現実を、受け入れる事ができなかった教員は、目の前で未だに銃口を向ける候補生に踊りかかる。

一番冷静であるべき大人が、いまこの場で一番に冷静さを失った。

故に、目の前にいるリヴァイヴの生徒もまた、己が守るべき生徒である事も失念してしまった、

「返せえッ、あの子たちをおッ!!」

アサルトライフル『焰備』と近接ブレード『葵』を両手にそれぞれ拡張領域から呼び出し、慟哭の涙を流しながら教員はそのリヴァイヴに乗る代表候補生に踊りかかる。

リヴァイヴを駆る代表候補生もまたアサルトライフルを構えて迎撃するが、教員はそれを軽々と避けていく。

如何に代表候補生といえど、教員から見ればまだヒョッコも同然。

この勝負の結果は、誰がみても明らかであった。

「返せッ、あの子たちの未来をおッ! あの子たちの夢をおッ……!」

瞬時加速で一氣にリヴァイヴの元へ接近した教員は、感情のままに近接ブレードを振るう。

その太刀筋に対応できない代表候補生は次々とその装甲とシールドエネルギーを削られていく。

それでも、その代表候補生の顔が苦悶に満ちる事はなかった。

彼女の耳には、己のI Sが伝える警告音も、その教員の慟哭すらも聞こえていなかった。

『この戦いは、神の御前に捧げられる、聖戦である』

聞こえるとすれば、秘匿通信を通じて復唱される、己の全てともいえる存在が語り掛ける声のみ。

「神の御前に、捧げられる、聖戦……」

「ハアアアアアアアアアアアアッ!!!」

装甲がまた切られる。

反撃する暇もなく、反撃しようにもその動きを読まれ、手も足も出ない。

それでも、その声は聞こえていた。

『伝統を軽んじ、神を冒瀆せし、不信仰者共に——』

ギロリ。

「……ッ」

おぞましい視線が、教員を貫く。

それは狂信、妄信の目。

己以外、いや、己の生命すらも映さず、ただひたすらに存在しないナニカを見つめる目。

そのおぞましい目は、教員の手を止めさせるには十分な代物だった。

『神の代行者である我々が鉄槌を下すのだ！』

教員が手を止めたその隙。

代表候補生はその教員を乗っているISごと掴む。

そして——そのリヴァイヴごと、爆ぜた。

「が、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

自爆。

コアを暴走させ、容量以上のエネルギー量供給をコアから受けたリヴァイヴは、オーバーフローさせたエネルギーを外部に暴発させ、その爆発に教員の打鉄を巻き込んだ。

「あ……あ、そ、ん、な……」

ポロボロとなった打鉄の残骸から、虫の息となった教員が這い出てきた。

体中に火傷を負い、大量の血を流しながら、その教員は這い出てきた。

突然の自爆攻撃に絶対防御が間に合わず、本来ならば大幅に軽減されるはずだったダメージを、ISごとはいえもろに受けてしまった。

こうして辛うじて生きているのは、ISの搭乗者保護機能の恩恵故であろう。

「ま、だ、だ……!」

それでも、教員はその意志を貫き通す。

自分にはまだ役目がある。

せめて、生き残っている生徒達だけでも避難させなければならぬ。

その執念だけで、どうにか体を這いずろうとする。

しかし。

「グエツ!」

その執念による進行すらも阻む影が一つ。

「……あ、ア、の、……いは、神の、ごぜん、に……」

先ほど、自爆した生徒が、教員と同じくリヴァイヴの残骸から這い出て、その教員の首根っこを掴んだ。

教員の執念すらも押さええつける、神への妄信が彼女を突き動かしていた。

「神を、侮辱する輩に、鉄槌をお!!」

隠し持っていた、リヴァイヴの装甲の破片を、教員の首に突き刺す。

グサリと刺さった所から、もう多くはない血が飛び出した。

その血を断末魔に教員はその命を絶った。

「あ……あ……これ、でえ……」

同時に満身創痍であった代表候補生も倒れる。

『我々は戦いで死すことによつて、神の御許へ導かれるだろう』

「神の、御許へ——」

それきり、その代表候補生も動かなくなつた。

この光景もまた、この聖戦のほんの一部でしかなかつた。



モニターに、学園中の様子が映し出される。

しかし、どの映像もさして変わりなかつた。

どの場所でも無惨な虐殺、戦争が起き、無惨な死体が積み上げられていく。

そんな光景ばかりであつた。

そして特に、先ほどまで学年別トーナメントの一回戦が行われていたそのアリーナでの惨状は、千冬を精神をかつてない程までに抉るものであつた。

「な……あつ、あ、んだ、これ、はつ……!!
!!
!!
!!」

「あ、あ、……、い、やあつ……」

真耶もまたその映像げんじつを受け入れる事が出来ずに、ただ目を逸らして硬直するばかりであった。

映っていたのは、己の姿を模したISが、次々とこの学園の生徒達を切っていく姿であった。

信奉者たちがぞろぞろと、女子生徒達を、あたかも罪人を扱うかのように拘束し、それをシユヴァルツェア・レーゲンだった黒い暮桜の前に突き出し、それを切らせる。

まるで中世で行われていた罪人の処刑場を再現するかのごとく、アリーナでその惨劇は行われていた。

「教員は……残りの教員部隊はいないのか!? あそこに何機か派遣の要請を!!」

「駄目です!! 既にアリーナ外での戦闘で手一杯……いえ、二機の訓練機がVTシステムらしき敵と交戦を開始しました!!」

「たったの二機だと!? それではアレには……っ!?」

己自身を模した存在だからこそ、千冬には分かる。

アレは並大抵の操縦者には敵わないと、それ程の完成度をアレは誇っているのだと。それを見抜いていた千冬は狼狽えるが、モニターに新たなISが映り、千冬は呆然となった。

「……鈴?」



「その生徒達!! 今すぐ学友たちと来賓達を解放しろ!!」

「今ならまだ間に合うわ!! 何を血迷ったのか分からないけれど、考え直してっ!!」

アリーナの中心に積み重なっている女子生徒達の死骸に狼狽ながらも、生き残っている女子生徒達を助ける為に、アリーナに入り込んだ二人のIS乗りの教員が彼女達に呼びかける。

しかし、その叫びすら、彼女達には意味を成さない。

『来たわ』

『うん、来たね』

『分も弁えないで、伝統ISを穢扱す不信仰者共』

『まさかブリュンヒルデ様の前に現れるなんて……!』

『神を貶めし不信仰者共め!!』

まるで憎き敵を見るかのような目つきで教員たちを睨む、女子生徒達。

そして、そんな教員たちの出現に多少の安堵を見せる女子生徒達と来賓達。

そんな中、洗脳された彼女達は懐から火器を取り出し、教員に向けて発砲しだした。

『不信仰者共に神の鉄槌を!!』

『ブリュンヒルデ様、どうかあの者達に罰を!!』

『そして私達もその聖戦に参加する許可を!!』

そんな彼女達の声と共に、黒い暮桜が動き出した。

先ほどまで、突き出された生徒達や来賓達を切っていく、そんな作業だけを続けていた暮桜が、そのスラスターを吹かし、ついに動き始めた。

狙いは教員が駆る二機の打鉄。

自身に近い力を操る者達への鉄槌を、その剣に乗せて下さんと肉薄した。

「来るわよー!」

「ええー!」

曲がりなりにもブリュンヒルデのコピー。

そんなI Sに近接戦は不利だと悟った二人の教員は、拡張領域からアサルトライフルを取り出し、距離を取りながら応戦した。

後退しながらの円形制御飛翔を二機で左右対称に描きながら、黒い暮桜を翻弄する。

しかし、その行為はまったくの無意味。

このシュヴァルツェア・レーゲンに組み込まれたV Tシステムの精度は、とある人物と組織の手を施されてその精度を大幅にランクアップさせている。

故に、その戦法は劣化もののブリュンヒルデだけではなかった。

「雑魚ガ、消エロ」

吐き捨てるように、そんなおぞましい声を発した後、黒い暮桜はもう一方の手にもう一本の雪片を生成し、二本同時に投げつけた。

そして続けざまにもう二本の雪片を生み出し、先ほどの二本とは違い、直線的ではなくまるでブーメランのような円形軌道を辿り、教員たちを翻弄する。

「嘘ッ」

「武装はあんな瞬時に、ガッ!」

直線で単調な軌道を描きながら飛ぶ二本の雪片を落とすとした教員であったが、側面から飛んでくる雪片に反応しきれず、そのまま打ち落される。

「くッ!」

「こんな……ッ!」

それでも流石教員といったところか、すぐさま受け身を取り、体勢を立て直す、その黒い暮桜にとっては遅すぎた。

一方の教員の打鉄の前には既に、その黒い暮桜がその剣を構えていた。

「消エロ」

居合のような構えからの一閃。

己の死を覚悟した教員であつたが、襲い掛かつてきたのは、斬撃ではなく、デカイ何かがぶつかる衝撃だつた。

「ぐっ、何が……あ、貴女は!？」

「くッ、姉さんの、模造品のくせに……!」

間一髪、教員はその専用機持ちに助けられたようである。

あの振るわれた雪片をその大型ブレードで受け止めた拍子に、教員ごと後方へ吹き飛ばされたようだつた。

「有難う、助かつたわ。立てる?」

「はい、何とかッ!!」

自分に礼を言いながら手を伸ばす教員。

中国の代表候補生、鳳 鈴音はその手を取り、三機はその黒い暮桜と再び向かい合つた。



激しい爆音が学園中から聞こえる中、スポンサーとの合流地点を目指す二人、アイン・ゾマイルとシャルロット・デユノアはIS学園の廊下を走っていた。

まだ比較的被害が及んでいない場所であり、そして人が集まらないその場所は、こっそり行動するにはうってつけのものだった。

「アイン！ あれは一体何なの、説明して!!」

息を上げながら、シャルロットはアインに問う。

「VTシステム、こういうええ分かるだろう？」

「っ！ それって——」

その言葉を聞いたシャルロットは昔、デユノア社でISについて学んでいた時の事を思い出す。

VTシステム————正式名称『^{ヴァ}alk^ルry^キrie^リ ^トTrace^ス ^シSystem^ム』。過去のモンド・グロツソの部門^{ヴァ}受賞者^キの動きをトレースするシステム。しかし、現在のIS条約ではどの国家・企業・組織においても研究・開発・使用すべてが禁止されている禁忌のシステム。

禁止されたのは、過去の部門^{ヴァ}受賞者^キ達を尊重する者達の声と、何より搭乗者の意志を蝕むなどのデメリットの存在があつたからだ。

それが、あのラウラ・ボーデヴィツヒのIS『シユヴァルツエア・レーゲン』に積まれている。

という事は、とシャルロットはアインを睨む。

「アイン、君はまさか!？」

「いいや、生憎だがVTシステムをあの嬢ちゃんのISに組み込んだのは俺じゃない。勿論、スポンサー様の仕業でもない」

「え?」

VTシステムを組み込んだ犯人をアインだと思ったシャルロットであったが、それは目の前の本人が否定した。

そして、彼の言うスポンサーの仕業でもないという。

「俺も驚いた事だがな、あのVTシステムは俺やスポンサー様が手を加える前から積まれているのさ」

「なッ!？」

「ハハハッ、ドイツさんも中々粋な事するよなあ。一から仕込むつもりが既に仕込まれてたとあっちゃあ流石に頭も上がらねえ」

愉快そうに語るアインの言葉に、シャルロットは絶句する。

IS学園において代表候補生とは、まさしく国の顔であり、そして国の一旦を背負う生徒の称号である。

その生徒に、そんな禁忌のシステム、あるうことか母国がそれを積むという信じられない事実。

(どこまで……)

シャルロットは思う。

(この男といい、この世界は何処まで)

どこまで歪んでいるんだ、とシャルロットの中の絶望は余計に増す。

そんな事をされるくらいなら、自分がされた所業などまだかわいいものではないかと、シャルロットは心の中で悪態を付いた。

「とはいえ、あんなお粗末品じゃとてもじゃないが神は名乗れねえだろうからな。スポンサー様に頼んで、俺の白式のデータ、および俺の戦闘データも組み込んでもらったついでに発動条件も少し変えてな」

洗脳した整備課の雌を使ってな、という言葉を省き、アインはシャルロットにそう説明する。

「おかげで少しはもつだろう。この混乱に乗じてスポンサーと合流——」

「そんな事、させると思ってた？」

「させてくれるとは思ってねえよ、水色のネーチャン？」

廊下から外に出たその瞬間、上から聞こえた声に、アインは動揺もせずそう返す。上を見上げたアインに釣られて、シャルロットもまた同じ方向を見上げる。

そこには透明な水色のヴェールをマントのように纏った、一機のISがいた。

「あれは……ロシアの第三世代型IS 『霧纏ミステリアス・レインの淑女』!?」

シャルロットが驚愕の声でそのISの名を口にする。

そのISがここにあるという事は、その搭乗者の名は間違いなくロシアの現代表、更識 楯無である。

「……」

楯無は無言のままアインを睨み付ける。

その視線はまさしく憎悪と憤怒。

右手に握られている四連装ガトリング・ガン内臓ランス『蒼流施そうりゅうせん』は遠目で見ても分かる程に震えており、それが彼女の怒りがどれほどのものを表していた。

そんな彼女の怒りを察したアインは、そつとほくそ笑み、楯無に語り掛ける。

「いいのかい？ 名高い生徒会長様が、こんな人二人ごときを相手にしていて………何の話かしら？」

ピク、と楯無の眉が釣り上がる。

アインの声を聞くだけで、彼女の中にある何か切れそうだった。

「俺達よりも、今現在被害にあっている大事な生徒達を優先したらどうだって話さ。それくらいテメエでも分かるだろう」

「……ッ」

ランスを握る手に、更に力が入る。

「やれやれ、仕事よりも自分の怒り優先たあ、天下の生徒会なんたらのが泣くぜえ？」

「——ッ!!!」

瞬間、とうとう耐えきれなかったのか、楯無は瞬間イグニッション・ブースト加速で一気にアインの元へ肉薄する。

アインもまた白式を展開し、雪片で楯無の槍を防ぐ。

ガキーン、という音と共に火花が散る。

その火花を間に、両者の視線は交差する。

楯無は憤怒の視線を。

アインはただひたすらに猛獣のような笑みを浮かべる。

「……信じられないッ」

「ああ？」

「信じられないわよアナタッ!! 自分が何をしたのか分かつてるの? この学年別トナメントで何をしてくるのかと思えばッ!!!」

まるで、これまでの怒りを吐き出すかのごとく、楯無は吠え続ける。

普段から飄々としていて、冷静な彼女でも、この男を前にして怒りを抑えられなかった。

何より、そんな男の思惑を見破れなかった己自身に対して。

「何も知らない無垢な子達を洗脳してッ、神を信じ込ませてッ、人殺しをさせてッ!!! 貴方には自ら罪を犯す意識もないの!!? 一体どれだけの人達が死んだと思ってるのよ!!! 私、わたしのこの学園をおッ!!!」

許せなかった。

楯無とて多くの汚れ仕事を請け負ってきた。

日本一の暗部の長として、多くの罪を背負ってきた。

しかし、全ては妹に更識の運命は背負わせないためにやってきた。

しかし、この男にはそれすらなかった。

自ら手にかけるのではなく、何の罪もない無垢な女子たちを洗脳して、彼女達に罪を

押し付けるこの男の存在を、楯無は何としても許容できなかった。

「ハッ」

そんな楯無の怒りの声すらも、アインは鼻で笑う。

楯無の槍を受け流し、スラスターの加速を利用して、蹴りを放つ。

「だったら猶更向こうへ行ったらどうだあ!? ええ、ミステリアス何たらさんよオー!」

「黙りなさいッ!!」

ランスを形成していたアクアナノマシンを解き、内蔵した四連装ガトリングをアインに向けて放つ。

スラスターを吹かして空中に飛び上がったアインは、それを身体を仰げ反らすような姿勢で、最低限の動きで躲していく。

ISのPICとハイパー・センサーを最大限に活用した最低限の回避行動。やがて、アインはその体勢を維持しながら、雪片式型の銃口から弾丸を連射する。

ガトリングの連射にはとうてい及ばないにせよ、その正確な偏差射撃は楯無の動きを確かに制限していた。

その隙を見逃さないアインは、連射を止めず、そのままスラスターを吹かして楯無へと迫る。

接近戦へと持ち込んだ両者。

時には剣劇を、時には蹴りすらも交えて激しい攻防を繰り広げる。

「絶対に許さないッ！ 貴方だけはあッ!!」

「こちとらビジネスなんだよ！ それになあ！」

「——ッ!?!」

突如、己のISのハイパーセンサーの反応に気付いた楯無は、即座にその方向を向く。

そこには、一機のISが人質を抱えながら飛んでいた。

「——え?」

そのISの名は『ブルー・ティアーズ』。

その搭乗者であったイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットはショートブレー

ド『インター・セプター』をその人質の首に突き付けていた。

その人質は、楯無がよく見知っていた人物だった。

「お……お姉、ちゃん……」

「か、かんちゃん……ッ、ガッ!?!」

動揺していたその隙に、アインは楯無に蹴りを入れる。

その蹴りを食らった楯無は地面に激突し、激しい土煙を巻き上げた。

「戦場じゃあな、女やガキはみんな『飯の種』になんだよオ!!」

そう叫んで、アインは楯無に向けて弾丸を連射した。

聖戦―止める鍵―

相手の雪片式型のマガジンが切り離される音を拾った楯無は、防御に回したアクアナノマシンを解き、それを攻撃に転じようとするが、それはアインの罠だった。

「もう一発!」

残る一発の弾丸を装填したままマガジンを切り離して楯無の意表を突いたアインは、その刀身を展開させ、そこに展開装甲エネルギーの光が集中する。

「……ッ!」

展開装甲のエネルギーを纏った弾丸が発射される。

反射的にアクアナノマシンで防ごうとする楯無。

このアクアナノマシンはISエネルギーで動かす代物であるため、当然零落白夜のエネルギーを纏ったソレを防ぐことなど不可能だ。

しかし、彼女の予想が正しければ、それは防げる筈だった。

眩い光を放った弾丸が、水のヴェールに集中する。

その弾丸が、その水のヴェールを貫く事はなかった。

(やはり……!)

己の妹が人質に取られている状況でも、楯無は辛うじて冷静さを保ちながら敵の状況を分析する。

敵のＩＳは本来なら燃費が悪いものであるが、ラウラ・ボーデヴィツヒと戦っていた時はあまり激しく動かずに、スラストも最低限しか吹かしていなかった事から、おそらくこの男は最初から戦力を温存するつもりであったようだ。

この男の事だ、この学園から脱出するためのエネルギーは残しておく筈である。だから、下手に零落白夜にエネルギーは割けない。

(かんちゃん……！)

今すぐにも助けに行きたい衝動をぐつと抑える。

勝機がない訳じゃない。

あの男にもそう余裕はない筈だ。

自分のＩＳがああ男の男のＩＳと相性がいいとはとても言えたモノではないが、この男はあくまで自分を甚振るために簪という人質を使ってくる筈だ。

つまり、この男は自分が確実に勝てる範囲での戦闘を楽しむ。

その為に自分の妹を人質として取っている。

という事は、何等かの隙を突けばこの男を出し抜いて簪を取り戻すチャンスもある筈だ。

だから、それまでは何としても粘らなければならない。

「それにしてもあのお嬢ちゃんも可哀想なこつて……」

「なんですつて?」

「俺という存在がなきや、専用機も手に入つて人質に取られる事がなかつたらうによ。そんなもつてこうして疎み続けてきた姉の足を引つ張る羽目になるたあ、存外喜劇なものじゃねえか」

ブチ、と何かが切れる音が聞こえたような気がした。

—— コイツ、イマナンテイツタ?

たった一言。

たったその一言で、楯無に戻りかけていた少女は、一瞬にして『刀奈』という少女の導火線に火を付けた。

「……ぎげないで」

「あア?」

「ふげないで!! 貴方にかんちゃんのもの分かるつていうの!! 心待ちにしていた専用機が貰えなくて、誰にも相談できずにたった一人で頑張つて苦しんでるあの子に、その原因である貴方が何を分かつた気でツ!!」

楯無としての判断能力を失つた刀奈は、四連装ガトリングガンを撃つ。

更にもう一方の手に蛇腹剣『ラストイー・ネイル』を呼び出し、ガトリングガンによる牽制と同時に斬りかかる。

しかし、それすらもフェイク。

本命は周囲に霧状に撒いたアクアナノマシンだ。

ばら撒いた水のナノマシンによる高濃度の霧を熱に変換して大爆発を起こす、それを決め手にしようとした刀奈であったが、戦場を生き抜いてきたアインが、その程度の事に気付かない筈もなかった。

「あ、アアあああああああッ!!?!」

「かんちゃん!?!」

悲鳴が聞こえる。

よく聞き慣れた声の、己の愛しい妹の悲鳴が聞こえた刀奈は、即座にその方向へ振り返る。

そこには、セシリアの「インター・セプター」の刃先を太ももに差し込まれ、苦痛と苦悶の表情を見せる簪の姿があった。

「お……ねえ、ちゃ……!」

「あ……かん、ちゃん……!」

刺された箇所から血が流れ、地面へと滴るように落ちていく。

「おい、人質の事忘れてもらっちゃあ困るぜ？　これからお前さんが近接武器以外、ついでにそのアクア何たらをそれ以外に使用すれば、その度にあの嬢ちゃんの四肢を切り落としていくっていうのはどうだ？」

「この、下衆が！」

まるで茶番劇を楽しむかのような笑みを浮かべるアインに対し、刀奈はただ成す術もなく睨み付ける事しかできない。

人が傷ついていく様、戦争を手段ではなく娯楽として興じるこの男を、刀奈は許す事ができなかつた。

許せないのに、何もできなかつた。

楯無としての存在はおろか、刀奈としての彼女、そのどちらもがこの男のいいように扱われていた。

「へへっ！　さあ、おっぱじめようじゃねえかあ、ミステリアス何たらさんよオ！」
「っ!!」

雪片式型を構えながら、アインは楯無に接近してくる。

ラウラとの戦闘では激しく動いてなく、また零落白夜も最低出力でA.I.C.を解除する時にしか使用していないため、燃費の悪い白式でもエネルギーにまだまだ余裕はあつた。

ガキイン。火花を散らしながら雪片式型と蛇腹剣の刀身がぶつかる。

それも刹那の事、アインは雪片式型の刀身の角度を変えて蛇腹剣を受け流し、楯無はその体勢を崩してしまふ。

同時にスラストアーを吹かしてでの膝蹴りを見舞う。

しかし、楯無は体勢を崩された勢いを利用してほんの少し機体をずらして回避、そのまま突き出された白式の脚部に手を置き、それを軸にアインの後ろに回り込む。

しかしその瞬間、アインは白式のウイングスラストアーの片方だけを噴射し、機体を反転させて再び楯無の隙を作り、楯無の機体を雪片の刀身へ運ぶように切り付ける。

「っ!!」

自分以上に曲芸的な動きをするアインに驚きつつ、避けれないと悟った楯無は、アクアナノマシンによるヴェールを作り、その斬撃を防ぐ。

それと同時に、ヴェール越しに蒼流施をアインに向けて突き攻撃を行う。

彼女自身が作ったヴェールに阻まれるかと思われた槍は、ヴェールと接触した瞬間にそのナノマシンを吸収して極大の槍を作り上げ、強力な奇襲がアインを襲う。

しかし。

「へっ」

その突撃は、“ナニカ”によって遮られた。

「なっ!?!」

そのの正体を見破った楯無は驚愕の表情を見せる。

それは、見間違いもなく楯無のIS「ミステリアス・レイディ」のアクアナノマシンそのものだった。

しかもその使い方も楯無とは異なり、ヴェールを作つて防ぐのではなく、水の流動性を生かして「受け流す」という神業をアインは披露してみせた。

(アクアナノマシンの制御が奪われた!?!　これが英国の代表候補生との戦いで見せた白式の単一仕様能力……まさかあの時既に!?!)

あくまで彼の白式には自分のアクアナノマシンを触れさせないように細心の注意を払いながら戦っていた楯無であったが、すぐにナノマシンが奪われた心当たりを付けた。

——最初に、彼の零落白夜による銃撃を防いだ時、奪われていたのだとしたら?　だとしたら、彼は今まで奪ったアクアナノマシンをずっと自分のアクアナノマシンの中に潜り込ませていたという事になる。

正に神業の域だった。

即ち、白式のもう一つのワンオフ・アビリティー、フォレンジング・アンロック強制使用許諾の発動条件とは白式の装甲や本体に触れる事ではない、白式のISエネルギーに触れる事が発動条件という

事だった。

「チヨイサあつー！」

「っー！」

渾身の一撃を自身のナノマシンによって受け流され、体勢を崩した楯無の横に機体を
雖もみ回転させながら回り込んできたアインが雪片式型で切り付ける。

自身の自慢の武器を奪われた事の動揺もあり、今度はヴェールを作る事すら間に合わ
ない。

咄嗟に回避行動を行う。

しかし、完全には回避しきれず、雪片式型の斬撃がミステリアス・レイデイの装甲の
一部を切り飛ばす。

その衝撃で楯無自身も吹き飛んでしまうが、PICによる操作で即座に体勢を立て直
す。

「くっー！」

「ハハッ、やっぱ戦争は白兵でねえとなあ！」

まるで命のやり取りを娯楽のように楽しんで笑うこの男を見ながら、楯無は冷や汗を
掻いて苦渋の表情を見せた。

（この男……戦い慣れてる！）

この男が戦場で生きてきたのは百も承知であるが、実際に戦ってみて直にそれを楯無は実感していた。

楯無とてこの男に食いつく事こそ出来てはいるが、それはあくまでI Sの搭乗時間キヤリアにおいて彼女の方が上回っているからの話だった。

この男はI Sに乗り始めてからまだ二か月手前くらいしか経っていない、にも関わらず、彼はまるでそれを感じさせない程の動きで此方を苦しめてくる。

ロシアの代表として、時には更識の当主として、数多の戦いを経験してきた楯無であったが、ここまで戦う事に慣れた敵と戦った事はそうはなかった。

歴戦の兵士やI S乗りといえど、結局は人間。戦闘時には油断も疲れもあるだろう。かのモンドグロツソの部門受賞者達ヴァルキリーとてそれは変わらない。

だが、このアイン・ゾマイルという男はあたかも「息をするかのように戦う」。

あの東欧の紛争地帯でも、クラス代表決定戦でも、そして今回でも、彼はその手にしたばかりの兵器を戦場においてどのようによれば最適に使えるかを本能で理解するのだ。それこそ元の使い手以上に上手い、最適な使い方を。

(羨ましいセンスね、欲しいとも思わないけれど……)

ギリ、と歯ぎしりをする他なかった。

状況は最悪だった。

此方が少しでも遠距離攻撃を仕掛ければ、その時点で人質となった妹の手足が切り落とされてしまう、そしてその手足が切り落とされてしまう条件すらもが目の前の男の気まぐれでいつ変わってもおかしくない。

極めつけに、この男自身の強さが一番の問題だった。

これで卑怯な手を使わず堂々と挑んでくるのであればむしろ好感が持てたが、この男はその強さに加えて、戦いにおいて手段を選ばない卑劣さも兼ね備えている。

敵対する者にとってこれ以上に厄介な者はいないだろう。

そう考えていたら、相手のIS乗りが距離を取る。

何かを仕掛けてくるのか、と思いきや、彼の周りにどこからか飛んできた物体が浮き並んだ。

「あれは、ブルー・ティアーズのビット、まさか……い！」

こちらが射撃武器を封印されている状態で!? そんな悪態を付こうとしたその瞬間。

「足りねえなあ! まだ楽しませろよ……い！」

六機の蒼い雫が、一斉に散開した。

それらは一斉に楯無の周囲を囲み、銃口からレーザーやミサイルを発射する。

「——っ！」

流星はロシア代表と言った所だろうか、まるでひらりと舞うようにレーザーを躲して

いき、飛来してくるミサイルを爆破しないように両断していくが、それでも内心では焦っていた。

(嘘、こんな早くつ……!)

早い。比べ物にならないくらいに、それは早くなっていた。

実際はビットの性能そのものは毛程にも変わってなどいない。

“使い手”が変わった、ただそれだけの事で、楯無の体感ではビットのスピードが段違いに上がっていた。

しかも、それだけではない。

「っ!? レーザーの弾道が曲がって……!?!」

しかも、クラス代表戦の時のように、ただビットが様々な角度から撃ち出してくるだけでなく、レーザーの弾道そのものが曲がり、楯無に肉薄してくる。

これでは爆発せず、高速で飛んでくるミサイルと何ら変わらないではないか。

そして、避けたレーザーがまた曲がり、それをまた避けている間にビットからレーザーが発射される。

そしてその間すらもビットはその変則的な軌道を緩める事はない。

「グう、アアッ!?!」

ついにはアクアナノマシンによる防御すら持ち出さなければならぬ程に追い詰めら

れたその瞬間、真つ二つにした筈のミサイルに、曲がったレーザーが命中し、爆破する。その爆破を直に受け、なんとかナノマシンでヴェールで防ぐものの、その際に煙で視界が遮られ、その隙に別方向から飛んできたレーザーに次々とシールドエネルギーと装甲を削られていく。

クラス代表決定戦の時とは最早違った。

あの時は白式そのものがそもそもビットを扱うのに適した機体ではなかった、だからあの場ではアインは偏光射撃^{フレキシブル}を獲得するには至らず、ただ上手くビットを動かすだけであつた。

だが、今回は違う。

今回はアインがセシリアからワンオフ・アビリティで無理矢理奪つたものではなく、ちゃんとセシリアからの『使用許諾』^{アンロック}を経て使用されている。

そのためビットの動力は普通のISエネルギーではなく、セシリアのブルー・ティーズから供与されるBTエネルギー——つまりはビットを動かすのに適したエネルギーなのだ。

故に、白式自身のISエネルギーが消費される事はなく、アインは心置きなくビットを使えるし、偏光射撃^{フレキシブル}が行える。

(…こんなのって……!?)

正に理不尽、その一言に尽きた。
蓄積していくダメージ。

周囲から休む暇もなく襲い掛かるレーザーとミサイルの弾幕。

(一体どうすれば……！)

よしんば、ここで彼を倒せたところで、彼が引き入れたフランスの代表候補生が控えている。

彼女に関しては説得の余地こそあるものの、そのころには自分の体力はどうなっていることだろうか。

「ハッハア！」

そして、そんな弾幕地獄の中で、ビットを操っている本人が白兵戦を仕掛けてくるといふ、おまけ付きが追加された。



「ああもう、クソ！ 何で当たらないのよ！」

向こうは的確に此方に斬撃や投擲を当てて来るのに対し、此方の攻撃や衝撃砲が当たらない事にイライラする鈴。

「感情的になっちゃダメ！　ちゃんと距離を取って！」

「相手の間合に入ってはダメだ！　ここは離れるんだ！」

「わ、分かってます！」

後ろから援護する二人の教員に窘められ、何とか冷静さを保った鈴は後ろに下がる。

同時に、二機の打鉄が鈴の甲龍を護るかのように前に立ち塞がる。

二人の教員とて、生徒を前線に出すのは教員としての意地が許せない所だが、専用機を持たない自分では決め手に欠けてしまうため、どうにかして二人で隙を作って、鈴がその隙を突くという戦法を取ろうとしていたが、向こうがそれをさせてくれない。

「出来れば早く決めてくれ。打鉄の防御力を持ってしても、後何撃つか……」

「失敗しても、恨まないわ。責任は私達教員が持つから、どうか……」

「こ、子供扱いしないでください！」

そんな会話の応酬を取り合う彼女らであるが、三人とも既に息が上がっていた。

近接武器のみの黒い暮桜——以下、黒桜であるが、明らかに歴史上で確認された今までのVTシステム、そのどれよりも精度が桁違いである。

「行くぞ！」

「ええ！　今度こそお願い！」

「はい！」

肩部と腰部、計四つの衝撃砲にエネルギーを溜める。

そして、三機のIS同時に黒桜へと踊りかかった。

二機は円形制御飛翔で黒桜を翻弄しながら、鈴の甲龍は衝撃を溜めながら黒桜へと肉薄する。

接近戦でも、射撃でもこちらが不利となれば、接近戦で動きを止めた隙に、至近距離から一斉に衝撃砲を叩きこむしかないと判断した鈴は、二本の大型青龍刀を構えながら突撃する。

接近する最中、黒桜が投擲した何本もの雪片が迫ってくるが、それを二機の打鉄が撃ち落とし、または物理シールドで防ぐ。

邪魔物を排除してくれる二人の教員に感謝しつつ、鈴は黒桜へと接近した。

ガキーン、二本の青龍刀と、二本の雪片が鏝迫り合いの状態となる。

確実に甲龍の方がパワー負けしてるが、そのまえに衝撃砲を撃ち込むまでの事。

(千冬姉さんのコピーだかなんだか知らないけれど、これで……！)

肩部の二門の大型衝撃砲、および腰部の二門の小型衝撃砲、計四門の衝撃砲が至近距離からその視えない弾丸を発射する。

しかし、それすらも、黒桜は咄嗟に機体を仰け反らせる事で回避した。

(嘘ッ、また避けられた!? というかこの避け方って……ッ!?)

先ほどから既視感のある避け方をする黒桜に違和感を抱きつつ、またもや失敗した事にシヨックを隠せなかった鈴。

「何度ヤロウガ同ジ事ダ!!」

「うっさい……キヤアアツ!」

千冬の太刀筋を知っていた鈴は辛うじて、振るわれた雪片を青龍刀で防ぐが、その衝撃でアリーナの端っこまで吹っ飛ばされる。

「いたたた……」

「大丈夫か!」

「怪我はない!」

二機の教員がまた鈴を護るようにして前が出る。

両機とも機体を側面に向け、物理シールドとスカートアーマーで防げるような体勢を作り、鈴に安否の声をかけた。

「だ、大丈夫です。その……ごめんなさい、失敗……しちやいました」

「何言ってるの、誰も責めないわよこんな状況」

「もういい、よくやった! 君だけでもここから逃げるんだ! 後は私達でなんとかする」

「けど……それじゃあ!!」

鈴は頑なに拒否する。

千冬の真似をするあの黒桜が気に入らないというのもあるが、何より、それ以上に悪い予感がしていたのだ。

何故なら、あの黒桜……明らかにかのブリュンヒルデがしないであろう戦い方をするのだ。

接近戦での太刀筋こそブリュンヒルデのそれであるが、この戦場での立ち回り方が明らかに異なっている。

まるで、劣化したブリュンヒルデに別の誰かの戦闘データを入れてあるかのような違和感を鈴は感じていた。

(それに、さつきからあの避け方……)

あの身体を仰げ反らせ、最低限の動きで回避するあの回避法。

あの回避法を用いるIS乗りを、鈴は知っている。

(あれって、アインの避け方じゃあ……)

鈴の悪い予感は、確かに的中していた。



「鈴……………！ くそッ！」

「織斑先生！ 外も危ない状況です。教員側や代表候補生側の I S 乗りにも死傷者が……………あ……………」

「分かっている！」

アリーナの中、外。

モニターに映るどこの画面を見渡せど、そこには地獄絵図が広がっている光景ばかり。

いよいよ精神的に限界になってきた二人は、必死にコンソールのスイッチを押して場に対応しようするが、対応が間に合わず、死傷者が出るだけだった。

その時だった。

「お、織斑先生……………」

「どうした!？」

真耶が震える口調を必死に動かし、千冬に語りかける。

「べ、別号館の避難口付近に、戦闘が……………」

「別号館だ?!? 戦闘区域からかなり離れてるぞ。一体誰……………が……………?」

モニターに拡大された映像を見て、千冬と真耶は絶句した。

何故なら……………そこで戦っていたのは、黒い I S を纏ったアインと、水色の I S を纏つ

た更識楯無の姿があつた。

「アレはアイン君と、生徒会の楯無さん、どうして……?」

どうして戦っているのだと、真耶が疑問に思った、その時だった。

「……山田先生、付近に拾える音声はないか?」

「え?」

「付近にキャッチできる音声はないかと聞いている!!」

「そ、そんなの、悲鳴とだ、断末魔、しか……」

「そんなものじゃない! 付近に飛び交っている電波全てをキャッチして解析しろ! 今すぐだ!」

「は、はい! 分かりました!」

千冬の迫力に圧倒されつつも、彼女の顔を見て、千冬が何かを感じていると悟った真耶は、急いで周囲のありつたけの電波を広い、解析作業に入る。

そして、ある声が聞こえてきた。

『……ザ……ザ……の戦いは……神の……前に捧げられる……戦である』

「これは……織斑先生!」

「黙って聞いている」

『伝統を軽んじ……ザザ……神を冒瀆せし不信……者共に、我らが神……もに鉄槌を下

すのだ……』

(この、声は……!!)

その声に、聞き覚えがありすぎた。

真耶もその声を聞いたとたん、咄嗟に信じられないといった表情になった。

『ザッツ……不信仰者共に屈服してはならない……』

二人の頭に思い浮かぶのは、いつも自分が担当していた教室の、真ん中最前列に座っていた人物。

いつも授業を真面目に聞いている姿しか知らない真耶は未だ信じられないといった表情をしたまま、千冬は唇を噛み締め、悔しそうな表情になる。

『我々は……ザッツ……で死す事によって、神のみ……かれるだろう』

「そ、そんな……まさ、か……」

その声の主の正体を、勘づいてしまった真耶は必死に己の脳裏に浮かんだ人物を否定する。

そんなわけがない、あの子がそんな事をする筈がない。

あんな、授業中でも、生徒であるにも関わらず教師である自分に気遣いを見せてくれて、授業もあんな真面目に聞いていたあの生徒が、そんな事をする筈ないと。

(神……奴の言う神、まさか……!)

そして、ここに至って千冬はようやく頭の中で状況の整理を始める。

この拾い上げた通信音声、そしてアリーナ広場での処刑場みたいな行為。

それらの情報を整理して、ようやく千冬は分かった。

「まさか……やつと言う神とは……私か？　という事は……」

という事は、と千冬は頭の中で考える。

何かが思いつきそうだった、何かが考えつきそうだった。何かにとどり着きそうだった。

そして、その答えにとどり着いた。

「そう、か……！」

「そういう事か！　あの戦争中毒め!!」

「お、織斑、先生……?」

急な怒り声をあげる千冬に、ビクっとなる真耶。

千冬と付き合いの長い真耶であったが、これほどまでに怒る彼女を見たことがなかった。

「山田先生! 学園の打鉄は今何機余っている!」

「えっ……えっと、第三格納庫に一機予備の打鉄が——」

「それでいい!! 今すぐ第三格納庫のロックを解除しろ!」

千冬の切羽詰まった声に圧倒されつつも、真耶はコンソールのボタンを押し、モニターに「第三格納庫開放」のお知らせが映った。

「第三格納庫、ゲートロック解除しました! 織斑先生、まさか……!?!」

「ああ、私が直々に出る! 打鉄の形状は暮桜に最も近いからな、代用品にはもってこいだ」

「けど、織斑先生ともあろうものがISに乗っては、全国から皺寄せが……ッ!」

「そんな悠長な事は言ってられん!!」

なおも渋るような口調の真耶に、千冬は怒りの声でそれを黙らす。

「ここでモタモタしているわけにはいかないと、千冬は急いでモニター室のドアを開ける、

「『IISに乗った本物の私』が出なければ、この聖戦とやらは終わらん！」



「ハア、ハ……あ、かん、ちゃん……」

ビットによる攻撃と、アインの白兵戦による同時攻撃を射撃兵装を封印された状態で乗り切った、否、敗北した楯無は既にポロポロだった。

白式との接触によりアクアナノマシンの大部分を奪われ、更には連綿と続くビットの弾幕によりシールドエネルギーと装甲をガリガリと削られ、絶対防御で防ぎきれなかったあとの弾痕や切り傷からは多くの血を流し、その姿は、美貌も相まって皮肉にも美しくかった。

「……臨終……ってレベルじゃねえか。こいつで終わりだ」

止めを刺さんと、アインが雪片式型を振りかぶったその時だった。

に懇願する。

「わだじのごとどあ、いいがら……ッ、お願いしますッ!!」

半身が引きちぎれそうになる程の痛みを堪えながら、あまりの勢いにメガネを地面に落としながらも、それでも彼女は懇願する。

「わたしのことは、好きにしていいいがらッ!!」

「煮るなり焼くなり、じていいがらッ!!」

「ごごで殺しても、構わないがらッ!!」

「この体、好きにして構わないがらッ!!」

「犯すなりなんなり、していいがらッ!!」

その身を差し出そう、この身を全部預けよう、貴方の道具になろう、貴方の玩具になろう、貴方の奴隷になろう、何時切り捨てても構わない、自分の事は好きにしてくれ。

「だがらあッ!!」

「お姉ちゃんを……私のおねえちゃんをこれ以上、いじめないでッ……」

精一杯、涙いっぱいそう言つて簪は頭を下げた。

嘘偽りなく、本心から、姉の無事を願ひ、己の身を差し出してでも姉を助けて欲しいと、そう懇願した。

「美しい姉妹愛だ」
きょうだいあい

しかし、そんな必死の懇願すらも、この戦争屋まるで小馬鹿にするような口調で笑みを浮かべる。

そんな風に懇願し、頭を下げてくる者を何人も見てきた。

勿論、その要求を受け入れ、後で何人も犯して壊してきたアインにとつてはまさしく日常茶飯事の光景だった。勿論、その者が助けて欲しいと願つた人間もその場で殺してやつた事がほとんどであるが。

(いいねえ、益々戦争らしくなつてきたじゃねえか……！)

ようやく取り戻しつつある日常戦争にアインは歓喜しつつ、雪片式型の切っ先を楯無に向け、問うた。

「つつーわけだ。俺としちやああの嬢ちゃんの願いなんざ聞く義理ねえが、ま、聞いといてやるよ」

「……」

その問いに反応した楯無は、そつと視線だけアインに向ける。

「俺の存在のおかげであの嬢ちゃんはあるとして専用機を貰えず人質に取られちまったわけだが、もしここで俺達をスポンサー様の所へ馳せ参じさせば、必然と白式は倉持なんたらの管轄から外れる訳だ。当然倉持なんたらは製造凍結した第三世代型の新しい機体の開発に着手せざるを得なくなる」

「……」

「どうだい、妹さんの将来を考えれば魅力的な提案だろう？ 最も、オメエの首はここで落とす事に変わりはねえがな」

「……」

「それともここで妹を踏み台にして生き残るか？ いいぜ、オメエの妹さんだ。たつぷりと使つてやるぜ？」

「……ッ」

握り拳が作られる。

この男の下劣な発言に怒りを抱きつつも、楯無はそつと、視線を自分の妹に向ける。真つ直ぐな目だった。

姉を助けるためなら自分はどうなってもいい、そんな強い意思を宿した目だった。

(……なあんだ、かんちゃんつてば、とつくに私より、ずつと強くなつてたのね)

両足を突き刺されて痛そうに血を流しているにも関わらず、ずつと己を見つめる妹の存在を眩しく感じた楯無は、再びアインの方へ視線を向ける。

(どの道、この男がそんな選択、選ばせてくれる訳が無い。きつと余興のつもり……どちらを選んだ所で、私とかんちゃんは死ぬ……)

——ならばどうする？

——更識の楯無として、ここで己の妹をあつ男に差し出して、これからも己を殺し続ける人生を歩むか？ そんな選択をした所で、この男はどのみち自分と妹を殺す。

——一人の姉として、ここで妹の将来のために己の人生を棒に振るか。そんな選択をした所で、この男はどのみち自分と妹を殺す。

ならば、残る選択肢は一つだけだった。

(両方、護るしかないじゃない)

そして彼女は、その第三の選択肢を選び取った。

「……お断りよ」

「ん？」

「お断りだと……そう言ったのよ、この害虫野郎」

「そオかい」

楯無の挑発めいた言葉に特に反応する事もなく、アインは雪片式型を上には振りかぶる。

刀身が反射する日光が、縦無にとつてすごく眩しかった。

「まあ、どっちも嘘なんだがな。あばよオー！」

そう言つて、雪片式型の刀身を展開させようとして、異変が起こつた。

「なに？」

訝しげな表情になつたアインは、自分が振りかぶつた雪片式型の刀身を見上げる。

ハイパーセンサーの表示では零落白夜を発動している事になっている筈なのに、その刀身はまるで死んだ貝殻のごとく頑なに展開しなかつた。

「うまく………いつたようね………」

してやつたり、という風な笑みを浮かべる。

その様子にセシリアも、シャルロットも、簪も啞然となる。

「何だ、何が起こっている!? 一体なにをしゃがつた!？」

「べーだ。いくら、強かろうが、ISのキャリアはこっちの方が上……なのよ」
「何だとオ？」

ベロを出してからかう楯無に対して、初めて苛立ちの表情をアインは見せた。

ようやくこの男から一本取ってやったと、そんな満足感を噛み締めながら、説明する。
「私の……アクアナノマシン。ISエネルギーを伝達……して、動かしてるのは気づいてるでしょう？」

「だから、貴方のISエネルギーに触れて、乗っ取られる訳だけど、ナノ単位の極小物質、全部を奪いきれるとは限らないでしょう」

「何が言いてえ？」

「つ・ま・り、貴方のISの体内に、貴方が奪いきれなかったナノマシン、乗っ取られる直前に私のISエネルギーを流し込みましたア」

化学分野で言うならば、結晶性沈殿と同じ原理だ。

結晶性沈殿が発生すると、そのコロイドは不純物を閉じ込め、通常の洗剤では落とせなくなる。

それと同じで、乗っ取られたアクアナノマシンの中で、唯一乗っ取られてない少数のアクアナノマシンが乗っ取られたアクアナノマシンに引つ張られ、白式の機体内へ潜入、完全に乗っ取られる前に自前のISエネルギーを流し込み、暴走させた。

「流し込んだ私のI Sエネルギーはあ、勿論あなたの白式にとつては不純物そのものです。よつて、エネルギー循環に不具合が生じ、ハイパーセンサーなどの表示がイカれてしまいます。まあ、ぶつつけ本番なだけどねえ」

満身創痍であるにも関わらず、他人をイラつかせるような、ワザとげな丁寧語で縦無は説明する。

アインとて馬鹿ではない、縦無の説明を聞き、段々と眉を潜めるようになる。

「だ・か・ら、貴方のハイパーセンサーの残量エネルギー表示がおかしいことになりますから、零落白夜発動設定でも、実際は表示と違つてエネルギー量が足りないわけだから、お得意のワンオフは発動しない訳でえす」

「——ッ」

しまった、とアインの顔がゆがむ。

「ついでに言いますと。貴方、私のアクアナノマシン奪い過ぎたおかげでえ、エネルギーがそつちを持って行かれて実はもうスカスカ状態です、ブイッ♪」

故に、ハイパーセンサーに不調が生じたおかげで、アクアナノマシンに持つて行かれたエネルギーの相当量に気付く事がなく、アクアナノマシンを操るのに適した機体ではない白式では、まるでがぶ飲みするかのようになにエネルギーが消費される。

「クッ、ハハハッ！」

そんな楯無の説明を聞いたアインは、悔しそうに喚くかと思えば、存外愉快そうに笑い始めた。

「まったく、やってくれるぜネーチャン。してやられたよ。出来ればもつとマシな戦場で会いたかったもんだぜ」

「……フッフ」

不敵に笑う両者。

だがその均衡もすぐに崩れた。

「だがなあ！ どの道テメエはここで終わりだよオ！」

そう言つて、アインは雪片式型を振り下ろす。

零落白夜を発動しようとしたのは、あくまで派手に散らせてやろうというアインの趣向が混じっているだけで、発動させなくてもこの状態の楯無に止めを刺すことは造作もなかった。

筈だった。

キイン。楯無の下に、制御が戻ってきたアクアナノマシンによるヴェールがその斬撃を防ぐ。

「ちいッ！」

零落白夜が使えていれば、こんな防壁貫けるのによ、と内心で悪態を付きつつ、アイ

ンは楯無から距離を取るが。
遅い。

「(こいつアツ!?)」

周囲に漂う、高濃度の霧。

徐々にその霧の温度が高くなっている事に気づいたアインは、しまった、と言わんばかりの表情を見せる。

「生憎、この状態じゃあ本来の四分の一の威力も出せないけれど、エネルギースカスカのIS一機を葬るくらいなら造作もないわツ!!」

今が好機だ、と楯無はそれを発動させる。

周囲も楯無の突然の一転攻勢に呆然とし、妹の簪も一時的に人質の状態から開放されたと等しい状態だ。

(これで、決めるわ)

——クリア・バツンヨン
清き激情、発動。

「ンの野郎おおおおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオツ!!!」
!!!」

強烈な水蒸気爆発が炸裂する。

その爆破に巻き込まれたアインは、誰もが恐れ戦くような憤怒の表情と共に、散つていった。

「フフフツ、ざまあ、みろ……」

してやったりと、言ったような表情で、楯無は親指を立てる。

水蒸気爆発の煙の中を睨み続け、ハアツ、ため息を吐いてそこから視線を逸らした。

「ア、・ア……」

セシリアが、この世の終わりを見るかのような、青ざめた表情でその煙を見続ける。

「アインさんツ!!」

やがて耐え切れなくなったのか、人質である筈の簪を手放し、スラスターを吹かして

煙の方へと向かっていった。

「きゃあッ!!」

突然手放され、なすすべもなく落下していく簪であったが、落下する直前に柔らかい何かに受け止められる。

その冷たくも、どこか温もりのこもる感触を感じ取った簪は、その正体を知った。

「あ……アアッ!」

「やつほー、無事? かん……ちゃん……」

楯無、否、刀奈の操るアクアナノマシンが落下寸前の簪を受け止め、ついでに一定量のアクアナノマシンを足の傷口に固定して、止血していた。

「お、お姉ちゃん……!」

嬉しさのあまり、簪は涙してしまふ。

刀奈もまた同じように嬉し涙を流す。

簪は自分の姉を抱きしめたい衝動を何とか抑え、刀奈の顔を覗き込んだ。

「お姉ちゃん、よかった、お姉ちゃん……!!」

「ううん、かんちゃんも……無事で……グスッ……」

お互いの無事を確認し、二人は喜び合う。

一度は疎ましいと思っていた姉だったが、それでも、この姉はちゃんと自分を想って

くれているのが分かって、それが嬉しかった。

刀奈の方も、ずっと溝が深まっていた妹との寄りを戻せて、とても幸せな気持ちになった。

だが、ここでずっと喜びを分かち合っているわけにいかない。

それくらい、刀奈も簪も分かっていた。

「続きは、後にしましょう。かんちゃん、後でいっぱいお話したい事があるから」

「うん、私も、お姉ちゃんと——」

「ところがギツチョン!!」

瞬間、二人に向かって二つの“ナニカ”が高速で飛来してきた。

「——え？」

一瞬、何が起こったか分からずに、鮮血を舞わせた己の姉の姿を簪は見つめる。

咄嗟に簪を庇った刀奈は残るアクアノマシンで“ソレ”を間一髪で防いでいたのだが、ナノマシンの量が不足だったのか、それとも“ソレ”の威力が些か高すぎただけなのかは、もはや分からなかった。

気を失った姉と、砕け散ったアクアクリスタルの破片を目にした簪は、その“ナニカ”が飛来してきた方向を見上げる。

そこには、先程自分たちを襲った二つの“ナニカ”がISらしきモノのサイドコンテナに収まっていく。

そのコンテナには、その二つを除いてあと四つ同じものが収められているのを簪は見た。

「アレは……ビット、いえ、“牙”？」

ソレを何と表現していいのかわからず、簪はただただ煩悶を抱く。

そして、水蒸気爆発の煙が消えてゆく、やがて“ソレ”の姿が頭になった。

「なに、あれ……まさか、打鉄？」

未完成ながら、打鉄の発展型の専用機を渡されている簪だからこそ、それが“打鉄”

である事を見破れた。

しかし、アレは量産機の打鉄でも、自分の打鉄式でもない、異様な雰囲気を漂わせていた。

緋色にコーティングされた装甲。

強固なスカートアーマーに変わり換装された、先程の牙らしきモノを収めたコンテナウイング。

右肩の物理シールドにマウントされた大型ブレード。

搭乗者の顔を覆い隠す、真紅に光るツインアイマスク。

そこに、ツヴァイ悪魔は降臨した。

聖戦―降臨せし神―

――奴は、ワタシという神を復活させるには贄が必要だと言った。そして、その「贄」というのは、おそらくこの学園の生徒達、および来賓のこと、いやもしかしたらこの学園の外の人間達すらも指しているのかもしれない。

まあ、そんな事はどうでもよかった。

「いっただな……」

第三格納庫のライトを付ける。

瞬間、一齐に付けられたスポットライトに当てられ、そこに一機の打鉄が現れた。

予備の一機といえど、きちんと整備班の手は行き届いており、その武者を思わせる装甲も健在なままだった。

「エネルギーは……よし、満タンだな。一次移行と最適化フィッティングをする時間はないが、それは別にいいか」

そう、別に打鉄の性能そのものは今の千冬にとつてはどうでもいい事だった。

重要なのは、この打鉄という量産機の形状が、自分がかつて使っていた暮桜に似ているという所。

リヴァイヴでは駄目だ、打鉄でなければならぬ。

そういう意味ではこの残り一機の訓練機が打鉄であったのは不幸中の幸いだった。コックピットに身を預ける。

その瞬間、どうしようもない重みが千冬を襲った。

「……ッ」

決して身体的にも、性能的にも問題がある訳ではない。

問題があるとすれば己の精神。

千冬はブリュンヒルデという己の二つ名があまり好きではなかった。

その名で弟を、唯一無二の家族を守るのであればその名を利用してやろうと思っていた時期もあったが、実際はその名のせいで弟は行方不明になり、一度は見つけたものの、またもやブリュンヒルデという名前が災いして再度弟と生き別れてしまった。

もうブリュンヒルデとして世には出まいというのも、千冬が日本の代表から身を退いた理由の一つであった。

だが、今回は違う。

「ブリュンヒルデ」そして、今回は出なければならぬ。

ブリュンヒルデとして出なければ、この戦いは終わらない。

世界最強と呼ばれた自分が再びISに乗れば、世間が如何に騒ぐかなどと、容易に想

像できてしまう。

マスコミも新聞記者も、各国の政府すらも次々と騒ぐ事だろう。

それでも、今回だけは「ブリュンヒルデ」として出なければ意味がなかった。

ブリュンヒルデを神に仕立て上げて仕掛けられたこの紛争を終わらせるには、皮肉にも己のブリュンヒルデという名を利用してなければならなかった。

故に。

「織斑千冬。打鉄、出る！」

迷っている時間などはない。

行先は首切り人と化した偽物ブリュンヒルデが待ち受ける、処刑場と化したアリーナ広場。

大切な生徒達、そして大切な妹分を助ける為に、暴走した教え子を止める為に、織斑千冬は「本物の」ブリュンヒルデとして、格納庫から飛び出した。

彼女達は、「自分」という神を完全なモノにするために、贄を次々とあの黒い暮桜に差し出している。

しかし、所詮偽物は偽物、いくら贄を差し出そうが本物のブリュンヒルデが出て来る筈がない。だから、この聖戦に終わりなど存在しない。

だから、この聖戦を止める方法があるとすれば、ただ一つ。

考えてみれば、それは簡単な事だった。

——
 “本物の神”^{ブリュンヒルデ}である自分が出れば、それだけでこの聖戦は終わるのだから。



「あ……アア……」

その存在を見上げた簪は、あまりの恐怖に何も言えなくなってしまった。

あれの存在を形容するのであれば、そう、自分が所有する打鉄式式の、その反対に位置する機体とでも言えばいいのか、とにかくそれくらいあの機体は簪にとっては受け付け難いものであった。

「あれが、^{うちがねカスタムツヴァイ}打鉄改 Z w e i……」

あらかじめあの機体のデータを閲覧していたシャルロットも、畏怖の目でそれを見上げる。やはりデータで見ると、実物を見るのでは段違いであった。

シャルロットはあの機体が、元々はアインが東欧の紛争地帯で強奪し、あのリヴァイヴのパイロットを惨殺した打鉄を改造したモノであると知っているため、その抱く恐怖は補正込みで大きい。

元々は第二世代型であった打鉄の装甲を軽くし、第三世代型の改造スラスターを搭載して威力を底上げし、更にイギリスのマインド・インターフェイス兵装であるBT兵器を搭載した魔改造機。

改造過程を見るとそれは同じく量産型ISの改造機であるシャルのラファール・リヴァイヴカスタムⅡと似ているが、やはり最大の違いは、あの打鉄がその改造の過程で第二世代型から第三世代型まで進化しているという点であろう。

「つたく、スポンサーから前払いで渡された奴を使いたくはなかったんだが……」
してやられたぜ、とツヴァイの搭乗者であるアインはぼやく。

ツインアイの付いた頭部装甲のせいでその表情こそ見えないものの、本人としてはご機嫌半分、不機嫌半分と言った所か。

新しい専用機に対する昂揚と、新しい専用機に乗らざるを得なくなった己に対しての不甲斐なさに、内心で複雑になるアイン。

「ああ、アレがアインさんの新しい専用機……!!」

まるで神を崇めるような視線でツヴァイを見つめるセシリア。

他の洗脳された生徒達とは違い、彼女だけは唯一、ブリュンヒルデではなくアイン自身を神として見るように洗脳されているため、その目は妄信的である。

アインは彼女にツヴァイがイギリスから新しく支給された専用機であると騙してあ

るため、ようやくアインがイギリスの代表候補になると決心したと勘違いしている事が余計拍車にかかっているようだった。

「アインさん……！」

喜びを全身で表すかのように、ブルーティアーズのスラスターを吹かしてアインの隣に並び立つセシリア。

アインを前にしてあたかも小動物のような甘える視線をアインに向ける。

「セシリアか。ビット、助かったぜ」

「いえ、アインさんのためですもの。それに……ようやくこれで、お揃いになりましたね！」

キヤツ、と恥ずかし気な仕草をしながらも嬉しそうにセシリアはほほ笑む。

自分の全てというべき存在が、自分と同じBT兵装を使ってくれるというのが、彼女にとって何より嬉しかった。

アインもそんなセシリアに対して微笑ましげに対応する。……マスクの下は愉快げな表情であつたが、それはセシリアからは見えなかつた。

「アイン……」

自分が雇った傭兵が戦いを終えた事を確認したシャルロットもまた、リヴァイヴカスタムIIを展開して、アインの横に並び立つ。

そんなシャルロットを見たセシリアは、心底憎々しそうにアインの隣に立つシャルロットを睨む。

そんなセシリアに対して、シャルロットはただ哀れな者を見るかのような目で一瞥した後、自分達の下で倒れている更識姉妹を見下す。

「さて、間もなくお別れの時間だ、お嬢ちゃん」

「っ!!」

宣告するアイン。

左腕に装着されたBTエネルギーハンドガン『流星』の銃口が簪と楯無の方へ向けられた。

「お、お姉ちゃんっ!」

気を失った姉に対し、簪は必死に呼びかける。

両足に傷を負った自分では姉を連れて逃げる事ができない。

しかし、そんな簪よりも楯無の状態は酷かった。

元々アインとの戦闘で重傷を負っていたにも関わらず、更に妹の簪を庇って、更に怪我を負い、こうして意識がない状態に陥ってしまった。

自分の呼びかけに対しても反応しない姉に対し、簪は更に涙を流して姉に呼びかける。

「お姉ちゃん、おねえちゃん、お姉ちゃん!!」

ここに来て簪は都合よく、無意識に姉を頼ってしまっていた。

よくも悪くも楯無、否、刀奈が簪に対して「貴女は何もしなくていい」と言った言葉が、簪の脳裏に刻み込まれ閉まっていた影響なのかは定かではない。

自分と違って、姉は何でもできる。

姉なら、どうにかしてくれる。

そんな淡い期待を無意識に涙に込めて、縋る。

しかし、それは終ぞ届かなかった。

「姉妹仲よく消えちまいなア!」

「ツ!!」

キユインツッ! 耳をつんざくような独特の音と共に、BTエネルギーハンドガンの銃口から真紅色のビームが発射される。

直前、思わず簪は姉に当たらないように自分の体を盾にして守ろうとするが、ISの武装から放たれた銃弾など、人体を容易く貫く。

ここで簪が姉を護るために己の身を盾にしようが、その銃弾の前ではまったく意味がなかった。

しかし、その銃弾は一筋の炎と共に消える事となった。

「何い!?!」

その紅いビームは、突如割って入って来た一機のISによって止められる事となる。

「あ、貴女は……!?!」

自分達姉妹を守ってくれたISの搭乗者に、簪は呆然としながらも問う。

犬頭の形状をした特殊な両肩から噴き出る炎。

ダークグレーの装甲を持つIS。

突如として現れたそのISの搭乗者は、簪の方へ振り向く。

「IS学園、3年生。アメリカ代表候補生、ダリル・ケイシーだ」

勇ましき褐色の獵犬ハウンドが、そこに現れた。



惨き処刑場と化したアリーナにて、三機と一機の激闘は未だ続いていた。

否、激闘というにはそれはあまりにも一方的と言わざるを得ないだろう。

二機の打鉄と、一機の専用機。

三機とも、猛攻を仕掛けてくる黒桜に対して手も足も出さず、ただその攻撃をいなし、や

り過ぎす事が精いっぱいである、三機のISのダメージレベルはとうにDまで達してい

た。

「く、くそお……!」

「こんな事って……」

「織斑先生とも動きが違う、これは一体?」

ただ単にブリュンヒルデをコピーしただけの劣化品であるなら、この三人は愚か、この中の教員一人が相手でもどうにかなっただろう。

だが、今回はその劣化したブリュンヒルデの剣に加え、ある戦争屋の戦闘データまでもが加わり、戦場における立ち回りが遥かに上昇している。

そのため剣の太刀筋そのものはブリュンヒルデであっても、VTシステム独特のアドヴァンテージを生かした戦法とその戦上手さによって、もはや教員の駆る訓練機二機と代表候補生の専用機一機だけでは手の付かない程の強さになっていた。

「この、ままじゃあ……!!」

ヨレヨレの機体を何とか動かして立ち上がる鈴であったが、いくらISの搭乗者保護機能であろうと、やはり彼女の体力は限界だった。

なまじ他の代表候補生のように長時間にわたる訓練を受けず、この一年間の才能と努力のみで代表候補生にまで成り上がった彼女の戦い方は、あの黒桜には百歩先まで読まれてしまっている。

そんな彼女の様子を見かねた教員は二人は、鈴を黒桜から庇うように前に立つ。

頑丈さが売りである打鉄は今のようなダメーヅレベルDの状態でも、鈴の甲龍よりはまだ動けた。

「鳳さん、もう逃げなさい」

「後は、我々二人でなんとかする」

そんな二人の言葉に、鈴は啞然とする。

一体何を言っているんだと、そんな顔で二人を見上げた。

「な、何を言っているんですか?! 私はまだッ……」

「そんな機体ではもう戦えないわ! 私達が食い止めておくから逃げて!!」

「ISの搭乗者保護機能だけは解くなよ。逃げるための体力だけは保っておけ!!」

そんな鈴に構わず、二人は何か鈴を前線から下がらせようとする。

いつまでも子供扱いする二人に対して、鈴はどうとう堪忍袋の緒が切れた。

「二人の機体だつてもうボロボロじゃないですか?! そんな状態で言われたつて、言われた……つて」

「それでも!!」

一人の教員の声に力が入る。

「君はまだ子供だ。こんな所で将来を無駄にするものじゃない。君たち生徒の将来を護

るために、我々教員がいるんだ！」

「お願いよ、逃げて！」

「…………ツ」

強い意志で言い返してくる教員に対し、鈴は項垂れて何も言えなくなった。

彼らの言う事は正しかった。

子供を守るのが大人の務め、そんな信念を持つ彼女らは、鈴にとつては尊敬すべき大人であり、鈴もできることならそんな彼らの思いを無駄にしたくはない。

(それでも、私は……………私は！)

それでも鈴は、嫌だった。

また傍観者に徹してしまうのが嫌だった。

実際は傍観者どころか、この場から逃げなければいけない状況でもある。

それでも鈴は、もう二度と見捨てたくはなかった。

「私はア！」

既に大破寸前の機体を、必死に起こそうする。

そして

「もういい。そこで休んでいろ、鈴」

突如、その手によって止められた。

「——え？」

ハイパーセンサーで、その手で制してくる人物をはつきりと目視できているにも関わらず、鈴は顔ごと其方へ振り向く。

そこには、打鉄を纏った自分の姉貴分が立っていた。

「千冬、姉さん？」

信じられない、といった風に鈴は千冬を見る。

一時期共に過ごしていた頃、鈴は千冬があれだけISに乗る事を拒否していたのを知っている。

そんな千冬が、打鉄を纏ってこのアリーナまでやってきたのだ。

「どう……して？」

「話は後だ。これでこの馬鹿げた聖戦を終わらせる!!」

そう叫ぶや否や、千冬はその場から疾風の如く消える。

気が付けば、打鉄を纏った千冬は既に黒桜の元へと接近していた。

スラストターの出力だけでなく、スラストターを吹かす直前にアリーナの床を蹴って加速し、一気に黒桜の元へと肉薄した。

『ッ!?!』

突如として乱入してきた千冬に、黒桜も、そしてそれと戦っていた教員も信じられな
いといったような驚愕の表情になった。

その剣には、迷いも一切ない。

ただ唯一無二の家族を守るためだけに鍛え上げてきたその強さ。

誰もが憧れる美しき在り方、誰もが憧れ、それになりたいと願ってきたその鬼神の如
き強さ。

世界最強と謳われたその剣が、黒桜に襲い掛かる。

黒桜も千冬と同じように居合のような構えで迎撃しようとするが、遅い。

それは彼女にとってはあまりにも遅すぎた。

一閃。

一筋の光が、黒桜の装甲を横切る。

それと共に、黒桜は崩れ落ちていった。

「す、凄、い……」

その呆気ない終わりを見た、鈴はただそういう事しかできなかつた。

たったの一太刀、しかも量産機であの化け物を葬るといふ、真正正銘のブリュンヒルデの姿を目の当たりにし、鈴は興奮せずにはいられなかった。

——これが、ブリュンヒルデ。

第一回モンド・グロツソを剣一本で勝ち抜いたその強さの一端を、その場にいた大衆に見せつけ、焼き付けた。

黒桜の装甲が崩れ落ちていく。

最初に現れた時とは反対に、形成した装甲がまた黒い泥に変貌していき、搭乗者から剥がれていく。

やがて、その中に囚われていた少女が出てきた。

「ラウラー！」

倒れそうになったその眼帯の少女を、千冬は間一髪で受け止める。

自分が手塩にかけて鍛えた教え子。

その安否を確かめんと、彼女の心臓に手を当てようとした、その瞬間——。

『ああ、神様！ ブリュンヒルデ様！』

『とうとう降臨なさったのですね!?!』

『ついに……！ ついに私達を認めてくださったのですね!』

彼女達はただただ喜ぶ。

“彼”に言われた通りに殺し、彼に言われた通りの犠牲を払ってきた。

そして彼の言う事は正しかった。……現にこうして、彼女達の前に神は降臨してくれたのだから。

『見てください!』

『貴女様を侮辱する不信仰者共をこんなに片づけました!』

『不信仰者共を贄にして本当に貴女様が現れてくれるのか、とても不安でした!』

『たくさん、戦って、力のまま殺しました!! どうか私達を御認めに!!』

妄信盲目。

ブリュンヒルデという偶像を信じ込まされ、後戻りのない所まで来てしまった哀れな少女たち。

その少女たちの狂喜の視線を、千冬は一斉に浴びる。

「や、やめろ……」

その俯きながら、顔を青ざめながら、千冬はただそう呟く。

こんな事をされたくて自分はここに出たのではない。

その名を呼ばれたくてここに来たのではない。

『ああ、ブリュンヒルデ様!』

『どうか私達を見てください!』

『どこまでも付いて行きます!』

『その眼差しを、どうか私達へ……!』

そんな千冬に構わず、彼女達はただやだ歎び声を上げる。

尊敬、畏敬、信仰。それら一斉の視線に千冬は耐えられなくなる。

「やめろと言っている……!」

必死に、そう叫ぶ。

もうそんな名前で呼ばれたくない。

家族の人生をめちやくちやにしてしまった、その名で自分を呼ぶな。

もう、二度とそんな名前で呼ばれたくなかった。

『ブリュンヒルデ様!』

『ブリュンヒルデ様!』

『ブリュンヒルデ様!』

「ヤメロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオツ!!!」

ブリュンヒルデではない、家族を失った一人の女性の慟哭が、アリーナ中に響き渡つた。

聖戦—英国少女の狂乱—

突如としてアインが放ったBTエネルギーハンドガンのエネルギー弾から姉妹を救ったアメリカの代表候補生。ダリル・ケイシーがアインを睨み付ける。

彼女が纏うIS、ヘル・ハウンドver2.5がアインを威嚇するように、その犬の頭を模った肩から火を吹きだす。

地獄の猟犬が、まるで飼い主を護らんと言わんばかりにそこに立ち塞がっていた。

(ありやあ、大将の……)

そんな彼女の姿を見て、真っ先に脳裏に思い浮かんだのは自分の現雇い主である、亡国機業の実働部隊のリーダー、スコール・ミューゼルであった。

自分から姉妹を護るかのように立ちふさがる褐色の少女は、そのスコールという女性がこの学園に送り込んだスパイであるのだが、何故かその雇い主側である筈のその少女がアインに敵対行為をしてきたのだ。

「おい、これは一体どういうことだ？」

左腕のBTエネルギーハンドガン『流星』の銃口をダリルに向けたまま、アインは悪態を付く。

「氣に入らねえ……」

「あア？」

「氣に入らねえんだよ。テメエのそのやり方、何で自分で引き金を引かねえ？ 何で自分の手でやろうとしねえ!? 人を掌で踊らせるのがテメエら傭兵の仕事なのかよ、あア!?!」

齒をむき出しにした狂犬のような表情でダリルは感情のままにアインに吠える。

彼女はもう我慢の限界だった。

この男が氣に入らない、心底氣に食わない。

ダリルとて決して善人という訳ではない、むしろ自分から進んで人を殺していく残忍な人格の持ち主であるが、そんな彼女にも最低限の矜持というものはある。

——だが、この男は何だ？

何も知らない無垢な女子までも洗脳し、手を汚させ、自分は高みの見物をして大笑いしているこの男は何だろうか。

ダリル・ケイシーが人でなしであるのだとしたら、この男は一体何と形容していいのやら、ダリルは最早思い付かなかった。

「調子に乗ってんじゃねえ！ テメエは傭兵なんだよ、金で雇われなきや何もできない野郎が、そんな高みから戦場を動かしてんじゃねえよ！ ソレはウチラの役目だろうが

!! 出しゃばってんじゃねえ。そんなに戦いてえならテメエもそんな姑息な手使わないで自分から戦場にでたらどうなんだよ!」

今までため込んでた感情全てを吐き出し、ダリルはアインにそう吐き捨てる。

「フォルテまで……フォルテまで巻き込みやがって!!」

最後の、その一言こそが全てだった。

スパイとして潜り込んでいたとはいえ、彼女とてこの学園に思う所がない訳ではない。知らずの内に彼女も感化されてしまっていた。

だが、何より、その中でも何より大切なモノになってしまった後輩すら巻き込んだのが、ダリルの中の導火線に火を付けた。

そっちが本音じゃねえのかよ、とアインは心の中で愚痴る。

「チツ、犬ツコロが……」

「犬ツコロじゃねえ、ハウンド 獵犬だ!」

そう言い返したダリルは火球を生成してそれをアインに向ける。

アインもまたBTエネルギーハンドガンのコンデンサクリスタルにエネルギーを装填し、いつでもエネルギー弾を撃てるようにする。

「いきなり何ですの貴女ツ!? アインさんの邪魔をして只で済むと思って!」

「テメエに用はねえよ道化女。俺はコイツに用があつて来たんだよ……!」

道化女と言われたセシリアは思わずカツとなつてBTエネルギーライフルの銃口を向ける。

(糞つたれが、興が冷めちまつたぜ)

一方、内心ではアインの闘争意欲はとうに掻き消えてしまつていた。

仕留め甲斐のある獲物を散々甚振つた挙句、満足したのでトドメを刺してやろうと思つたら、あろう事が雇い主側の人間がその獲物を庇う始末である。

興冷めにも程があり、むしろ戦いよりもこれからの事を考える必要まで出てきてしまった。

(クライアントの意に反する行動をした覚えはねえ。単純にこの女個人の痼癩つていう線が強えが、最悪の事態も考えなきやいけねえか)

アインは唯の戦闘狂ではない。

彼は戦争屋である。

戦争という理不尽を、自分が確実に生き残れる範囲での戦闘を楽しむ彼の思考は、ここが引き際かと念を押していた。

そもそも、彼が白式を用いて楯無と戦闘を行ったのは、白式のエネルギーが切れた時に備えて、予め脱出用にツヴァイの待機状態を装着していたからである。

自分が楽しめる戦闘を行い、それも満足した状態で止めを刺そうとしたら、本来味方である筈のIS乗りが自分に敵対してきた。

目の前の少女と戦闘を行えば、その場では勝てても、クライアントとの関係性が悪くなり、最悪契約解除も在り得る。いや、下手したら既に解除されている可能性すらある。(さて、どうしたもんか……)

生成した火球を此方に向けて来るダリルに注意しつつも、アインは本館の方向を一瞥する。

(銃声や爆音もほとんど止んでやがる。千冬姉がどうやらこの聖戦のからくり気付いたらしいな、となりやあ長居は無用)

今頃アリーナでは自分の元姉が絶叫を上げている頃だろうと思いつつ、この場から退く決心をしたその時、新しいIS反応が飛来してきた。

『ツ！』

セシリアも、シャルロットも、ダリルも、そしてアインも、突如ハイパーセンサーに表示された新たなIS反応に警戒する。

おそらくは雇い主側のIS乗りであろうが、この状況では敵か味方かは分からないので、アインは要注意の目線で飛んでくるISをハイパーセンサーで注視する。

「あれは……まさか!？」

ハイパーセンサーの拡大カメラ映像に映った、その見覚えある蝶のようなシルエツトを持つ機体にセシリアは思わず驚愕する。

BT二号機『サイレント・ゼフィルス』。

シールド・ビットを試験的に搭載した機体であり、その基礎データには一号機であるセシリアのブルー・ティアーズが使われている。

「あ……ああ、ついに！」

最初こそ驚愕の表情であつたセシリアであるが、途端にその表情は歓び変わる。

「ついに、ついに英国が私とアインさんを迎えに来たのですね!!」

とうとうこの時が来た、と言わんばかりにセシリアは喜ぶ。

これですつと、祖国でアインと共にいられると、そんな勘違いを抱きながら、彼女は狂喜していた。……そんな自分を心底憐れむような目で見るシャルロットの視線に気づかず。

高速で接近してくる蒼い蝶が、ブルー・ティアーズと同じBTエネルギーライフルを取り出す。

その照準は、ダリルのヘル・ハウンドへ向けられていた。

キュイイン！ その銃口から飛び出したきたのは、赤色のビーム弾。

そのビーム弾は、ダリルが形成していたヘル・ハウンドの火球を打ち消した。

「ちっー」

火球を打ち消されたダリルは舌打ちをすると共に、アイン達の横に並んだサイレント・ゼフィルスを睨み付ける。

サイレント・ゼフィルスの搭乗者の顔は見えない。

アインの打鉄改 *zwei* と同じく、バイザー型のハイパーセンサーによつてその素顔を隠れていた。

「どういう風の吹き回しだ、レイン」

誰もが凍り付くような冷たい声で、サイレント・ゼフィルスの搭乗者がダリルに問う。その言葉を聞いたアインは、とりあえずスポンサーが自分との契約を破棄しようとしている訳ではない事が分かり、そのままダリルの方をみた。

「邪魔すんじゃないやねえよエム。黒焦げになりたくないやあそこを退け！ 私はコイツに用があるんだ!!」

「ふん」

答えるダリルに対して、エムと呼ばれたゼフィルスの搭乗者は鼻で笑う。

「もつと骨のある奴かと思つていたのだがな。情に流されて牙を抜かれるとは、猟犬の名が聞いて呆れる」

「んだと?」

エムの挑発めいた言葉にダリルは眉を潜めて激昂する。

彼女の中でも頭の整理が追い付かず、ただ己の感情に踊らされているように見えた。

「おい、コイツは一体どういうこった?」

「詳しい事はスコールにでも聞け」

詳細の説明をエムに求めるアインであったが、エムは取りつく島もなくそうとだけ返す。

そんな彼女を見てこれ以上聞いても無駄だと判断したアインは、後で雇い主であるスコールから根掘り葉掘り聞かせてもらうかと判断した。

「つたく、大将もちゃんと飼い犬に首輪付けとけよ……、おら、行くぞ」

「……………うん」

エムに続き、ボーナズ対象であったシャルロットにそう呼びかけ、アインもまたこの地から離れようとする。

火種はもう十分に撒いた、もうこの学園に用はない。

後は戦火が広がっていくのを眺めさせて貰おうと、空に飛びあがろうとしたその時だった。

「待てよテメエ、降りてきやがれエ!」

相手にされずに逃げられるのが堪らなかつたのか、アインの後を追おうとダリルもま

たスラストを吹かして飛び上がり。

その進行は、一機のI Sによって阻まれた。

「なッ、テメエ！」

「アインさんの邪魔は、させませんわ！」

ダリルの行く先を阻んだのは、ブルー・ティアーズを駆るセシリアだった。

余談であるが、少しブルー・ティアーズに関しての説明をしよう。

現在、イギリスが開発した第三世代型のB T機は二基、そして現在開発中のB T機が一機存在している。

開発済みの一号機は言わずもがな、セシリアの『ブルー・ティアーズ』。

開発済みの二号機はエムの『サイレント・ゼフィルス』。

そして、現在開発中のB T三号機『ダイブ・トウ・ブルー』。

例外としてここにもう一機、アインのツヴァイが存在するが、それはイギリスが開発したのではないので除外しておく。

そもそもセシリアがこうしてブルー・ティアーズを渡されてこのI S学園に送られて来た経緯として、『盗まれたサイレント・ゼフィルスの仕切り直しの為のデータの取り直し』という意味合いもあった。

その仕切り直しのデータをもとに今現在B T三号機の開発が進められている訳なの

だが、そもそも国側としての自国の第三世代機が盗まれた時の事態を想定していない訳がない。

サイレント・ゼフィルスが盗まれてしまったのも、要は力及ばなかったただけの話に他ならない。

ならば、そのサイレント・ゼフィルスの中にブルー・ティアーズのデータが入っているとすれば、残るブルー・ティアーズの有用性はもはや試験的なものに限定されてくる。そして、もしソレを盗られた時、その技術を盗まれない為の対策を、イギリスが怠っている訳がなかった。

つまり――

「デメエ、まさか!?!」

ハイパー・センサーに映ったブルー・ティアーズからの異様なエネルギー反応を感知したダリルは、急いでセシリアから距離を取ろうとする。

「分かってんのか!?! そんな事したらデメエは……!!!」

セシリアが何をしようとしているのかを悟ったダリル。

この女正気か、とそんな疑問だけが頭の中を支配する。

「大丈夫です。だって、もしもの時は、アインさんが助けて下さりますもの」

それは何の根拠も、確証すらない発言。

しかし、彼女はそれでも信じていた、妄信していた。

何故なら、アインだから——セシリアにとつての絶対の存在神であるアインならどんな場所であろうが助けてくれると、彼女は信じ込まされていた。

「助けるもクソもねえだろ道化女が！ テメエの自爆からどうやってテメエを助けるんだよ!？」

「アインさんなら、やりますわ!」

——駄目だこの道化女、もう完全にイカレテやがる!!

もう彼女の血迷った行為を止める事できないと判断したダリルは即座にセシリアから距離を取ろうとする。

せめて後ろの姉妹からだけでも離さんとしたその時だった。

「……………え、お……………!」

「お姉ちゃんっ!!」

突如として、息を吹き返した人間がこの場に一人。

体中から血を流し、割れたアクアクリスタルの破片が突き刺さっていても尚、その少女は必死に声を出す。

「目え、を……………!!」

「お姉ちゃん、動いちゃダメ!!」

必死に妹が呼びかけるも、それでも楯無はそれを必死に口にする。

やがて体中に走る激痛が迸り、その衝撃で一氣に意識が覚醒した楯無は、彼女に残酷な真実を伝えた。

「目を、覚ましなさい!! セシリア・オルコットオ!!」

スパイとはいえ、自分達姉妹を助けてくれた彼女に報いる為に、楯無はそれを彼女に伝える。

それが彼女にとってどんな残酷な真実でも、これしかなかった。

「三年前の、越境鉄道の横断事件——!!」

「その事件を起こすように指示して、貴女の両親を奪ったのは、この男よオ!!」

それは、とてつもなく残酷で、受け入れがたい真実だった。

「……………え？」

一瞬、何を言われたのかセシリアには理解できなかった。

ハイパー・センサーに表示された爆破までの残り時間すらも見えず、ただその言葉だけで、彼女の世界は一時停止した。

(アイン、さんが、あの事件の……犯、人……?)

何を言っているのか全然分からなかった。

一字一句、それがどういう意味なのかすらセシリアには分からず、困惑してしまった。本当にどういう意味なのか分からなかった。

分かるのに、分からなかった。

発情のあまり熱を発していた身体が、一気に凍り付いていく。彼に汚され、全てを捧げたこの身体が、途端に動かなくなる。

(そんな……)

告げられたその真実を、セシリアは受け入れられない。

(そんな、わけ……!!)

今まで彼と過ごした思い出を振り返り、セシリアはその事実をこの短い時間で幾度

と、数千回と、一秒に何万回もの速さで否定し続ける。

そして、ふと、ある言葉を思い出した。

『わたくしも三年前に依頼で行ったことがあります、確かにあそこはいい所だ。この学園に入学する前に回った日本の名所にも勝るとも劣らない——』

あの時、愚かしくも彼の存在を否定していた自分。

その時の、まだ猫を被っていた時の彼の台詞。

そう、三年前だ。『三年前』である。

「あ……あ、そ、ん、な……」

否定する言葉とは裏腹に、セシリアの頭は段々と冴えて来る。

元々エリートなだけあって、一つのキーワードを与えられてしまえばあつという間にその事実にとどり着く。

(あの事件……: 当時はイギリス政府と協力関係にあったP M C「ビリーヴ」の仕業かと疑われ、そのP M Cは倒産した。だけど、結局最後まで証拠は出なかつた……)

頭の中で蘇ってくる情報を、次々と整理していく。

当時のイギリスの情勢、組織、I S 関連の情報。

それら全てを持ち前の頭脳で整理していった。

(けれど、あのP M Cはそれ以前から色々と嫌な噂がありましたわ、まだ年端も行かない

子供を少年兵として雇って……少年、兵？)

少年兵、その単語にセシリアはハツとなった。

アインは自分と同年だ。

アインの腕からして今の年以前から戦いの中で生きてきた事くらいは想像が付く。

つまり、当時12から13歳であつたアイン・ゾマイルが犯人でも、十分に筋は通るのである。

「あ、あ、ア、イ、……そ……んな!!」

至つてしまった。

その回答にたどり着いてしまった。

わずかなその短い時間で、頭が冴えたセシリアはそこで犯人が誰なのかに至つてしまった。

思えば、事前に調べていたにしても、彼は自分の事を知り過ぎていた、両親が死んだ今他の誰よりもセシリアの事をよく知っていた。

考えれば考える程、セシリアの脳裏で、アインが犯人像として挙がつてくるのだつた。

「ア、ア、インさん……」

それでも認めたくなかつた。

認めたくなかつたから、本人に聞くことにした。

頼むから否定してくれと、必死に懇願するように聞いた。
「本当、なの、です、か……？」

震える口を必死に動かし、セシリアは問う。

ツインアイが赤く光り、セシリアを見下ろした。

そして。

「……ククツ……」

「……——ハハハハハハハハハハハハハハハハハアツアツ
!!!!」

笑いをかみ殺した後、もはや耐えきれんとばかりに、大声で笑い始めた。

その表情こそマスクに隠れて見えないものの、その下は愉快そうな笑みがある事は誰しもが想像できるであろう。

まるで今までかみ殺してきた笑いを一気に吐き出すように、セシリアとのこれまでの時間を嘲笑うかのような笑いが響いた。

その笑いが、全てを表していた。

「あ……あ、あ……い……」

やっと気付いたのかと言わんばかりのその笑いに、セシリアの身体に段々と力が入っていく。

騙されていた悲しみと、屈辱と、怒り。

多くの負の感情がセシリアの理性を支配していく。

「クククツ、ハハ、ちよくちよくヒントを与えてやってたのにテメエという女はよオツ！
ハハハハハハ、この後に及んでやっと気付きやがった!!」

全て、嘘だった。

全て、この男の掌の上だった。

あの時、越境鉄道事件により両親が死に、セシリアの人生は大きく狂った。死に物狂

いの努力をし、両親の遺産を守るために様々な勉強と努力をしてきた。

そして、その功績を政府から認められて、こうして専用機を与えられて、このI S学園に入学してきた。

入学して、挫折して、運命の男と出会い、幸せだった。

けど、その運命の男は自分の人生を狂わせた越境鉄道事件の犯人だった

セシリア・オルコットという少女の人生は、あの事件から今日これまでずっと、このアイン・ゾマイルという男に弄ばれて来たのだ。

「う……ぎいッー！」

人の音声すら発するのが難しくなった。

今まで神のように、愛おしい運命の人のように思っていた心が、一気に崩れ落ち、霧散していく。

この学園生活で彼と過ごしてきた幸せな思い出さえ、それは黒いドロドロに変わっていく。

「あ……が、あッー！」

全てが壊れていく。

セシリア・オルコットという少女を構成していた全てが、まるで嘘であったかのように壊れていく。

今までに手にしてきた栄光も誇りも、全てが土となって還っていく。
そして、残ったのは憎しみだけだった。

「があああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアああアツツ!!?!」

人の音声を失う。

理性を失う。

憎しみに従う本能のみが、今のセシリアの全てだった。

「アツ、アツ、アアツ!!!」

そんな野生じみた掛け声と共に、BTエネルギー・ライフル『スターライトmk-III』を連射し、アインを撃ちぬかんとする。

射撃、射撃、射撃、射撃。

人としての理性を失ってもさすがは代表候補生と言った所だろうか、その射撃には寸分の狂いもない。

しかし、相手が悪かった。

クラス代表決定戦の時と同じように、アインはスレスレと舞うように躲していく。

どう動けば最低限の動作で回避できるかを分かっていると云わんばかりに回避していく。

ライフルでは当たらないと思い、痺れを切らしたセシリアはついに己の十八番を使った。

「お行きなさいいいいッ!!! ビットオツ!!!」

憎しみの円舞曲ワルツにその雫を乗せる。

放たれたのは四つのレーザー・ビットと二つのミサイル・ビット。

それらの銃口から一斉に弾幕が発射される。

それだけではなく、なんとセシリア自身も機体を移動させながらエネルギーライフルを連射してきた。

ただ踊らせるだけではなく、自身もビットと共に円舞曲ワルツを踊る。

皮肉にも、その理性さえも食らう強烈な憎しみは、セシリアに確かな成長と力を与えていた。

しかし、戦場で生きてきたこの男にはまったく通じなかった。

戦いという言葉が本能の奥底まで根付いているこの男には、一切通用しなかった。

七つの砲口から放たれる弾幕、アインはそれを次々と躲していき、弾幕が僅かに緩ん

だその隙を突いて、セシリアから距離を取り、ソレを放つ。

「行けよ！ ファングウツ!!」

腰のコンテナウイングから三つの「^{ファング}牙」が飛び出した。

左右から放たれた牙状のビットは一点に集まりながら、セシリアの機体へと飛来する。

一点に集まったそのタイミングを狙ってセシリアはエネルギーライフルと四つのレーザー・ビットで一斉に射撃するが、その射撃を誘っていたかのように、ファング・ビットは少量ずつ分散してそれを回避。

セシリアのビットとライフルの発射間隔の隙間を狙い、その全身翼を展開させ、真紅色のビームが放たれた。

放たれた三つのビームはその弾道を曲げながら複雑な軌道を描いて、セシリアの方へと向かう。

「くっ！」

曲がったビームを何とか避けようとするセシリアだが、その前にビームの方がセシリアを避け、また違う角度から遅い、セシリアを翻弄する。

「このおツ!!」

そして、セシリアは気付かなかった。

彼女が、フレキシブル偏光射撃による曲げられるビームに翻弄されている間、そのビームを放った

ビット本体がエネルギー・ブレードを形成し、セシリアに襲い掛かっているという事に。

「ギツ、グツ、アアツ!!」

曲がるビームはただの陽動、本命はエネルギー刃を形成して襲い掛かってくるビットそのもの。

エネルギー刃を形成したビットは、それぞれブルー・ティアーズの両肩のコンテナ、および背部のスラスターにそれぞれ命中する。

「ガアツ!?!」

スラスターを破壊され思うように動かなくなったブルー・ティアーズの周囲から、先ほどまでセシリアを翻弄していたビームがトドメと言わんばかりに命中する。

そして、うまく動かなくなったブルー・ティアーズは、そのままダリルと更識姉妹がいる方へと落下していった。

「後は好きにしなア!!」

放った三つのファンング・ビットをウイングコンテナに戻したアインは、落下していくブルー・ティアーズを一瞥し、そう言い残す。

そのまま彼は、エムやシャルロットと共に上空へと飛び去って行った。

『不味いッ!』

落下予測地点にいた三人は同時にそう思っただろう。

落下していくブルー・ティアーズ。

既に自爆設定をオンにされているそれを戻すことは既にできない。

ブルー・ティアーズの自爆時間まで、3、2、1……

その爆発音と共に、三人の眼前でブルー・ティアーズは弾け飛んだ。

聖戦—終幕—

ここに、聖戦は終わりを告げた。



シャルロット・デュノアは、爆発した儂き蒼い雫を見つめる。

列車事故によって両親を失い、色々な苦勞と努力を重ねて代表候補生としてこの学園に入学してきたにも関わらず、そこに運悪く同級生として入学していた列車事故の犯人に弄ばれ、洗脳され、依存させられ、その体を犯され、多くの仕打ちを受けた少女の最後は、ひどく呆気のないものだった。

(憐れだな、本当に)

心底から、同情してそう思った。

心の底から、彼女は代表候補生である己に対して誇りを持っていただろう。その誇りを持つきっかけとなった列車事故から今日までの人生全てにおいてその列車事故の犯人の掌の上だったのだから、最早道化を通り越して滑稽と言わざるを得ない。

(いや、滑稽なのは僕か)

自分も人の事は言えないかとシャルロットは溜息を吐く。

選択肢などなかった、許されていなかった。……そんなものは只の言い訳に過ぎないだろう。

それでもシャルロットは、己が生き残るために多くを犠牲にする道を選び取った。

今でも、頭の中では「これは仕方のない事なんだ」と己に言い聞かせている。言い聞かせなければ、心が壊れそうだった。

壊れそうな心を護りたくて、考える事をやめた。

(アイン・ゾマイール――)

自分と一緒に撤退するように勧めてきたアインを見て、少なくとも彼はあのイギリスの少女と違って自分を切り捨てる算段はなかったのだと知り、シャルロットは少なからずほっとした。

自分が生き残った――そういう観点のみで見れば、何も考えずにアインに従う事は正しかったと言える。

考える事をやめて、アインの指示通りに動こうと努めた。

自分が一体何をしているか――そんな事を考えたら今にも壊れそうだから。

考えた上でこんな行為を平気で、むしろ楽しんで行う彼の傍にいれば、皮肉にもこの

心は保たれるだろうと、少なからずそう思っていた。

筈だった。

「どうして……」

自分のリヴァイヴカスタムを含める三機のISが上空に飛んでいく中、ハイパーセンサーの集音システムが一人の少女の声を拾う。

「おかしいよ、どうして……!!」

そのしゃくり声から、涙を流しながら叫んでいる事が分かる。

聞きたくない、そんな思いを過りながらも、シャルロットはその慟哭を聞いてしまった。

「どうして、こんな事ができるの!? こんな血を流して、こんなに沢山人を傷つけて、どうしてそんな風に平気で逃げる事ができるの!!」

——その声が、自分にも向けられているという事を、考えたくなかった。

ふと隣にいる二機のIS乗りを見つめる。

アインと、エムと呼ばれた少女。

アインは表情こそ見えないが動揺している様子もない、エムと呼ばれた少女もまたそのバイザー型のハイパーセンサーのおかげで表情が分からないが、心なしかその声を鼻で笑っているようだった。

そんな彼らを見て、これはきつとあの二人に向けられているのだと、そう思っていた。「おかしいよ、貴方達!!」

ドクン、と心臓が跳ね上がり、胃を締め付けられるような錯覚に陥る。

「アナタ…… “たち” ……?」

ようやく、その声に自分も含まれている事に、気付いた。

その声を最後に、更識簪の叫びは聞こえなくなった。



「どうして……どうしてこんな事が……!!」

ブルー・ティアーズの爆発に巻き込まれ、間一髪でヘル・ハウンドの火球バリアによって命を救われた二人。

そんな中で、煙が晴れた後に見えたのは、上空に飛んで消え掛かっていた三機のISだった。

まるで己の罪から目を背けるように、己の罪など知らんと言わんばかりに飛んでいく三機を前に、簪はそう怒鳴らずにはいられなかった。

簪の怒鳴り声は三機のISが見えなくなっても続いていた。

「やめろ、更識妹」

「……ダリル、さん？」

「あいつらには、何を言ったって無駄だ……」

何を言ったって無駄、それは彼らの仲間であるダリルだからこそ、実感がこもっていた台詞だった。何故なら、言っている本人もまたその部類の人間であるのだから、猶更である。

本来ならば、ダリルはこういう人間ではなかった、あの空の彼方に飛んでいった二人と同類の人間である筈だった。

「ぐ、う……！」

「ッ、お姉ちゃん!!」

さっきの必死の命乞いで力を使い果たしたのか、自分の妹の無事を確認した楯無は再び気絶してしまう。そんな楯無に心配そうな声で叫ぶ籬。

ひどい怪我だった。

多くの弾痕や切り傷が刻まれ、更にあの緋色の打鉄から射出された“フアング”とやらで砕け散ったアクア・クリスタルの細かい破片までも突き刺さっている状態である。

少なくとも常人であれば四、五回は死んでいる。

そんな姉妹の様子を見ていたダリルは、やがて口を開く。

「向こうの銃声が止んでいる。どうやらこの聖戦も終わりらしい」
「え？」

「間もなく助けが来るだろうさ。それまで何とか耐えてくれと願つとけ」

そう言つて、ダリルはヘル・ハウンドを解かないまま簪から背を向ける。

そんなダリルに簪は思わず手を伸ばして呼びかけた。

「あ、あの……！」

「……」

そんな簪の呼びかけ、背を向けたダリルはふと立ち止まる。

簪の質問に答える意図があるのだと暗に示していた。

「貴女は、あの人達と……どういう関係なんですか？」

先ほどの彼らとこのダリルという先輩のやり取りはどうみても既知同士のソレでしかなかつた。

先ほど助けてくれたこの先輩が、まさか彼らの仲間とは簪も思いたくない。故に、聞かすにはいられなかつた。

「それは、そこに倒れているテメエの姉にでも聞け、どうせさっきのでバレただろうしな」

「ッ!？」

その一言が、正に答えだった。

思わず己の身を楯無の盾にするようにして身構える簪であったが、その前にダリルがヘル・ハウンドのスラスターを吹かして上空へと飛んで行ってしまった。

「……悪くなかったぜ、お前らとの学園生活も……」

飛び際に残したその言葉は、簪には聞こえなかった。



学園中から歓声が沸き上がる。

彼らの足下には無数の学友と来賓の屍が積み重なり、その屍を踏みつぶしながら、彼らは勝利に酔っていた。

「ブリュンヒルデ様が降臨なされた！」

「我らが神よ!!」

「ようやく私達を御認めになってくださったのですね!」

勝利の歓声が沸き上がる。

洗脳され、神を信じ込まされ、真の神を拝む事が出来た彼女達はひたすらに歓声を上げる。

「ブリュンヒルデ様！　ブリュンヒルデ様！　ブリュンヒルデ様！」

鉄槌を、神を冒瀆せし不信仰者共に鉄槌を。

雷を、神を貶めし冒瀆者に雷を。

裁きを、ブリュンヒルデの名を汚せし不埒者に裁きを。

鉄槌を下して、雷を落として、裁きを下した。

たくさん殺した、たくさん犠牲にした。

「不信仰者共の罪は私達が裁いて参りました、ブリュンヒルデ様！」

「ブリュンヒルデ様！　ブリュンヒルデ様！」

神の贄となるのであれば、例え不信仰者共であろうと無駄死にはない。

彼らは神の贄となり、その魂は聖なる神の御許へと導かれる。

戦いを通じて、誰もかれもが神の御許へと行くことができる、そんな世界を築く事が

できた。

「これで、不信仰者共たち、彼らの魂も救われるのですね!？」

「もう、殺さなくて済むのですね!？」

「ああ、我らがブリュンヒルデ様！」

それは、彼女達にあつた罪悪感と涙であつた。

神を信じない不信仰者共にしてやれることは、神の代行者である自分達が鉄槌を下す

事によって、彼らを神の御許へと導いてやる事だった。

けれど、もうその必要はなくなつた。

この世に神が降誕したのであれば、それは即ち——

「これで、私達もずっと神の御許にいる事が許されるのですね!？」

「ああ、何て幸福!!」

「ブリュンヒルデ様に祝福を!」

「この地はもはや貴女様以外の何者であつても侵す事はできません!!」

この世にブリュンヒルデが降誕したのであれば、即ちこの地は神の御許となつたのだ。

「ああ、この勝利に祝福を!!」

「このヴァルハラに祝福を!」

「このブリュンヒルデ様に、盛大なる祝福を!!」

尚も歓声は続く。

狂信者たちは心の底からただひたすらに喜ぶ。

その狂信者たちの影の中に、彼らを狂信者たらしめた元凶は既に存在していなかつ

た。

生き残った生徒達は、その様を呆然と見つめる事しかできなかつた。

怪我を負った生徒達も、瓦礫に埋もれて動けない生徒達も、その狂信者たちの歓声を聞いていた。

『狂っている』

残された彼らは一斉にそう思った事だろう。

彼らの歓声は、自衛隊の護送車達が到着するまで止むことはなかつた。



「これは……いつ……たい……!?」

とある飛行ラボの中、モニターに映し出された狂喜の映像を見せつけられた筈は、ただ呆然と見つめる他なかつた。

これが、今現在 I S 学園の光景だという事が信じられなかつた。

血と臓物が散乱し、その上で狂信者たちが歓声を上げている。

「どういう、事だ……」

その映像から目を逸らし、箒は己にこの映像を見せてきた人物へと問う。

「どういう事なんだ、姉さん!？」

「あれ、愉しくないの？ 箒ちゃん。これは戦争っていうんだよ？ 人と人が争って、たくさん殺し合って、たくさん化かし合って、命を奪い合う。まごうことなき戦争の時代がやってきたのだ、なはは♪」

「ふざけないでくれ!! こんな物を見て何故笑ってられるんだ貴女はっ!!? 私は……わたし……は、ウ……プツ……!」

「あれ、あれあれ!?! クーちゃん、新しいエチケツト袋プリーズー!」

「かしこまりました、束様」

ドタ、と膝を床に付いて口を抑える箒を見た束は慌てて、養子であるクロエにエチケツト袋を持つてくるように言う。

返事をしたクロエは急ぎ足で大量のエチケツト袋を手元に大量に抱えて、その内の一つを箒に渡した。

「どうぞ、箒様」

「ッー」

差し出されるや否や、素早い動作でクロエからエチケツト袋を奪い取った箒はまた口から嘔吐物を吐き出す。

吐き出した嘔吐物を見ずにエチケツト袋の紐を閉め、箒はハアハアと息を上げたまま、束を見上げてキツと睨み付けた。

「うん、なにかな―箒ちゃん?」

相変わらず何を考えているのか分からない胡散臭い笑みに箒は眉を潜めるも、それでもさつきから聞きたかった事を聞く。

「姉さん」

「なーに?」

「この事件は貴女が起こしたもののなのか、そうでないかはもう聞かない。だが、一つだけ聞かせてくれ。アイン……いや、一夏は無事なのか!」

その質問に、束は一瞬だけ驚いたように目を見開き、やがて少し悲しそうな目をするが、それもすぐにいつものような笑みに変わった。

「……そつか、すごいね箒ちゃん。ちーちゃんですら気付こうとしなかったのに、いや、認めたくないだけかな、ちーちゃんの場合は……」

「何を訳の分からない事を言っているんだ!?! 私の質問に答えてくれ、一夏は無事なのか!?! 今どこにいる!?!」

あの光景を見せられた筈だからこそ、生きていると分かった幼馴染の事が心配で心配で仕方なかった。

今どこで何をしている？

ちゃんと生き延びられているのか？

ちゃんと安全な所へ避難しているのか？

そんな思考が今の筈の全てだった。

「アハハハハハ、何いつてるの筈ちゃん？」

「何がそんなおかしい!! 私に至って真面目な事を聞いている!!」

「アハハ、そうだったね。けど、何でそんな事聞くの？」

「そもそも、この事件を起こしたのは他ならないつくんだよ？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

『この事件を起こしたのは——』その後が、よく聞こえなかった。聞きたくもなかった。

あまりにも分からなくて、頭的时间が停止した。

「おい、箒ちゃん、ダイジョブー？」

箒の顔を覗き込みながら、ひらひらと手を振る束。

「……………姉さん、ワタシは冗談は好きではないぞ？」

「冗談じゃないんだけどなー、まあいいやー！」

よっこいしょ、とコンソールの上に座り込み、束は箒を見下ろす。

「そんな箒ちゃんに少し昔話をしてあげる。むかーしむかーし、ある所に一人の天才とその友人がいました」

「ある時、天才は思い付きました。天才はあるモノを開発し、それを使って宇宙へ行きたいと考えたのです」

「しかし、如何な天才であろうと、そのたかが一人の資金力では限度があり、それを開発するのも一機が限界でした。ですから、天才はそれを世に発表して、それを広めて世界に宇宙開発をさせようと考えたのでした」

「しかし、公然の発表場で、自分が開発したそれを発表した天才は、世間から馬鹿にされるようになりました。世間は天才の発表を認めませんでした。バカバカしい、御伽噺だと、まるで相手にしなかつたのです」

「天才はまだまだ子供でした。そんな彼らの言い分についてムキになってしまい、とうとう世界中の軍事基地をハッキングして二千発以上ものミサイルを飛ばし、自分が開発したそれに友人を乗せてそれを撃墜させたのです」

「ソレを危険視した世界各国は、続けざまに戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基を天才の友人が乗ったソレに送り込みましたが、全て無力化され、世界はついに天才とその友人からの敗北を認めざるを得ませんでした。後にコレは『白騎士事件』と呼ばれるようになります」

「天才が開発したソレ—— I S の開発の着手、それを行った各国はついに独自の I S の開発に成功しました。しかし、I S には女性にしか乗れないという欠落がありました。これによって、I S に乗れる女は偉くて、それに乗れない男は弱い、所謂女尊男卑の世が広まりました」

「ある時行われた I S の世界大会で、それに参加していた天才の友人の弟が誘拐されました。彼らは女尊男卑反対を掲げるテロ組織で、人質として友人の弟を誘拐したのです」

「誘拐された友人の弟は、テロ組織から訓練を受け、少年兵に仕立て上げられました」
「天才の友人と同じく、底知れない戦闘センスを持っていたその弟は、様々な戦場で望まない戦いをさせられる過程で、段々と心が戦場に侵されていきました。しかし、幸いにもその日は終わりを迎えたのです」

「結果的に、その友人の弟は無事救出され、天才の友人の元でまた二人暮らしする生活に戻ってきました。しかし、既に女尊男卑の世に染まっていた二人の祖国の女たちは、その天才の友人の弟であるその子を疎み、ついにはその存在を許せなくなつて手を出してしまいました」

「友人の弟は、戦場に染みついた体に抗えずに、その女たちを殺してしまいました、一人残らず殺してしまい、ついには泣いて、絶望して、狂つてしまいました」

「彼は絶望したのです。もう姉の元には自分の居場所がないことに、周りがそれを許してくれない事に」

「そして彼は気付いたのです、心の何処かで戦場を望んでいる事に。自分の居場所も、うそこしかない事に気付いてしまったのです」

「彼は、『戦争屋』になりました」

「その後、彼は多くの戦場を渡り歩き、今もなお紛争を起こしてはそこに飛び込んで戦を楽しむ日々を送っていたとき。めでたしめでたし——」

「——ッ」

ヒュン。途轍もない速さで、真剣が振るわれた。

いつものよりも、何倍も、何十倍ものスピードで迷いなくソレは、東へと振るわれた。

ピト。しかし、その振るわれた真剣の刃を、東はたったの二本の指で掴み、ソレを受け止めた。

「……………さ……い!!!」

受け止められる真剣の刃。

カチカチと刀身が揺れている事から、それにどれだけの力が入っているかは想像が容易かった。

「許さないッ!!」

やがて、少女の怒りは爆発した。

「許さない赦さないユルサナイゆるさないッ!!!」
姉さん、私は貴女を絶対に許さないッ

!!!」

受け止められた真剣を引っ込め、箒はまた真剣を袈裟に振るい、束を切り刻まんとするが、束はそれを曲芸じみた動きで躲していく。

凄まじい身体能力に驚きつつも、その怒りと憎しみを抑えきれない箒はただひたすらに束に真剣を振り続ける。

やがて、また真剣は止められる。

「一生貴女を恨み続けてやる!! この身が朽ちても、滅んでも、貴女が死んでも生涯呪い続けてやるッ!!」

距離を取り、再び剣を振るう。

怒りのままに、憎しみのままに、少女は剣を振るい続けた。

「返せエツ!!」

「返せ返せ返せカエセエツ!!!
全部をオ——!!!」

私の一夏をツ！ 私の全てをツ！ 私が貴女に奪われた

上段に剣が振るわれる。

力一杯振り下ろされたソレすら、容易く受け止められた。

「返せエ、返してよオ……!」

「箒、ちゃん……!」

箒は泣いていた。

その顔を見た束は、今度こそ笑みを崩し、つらい表情になってしまいが、それが箒に伝わる事はなかった。

いよいよ見ていられなくなった、束は、もうこれで終わりにしようとクロエに命ずる。

「おねがい……クーちゃん……」

その「おねがい」は、頼みではなく懇願であるかのようにクロエは聞こえた。

クロエは黙って、箒の首筋に手刀をお見舞いする。

「ガッ、あ……」

そのまま、箒はうつ伏せに倒れてしまった。

「東様、ご無事ですか？」

「……」

東からの返事はない。

ただ黙って、気絶した自分の妹を見つめるだけだった。

やがて――

「ッ、東様!？」

グラ、とふらつくような動作から、後ろ向きに倒れそうになった東の身体を、クロエは慌てて受け止め、東の顔を覗き込む。

「東様、しつかりッ!!」

「アハハ……思ったより……堪えるね、これ……は……」

苦笑いをしながら答える東であるが、クロエの目からみてもそれはいつもの東ではない。
い。

明らかに息が上がっており、些か苦しそうだった。

「……胃が、はち切れそう、こんなの、初めて、だなあ……アハハ♪」

「お願いです、東様! もう、こんな事……!」

「やめないよ、クーちゃん」

苦しむ主の姿にとうとう耐えきれなくなったクロエは、もうこんなバカげたことはや

めましようとして東に進言しようとしたが、その前に他ならぬ東によつてそれは断られた。

これでいい、もうこれでよかつたのだ。

妹に真実を伝えて、嫌われる。

どんな形であれ、東は妹との“けじめ”を付けた。

これでやつと篠ノ之 東は織斑一夏と織斑千冬に向き合う事ができる。

「もう、止まらない、止められない……!」

「待つてね、いっくん、ちーちゃん」

——この私が、作つてあげるから。

——東さんですら邪魔できない、介入できない、二人だけの^{死合}時間を、^{戦争}世界を、作つてあげるから。

「アハッ♪ アハハハハハハハハハハハハッ!!」



ばしいん!

高層マンションの最上階。

豪華な飾りで溢れかえっているその部屋で、スコールは一人の少女に平手打ちをした。

平手打ちを受けた少女はドアの所まで吹き飛び、崩れ落ちたままスコールの方を見上げた。

「叩かれた理由は分かるわね、レインン？」

「……」

再び少女の元へと詰め寄り、スコールは少女を見下ろす。

少女もまたしゅんとした様子でそのままスコールを見つめる。

普段は余裕な雰囲気醸し出している彼女であったが、今回は目に見えて怒っている事が少女には分かった。

「今回の貴女の行動。下手すれば彼から契約を破棄されて、せつかく取り込んだ技術者たちを手放す事態が起こる事だって在り得たわ。何故、彼の邪魔をしたの？」

「……」

「ハア、理由くらい言いなさいって。私だって、せつかく裏で手を回した努力を無駄にするような行動を取られて怒らない程やさしくはないわよ？」

溜息を吐くスコール。

「……気に入らなかつたんだ」

「……」

ゆつくりと口を動かし始めた少女の言い訳を、スコールは黙ったまま聞く事にした。

「どうして、どうして自分の手でやろうとしねえ、どうしてあんな風に無垢な女どもに罪をかぶせる事ができる。楽に殺してやるんだつたらともかく、一生苦しむような心の傷と罪悪感を負わせて、何が楽しいんだよ！」

「……」

「笑ってやがるんだよ、アイツ！ そんな女どもを戦場の上から見下ろして笑ってやがった！ フォルテまで巻き込みやがった……もう我慢できなかつたんだ!! それで、その……」

「彼に敵対してしまったと？」

「……」

黙り込む少女。

そんな少女を見ろしながら睨み付けるスコール。

「貴女が彼の邪魔をしたのは今更だからもういいとして、貴女は何故あの子まで連れてきたのかしら？」

少女から視線を外し、スコールは奥の部屋の寝室で寝ているもう一人の少女の方へ視線を移す。

フォルテ・サファイア——スコールの良き後輩にして、ギリシャの代表候補生がそこで寝ている。

あの惨状を目の当たりにして耐えきれず気絶した彼女は、こうしてここまで運ばれて寝かされている。

「このままじゃあ、アイツはあの野郎が起こした戦争に巻き込まれる。代表候補生なんだ、巻き込まれない保障なんてねえ、だったら……」

「それはここにいてもどの道同じだと思っただけだ？」

「ッ！ それは——」

スコールの正論に少女は言い淀む。

そんな少女に、スコールは再度溜息を吐き、少女に指摘した。

「貴女、感化されすぎたわね。この三年間の学園生活に」

「……」

「スパイが聞いて呆れるわ、まったく。おまけに仲良しな先輩後輩ごっこを演じてきたあの子まで連れて来るなんて、相当気に入っていたようね？」

「……」

「凶星を突かっていた少女、ダリル・ケイシー——コードネーム『レイン・ミューゼル』はスコールの指摘に黙り込む。」

「……ハア」

もう何度目の溜息か分からない、とスコールは内心で悪態を付く。

「次はないわよ」

そう思いながら、スコールは手元から取り出したベレッタをレインの前に置いた。

「これは……？」

「貴女がその子を手元から取り出した事とはかくとして、ギリシャのIS『コールド・ブラッド』を組織の元に持ってきた事はウチにとってプラスよ。だから、後は貴女次第」

「私、次第——？」

「貴女があの子なしでやっていけないというのであれば、組織にいてくれるようにあの子を説得しなさい。それができなければ、これで撃つよ」

「……」

黙り込みながら、レインはそのベレッタを懐にしまい込む。

そんなレインの行動を、自分の命令に対するyesの答えと受け取ったスコールはそのままレインの横を通り過ぎて、部屋から出て行った。

「ウチの者が迷惑をかけたわね、アイン」

「構わねえよ。こつちも取引材料の白式を損傷させちまったしな、これで貸し借りなし。また振り出しの契約状態ってわけだ」

「そう言つて貰えると助かるわ」

アインの向かい側の椅子に腰かけ、二人は今回の契約についての話をする。

二人の横には美しき夜景が映つており、そこから見える無数の光が美しく点滅したり、走っていた。

「それにしても、貴方から譲り受けた白式、ひどく損傷していたけれど、一体誰にやられたのかしら」

「更識の姉ちゃんだよ。日本人なのにロシアの代表をしている、あの売国奴の名で有名なミステリアス何たらのパイロットさんだ」

「成程ね。応報、かち合いそのものでは圧倒できて、ISの搭乗経験の差でいっぱい食わされたって所かしら？」

「さすが大将だな。その通りすぎて言い訳できねえぜ、つたく……」

思い出したら腹が立ってきたのか、不機嫌そうに頭の後ろを搔くアイン。

「まあいいさ。今回であの姉ちゃんも戦場の何たるかを思い知つただろう。この借りは

——戦場で返させてもらおうとするさ」

「ふふ、期待しているわよ」

お互い不敵な笑いを浮かべながら、紅茶を飲む。彼らは待つ。

世界に戦火が広がるその時を、世界が戦場になるその時を、ゆつくりと夜景を眺めながら待ち続けてた。

(しかしあのガキ何者だ？ 俺の事知ってるのか？)

夜景を見ながらふと、自分を迎えに来てくれたあのサイレント・ゼフィルスのパイロットを思い出し、アインは少しだけ首を傾げた。

あのパイロットの姿を見た時、自分は表向き動揺は見せなかったが、内心では少し驚いていた。

……一方、向こうは此方の素顔を見た途端、表情こそ変えなかったものの目に見えて動揺していた様子だったので、少し気になった

(中学時代の千冬姉とまったく同じ容姿……そーういや——)

自分の記憶を改めて探ってみる。

これでも記憶力はいい方だが、綺麗に小学一年生から前の記憶がさっぱりとない。戦

争屋になってからそれも気にしなくなっただけで、あのサイレント・ゼフィルスのパイロットを見て、再びその記憶を頭の中で探してみる。

(まさか……)

そして、ある可能性に思い至るアインであったが、すぐにそれを否定して、夜景を見つめなおす。

(フツ、考えすぎか……)

戦痕、広がる戦火

束の間の静けさ

「ですから、詳細な説明を求めます。お嬢様は一体——」

イギリスのとある豪邸の屋敷にて、一人のメイドが政府の関係者と電話を取っていた。

赤みがかった茶髪で肩前まで伸びた揉み上げが印象的な少女だった。

「ふざけているのですか？ 亡くなられたというのであれば何故遺体がこちらに届かないのです。身体がまるごと無くなった訳ではないのでしょうか？」

メイド、チエルシー・ブランケットは多少口を荒げながら質問をする。

さつきから何度もこの質問をしては、その度に見当違いの回答をしてはぐらかしてくる政府関係者に彼女も我慢の限界だった。

「——その一点張りですか。では質問を変えます。貴方方はお嬢様に何をさせたのですか？」

ドスの入った声で、チエルシーは電話の向こう側の相手に問う。

その口調に向こうは多少怖気づいたのか、それとも単に焦っているのか、口調に落ち着きがないのがチエルシーには丸分かりだった。

「I S学園に代表候補生として送っただけ？ ふざけないでください。巷では我が祖国はこんな噂がされているんですよ。『今回、I S学園で起こったテロ事件には、イギリスが密接に関わっているのではないか？』と」

瞬間、電話の向こうの相手がムキになったのか、チエルシーに怒鳴り返す。

しかし、追い詰められているのはチエルシーではなく電話の向こうの相手であるという事は明白だった。

「ドイツやアメリカやフランスも同じような噂が流れてる？ ですが、何故か第一候補に挙がっているのはドイツと私達イギリスでしょう？ それに、サイレント・ゼフィルスの目撃情報までもが上がっているのはどういう事です？」

サイレント・ゼフィルスが盗品である事はチエルシーも予め裏の伝手で調べさせて分かつている事だが、それをあえて伏せて、電話の相手にカマをかける。

「それを何処で知ったか？ 少し調べればわかる事です。しかもこの事件の主犯と思われる人物と、そのサイレント・ゼフィルス、フランスのラファール・リヴァイヴカスタムⅡが共に逃亡したという目撃情報も入手しました」

少し日本の暗部の邪魔が入りましたけどね、という言葉を省き、チエルシーは情報を

入手した経緯を説明する。ここまで踏み込むといよいよ危ないが、イギリス政府とて余裕はない。

もう少し、グレーゾーンまで踏み込んでみようかとチェルシーは試みる。

「ところで、一番最後にお嬢様と連絡を取った時、お嬢様はある人物についてよく話していました。世界で初の男性操縦者、アイン・ゾマイル。彼とは酷く親しい様子でした。勿論、貴方もそれはご存知の筈ですよね？」

電話の向こうからイエスの答えが返ってくる。

「どうやら向こうも自分の主の交友関係は、少なくとも此方側と同じ位には把握しているようであった。」

ならば問題はこの先である。

「まあ、そのような事はどうでもいいのです。単刀直入に聞きます。貴方方はお嬢様に何をさせようとしたのか？ それに対してお嬢様はどのような行動を取られたのですか？ それはお嬢様の遺体が此方に帰ってこないのと何か関係があるのでしようか？」

私が聞きたいのはこの三つです。どうかご回答願います」

「しつこいですって？ 冗談を。貴方方が私の質問に対してはぐらかしてばかりいるからでしょう？ オルコット家に仕える者として、亡くなった主に変わり、それを知る義務が我々にはあるのです。もう一度質問いたします、お嬢様は——」

ツー、ツー、ツー。

チエルシーが言い終わる前に、その電話は途切れる。

結局、政府側はチエルシーの質問に答えなのまま、一方的に電話を切ってしまった。

「……どうでしたか？」

チエルシーの後ろから電話の様子を見守っていた老人の執事が問う。

「駄目ですね。此方の質問に対してはぐらかしてばかり。ですが、明らかにイギリス政府は黒ですね。IS学園でのテロにどう関わりがあるのか分かりませんが、綺麗なお嬢様に関する質問だけは答えようとしませんでした」

「では、お嬢様の遺体については……」

「確証はありませんが、おそらくはないのでしようね。テロによる爆破をモロに受けたか、それとも……」

ガチャ、と電話を取っ手に戻すチエルシー。

表面上は平静を保っているが、その目は明らかに不機嫌である。

「まったく、電話の相手がひどく女尊男卑思考の人間でしたから、貴女に電話を替わってもらったのですが、結果は同じでしたか」

「向こうにとつては男性も、IS適正が低い女性もさして変わらないのでしよう。IS適正が低い私の事も下に見ていたようですし」

「……やれやれ、貴女が実はお嬢様よりもIS適正が高いという事実を知ったらどんな顔をする事やら……」

「主を立てるのも従者の役目。それに、それは口にしないお約束だったのでは？」

「ホッホッホ、それは失礼致しましたなあ、ブランケットメイド長」

誤魔化しながら笑う初老の執事にチエルシーは溜息を吐いて呆れつつ、窓の外にある景色の彼方を見やる。

夜空に美しい満月が昇っており、チエルシーはそこに手を伸ばすように窓に手を当てた。

「やはり、行かれるのですかな？」

「勿論、私の生い立ちを知っている貴方なら分かるでしょう。ここまでされたら、もう止まる訳には行きません」

窓の向こう側の月を掴むように、拳をぎゅっと握りしめる。

あまりに力を入れ過ぎたのか、掌から流れてきた血がガラスを伝ってツーツと流れ始めた。

その血に込められた彼女の怨恚を感じ取った初老の執事は、もう彼女を止める気にもなれなかった。

「お嬢様、仇は必ず」

あの月を掴むまで、彼女は止まらない。

あの^{エクスカリバー}月を掴んだその瞬間から、少女の復讐は転機を迎える。



あの事件から既に一か月半、多くの学生が夏休みを迎える中、元 I S 学園の生徒である彼女達にその平和な夏休みが訪れる事はない。

たとえその夏休み自体が平和でも、彼女達の心には一生癒える事のない傷が残ってしまった。

彼女達の親は嘆き悲しみ、洗脳されてテロに参加した生徒達を恨む。

洗脳された生徒達の親達もまた「ウチの子がそんな事をする筈がない」と現実から目をそむき、被害者の生徒達の親と対立する立場を頑なに取る。

被害者たちの中に来賓も含まれていた故に起こる国同士のがみ合いとは一方に、こんな形でも争いは勃発しようとしていた。

I S の世界に対する影響力がどれほどのものであるのかを、元 I S 学園の教師である真耶は実感する。

既に世界は大きく傾き始めている。

各国で大小違えど、それはいずれ紛争という形に勃発しようとしている。

それを止める手段は今の真耶には存在しない。

もはやＩＳ学園で起こったテロ事件ですらも、今となつては引き金に過ぎない。

そんな問題を、一人で止める力など、真耶は持つていなかった。他の教師たちも同様である。

しかし、だからと言つて真耶は黙っている訳には行かなかつた。

大事な生徒達を放つておいたまま、真耶は何も行動せずにはいられなかつた。

事件後の色々な後処理を終えた後、真耶がすぐに行つたのは被害にあつたの生徒達への家庭訪問であつた。

真耶の姿を見た生徒は三者三様の反応を見せた。

ある者は彼女の授業を思い出して懐かしみながら泣きわめき、ある者は少しだけほつとしたような様子を見せ、ある者は学園の事すら思い出さたくないのか真耶の姿を見た途端恐慌状態に陥る事もあつた。

精神に限つた話ではない。中には片腕を欠損している生徒や、片目を失つた生徒など、一生涯の残る傷を負つた生徒がほとんどであり、よほど運よく逃げ切つて無傷であつた生徒は極々少数だつた。

戦争の傷跡を、自分が勤めていた学園の生徒達に見る事になつた真耶は、心を疲弊さ

せながらも、それを続けた。

IS学園の生徒達は狭き門を潜って入学してきた者達といえど、やはり世界各国から集まっているだけあってその人数は普通の学校に比べれば圧倒的に多い。

やがて、心が耐えきれなくなった真耶は、自分の同僚であり先輩である千冬に頼ろうとしたが、肝心の千冬は何処にもいなかった。

唯一、千冬と以前から親しい仲にあつた生徒、鳳 鈴音に行方を聞いてみたのだが、そんな彼女ですら千冬の行方が分からずに途方に暮れているようであつた。

この一か月間、真耶は千冬を探し続けた。

そして、ついに真耶は千冬を見つけた。

駅から少し行つた所の商店街の、その地下にあるバー。

夕方四時から翌朝八時まで開いているこのお店の名『バー・クレッシェンド』。フラン

ス製の調度品で統一した大人の社交場である。

千冬の行きつけの場所であるソレを真耶は何度も訪れては、千冬が店に来たかを店主に聞いてきたが、店主の話だと千冬はこの店に来てないらしく、いよいよ当てを失った真耶は千冬の搜索を諦めようかと思っていたその時だった。

『千冬さんが店にやってきた』

そんな連絡が店主から入り、真耶は同じく、千冬を探して日本にやってきたとある人物と共にそのバーへ向かった。

そして、そこに千冬がいた。

「マスター、もう一杯だ」

そこには、酒に入り浸って酔っ払っている、ブリュンヒルデの姿があった。

地獄を見た者の慟哭

「織斑、せ……………」

呆然とした表情で、真耶は落ちぶれたその存在を見つめる。

「何だ……………山田先生か。丁度いい、お前も飲んでいくか？ 久々の……………ヒック、酒は、うまいぞオ……………」

見るにも無残な姿だった。

お忍びでどこかに行っていたのか、いつも見ている教師服とは違い、私服の状態の彼女であるが、その私服から所々がボロボロであり、破けている所まである。

どこぞのチンピラが見たら襲いかねない——返り討ちにされるだろうが——程の危ない恰好である。

そんなマスターもさすがにマズイと思ったのか、店の扉の前には「貸し切り」の看板を立てており、幸いにもこんな千冬の惨めな姿を見ているのは、この店のマスターと真耶だけであった。

「織斑、先生……………」

「如何したア、山田先生エ？ そんな辛気臭い顔をして……………何か、生徒の事で……………ヒッ

ク、悩みごとでも、あるのかア……？」

酔いながら、まるでかつての時間に戻ろうとしているかのようなその言葉は、真耶には痛々しく聞こえてしまい、胸を締め付けられるばかりだった。

「またラウラが問題を起こしたのかア？ まったく、相も変わらず私がいなければ何を仕出かすか……」

「織斑先生……」

「それとも鈴がまた上級生と喧嘩でもしたのか？ ハハハ、アイツは自信過剰だからなあ、その癖頑固なのだから困ったものだよ」

「聞いているんですか、織斑先生!!」

いつまでも夢を見ているのか、と真耶はそう叫ぶ。

今までどこに行っていたのだ、こんな大変な時に何処で何をしていたのかと色々問い詰めたいた気持ちでたくさんになる。

だが、そんな衝動を抑えて今は目の前の千冬（酔っ払い）を正気に戻すのが先決だと真耶は声をかける。

「IS学園はもうないんです！ もう閉鎖されて今では立ち入り禁止区域になっています！ 織斑先生だって見たで——」

「何を言っているんだ山田先生。冗談にも程があるぞ、私をまだ織斑“先生”と呼んで

くれるのであれば……ヒック、……そう、まだ……なんだろう……?」
「ッ」

酔いながらも、凶星を突くような言葉に真耶は一瞬だけ押し黙った。

過去を見ているのはお前だけではないだろう、だから自分も酔わせる——暗に千冬はそう言ってきたのだ。

無意識に千冬の事を織斑先生と呼んでいる真耶自身も間違いなく、今の千冬と同じようにあの日に戻りたがっている……そんな真耶の心を千冬は見破っていた。

酔っ払っても尚その読心術は健在である事に、真耶は齒噛みしつつも、千冬を正気に戻すように語り掛ける。

「織斑先生、そんな酒に逃げたって……何も変わりません、もっと現実を……」

「しつこいぞ山田先生。私は酔ってなどいない。それとも、何か私が受け持つ補講授業でも——」

「目を、覚ましてくださいっ!!」

パシイン、とバー内に打撃音が響き渡る。

遠くから様子を見守っていたマスターも、驚いた顔でその様子を見る。

あの優しい性格である真耶が、あろうことか、あの世界最強に対して平手打ちをしたのだ。こんな光景など滅多に見れない事だろう。

「……」

真耶が辛うじて保っていた冷静さのおかげか、平手打ちの衝撃で千冬の手にあつた酒のグラスまでもが吹き飛ぶことはなかった。

コト。千冬はそつとグラスをテーブルの上に置き、赤く腫れあがつた自分の頬をそつと撫でる。

そんな千冬の力無い様に、真耶は容赦なく話しかけた。

「ブリュンヒルデともあろうものが、随分な様ですね、織斑先生。私程度の平手打ち、貴女なら余裕で反応できる筈です。どうしてそこまで、貴女は……ツ!!?」

貴女はおちぶれたのですか、と聞こうとしたその瞬間、千冬の無造作に伸ばされた手が真耶の胸倉を掴む。

「どうして、落ちぶれた、だと? 知ったような口を聞くなよ」

「——ツ!?!」

「落ちぶれた? そんなの最初からに決まっているだろうツ!!!」

一瞬だけ掴み上げた襟を、千冬はとてつもない力で真耶ごと床に放り投げる。酔ついても理性は働いているのか、叩きつけられる程の痛みはなかった。

「あの時……あの時からッ!! 一夏がテロ組織に攫われて、少年兵に仕立て上げられて、せっかく再会したと思つたらまた手元から離れて……その時から私はとうに落ちぶれているッ!!! 私を“そんな名前”で呼ぶんじゃないッ!! 山田先生、貴女までその名を呼んで私を縛り付ける気かッ!」

「——ッ、呼び名だとかそれ以前に、私達は教師でしょうッ!! 生徒達を立派なIS乗りに育てて、あの子たちを守つてやるのが義務でしょうッ!!? そんな呼び名程度に縛られる貴女であるのなら、IS学園の教員だつて務まらなかつた筈でしょうッ!」

「育てる? 守る? 私達にそれが出来たか!! 生徒達が洗脳されてる事にすら気付かず、こうしてあの男の蛮行を許してしまつた私達が教師であるとよく言えたものだなッ!! それとも何だ、貴女のようにそうして生徒を気にかけてるような風をしていればそれだけで教師と呼べるような存在になるのか!」

「ッ、そこまで分かつていてどうして逃げるのですッ!! 元はといえば、今回の事件はブリュンヒルデの名を利用して起きたものでしょうッ!! ならばそのブリュンヒルデたる貴女が動かなければ話に——」

「そのブリュンヒルデの名を使って紛争を止めようとした結果がこの様だ!! 確かにそれであの小娘共の行為は止まつた。けどそれだけだ! 洗脳された方 加害者側も被害者側も一生治らないような傷を負つた。そして止まつても戦火は広がるとしている、何かもが遅

かった、あの時から……既に……!!」

「……」

「ラウラもその他大勢の生徒達も死んだ!! 私の目の前で大勢死んだ!! 白騎士事件の時とは話が違う!?」ブリュンヒルデだとか白騎士だとかそんな力で解決するような問題じゃない! いくら力を持つのが、生徒を護る者としての、私が教師としてそもそも失格だったのだツ!!」

「それでも、教師としてでなくても、あの地獄を見てしまった者として、大人として、何かできる事をすべきなのではないのですかツ!? 逃げたくなる気持ちも分かります、それでもソレを引き起こすのを許してしまった私達は少しでも——!!」

「少しでも!? そんなのとづくにやったさ、この一か月以上もの間、貴女がしていたのと同じようになツ!」

「ツ!?!」

突如、千冬の口から発せられた言葉に真耶は呆然とする。

真耶はこの一か月以上もの間、日本中の生徒の家を家庭訪問しては、一人ずつケアをしてきた。

うまくいかないのがほとんどであり、それでも真耶が出来る限りの事をしてきた。

しかし、千冬の口から語られてきたのは、真耶が味わってきたのとは比べ物にならない

いほどの一か月間だった。

「日本の生徒だけじゃない!! 世界を飛びまわって、被害者側の生徒達、そして洗脳された生徒達の親元を一件ずつ回った。私にできるのはソレしかなかったツ!!」

「どんな罵倒も暴力も覚悟してたツ!!。そしてその覚悟の通りにソレを一心に受けてきた!!。当然の報いだ、私はそれだけの事をしてきたのだから!!」

——貴女さえいなければ、ウチの娘が憧れて I S 学園に入る事もなかった。

——貴女さえいなければ、ウチの娘が I S に触れる事などなかった。

——貴女さえいなければ、ウチの娘がブリュンヒルデに憧れる事もなかった。

『貴女さえいなければ』——そのような言葉を甘んじて受けいれ、彼らの恨みをこの一か月以上もの間千冬は受け入れてきた。

当然の報いだ、これが自分が彼女達に唯一してやれる事なのだと、そう思った。

「けれど、その償いをする事すら許されない所が……あつた……」

「償いすら、許されない?」

顔を俯かせてそう弱気にそう呟く千冬。

一体どのような場所なのだと、気になって千冬の言葉を待つ真耶。

その言葉は、これまで語って来た事すら赤子のように感じる程の、惨い真実だった。

「自衛隊の護送車に運ばれた、洗脳された生徒達が、収容されている所を訪れた……」

「そこって……」

あの日、学友たちを虐殺し、ブリュンヒルデが降誕した事により勝利に酔いしれ、後に自衛隊の護送車に運ばれていった生徒達。

その生徒達が収容されている場所を、IS学園の大半の教師にすら機密にされている場所を、千冬は訪れていたようだ。

「そこには……地獄しかなかった。大半の生徒達が洗脳から解けて、自分達が犯した罪を自覚して、皆狂っていた」

「——ツ!？」

「ある者は自殺して、ある者は自分の罪を認められずに他の小娘にいちやもんを付けて、それで命を落としていく生徒達、自殺する事すらままならず狂っていた子たち、廃人のような目になってボーっとしている子たち……たくさんいた。皆……みんなウチの生徒達だったツ……!!?!」

「そ、そんな……」

あまりにも惨い事実にも、真耶は最早呆然とするしかなかった。

あの真耶ですら話を聞いただけでこの様だ、その現場を直に見た千冬が味わった思いがどれほどの物か、想像をする事すら易くはない。

「私だ……ワタシのせいだ……ワタシがこの事態を招いた。——私が、この世界を

歪めてしまった……ア……」

服が破れている箇所を覗き込んでみれば、千冬の肌には最早数えきれない程の痣が見受けられた。

何度も打ち付けられ、それが何重にも重なった。先ほどが真耶から受けたビンタなど屁ではなかったのだろう。

「織斑、せん……せいッ……」

最早、真耶は何も言えなくなってしまうた。

言える筈がなかった。

この一か月以上もの間、千冬は自分以上の地獄を延々と味わい続けてきたのだ。

「驚きました。貴女のような方でも、そんな風になるのですね……」

「——ッ！ この声は……！」

聞き覚えのある声に、千冬は咄嗟に顔を上げて声をした方を見やる。

「ハルフォーフさん、まだ入ってきては……!?!」

「申し訳ない、山田教員。この調子では、いくら待っても同じ事でしょう」
物陰から一人の女性が出て来る。

そんな女性に制止をかける真耶であったが、向こうはいくら待っても同じだと言ってその姿を現す。

「何か飲み物でも如何が？」

突然入って来た来客に、マスターは注文を聞く。

「いえ、突然お邪魔して申し訳ない。お忍びで来ているので、出来れば客扱いはしないでくれると助かる。……少しの間でいい、教官——織斑さんと話をさせていただけないだろうか？」

マスターに頭を下げながら、左目に眼帯を付けた女性はそうお願いする。

「……畏まりました。私は奥の部屋で待っていますので、どうか好きなお話を」

「その気遣いに感謝する、マスター」

他の人には聞かれたくない話だと悟ったマスターは奥の調理室へと移動していく、そんな気遣いを見せるマスターに眼帯の女性は感謝しつつ、千冬の方へ向き直った。

「お久しぶりです、教官」

「お前は……クラリツサ、か？」

「はい。貴女から教えを受けた黒^{シュヴァルツェア・ハーゼ} 兎 隊の副隊長、クラリツサ・ハルフォーフ大尉です」

左手をビシッと掲げ、軍隊風の挨拶をする眼帯の女性、クラリツサ・ハルフォーフ。真耶が連れてきた、〃千冬を探している人物〃とは彼女の事だった。

「……そうか、これでも世界を回って来たつもりなのだがな、生徒達の家で訪問で精一杯だった」

テーブルに座る真耶と千冬、そしてクラリツサの三人。

真耶は千冬の行方を追う中、同じくドイツからお忍びで日本に入国し、同じく千冬の事を探しているクラリツサと出会い、互いの目的が同じであった事から共に千冬の方

を追うようになった。

そしてこうして今、真耶とクラリツサは千冬をようやく見つけたという訳だった。

「今、世界はどこもかしこも緊迫しています。特に、今回 I S 学園で起こった事件で一番に容疑が問われている国は、イギリスと我が国ドイツです。私達黒兎隊にもいつ戦場に駆り出されるのか……想像をするだけで身震いがします。隊長もいない状態で……」

「……特に欧州連合は今危険な状態です。容疑にかけられた国であるドイツとイギリスの存在によって、この二国は欧州連合から疎まれていきます。事実、隊長のシユヴァルツエア・レーゲンには V T システムが詰まっていた……我が国は如何しようにも言い訳ができない状態で……、私は……!」

唇を噛みちぎり、拳を震わせながらクラリツサは今ドイツ、および欧州の現状を説明した。

「結局、隊長の I S に V T システムを仕込んだのが一体何者なのか分からないまま……イギリスの方も今回の事件に加担した B T 機、ブルー・ティアーズとサイレント・ゼフィールの二機が目撃された事により、第三次イグニッション・プランでの立場も危うくなっている。このままでは欧州は確実に……!!」

今まで欧州連合の第三次イグニッション・プランで優位な位置を保っていたイギリスが今回の事件で、その立場を一気に転落させてしまった。

「ドイツやイギリスだけではなくありません。ブルー・ティアーズのパイロットが日本の代表候補生を人質に取った事により、ロシア代表が痛手を負う事になり、更にサイレント・ゼフィルスとフランスのラファール・リヴァイヴカスタムⅡと不明のISが共に逃亡する姿が目撃された事により、ロシアはイギリスを敵視、フランスも、特にデユノア社が窮地に立たされている。間違いなく、戦争一步手前です……!!」

「そ、そんな……戦火がどんどん広がって……!?!」

「このままでは確実に戦争になります……! 隊長もVTシステムの負荷に耐えられず亡くなられて、そんな状態で私達黒兎隊はいつ戦場に駆り出されてもおかしくない状態にある」

それだけではない、ISの開発着手に資金を使うあまり、国民に費やす資金を疎かにしてきた国などが、今回の事件でISの存在意義についての市民の疑念を募らせたとなれば、デモから一気にテロに発展しかねなかった。

「目の前で隊長の遺体が軍の上層部に持っていかれる様を、ただ見る事しか出来なくて、私達もどうしていいのかわかりませんでした。一番、年長である私ですらどうしていいのか……だから……」

「だから、私の所を訪れたという訳か……」

「はい、現場にいた教官なら、私達が軍から知らされていない事をご存知なのかと思いま

して。今はとにかく情報が欲しい、事実が、情報が。もし隊長の専用機にVTシステムを仕掛けたのが本当にドイツであるのだとすれば……私達は一体何を信じて戦えば――

『ここで、緊急のニュースをお伝えいたします。ただいまより数時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。街中でエネルギー弾をばら撒き、市民に数千人の死者、および数万人の怪我人を出した後、監視空域により離脱。各国は至急対空警戒を怠らないようにしてください。繰り返します、ただいまより数時間前――』

そして、戦火は更に広がる。

この世界に、神はいない

日本の地にある、とある地下の收容所にて、その惨劇は広がっていた。

ある者は自分達が犯した罪を互いに擦り付けながら殴り合い、血が飛び交う。そんなやり取りにうんざりした者や、己が犯した罪と罪悪感に耐えきれなかつた者が、自殺していく。

ある者は精神崩壊を起こし、極度の廃人状態に陥る者もいた。

その者達の一人であつたイギリスの元代表候補生、サラ・ウエルキンはその「精神崩壊を起こし、極度の廃人に陥つた状態」の、その寸前まで落ちかけている少女であつた。代表候補生として鍛えられてきた精神が、かろうじて彼女の心を正常とまでは行かずとも現実を受け入れられる程度までには保つていた。

今日も今日とて、発狂しては血を流すかつての学友たちの悲鳴を聞いては、喉も通らない飯を傍に置いて、ただひたすらにサラは己の犯した罪に対して怯えていた。

ガタ、ガタ、ガタ、ガタ

体が未だに震える。

あれからとうに一か月以上は立っている。

当初は周囲の部屋から絶え間なく聞こえていた発狂や悲鳴も今では収まっている。廃人化したか、それとも自殺したか、そんな事はもうサラの頭の中ではどうでもよくなっている。

ガタ、ガタ、ガタ、ガタ

体は未だに震えていた。

如何に誤魔化そうとしても、その感触はちゃんと覚えている。

ラファール・リヴァイヴを駆り、学友を、教員を、来賓を、多くの人間達をこの手で殺めた感触を、サラは覚えていた。

ガタ、ガタ、ガタ、ガタ

—— どうして、こうなってしまったのだろうか？

サラは思い返す。

きっかけは、自分の後輩であったイギリスの代表候補生が、入学初日にあることか29人もクラスのメイトの真ん中で、差別発言をした事であった。同じクラスにいた男性操縦者に対する差別発言をするならともかく（よくはないが）、日本人までをも差別したのはイギリスにとっては大きな痛手であった。

これらの噂を聞きつけたサラは、何とかセシリアのフォローに回ろうと、まずは彼女の一番の差別発言を浴びたアインに対して、祖国イギリスを代表して謝りに行こうと、

アインの部屋を訪れた。

それが、始まりだった気がした。

彼の部屋を訪れ、ドアをノックし、そこでサラは彼と出会った。

サラが彼に抱いた第一印象は、一言でいうのなら「紳士的」であった。

ここ最近の男性というものは、女尊男卑の風潮のおかげで大抵は女性——特に I S 関係の職に手を付けている女性に対しては過剰な警戒を示す事例が多い。

その最中で彼は I S 乗り——しかもイギリスの代表候補生である自分に対して何ら警戒を示す事なく、むしろにこやかな笑みを浮かべて自室へ招き入れてくれた。

そんな彼に驚きつつも、サラは真つ先に己のすべき事を彼にした。本来は自分に対して怒りや不満をぶつけてもいい立場であるにも関わらず、快く自分を迎え入れてくれた彼に恥じ入る事がないように、サラもまた己の持ちうる限りの相応の礼儀で彼に謝罪をした。

『いえ、別に構いませんよ。自分はこういった事には慣れていたので。それに、もし謝罪するのであれば自分よりも、自分のクラスメイトのお嬢さんたちにさせてやってください。勿論、貴女が、ではなく彼女にですがね』

自分の謝罪に対して返って来たその男の言葉に、サラは感銘を受けた。一番に怒つていい立場である筈なのに、それに対して不満を口にせず、むしろ自分以外に差別発言を

受けた生徒達に対しての謝罪をしてほしいという彼の言葉に。

女尊男卑の世の中であるにも関わらず、いや、そんな世の中でもやってこれた男の強かさを感じ取ったサラは、アインに対してセシリアの身の上を打ち明けた。

列車事故により両親が他界、今までオルコット家の財産を一人で守り続けてきた孤独、孤高な後輩の話をアインにした。

ここが、サラ・ウエルキンという少女の、最大の間違いだった。

サラはアインの事を信用、とまでは行かずとも彼女の身の上を話すのにふさわしい人物だと思ってしまった。彼女の罵倒を一心に受け続け、それでも彼女に怒ったりせず受け入れる心を持つ（振りをしている）男を、この男なら彼女を任せてもいいのではないかと思ってしまった。

セシリア・オルコットという後輩は、ひそかに『強い男』という者を望んでいるのを、サラは知っている。憧れた母親が強い女性であったからこそ、その母親に媚びてばかりであった父親を敬遠しつつも、母親と同じように強くあつてほしかったという後輩の望みをサラは理解していた。

サラは知ってほしかった。

セシリア・オルコットという少女は、典型的な女尊男卑の風潮に染まった少女ではないのだ、女尊男卑の世になる前から彼女は強い男を見た事がなかった。

女尊男卑の思考に染まったセシリアに対して、サラは何度も忠告した事があつたが、それでもセシリアのその考えを改めさせる事はサラにはできなかった。

このＩＳ学園に世界初の男性操縦者が入学してくると知り、セシリアがその男性とクラスメイトになってしまった事にサラは密かに不安を抱いていたが、あるうことかセシリアの入学初日にその不安は的中してしまったのだから、始末に負えない。

噂を聞きつけ、サラはどれだけ胃を痛めたか。

男が弱い生き物だ、セシリアのその考えが根底から抜ける事はないだろうと散々思い知ったサラは、できるだけ彼女を公の場で男に会わせないように努めてきたが、世界初の男性操縦者がＩＳ学園に入学したとあつては彼女の努力もいよいよ限界である。

一度はあきらめていたサラであつたが、もしセシリアがこのＩＳ学園の中で自分の中の黒い感情を爆発させてしまえば、今度こそ彼女は壊れてしまうと危惧したサラは、アインにある頼み事をした。

どうか、クラス代表決定戦で彼女を負かしてほしいと。

イギリスの代表候補生としてあるまじき発現である事は百も承知であつた。

それでも、『男に敗北する』という経験がなければ、セシリアの思想が覆されることはないとサラは焦っていた。

セシリアは男性差別者というだけでなく、イギリス以外の国、特に日本という極東の

島国をも密かに見下している。勿論、セシリアがそれを易々と発言する人間ではないという事をサラは知っているが、『男』という生き物が絡めば何を仕出かすのか分からないのがセシリア・オルコットという少女なのである。

そして、初日にセシリアはやらかしてしまった。

胃を痛めたサラは、セシリアの従者からお願ひされた身として、もうセシリアの女尊男卑思考を直さなければ彼女の学園生活はお先真つ暗だと危惧し、アインに願ひ出たのである。

無茶な願ひである事は承知だ。

下手すれば彼が笑い物にされる可能性だつてある。

だから、彼が断わってくるのであればそれまでだ、とサラは覚悟を決めていた。

彼は、快く承知してくれた。

それを機に、サラは彼に対して感情を爆発させてしまった。

彼に感謝の言葉を繰り返し言うと共に、今まで自分がどれだけ苦労してきたかを無意識の内に語ってしまった。

何を言うかというのと、それくらい嬉しかった。

そんな彼女に対し、困惑の表情を作りつつも、そんなサラを何とか落ち着かせるために、アインは彼女にお手製の緑茶を振舞った。

サラとしては紅茶を飲みたい所であったが、彼が入れてくれた日本の緑茶も捨てがたい味であったため、セシリアの発言は明らかに間違いであるという事を実感した瞬間であった。

そんな彼の気遣いに感謝しつつ、サラはソレを飲んでしまった。

そこからの記憶は曖昧だった。

いや、曖昧などではない、その時の記憶もきちんと残っているが、それをサラは認めたくはなかった。

そもそも、サラがISに乗りになりたいと思つた一番の理由は、ブリュンヒルデに憧れたからというものである。

サラがアインの部屋にきたもう一つの理由として、女性だらけの学び場で戸惑っているであろう彼に対して先輩として何かアドバイスをしてあげようという親切心も少しあつたりした。

自分の頼みを聞いてくれるのだから、クラスメイト付きあいの悩みで何かあれば自分に相談してくれていいと持ち掛けたサラに対し、アインは礼を言つた後、学園生活に不自由はないと答えた。

むしろ、『憧れのブリュンヒルデのクラスの配属されたので、毎日が楽しみだ』、そう彼は言つたのだ。

同じくブリュンヒルデに対しての強い憧れを持っていたサラは、彼との会話を盛り上げてしまひ。

一晩中ブリュンヒルデの事について話してしまつた。

その中の記憶は、今度こそ曖昧だつた。

色々、サラが知らないブリュンヒルデについての事を、サラはアインに聞かされた。何故男性である筈のアインが、ブリュンヒルデとは無縁である筈の彼が彼女についてそこまで知っているのかという疑問を持たずに、サラはブリュンヒルデに対する憧れと興味をより一層強めていった。

気が付けば、憧れに代わり、『信仰』を刷り込まれていた。

以降、サラ・ウエルキンという人間の内面は大きく変わった、いや、変えられた。

本来の目的であつた後輩の改心という目的を忘れ、アインに敗北したセシリアに対して、『神の地を侮辱した不信仰者』と見下すようになり、周囲から罵倒や陰口を叩かれる後輩に對して、何も思わなくなつていった。

思わなくさせられていた。

そして。

『この戦いは、神の御前に捧げられる聖戦である』

ISのプライベート・チャンネルを通じて、ISに乗っていない生徒達には腰の無線を通じて、そのラジオが流れる中で、サラは虐殺を行っていた。

『伝統を軽んじ、神を冒瀆せし不信仰者共に、神の代行者である我々が鉄槌を下すのだ！』

今まで共に過ごしてきた学友たちが弾丸の餌食になっていく様に対して、これが神を信仰できない者達へのせめてもの救済であり、鉄槌であるのだと思い込まされて、サラはその手を汚してしまった。

「——ッ!!!」

ペタリと、床に手を付く。

今まで頭を真つ白にさせて考えないようにしていた筈なのに、一度思い出しただけで、吐きそうになる。

『不信仰者に屈服してはならない』

「グうッ、アア……」

一度思い返してしまえば、その声が脳内で止まることはない。

一度は抛り所として、今となってはトラウマとして刻まれたその声が、一度刷り込まれた脳裏に止まる事はない。

「ア、・アアツ……!!」

頭痛は止まらない。

吐き気がする。

『我々は戦いで死す事によって、神の御許へ導かれるだろう』

今にも飲み込まれそうな、あの声。

気持ち悪い。

——— 気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

気持ち悪くて、今にもソレに塗り替えられそうで、サラはついに耐えきれなくなった。

「ち、がう……!!」

床に拳をドン、と突き立てる。

脳裏に再生するその言葉に対して、サラの口は必死に否定する。

「死の果てに、神なんていない……!!」

結局、ブリュンヒルデの名は戦争を勃発させるのに便利な肩書でしかない。

宗教など、争いの温床でしかない。

神の代弁者の語りなど、所詮は富と権力を求める浅ましい人間の法螺でしかない。

「この世界に、神なんていない!!」

ベッドと机しか用意されていない殺風景な一室に、彼女の叫びが響き渡る。その直後。

『サラ・ウエルキンさん。日本政府、およびイギリス政府からの要請により、特例として貴女を収容所から出します。部屋のロックを解除しましたので、指定のポイントまで監査員が案内致します』

彼女の部屋に設置されていたスピーカーから、そんな放送が流れた。



『ただいまより数時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型 I S 『銀シルバリオ・ゴスベルの福音が制御下を離れて暴走。街中でエネルギー弾をばら撒き、市民に数十人の死者、および数百人の怪我人を出した後、監視空域により離脱。各国は至急対空警戒を怠らないようにしてください』

「最近、物騒だなあ。ここまで来なきやいいんだが……」

五反田食堂と呼ばれる食堂で、その手伝いをしていた高校生、五反田 弾は突如ラジオで放送された音声に、冷や汗を拭いながらそう呟く。

「この間の I S 学園でのテロ事件といい、蘭が I S 学園に入学希望を出してなくて本当

に良かったぜ……」

テロが起ころうな地に妹を送り出すような事をせずに済んだ事に弾は心の底から胸を撫で下ろす。

「まったくだな」

それに同意するように、カウンターの奥から年寄りの声が聞こえてきた。

「ただでさえ女尊男卑の世に染まつてるつてんのに、家の孫娘までそれに染められちゃあ堪ったもんじゃねえからな。蘭はまだ純粋な娘だ。あんな所に行かせられるかってんだ」

IS学園の方角を向きながらそう吐き捨てる赤毛の老人、五反田 巖。弾の祖父にしてこの五反田食堂を営む男である。

弾もまたそんな祖父の言葉にうんうんと頷きながら、客が置いていったお盆を集めてお盆置き場に置く。

「それにしても、数十人が死亡か。ISが暴走したにしては奇跡的な少なさといえ、これからどうなるんだ？」

「本当にそう思うか、弾？」

これからの不安を口にする弾に対し、巖がそう問いかける。

思わず首を傾げる弾を見て、巖は口を続けた。

「そもそもだな、I Sが暴走して人が死んだなんて事、そんな大つぴらに報道できると思うか？ しかも被害者たちは自国民と来たもんだ。そんなもん報道すりゃあ、向こうさんの地位がどれだけ脅かされるか分かったもんじゃないやねえよ」

「け、けど、現に報道されちゃってるぜ？ 米国様が態々自分達の立場が不利になるような嘘の報道なんてするのかよじいちゃん？」

「そっだよ」

弾を指さし、厳は言う。

国が態々が自分達の不利になるような嘘の報道を流す筈がない。つまり――

「つまりな、弾。これでもまだ事実を隠蔽している方だという可能性があるって事だ。これ以上にアメリカの立場を揺るがしかねない事実がその報道の裏にあるかもしれないんだ」

「そ、それって、つまり……」

祖父の言わんとしてしている事をなんとなく理解し始めた弾は、冷や汗を掻きながら祖父の言葉を待つ。

「これは俺の勘だがな、実際は――」



『繰り返します。ただいまより数時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型 I S 『銀の福音シルバリオゴスペルが制御下を離れて暴走。街中でエネルギー弾をばら撒き、市民に数十人の死者、および数百人の怪我人を出した後、監視空域により離脱。各国は至急対空警戒を怠らないようにしてください』』

バーの中で、突如流れたその放送に、三人は固まってしまった。

この情勢の中で、他国が開発した I S が暴走してしまい、しかも自国民に死者を出してしまうという事実が、三人の精神にこれ以上にならない程の精神的負担を強いた。

「そ、そんな……」

目を泳がせながら、真耶は呟く。

「……クラリツサ。これをどう見る？」

「……」

動揺を何とか抑え込み、千冬はクラリツサに先の放送について問うた。

それに対してクラリツサはしばらく沈黙を貫く。

ただでさえ、彼女の隊は何の為に戦えばいいのか分からない状況であるというのに、そんな状況の中でコレだ。

それでも、千冬はクラリツサの返答を待つ。

如何なる状況でも、冷静であれとクラリツサは千冬に教えられてきた。やがて、クラリツサは口を開いた。

「こんな事実、そのまま報道される訳がありません。もし先ほど報道されたのが事実だとすれば、アメリカはとんだ能天気です。勿論、そんな事あるわけない。つまり——」

「これでも、隠蔽した方であると考えるべきだな。くそッ……!!」
苦虫を噛みつぶすような表情になる千冬。

彼女も、クラリツサも、そして真耶も。

この報道がそのままの事実でないことくらいは予想が付く。

(私は、どうすれば……)

そんな中で、クラリツサは更なる葛藤に陥っていた。

先ほど自分の教官に言われた通り、アメリカがこんな事実をそのままに報道する訳がない。

もしそのままの事実が発覚すれば、世界は更に荒れる。

(私は、私達は一体、何を信じれば……)

このままでは、自分達黒兎隊も近い内に出撃命令が下されてしまうだろう。

だが、クラリツサは正直、今のドイツを信用できないでいた。

自分の隊長のISにVTシステムを搭載したのがドイツであるのだとすれば、自分達は一体何の為に戦えばいいのだろうか？

軍人に戦いの理由を求めるのはナンセンスだというが、軍人として人間である。

その軍人の上層部が黒で、自分達がそれに踊らされているのだとしたら、それこそが自分達が軍人をする意味もないのである。

——だからといって、果たして遺伝作子強化遺体存である自分達に、あそこ以外の居場所があるのか？

もし、自分達が本当に戦うべき相手があるとしたら、その居場所そのものであるとして、それを打倒したとして、自分達の外の居場所は何処にあるというのだ？

そんな葛藤を彼女は抱え続けてきた。

抱え続けて、悩み続けて、苦悩の末に軍の目を盗んでドイツを抜け出し、こうして極東の地までやってきた。

事件の当事者たる人物に会い、少しでも情報が欲しかった。

そして、ようやくここにたどり着いたのだ。

ようやくたどり着いたその矢先で、このラジオからの放送である。

欧州の情勢といい、世界がどのような方向に傾きつつあるかは分かっているのにも関わらず、クラリツサは自分達が戦う理由を見いだせなかった。

「織斑、先生。この死傷者って……」

「ああ、十数人程度で済む筈がない。実際は——」



「十数人の死者、ですか……ＩＳ学園での例があるというのに、軍用ＩＳが暴走して死者が高々十数人程度で済むのか……」

「どうにも、嘘くさいですな」

「ええ、そうですね」

突如として聞こえてきたラジオの音声から、チエルシーと老人の執事は先ほど報道された事実は嘘であると断じる。

「今の情勢が分からない程アメリカも馬鹿ではない。徐々に戦争に向かいつつある世界の中で、各国が密かに殺戮に特化した軍用ＩＳを開発している可能性だって否めない。アメリカのその例に洩れない」

呟くチエルシーの言葉に、執事の言葉が続く。

「そして、そんな最中で開発している軍用ＩＳが戦争向きである可能性は高い。そんな軍用ＩＳが暴走したとなれば、死者は十数人では済まないでしょう」

「そうですね、実際は——」

「「実際は、数千人くらいの死傷者を出してしまっているのではないか？」」

復讐の少女

まるで悪夢を見ているかのようにだった。

暴走したアメリカ、およびイスラエル製の第三世代 I S、シルバリオ・ゴスベル銀の福音の搭乗者、ナターシャ・ファイルスの悪夢は一か月以上前の、I S 学園で起こったテロ事件がきっかけで始まった。

そのテロ事件により、各国の代表候補生、およびその他無名の生徒が多くの学友や来賓、教員などを失い、来賓達の中には各国政府の幹部すらもが含まれていた。

今現在それにより戦火は拡大しつつあり、いずれ戦争になる事を危惧したアメリカとイスラエルの両国は、突如ある計画変更を下した。

第三世代 I S 『銀の福音』の過剰戦力化を施そうとしたのだ。

その I S のパイロットになる予定であったナターシャは、当初その計画に反対した。

福音のテストパイロットになる事は、ナターシャにとつての長年の夢であった。

かつての白騎士を彷彿とさせる造形と、天使のような包容さを併せ持つ機体に憧れたナターシャは、ついに福音のテストパイロットになる座を勝ち取ったのだ。

———あの子と共に空を駆ける、それが私の夢だった。

なのに、テストパイロットになる直前に聞いたのは、その信じられない計画変更である。

本来ならば広域における偵察、および瞬時情報収集と高速飛行を目的としたI Sは、両国政府の命令によって広域殲滅、特殊射撃型の兵器に早変わりしてしまった。

——やめて。

代表候補であるが故、政府の命令に我儘を言う事ができない立場ながらも、ナターシャは内心で叫んだ。

——その子に、人殺しをさせようというの!?

自分はその事を望んでなどいない。福音もそんな事なんて望んでいない。

まだ未稼働状態の福音を目にした時から、ナターシャは直感的に感じていた。

この子は早く空を飛びたがっているのだ、早く高い空を自由に駆け抜けたくてもうずっとしているのだ、と。

——なのに、どうして殺戮の兵器に変えようとするの!?

理解が及ばなかった訳ではない。

やがて来るであろう戦争に備えて、既存の乗り物が人を殺す為の兵器に作り変えられる事くらい、この歴史上では何度もあったことだ。

だが、理解と納得は別である。

自由な空を飛べる事に変わりはあるまい。

その一方で地上が大量の人の血で濡れてしまうなど、この子が望むものか。

ISだつてずっと空を飛び続けていられる訳ではない、帰るべき地上ほしよが必要なのだ。

なのに、その帰るべき場所が、自身の手によって赤く染められた大地であるなどと、ナターシャからしてみれば想像するだけで吐き気がした。

そんな暗い感情を抱きながらも、ついに『銀の福音』の試験稼働の日がやってきた。

福音が殺戮の兵器に作り変えられる事に、その飛翔速度の外に、その兵装の実験すらも行わなければいけない事に嫌気がさしながらも、「福音を操縦できる」という事に多少の暗い感情が緩和されていた。

ナターシャは、ついに念願の福音に乗る事を達成した。

そこまではよかった。

そして、ついに地獄がナターシャを襲った。

試験稼働中だった福音が突如暴走し始め、それに飲み込まれるようにナターシャもまた体の自由を奪われた。

やがて意識すらも薄れていく中、ナターシャは見てしまった。

如何に主導権がIS側にあるとはいえ、目を閉じようにも、ハイパーセンサーによって否が応でもその光景を見せつけられる。

福音の、この子の帰るべき大地が、他ならぬ福音の手によって赤く汚される光景を、ナターシヤは否が応でも見せつけられてしまった。

それはナターシヤが前から嫌だと、そんな未来など来てほしくないと思い続けてきた光景が、あろうことか目の前で再演されてしまっていた。

福音のウイングスラスターの砲口から射出されたオールレンジ射撃が、一斉に市民を襲う。

市民は次々とそのエネルギー弾を前に成す術もなく身体を跡形もなく消し飛ばされ、また倒壊した建物などに押しつぶされていく。

ああ、これは夢だ。

酷い悪夢だ。

こんな、こんなのが、あつていい筈がない。

この子だつて必死に叫んでいる。

こんな事をしたくないと、操縦者のナターシヤに必死に訴えかけているような気がした。

誰か、誰でもいい。

自分はどうなつてもいい。

だから――

(誰か、この子を、解放、シテ……)

その心の眩きを最後に、ナターシャの意識は途絶えた。



「フフフフ」

モニターの前のキーボードを高速で撃ち込みながら、束は笑っていた。

心の底から、まるで死んでいるかのような嗤いだった。

モニターの前に映し出されているのは、暴走して都市部の人間を虐殺する福音の姿が映し出されていた。

隣のモニター画面にはその福音のコンディションを示すパラメーターとグラフが表示されており、まるで心電図であるかのような揺れ具合が、この福音の暴走具合を表していた。

「チツチツチツ、あちやー、ついにやつちやつたねえ、アメリカ君？ 事を急いでI Sの無茶なオーバースペック化を図るからこの束さんに利用されるんだよつと、ホイヤッ

！」

茶化すような掛け声と共に最後のボタンを押し終わる。

「まっ、今まで東さんが譲ってやったＩＳコアで散々いい思わせってやったんだから、これくらいはさせて貰わないとギブアンドテイクは成り立たないよね♪」

最初にＩＳで世界を騒がせておきながらどの口が言うんだよ、とそんな己に内心で突っ込みつつ、東は椅子を動かして、別のモニター室に一瞬に移動する。

自分の主がいた筈の部屋が空になっている事に、緑茶を持ってきたクロエが困惑する声にクスクスと笑いつつ。

「それにしてもアホだよね。ぶっちゃけ東さんが暴走させる前から福音は急な戦力化を施されて不安定な状態にあったんだゾ？ まあ、外付けの要因ではなくコアそのもの問題になるから、コアの解析が進んでない連中からしてみれば何が起こったのか分からないだろうけどさ——ぶっちゃけ、いつ暴走しておかしくなかったよ？」

猿でもわかるＩＳの作り方とかでも配っておけばよかったかな、と東は可笑しそうに笑いつつ、東はモニターの画面を開く。

そこには緋色のＩＳのデータが映し出された。

「まったく、いっくんもいっくんだよ……せつかく東さんお手製のＩＳを作ってあげたのに、早々に交換してこんなＩＳに乗り換えちゃうなんて。まあ……零落白夜を入れた

のは少し露骨すぎたかな、東さんもこれにはちよつと反省かも」

そもそも、東は零落白夜という能力に対して、天才の頭脳らしからぬ色眼鏡を持つていたため、千冬の弟である一夏アインにも使いこなせるだろうという見識を持つていた。事実その見識は間違つておらず、一夏は千冬と同じように零落白夜という諸刃の剣の使い所を誤る事はなく、銃としての機能を追加した事で千冬とはまた違つた使い方もしていた。

だが、そもそも雪片という武器自体、アインの戦闘スタイルには向かなかつたという事だろう。

「ハアー、結局東さんも、いつくんのことをちーちゃんの弟としか見ていなかったって事なんだよね、これって……。——なら、猶更やらなくちやね♪」

悲しそうな表情から、一転してまたいつものような気の抜けたような笑顔に戻ると、東はモニターのISの解析を続ける。

「ふむふむ、この『フアング』っていうのかな？ 使用するBTエネルギーとは別に白式の雪片式型に使用されている展開装甲を参考にして、凡人なりに発展させているみたいだね。どうしていつくんが白式を渡す前から白式のデータを亡国に売つぱらつてるのかはこの際置いておこう、うんそうしよう」

こうも自分が作つたISのデータを必要とあらば簡単に売つぱらうアインに対し、若

干こめかみを抑える。

「次に右肩に背負った大剣は……使ってる所は見えないからなんとも言えないけれど、どうやら本体からは独立したP I C展開機構が仕込まれるみたいだね。概ね、P I Cの重力操作で剣を軽くして、対象に当たると瞬間に重量を増大させて切り付けるのが用途って所かな、敵に当てる瞬間に発動させるという意味では結構零落白夜に近いって……あれ？ 待てよ、このI Sって案外白式の特性受け継いでたりする？」

東は考える。

素体となった打鉄。

武装の基礎データはブルー・ティアーズ。

武装の機構は白式の雪片式型の発展型。

「ええっとつまり……この機体って打鉄の汎用性とブルー・ティアーズの遠隔操作兵装と白式の試作型展開装甲による三つのデータが合わさって……これ何て奇跡のコラボレーション!？」

節操なさすぎイ！、という叫びがラボ中に響いた。

「ここにいましたか、東様。緑茶を持ってまいりました」

「お、ありがとクーちゃん！」

その叫びでようやく東の居所を掴んだクロエから緑茶を受け取り、東は礼を言った。

ズズイツと一気に口に飲み干すが、ちゃんと口内全体に緑茶の味が浸透するように運ぶ。

「ぶはあッ！ これで後一年ぐらいは胃が持ちそう、うんうん！」

冗談なのか、それとも本気で言っているのかは本人だけが知る故であったが、少なくともあの束がこのような発言をする時点で、彼女のナニカが狂ってきているのは明白であった。

そんな束を見てすこしつらそうな表情になるクロエ。

「……束様」

「うん？ なーにクーちゃん」

「その……銀の福音を暴走させる事に、意味はあるのでしょうか？ 私はこのまま千冬様と一夏様をぶつけても——」

「チツチツチツ、まだまだだなあクーちゃん」

立てた指を振りながら束はそう言う。

「まあ、半分は束さんの落ち度なんだけどね。当初の予定では、ちーちゃんが教師としてアインと接する過程で私が色々介入してあーだこーだしてちーちゃんに今のいっくんを思い知らせる予定……だった……んだけど、ね……ッ」

「束様ッ?!!」

急によるめき始めた束を見て、慌ててクロ工は束の身体を支える。

「またもや胃の痛みが再発してきたのか、束は息を荒くし、苦しそうな様子になる。が、その胃の痛みもすぐに治まった。」

「いや、その細胞レベルまでオーバースペックな身体を無理やり活性させて痛みを治めた、という表現が正しかった。」

「ええつと、ごめん。それでね、当初はそんな予定だったんだけど、ちーちゃんはともかくいつくんまでもが私の影に気付いちやつたもんだから、おかげで白式は売り払われるわ、いつくんは別の機体に乗りに換えるわ、何を仕出かすと思えば学園の生徒達を洗脳してテロを起こすわで……要はいつくんが束さんの予想斜め上の行動を取るおかげで急遽プランを変更せざるを得なくなっちゃったんだ」

自身が束の掌の上で踊らされると気付いたアインは、とにかくそこから束の予測斜め上の行動を取り続けた。

それが特に顕著になったのは亡国機業が介入してきてからだろう。

スポンサーを得た傭兵は、まさしく水を得た魚と同義だった。

学園中の生徒達を洗脳し、束の親友である千冬の肩書を神に見立てて紛争を起こし、あまつさえそれで千冬に対してこれ以上にならない程の精神ダメージを負わせ、戦場を散々好き放題弄んだ挙句にそのままスポンサーの元へ逃げていくアインの手口は、さすがの

東でも舌を巻いた。

千冬や東が人間を超えているように、^{アイン}一夏もまたこの二人とは別のベクトルで人間を超えた存在なのだ。

「私はまだ、計画の第一段階すらクリアしていないんだ。『ちーちゃんにアインがいつくんである事を分からせる』という目的を達成できていないの」

「……」

「ちーちゃんは、アインの、いつくんの狂気を嫌という程垣間見たけど、それでもいつくんが……アイン・ゾマイルが織斑一夏であるという事を認めてない。だから、認めさせないと、ね?」

「その役目が福音であるという事ですか?」

「ああ……うーん、福音は、その役目というよりは——」

その引き合わせ役、みたいなものかな?



亡国機業のとある地下基地。

その、I S学園のモノに似たアリーナ広場で二機のI Sが訓練をしていた。

一機は橙色のリヴァイヴ、『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』。

そしてもう一機は蝶のようなシルエットを持つ蒼いI S『サイレント・ゼフィルス』である。

アインの伝手を得て多くのモグリの子I S技術者を取り込んだ亡国機業は、新たなテスト・パイロットとしてシャルロット・デュノアを雇い、こうして新兵装の実戦テストを実働I S部隊の一員を相手に行っていた。

（——ッ、回り込まれた!?!）

テスト相手であるサイレント・ゼフィルスのパイロットが、自分の得意分野である高速戦闘で上回ってくる事に驚きつつも、シャルロットは冷静に別の新兵装を拡張領域から呼び出して応戦する。

拡張領域内の武装全てを新兵装と差し替えられているにも関わらず、ここまで器用に使いこなし、状況に応じて使い分ける事が出来るシャルロットの技能は、まさしくテストパイロットをするにはうってつけの物だった。

しかし、相手が悪いと言うべきか、相手が18番であるビットをまったく使っていない

にも関わらず、こうしてシャルロット相手に優位になっている時点で、シャルロットとこのゼフィルスのパイロット、エムとの間にどれだけの差があるかを痛感させられる。

エム側としては、あくまで新兵装の性能テストであるため、敢えてその兵装の用途に合わせるような立ち回りで、まずはシャルロットにその兵装を使わせる事を優先し、その上でシャルロットを上回ってくる。

IS 乗りとしての格が違いすぎる。

やがて。

「ぐうッー」

まるで興が冷めたとやわんばかりに、エムが振るった銃剣がシャルロットのむき出しの生身の部分を切り付け、それを境に一機にSEが持つていかれ、やがてその数値はゼロを示した。

「ふん、この程度か」

鼻で笑うかのような嘲笑、それと共に性能テストは終了した。

エムとしても、記憶した新兵装は粗方シャルロットに使わせた腹積もりである。後は向こうがきちんとしたデータを取れていれば、自分の用はこれで済む。

「……」

ふと、エムはISを展開したまま膝を着いているシャルロットを見下ろす。

そこから感じられるのはただひたすらの無気力、諦観、それだけだった。

こうしてIS兵装性能テストが終わり、ピットの更衣室にてシャルロットは着替えていた

「ハア……」

口うるさい変態技術者から解放された事に安堵しつつ、溜息を吐く。

口五月蠅いとはいうが、それはシャルロットを貶すような罵倒ではなく、大勢の技術者がハアハアと興奮するような息を吐きながら、「新兵装の性能はどうだった?」とか、「改善点は見つかったかい?」と一斉に問い詰めてくるのだ。

アインのISに搭載されているフアング・ビットとやらもどうやら彼らが開発したものであるらしいが、あれ程までとは思わなかった。

デュノア社のテストパイロットを務めていた頃でさえ、あのような技術者はいなかったというのに、彼らは元モグリの技術者であるためか、遠慮というものがない。

彼らもかつては正規のIS技術機関に所属していたのだが、その頭脳と何処か周りとズレた感性故に周りとかみ合わず、モグリの技術者となつたらしい。

「まあ、い、い、い……」

諦観にも似た心境で、シャルロットは俯く。

今の生活に不満はない。

きちんと衣食住も提供され、己の技能を生かせる職にも就くことが出来ている。

あくまでテストパイロットであるが故、アインやオータム、エムのように実戦の場に駆り出されることも少ない。

自分がここに所属するまでの過程を省みなければ、シャルロットにとって今の生活に不満はなかった。

「……ッ」

自分が犯した罪を振り返ってしまったシャルロットは即座に思考を振り切る。

仕方なかった。

自分は今まで生きる為に、選択せざるをえない選択肢を選んで生きてきた。

今回も、ただのその選択に他人を巻き込むかそうでないかの違いがあるだけだ。

自分は、仕方なくやった。

断じて望んでやったわけではない。

だから、自分は悪くないのだ、決して……。

「いや……違う。僕は、やってはいけない事を、だけど……！」

いつそ、あの男に脅迫された時、おとなしく殺されていればよかったのではないか？

そんな思考がシャルロットの脳裏に浮かぶ。

そうすれば自分もこんな思いをせずに済んだ。

あんな惨劇を、自分の罪として背負う事もなかった。

けど……自分がどんな選択をしたところで、あの惨劇はどの道起こっていた。ならば自分がどんな選択をしたって悪くはないではないか。

「だから……僕は……悪くなんて、悪くなんて……」

「常々思っていたが、相変わらず面倒くさい女だ」

突如、横から、聞き覚えのない声が聞こえた。

「ッ!？」

突然、気配もなく声を掛けられたことに驚いたシャルロットはそのまま声がした方向に振り向いて身構える。

そこには――

「君……は、サイレント・ゼフィルスの……?」

「テストパイロットの身に甘んじ、あまつさえ己がした事について未だに悩んでいるとはな」

声を掛けてきたのは、あろう事か、先ほど自分が戦っていたようにあしらわれた挙句に撃ち負けた対戦相手、サイレント・ゼフィルスのパイロット、エムだった。

何故か織斑千冬と似たような容姿をしている事に、シャルロットは何か訳ありなのだろうと思ひ、なるべく互いに干渉しないようにしてきたが、今日になって初めて彼女から話しかけられた。

「屍とは、己の後ろに自然と積みあがつていくもの。一々気にする必要がどこにある。無様に散つていった奴等にかかる情など何処にある？」

「それは……」

「貴様は私やアイツが起こしたあのテロに加担した。貴様が当然のように選んだ選択だ。人が生きるという事は、他の誰かの命を大なり小なり奪うという事だ。何故そのように気にする？」

「加担してなんていない、僕は——！」

「自分は悪くない、か？」

言おうとした台詞を先に言われ、シャルロットは言い淀む。

まるで尋問のようであった。

何故今までお互いに不干渉だった少女がいきなり、自分にこうして詰め寄ってくるのか、それがシャルロットには理解できなかつた。

「悪くないと思うのなら、何故そのように背負い込む。自分は間違つてないと思ひながら、その癖が自分がした事を罪と認めて背負い込もうとする……見ていて滑稽だぞ？」

その言葉に、シャルロットはどうとう耐えきれなくなり、このエムと呼ばれる少女に怒鳴り始めた。

「——ッ、君に何が分かる!! 何の選択も許せなかった僕の事が、君に理解できるの!?! 僕は君みたいな人殺しじゃない……人殺しに……なりたくなんてなかった!! それを後悔して何がわる——」

「黙れ」

瞬間、シャルロットの首が掴まれ、そのまま壁に叩きつけられた。

ドオン。その華奢な体つきからは信じられない程の腕力に、シャルロットは成す術もなかった。

「アツ、ガツ……!?!」

「貴様を見ているとイライラする。自分が悪くないと思うのであれば、何故そのような背負い込む。己をこのようになるまで追い込んだ者を憎いとは思わないのか?」

「に……く、い?」

「そうだ。己を選択の余地のないまでに追い込んだ元凶。常に最悪の選択を取るしか手段がないような状態にまでに貴様をおいやった者。己がした事を背負い込む気がないなら、何故そのように追い込んだ者を憎いと思わない?」

「……」

「何故、そいつらに対して復讐しようと思わず、テストパイロットの身に甘んじているのか、本当に理解に苦しむ」

「グ、ぎいッ……」

自分の首を押さえつける、エムの腕を必死に引き離そうとしながら、シャルロットは考える。

——僕の、復讐したい、相手……。

確かにいる。

己に自由を与えず、まるで母親が死んだタイミングを見計らったと言わんばかりに自分を無理やりI.Sのテストパイロットにし、こうして犯罪まがいのことをさせて学園へ放り込んだ両親。

確かに憎かった。

けれど、彼らも長くはないだろう。

今回のテロ事件で、デュノア社はもうその株価を大きく暴落させている。このままいけば一年かそこらで倒産待ったなしだろう。

己が手を下さずとも、あの両親はいずれ地獄を見る事になる。

だから——復讐したいなんて、ちつとも——。

「それはただの怠慢だな、負け犬にすら劣る。己の手で地獄を見せてやりたいとは思わ

ないのか」

ドクンと、心臓が跳ね上がった。

己の手で、地獄を見せる。

今まで向こうが散々己を縛り付け、まるで捨て駒のように自分を男性と偽らせて学園に放り込んだように、今度は自分が向こうに対して地獄を味わせたい。

それは間違った感情ではない。

己の感情に従って行動するのは、まさしく人間がすべき生き方そのものだ。

「ぼく、は……」

瞬間、シャルロットの目が濁っていく。

首を絞められる事による苦しみからではなく、それは紛れもなく「憎しみの脂」が渦巻く瞳へと。

その時だった。

『聞こえてるかしら、エム。新しい任務よ、至急部屋へ来てちょうだい』

突如、無線機から入って来た音声と共に、エムはシャルロットの首を乱暴に放した。

『ゲホッ、ゲホッ!!』

「……少しはらしい目になったか、シャルロット・デユノア」

首を押さえながら、苦しそうに咳き込むシャルロットを一瞥するエム。

そこから微かに、己と同じ匂いができてきている事を感じ取ったエムは、薄らとほくそ笑みながら、スコールの所へと向かった。



「ああ、姉さん。やはり貴女は私を選ぶべきだったんだ」

憎しみの脂に染まり切った目で、少女は呟く。

「見ただろう姉さん、あの男の堕ちっぷりを。姉さんの傍にいたばかりに、壊れてしまったあの男を……!!」

忌々しいあの男の顔を思い浮かべる。

己ですらドン引きする程の所業を、易々と行って見せるあの悪意のカタマリのような男を。

「私を選ばなかったから、貴女は両方を手放すハメになった」

その選択は、間違っていた

少なくとも、自分を懐に置いていれば。どちらかが壊れるだけで済んだ。

「どんな気分だ、姉さん。一方を護ると誓い、その一方を自分の所為で壊してしまい、両方を壊してしまった気分はどうだ？ 最悪か？ 吐き気がするか？ 身震いするか？

目を背けるか？ ああ、早く顔を見たいぞ姉さん……苦痛に塗れた貴女の顔が！」

あの時、エムがIS学園に入った段階でアインを迎えに行かず、アリーナに直行していれば、エムにとって千冬の最高の表情が見れたであろうことを、エムは知らない。

エムはまだ姉^{千冬}が苦しむ姿を直接目していない。

「フッフ、ハハハハ、殺す、コロシテヤル。お前達、二人とも。苦痛の刃にもがき苦しんで私のために死んで行け……！」

私を捨てた事を後悔しろ。

私を選んでいれば、少なくとも今よりマシな結果になっていた。

両方が狂わずに済んだ。

——だから、精一杯苦しんで死ぬがいい、織斑千冬！

歪みの大源

「……知らない、天井だな」

思わず、そんな言葉が漏れた。

別に知らない訳ではない。

知識としては知っているし、単に自分がこういう場所にお世話になった経験がないだけの話であつた。

……薬品の慣れない匂いが鼻に触る。

病院という空間に慣れていない彼女にとっては、それはまさしく未知の経験であつた。

「まったく……」

ハア、とため息を吐く。

今まで如何に自分が報いを受けてこなかったかを、慣れない病室の雰囲気や千冬は実感させられる。

いや、病院に運ばれたというのであれば、それは報いとは言わないのでないか。そんな思考が過るが、それでは自分を病院に入れてくれた者に対してあまりにも失礼だと

思いなおす。

「誰だろうな、こんな私を今更助けようなんてお人好しは……」

体中に撒かれた包帯やらを目にして千冬は眩く。

今までは、あまりそういうのを感じてはいなかった。

白騎士事件を友人と共に共謀し、世界を変え、自分は白騎士から姿を変えブリュンヒルデというIS乗りとして世に君臨した。

変わりゆく世界に切り捨てられる者達を目にくれずに、ただ一人の家族を守るために栄光に縋りつき、そのただ一人の家族すらもその栄光故に手放してしまった。

どうしてだ、と千冬は今になって思う。

あれほど家族を守るにはいい後ろ盾だと思っていたブリュンヒルデの名も、今では完全に忌むべき名でしかない。

己のせいで歪んでしまった世界を友人と共に眺めておきながら、その闇から目を背け、己が手にしたもののばかりに目がいくあまり、己が抱いてしかるべき罪悪感おもしろいがいつの間にか如していた。

それ故に、あの事件を招いた。

各国の上層部から半ば押し付けられる形で、IS学園へと入学させられた男子生徒、アイン・ゾマイール。

「いや、押し付けられた、というのは言い訳か」

先程の己の思考を省みて思い直す千冬。

手を刎ね除けてでも、彼をI S学園へ入学させろという要請を断るべきだったのだ。

なのに、千冬はむしろ進んでそれを承諾してしまった。

彼がかつて自分が手放してしまった唯一人の家族なのかもしれない。……そんな誘

惑に千冬は負けてしまった。

自分勝手に世界を変えておきながら、それが原因で手放してしまった家族をまた取り戻せるかもしれないと、それで周りに与える被害を考慮せず、またもや自分勝手の都合で人々を巻き込んでしまった。

「私は、何も変わっていない。変わろうとしなかった……」

自分が変えた世界にあるうことか満足してしまい、それで周りにどう影響を与えるのか、その影響でどれだけの人々が陥れられたのか。それを見ようとも、知ろうとも思わなかった。

周りを信用せず、己の力で何とかするかしなないと自惚れ、その力がまかり通る、己にとつて都合のいい世界に変えようとして、この様だった。

そんな、自分勝手な子供が、己のエゴを押し通したままズルズルと駄目な大人のまま成長した。

その成れの果てが自分なのだ、千冬は思い知った。

そういつた無意識の悪意が、人を傷つける結果になるという事も、今更になって痛感した。

気付いた時には、もう遅かった。

「私は、どうするべきだったのだろうな……」

どうするべきだったか……そんなものはとづくに分かっていた。

昔、友人の馬鹿げた行いに付き合わず、止めていればよかったのだと千冬は思い返す。そして千冬は自分の力だけで何とかしようと思わず、きちんと周りを頼るべきだったのだ。

箒や束の両親を頼るなり、己の手で一夏を育てようと思わず、一夏を縛り上げようと思わずに、ちゃんと周りの大人を頼ればよかったのだ。

そうすれば、少なくともこういう事にはなっていなかったかもしれない。

「失礼します……あ、目が覚めましたか、織斑先生！」

ガチャ、とドアが開き、山田先生——もとい山田真耶が入って来た。

「山田先生、私は——」

「織斑先生はあの後、バーから出ようとした時に急に倒れたんですよ？ 体中に何重にも重なった打撲と、アルコールの摂取のし過ぎで、それで……」

「そう……か……、福音は今どうしている？ それにクラリツサは？」

倒れてしまった自分を情けなく思いつつも、現状を整理しようと千冬は真耶に問う。福音が暴走してから既に相当な時間が経っている。

新しい被害情報はないか、またかつての自分の部下が今どこにいるのかも気になった。

「福音は……現在は太平洋の真ん中で浮遊したまま活動を停止しているようです。ドイツ軍が保有する衛星カメラにより監視されているようですが、いつ活動を再開してもおかしくは……」

「ドイツが……だと？ アメリカ政府は何をしている？ 仮にも自国が暴走させてしまった兵器なのだから、それくらい——」

「福音の監視は、ドイツが自ら買って出たそうです。おそらく狙いは信頼回復にあるのだとマスメディアは推測しているようですが、本当の狙いは……」

「……あわよくば、福音を手に入れようとしている状況、という事か？」

「おそらく、ドイツだけではないでしょう。福音の座標位置が太平洋の真ん中となれば、各国も手が出し辛いでしょうし、何よりこの情勢では各国で連携が取れるかも難しいでしょう。福音に対する対応は当分先送りになるかと思われまます」

「よしんば各国が手を組んで合同作戦に出た所で、どこかしらの国が福音を横取りしよ

うと企むかもしれない、か。太平洋にいますという事は、おそらく欧州やアジアを横断した訳ではない、其方に被害が行かなかつたのが不幸中の幸いか……」

「ですが、先の福音暴走事件をきっかけに、アメリカの各州でデモが起こっているようです。何千人もの犠牲者が出たというのに、それ何十人と言った風に情報操作するのは無理があります。デモ隊には女尊男卑の被害を受けた男性を中心に、この間のＩＳ学園でのテロ事件の影響を受けて女尊男卑の思想から目を覚ました一部の女性たちも加わっています」

次々と真耶の口から語られる情報に千冬は頭を痛める。

「クラリツサさんは……暴走した福音に備える為に本国に帰還しました。けれど、そのせつかく情報を求めて織斑先生の所までやってきたのに、織斑先生が倒れてしまったものだから……その……私が持ちうる限りのあのテロ事件の詳細と情報データを彼女に……」

若干、千冬から目を逸らして気まずそうに真耶はそう語った。

せつかく情報を求めて副隊長一人の身で国の目を盗んでこの国にやってきたのに、その貴重な情報源が倒れてしまい、何の情報も得られぬまま本国へ帰還しなければならぬ羽目になるのはあまりにも哀れだったので、真耶はクラリツサにあのテロ事件の詳細データを渡したのだと言う。

「……そうか、世話をかけるな。すまない」

「あれで、よかつたのでしょうか？ 彼女は、いえ彼女達はドイツという国に不信感を抱いていたのに、それを促すような情報を与えて、それに、ボーデヴィツヒさんの仇の名もその中に……」

「……………アインを入学させるように学園に促してきたのは各国の上層部共だ。アインが犯人である事を公開するとは即ち、自分達の尻尾を掴ませる事にも繋がる可能性が出てきてしまう。本来ならば、一教師の一存で流していい情報ではないな」

「……そう、ですよね……、クラリツサさんも同じような事を言いたげでした……すごく頭を下げられましたけれども」

「私個人としては、何も言えないな、ソレは……」

大本の原因が自分である事を明かせない自分を情けなく思いつつ、千冬は真耶の独断行動についての是非を決められなかった。

黒兎隊が仇の名を知った所で、仇という存在はアイン・ゾマイルに限らないのが彼女達にとっては辛い所だ。

大本としてラウラのレーゲンにVTシステムを搭載したのはアイン以外の第三者である事に違いない。VTシステムインストール履歴には、彼女が代表候補生としてIS学園に転校する前からVTシステムは搭載されていたとの事。

そして、学年別トーナメントと同じ時期にVTシステムの更新履歴が確認された事から、あの時点でドイツ以外の者の手によってVTシステムが改良されていた形跡があった。時期からして犯行が可能であった者はレーゲンの整備を担当していた整備課の生徒達。

その整備課の生徒達も洗脳されていた事から、誰の手によるものかは一目瞭然である。

つまり、彼女達にとつて隊長であるラウラの仇とは、ドイツであり、アインであり、そして彼のスポンサーでもある。

「クラリツサ……」

拳を握り、かつての教え子の名を呟く。

千冬は改めて、クラリツサが身の危険を冒してまでこの極東の地まで情報を求めてやってきた訳を実感した。

最早、彼女達は何を信じて戦えばいいのか分からない。

そして、その彼女が頼りにしていた自分ですら、この世界を歪めた元凶である始末だ。彼女達には信じられるものが、そして明確な味方が何処にもいない。

こんな状況の中で祖国に素直に尽くせるわけなどないのだ。

(……どうすればいいのだろうか、私は……)

今になって、次々と千冬の胸の内から、罪悪感の泥が沸き上がってくる。

そもそも、ラウラの『越界の瞳』ウオードン・オーソエの事故に関しても、自分と親友がISを世に広めていなければ起こっていなかった。

黒兎隊が今のような状況に陥る事もなかった。

考えれば、考える程。

辿れば辿る程、その元凶が自分に行き着いてしまう。

この世界の歪みの、何もかもが、その元凶が自分とその親友だった。

アイン・ゾマイルという怪物も、結局はその歪みから生じた一端でしかない。

「山田先生、少し、話を聞いてくれるか？」

「話……?」

「ああ。己のエゴで世界を歪めた、バカな女の話だ」

そして、千冬は話した。

己の家族の事。

そして、白騎士事件の真相を。

彼女との仲も崩れる事も承知して、己の罪を話した。



アメリカ。

シルバリオ・ゴスペル
銀の福音の襲撃を受けて崩壊し、閉鎖された都市部。

軍の嚴重な閉鎖体制によって本来ならば簡単に入れるような場所ではないのだが、閉鎖体勢を敷く軍に大量に押し寄せるデモ隊を何とかカモフラージュに利用し、少女、エムはこの地区を調査していた。

「スコールからの情報によれば、この地点の上空から拡散レーザー砲が放たれたそうだが……」

高所に赴いては、ISのハイパーセンサーに搭載されたカメラ機能で、ゴスペルが残した傷跡をカメラに取っては、それを本部に転送する。

いずれ強奪予定の銀の福音のスペック調査——それがエムに与えられた任務である。

肝心のゴスペル本体は太平洋の真ん中で静止状態のまま動かないのが現状である。従って、そのゴスペルが残した傷跡からでしかゴスペルの性能を測る方法はない。

サイレント・ゼフィルスのバイザー型ハイパーセンサーを部分展開しながら、エムは都市の中を歩く。

ハイパーセンサーの映像から次々と解析結果が映し出され、それが本部へと転送され

ていく。建物の損傷具合や瓦礫の数、地形の変化、人の死体の数、散らばる肉片など、それらの要素を元にゴスペルの予測スペックデータは少しずつ完成していく。……それでもあくまで予測なので結局未知数であるのが心許ない所であるが、それでもないよりはましだった。

「あの地形の荒れ具合、そして残留エネルギー反応、今までよりもスペック予測地点には最適か……」

今までのどの地点よりも荒れた地形であり、同時にそこから血の臭いを感じたエムはそこへ向かった。

向かった先は、遠目で見るとよりも更に無残な光景が広がっていた。

「戦争特化のI-Sを作ろうと急いだ結果がこれとはな……スコールの奴が米軍を抜け出したのも領ける」

他人衆に与えられた武器を扱いきれずに自国を傷つける愚者……エムは米国に対してそんな評価を下す。他国に力を示すならばともかく、その力を自国に向ける形で示しては呆れを通り越して笑えて来るとエムは思った。

「……誰か来るな」

ハイパーセンサーに映った生態反応。

それを目にしたエムは、即座に物陰に隠れる。

「ここで間違いないようですね。この荒れた地形、この残留エネルギー反応。ゴスペルの性能予測に役立ちそうです」

「そうか、ナタルがここで……」

物陰に隠れたエムの耳に、男と女の会話が聞こえてくる。

エムはこっそりと覗いてみる。

（あの軍服は、米軍か？ 奴等もこの搜索を……）

米軍がここに調査に来る事自体は疑問に思わなかったが、自分と同じようにゴスペルの性能調査が目的である事に関してはその限りではなかった。

（何故態々自国のＩＳの性能調査をここに来てまでする？ データベースを調べるならなんなりすればいいものを……）

そんな疑問をエムは抱く。

既に米軍自体が一枚岩ではない可能性も否定できないので、もしそうであるのなら多少なりと納得が行ったのだが――。

（あの女、確かナタルと言ったな。会話から察するにあの銀の福音に搭乗しているパイロットはアメリカのＩＳテストパイロット、ナターシャ・ファイルスカ……）

しかも彼女の事を「ナタル」と愛称で呼んでいた事から、その代表とやらとある程度親しい仲にあると見えた。

何か情報が得られるかもしれないと、エムは物陰に息を潜めながら彼らの様子を窺った。

「つたく、上もケチな奴等だ。今更隠したっておせえんだし、とつとと福音の性能データを公開しろってんだ……!!」

「同感です。しかし、詳細を知る技術者や研究員は全員自分達が作った福音にやられ、福音のスペックを大衆に教えられる者はもうほとんどいない。だとすればデータベースしかない訳ですが、国家代表である貴女にすら閲覧許可を与えないとは……」

「正直な話、ナタルが乗っている福音は従来の構想から外れて急な武装化を施されたらしいしな、データベースに乗っている奴とは似ても似つかねえかもしれねえ。だからと言つて実際の福音の詳細を知る無能共もいねえとなりやあ、こんな面倒な事をするしかないってか。くそ、こうしている間にもナタルは……!!」

国家代表らしき女性の軍人が悔しそうに拳を握りしめる。

その様子からしてひしひしと米軍の上層部に対して不信感が感じられる。

（友の為か、下らんな……。それにしても、この様子では国家同士の戦争が始まる前に内乱が各国で勃発するか……。どちらにしてもあの男が喜びそうなことだ）

自分が殺したいと思っている内の一人の顔をエムは思い浮かべる。いずれ彼も殺すつもりだが、それまで精々織斑千冬を苦しめる餌になつてもらおう腹積もりだった。……

下手すればエムの方が逆に餌にされかねない程の要注意人物なのだが。

「んで、イスラエル側の見解はどうなんだ？ 現場にいたほとんどの技術者はアメリカ側だ。あっち側なら多少なりと残ってんだろ？」

『暴走の原因は未だハッキリしないが、おそらくは急な武装化を施し、その武装を十分に馴染ませる事が出来ずに、コアのエラーが発生して暴走したのではないか』。何か言い訳じみた物を感じますね」

「暴走したのではないか、じゃねえよ。こっちは暴走の原因じゃなくて性能データが欲しいんだ。そんな苦しい言い訳なんざ聞きたくねえつての！」

「福音の横取りを企てる国家もいるでしょう。その対策の為に公開したくないのは分かりますが、さすがに憤りを感じますね」

「まったくだ」

イスラエル——かの国もアメリカと合同で福音の開発に携わっている。アメリカと違い自国民に被害を出さなかっただけマシといえるが、今後も他国からの責任追及は間違いなくされるだろう。

「まあ、軍属の我々がどうこう言っても仕方ないでしょう。とりあえず、この任務を……どうかしましたか？」

「……誰かいるな」

突如、男に制止の手をかけて台詞を遮る国家代表の女性。

何者かの気配を感じ取る。

その視線の方向は、エムが隠れている物陰へと向けられていた。

「出てこい、いるんだろ?」

(……気付かれたか)

「何処の差し金だ? ドイツか? イギリスか? それともイスラエルか? 何処のど

いつかは知らねえが、大方、私らと同じようにゴスペルの性能調査でもしに来たんだろ

う?」

どうやらエムの隠形は、この国家代表の女性にはお見通しのようだ。

さすがは国家代表といったところである。

「ああちなみに、私がどうしてお前に気付いたか知りたくねえか? —————こういう

事だよおツ!!」

「!」

瞬間、国家代表の女性の身体を、量子化の光が纏っていく。

そして、エムの隠れていた物陰、地面ごと粉碎した。

出来上がった巨大なクレーターの中心には、IS専用装備・単分子結晶ナツクルが突き立てられている。

その咄嗟の攻撃に反応したエムは既に、サイレント・ゼフィルスの装甲を全身に呼び出し、纏ったままその女性のI Sを見下ろしていた。

「アメリカの第三世代型I S 『フアング・クエイク』か」

「おう。そして国家代表イーリス・コーリングだ。何処の差し金かと思えばソレ、イギリスの第三世代型I S 『サイレント・ゼフィルス』じゃねえか。知ってるぜ、テメエ、I S 学園のテロ事件ん時にいただろ？ 英国はまるつきり黒みたいだしな、ドイツ然り」

「……」

名乗りを上げ、全身で闘争心を表す国家代表の女性、イーリス・コーリングはゼフィルスを纏うエムを見上げる。

その沈黙を、イーリスは肯定と受け取った。

「なら下手に手は出せねえな。安心しろ、殺しはしねえ。身体に聞く事もあんだからよー！」

「……勘違いも甚だしいとはこの事か」

呆れたように、イーリスに聞こえないようにエムはそう呟く。

イーリスとて、上層部から聞いた情報をこの状況で鵜呑みにする質でない事は先ほどの会話で分かっているのです、実際のところはどうなのかは分からない。が、情報を手に入れる為にエムを捕縛しようという判断自体は間違いでなかった。

エムが逆手に構えたナイフで襲い掛かる。

「んなチマチマしたナイフに、この『ファンク・クエイク』の拳が敗れるかよ！」

そう言うと同時に、イーリスの拳が振るわれる。

派手な音と火花を立て、同時に金属の折れる音が響き渡る。

宙に舞ったのは、エムの折れたナイフの刀身だった。

が、エムは即座にBTエネルギーライフルを呼び出し、ライフルのAIMが、ナイフの破片、およびイーリスに重なった同時、発砲する。

「チィッ！」

脚部にビーム弾が命中する。

同時に、命中した部分に、先ほど自分が折ったエムのナイフの刀身が突き刺さっているのをイーリスは見た。

「邪魔くせえ、やってくれたな」

「……」

「言っておくが私はつえーぞ。イギリスの使いなのか何なのか知らねえが、今の内に降伏して大人しく尋問されとくのが吉だぜ？ お前、どうにも手加減出来なさそうな輩だしなあ」

イーリスはエムの实力を見抜いていた。

先ほど、己のナイフを折られても冷静に射撃武器で対処してきたその技量は、間違いなくIS乗りとして優秀である事が伺えた。

『エム、聞こえるわね?』

ISのプライベートチャンネルのスコールの声が響く。

敵を前にしているエムは返事をしないが、スコールは問答無用で言葉を続ける。

『状況はモニターしているわ。データも十分取れたし。頃合いを見て下がりなさい。見つかってしまったけど、イギリスに罪を押し付ける事もできる』

そのためのゼフィルスなのだからね、と続けるスコール。

IS学園での代表候補生の差別発言、およびテロ事件加担の容疑を駆けられているイギリスは既に国連での発言権を失っている。

サイレント・ゼフィルスが盗品であると釈明した所で、彼らの言葉は信用されない。よしんば信用されたところで、自国のISをテロ組織に盗まれたとしてイギリスの信用は更に墮ちるだろう。

アインの専用機の件もあり、とにかく今のイギリスという国の存在は、亡国機業にとつて都合がよかった。

「……了解」

自分が負けるとは思わないが、すぐに決着が付くとは思えない。

この閉鎖された都市部は、デモを抑え込む米軍で囲まれているので、いつ援軍が来てもおかしくはない。

最悪、フアング・クエイク以外のISが出張ってくる可能性もある。

そう判断したエムは、感情のない声で静かに返事をした。

「逃がすかよー！」

言うなり、イグニッション・ブースト瞬時加速でエムに向かうイーリス。

だが、襲撃対象に一撃を与えてからの離脱に特化したゼファイルスを駆るエムは、イーリスの突進をBTエネルギーライフルで牽制射撃を行いつつ、そのまま作戦領域から離脱した。



亡国機業の基地。

その整備室にて、赤いISスーツを纏った青年がいた。

IS学園の時に着ていたダイバータイプのISスーツは既に破棄し、現在着用赤いISスーツは目の前に展開されている彼の専用機用のものだった。

そこにあるのは操縦者だけがすっぽり抜けた打鉄のシルエットそのもの。

装甲は緋色にコーティングされ、従来の打鉄よりも鋭角的なフォルムになっている。脚部の靴部分のパーツはハイヒールのような形状のモノとなっているため、機体の高さは従来の打鉄のモノよりも少し高い。

強固なスカートアーマーは、牙状のビットを収めたコンテナウイングに換装されている。何より特徴的なのが、右肩に携えた大型ブレード『天山』。

左腕には装着型の射撃兵装、BTエネルギーハンドガン『流星』を装備している。装着型なのは、そのままの状態でも大型ブレードを満足に扱えるようにするためだった。

(ブレードに内蔵されたPIC展開機構の展開速度をもっと早くするように調整してもらうべきか、ファングの持続時間もブルー・ティアーズに比べて劣るのが気になるが、それは仕方ねえ)

右肩に携えた大型ブレード『天山』は刀身にPIC展開機構を内蔵されており、それにより大型ブレードの重量を軽くして振り回しやすくし、インパクトの瞬間にPICの重量軽減効果を切って運動能力を高めた粉碎攻撃をする事が可能であった。正にPICの機能をうまく武装に取り込んだ代物である。

また、搭載されたBT兵装『ファング』も強力な兵装であり、その性能もブルー・ティアーズに比べれば格段に上昇しているのだが、一つだけ弱点がある。

それは、消費エネルギーが激しい故、本体から射出できる時間が、ブルー・ティアー

ズやサイレント・ゼフィルスに比べて短いという点である。単にビームを射出するだけなら従来のモノとあまり変わらないのだが、雪片式型の展開装甲を流用したエネルギー刃を発生させた時のエネルギー消費量が著しく多かった。

元々小型であるため、それにクリスタル状に溜められるBTエネルギー量も少ない。(まあ、元々BTをメインに戦うつもりもねえ。ファングはあくまで補助兵装として使えって事か……)

打鉄改 *zwei* のBT兵装のファングは強力な武装でこそあるものの、ブルー・ティアーズやサイレント・ゼフィルスのようにBT兵装そのものをメインとして使うには向かない。

あくまで一気にケリを付ける時や、一瞬だけ射出して、敵の動きを妨害、もしくは接近するための布石にするという使い方が望ましい。

つまり、この機体は、操縦者がBT兵装の操縦と白兵戦を同時にこなす事を前提で組まれたものなのだ。

使いこなせるIS乗りは自然と限られて来る。

それが今までの機体を使ってきた中で、アインが下した評価だ。

とはいえ、打鉄を素体にし、イギリスのBT技術、そしてあの篠ノ之 東が自ら手掛けた白式の雪片式型に搭載された展開装甲の機構を流用したファングを搭載したこの

機体は、傭兵の身分である自分にとってこれ以上にならない程の贅沢品である事はアインも承知している。

基本スペックこそ白式に劣るが、その分武装の相性がよりアインに合うようになっていたため、アイン自身としてはこれと言って不満はなかった。

(まあ、今後の調整も兼ねて、裏の技術者共に報告しておくか……)

そう思つて、再びツヴアイを待機状態に戻したその時だった。

「アイン・ゾマイルはいるか？」

不意に、整備室のドアが開かれ、名前を呼ばれる。

「……だ。何か用か？」

椅子から立ち上がり、入つて来た女性と向き合う。

この女性もまた亡国機業の一員であり、スコールの部下である。

専用機こそ与えられてないが、スコールの部下なだけあつて腕はそこそこ立つ。

「スコール隊長がお前に会わせたいと言つていた者達が今到着した」

「俺に……？」

「そうだ、付いて来い」

そう言つて、隊員の女性は整備室から出て行き、アインもそれに続く。

延々と長い廊下を歩き、整備室から段々遠ざかつていく。

そうまでさせて一体自分に誰を会わせたいのだとアインは考えたが、着くまでまだ時間ありそうなので、この基地の廊下を見渡した。

（しかしまあ、よくこんなでけえ基地を持つてるもんだ）

独自のI S部隊を保有している事といい、この亡国機業という組織がそこかしこのテロ組織とは一線を画す物である事は承知していた。

聞いてみればこの組織、第二次世界大戦の時期から存在していたという事だが、そんな組織が何故I Sコアを集めたがっているのかアインには気になつていた。

亡国機業という組織の目的が設立当時から変わっていないのだとしたら、突如として世に散らばり出たI Sコアに自分達の目的を達成しうるナニカを見出したのか、それとも亡国機業の目的そのものが設立当時から大きく変わっているのか、どっちにしろ傭兵であるアインが知るところでないのは確かだ。

アイン自身も気にはしているが、それでも大きく踏み込むような真似はしない。

少なくとも、自分という存在は彼らにとって利用価値がある、それさえ分かっていたらば十分だった。

「……だ、入れ」

やがて部屋にたどり着け、女性に入るように促される。

言われたまま、そのドアを開けた瞬間、見覚えのある顔がずらりと並んでいた。

『隊長、やっと戻って来たア!!』

アインの顔を見た瞬間、部屋にいた彼らはそんな歓びの声を上げる。そこにいたのは、今までアインに付き従ってきた戦争屋仲間だった。

懺悔、涙

彼らにとってアイン・ゾマイールという存在は、一言で表すのであれば「憧れ」であり、「一生付いて行きたい存在」であった。

世にISが台頭してから女尊男卑の風潮が広がり、男と女の立場は逆転。いや、かつて男が有利だった時代でもこれほどまでの仕打ちを女たちが受けた事はないだろうと思わせる程のものである。

やがてそれはエスカレートしていく。

ある欧州のPMCはその構成員のほとんどが男性であったが故、そのビジネスを縮小せざるを得なくなり、果てには少年兵を秘密裏に養育して中東の戦場に安い賃金で派遣するという暴挙にまで出た。

フランス陸軍の女将校たちの画策により、フランスの外人部隊に非公式の少年兵連隊までもが設立された。

それらの組織を転々としながら、戦場で好き放題その悦を満喫してきた一人の少年傭兵がいたのである。

望まぬにも関わらずそこに所属させられ、望まない戦いをされていた彼らとは違い、

その少年は積極的にそこに自分の能力と力を売り込み、所属し、一定の戦果を上げつつ戦場で好き放題するその在り方に、いつしか彼らは惹かれていった。

フランス 外人少年連隊——フランス陸軍の女将校たちが秘密裏に作り上げた少年兵の部隊。

構成員は十歳から十五歳までの少年兵たちであり、この女尊男卑の世において男の捨て子が数多く発生し、フランス陸軍はそんな彼らを有効活用しようと拾い上げ、または拉致し、人殺しの方法と、そして己の立場を徹底的に叩き込み、従順な少年兵として育て上げた。

少年たちとて望んで所属した訳ではない。

ときには上の意向で捨て駒にされ、ときには戦場だけではなく慰安夫として女たちの慰み物にされ、そして無様に切り捨てられてゆく。

それが彼らが辿る人生の末路である。

自分達は他人に好き勝手に弄ばれ、無様に散っていく運命なのだ、少年連隊の誰もが諦めていたその時だった。

一人の少年がまた、その少年連隊に所属してきた。

その少年は、自分達のような全てを諦めたような目ではなく、だからといって信念に燃えるような目もしてはいなかった。

上の理不尽な任務にも従い、また今までの仲間たち同じように切り捨てられるのかと思いきや、その少年だけが何故か生還した。

それが、彼らの興味がその少年へいくきつかけとなった。

——何故生き残った？

——何故戦果を挙げられた？

——何故そんな、汚れ仕事を平然と引き受けられる？

そんな疑問が彼らを支配した。

その後も同じだった。

周りが絶望したような表情で上の命令に頷く中で、その少年だけは普通の軍人と差異のない態度で任務を了承し、そして生き残る。

そして、次々と変化があった。

その少年と共に任務に当たった同僚の少年兵たちが、何と任務終了後でも帰還するようになってきたのだ。

普通なら切り捨てられるか、そのまま射殺されるかの二択であるにも関わらず、その少年に付いて行った同僚たちは生き延びたのだ。

到底生き残れるような任務でなかったにも関わらず、その少年に付いて行くだけで生き残れたのだ。

その少年と共に任務に当たった同僚たちはこう語った。

その少年の普段大人の上官に対して見せてきた態度が嘘であるかのように戦場では変貌し、任務目標を達成するは愚か、その戦場で好き勝手虐殺し、無力な女たちを強姦し尽したのだという。

望まぬ戦いをする自分達とは違い、まるで自分から進んで戦いたがっていたかのような、帰還してきた仲間たちは語った。

それを聞いた時、彼らが最初に抱いた感情は憤りだった。

自分達は望んで戦っているわけでもない、ここにだって好きで所属した訳ではない。わけも分からず捨てられ、連れ去られ、気が付けばこうして自由のない軍隊生活を強要され、今まで何の訳もなく打ち捨てられていく仲間も大勢見てきた。

そんな組織に、進んで入ったその少年が彼らには理解できなかった。

自分達とは違い、ちゃんと自由に選択できる能力と力があるのに、態々こんな進んで戦争するような選択肢を選ぶその少年の存在を、彼らは許容できなかった。

……だが、その少年と任務を共にする内、そして生還するのを繰り返し、彼らの頭からそんな思考を失せていった。

少年と任務を共にする度、その戦場で悦を味わえた。

最高の結果で任務を達成した上で、虐殺、強奪、強姦——その少年に付いて行け

ば、その戦場で味わえる限りの悦を味わい尽くす事ができた。

最初こそ忌避していたが、自分達を散々貶めてきた女どもが屈服する感覚を覚えた時、彼らは知った。

少年は彼らに教えた、戦争の素晴らしさを。

この世には戦争で得をする人間もいる、その得をする人間達こそが自分達なのだ、少年は彼らに身を以て教えた。

その後も同じだった。

その少年に付いて行けば、どの任務も生還する事が出来た。

非公式の部隊である分、上が汚れ仕事を多く回してくるおかげで、その分楽しむ事が出来た。

最初は忌避していた筈のソレを、いつしか最高の遊戯場だと思ふようになった。

戦いをするしかないのであれば、その戦いの中で楽しんでしまえ——ソレを、少年は彼らに教え込んだ。

慰安夫として派遣された時は、女共に壊されるのではなく、逆に壊し返してやった。

その少年に付いて行けば、とにかくどの戦場も愉しめた。

今まで望まずやってきた虐殺も、一周回ってやりすぎれば楽しかった。

ただ殺すだけではなく、手足を撃ちぬいて動けなくなつた『女』を好き勝手強姦する

事も出来た。

——ああ、戦場ではこういう事もできるのか。

これが他の軍隊であるのならばまずできない事だろう。

だが自分達は非公式の部隊、上が汚れ仕事を回してくる機会が多く、その汚れ仕事がかんなんにも楽しいものなのだと彼らは知る事出来た。

そしてついに、少年は非公式の部隊の所属ながら、上から階級を貰った。

今まで一人として階級を貰う間もなく捨て駒にされてきたというのに、その少年は「少尉」という階級を貰ったのだ。

その結果に、彼らは歓喜する。

いつかしか、彼らはその少年に付いて行きたいと思った。

聞けば、この外人少年部隊ではなく、他の外人部隊にも少年が連れてきた傭兵が多数所属しているようだった。

P M C に所属していた時に、またはそのP M C から派遣されていた時に中東で作った傭兵仲間たちまでいると少年の口から聞いた。

この少年は、自分達の所に来る前から、多くの年上の傭兵仲間と共に戦場を駆け抜けていたのだ。

故に、自分達も付いて行きたいと思った。

この女尊男卑の世の中でも、己の欲望のままに生きるその姿に、彼らは憧れた。女尊男卑など関係ない。

男女関係なく、自分達を今まで散々弄んできた女性すらもが無力と化す場所、それが戦場なのだ、彼らは知った。

そして、彼らは少年と共に外人部隊を抜け出した。

少尉という階級と権限を得た少年は、自分達に付いて来る少年兵仲間と、共に外人部隊に連れてきた大人の傭兵仲間を引き連れ、次なる戦場へと赴いた。

イドニア共和国——1980年代後半に民主化を果たすも20年以上あまりが経過し、内政は乱れて混乱し始めた歴史を持つ東欧の国。そんな中、大臣の不正を見抜いた軍部によるクーデター事件が発生するも、このクーデター事件のおかげで政府が結束し、混乱は収まった。その後、女尊男卑の風潮に乗っ取って「戦後、この世界を担っていくのは女性だ」という大臣の公言により、女性の大統領が着任した。壊滅した軍部は反政府勢力として未だ抵抗を続けていたが、それも鎮まりつつあった。

しかし、大臣の不正がマスコミに暴かれた事により事態は一転、「女性による国内の統治」を提唱した大臣本人はその女性大統領を自らの言う事を忠実に聞く傀儡とし、国を裏から支配していた事が判明し、結果として大臣は国民の男女双方から反感を持たれる。やがて世論の支持は次第に反政府組織に傾く事になり、それに便乗した反政府組織

は多大な支援金を獲得、多くの傭兵を雇い、国内は新政府軍と傭兵部隊による激しい内戦へ突入。

その内戦に、彼らも反政府軍の傭兵として参戦した。

やがて戦況は反政府側へと傾き、大臣がついに隠し持っていたＩＳを導入せざるを得ない事態にまで陥った。

その内の一機が、彼らによって落とされ、彼らを率いていた少年はあろう事かその墜したＩＳに適合し、ＩＳ適正がある事が発覚した。

自分達の隊長にＩＳ適正がある事が分かった彼らは更に歓喜する。

この人に付いて行つて間違いはなかった、この人に付いて行けばこれからもつと戦争を楽しめると思った。

その後、隊長であった少年は部下と共に大臣邸を襲撃し、大臣を殺害した後、残り二機のＩＳのパイロットの内一人をＩＳに搭乗していない状態で銃殺し、ＩＳを強奪。残り一機のＩＳを撃墜するに至つたのだが、そこでアクシデントが発生した。

隊長の少年が、ＩＳを動かした事が何故か世間に広まってしまったのである。

さして時間は掛からず、まるでＩＳに搭乗したその瞬間から知られたかのように、各国の上層部にその情報が行き渡ってしまった。

結果として彼らを率いていた少年は「ＩＳの兵器としての使用を禁ずる」というアラ

スカ条約を破った事により投獄され、内戦真つ只中の国の中心に彼らは置き去りにされる事となった。

途方に暮れる彼ら。

別れてそれぞれ戦争屋として生きていくかという結論まで出かけてたが、そんな彼らに朗報が舞い込んだ。

ファンダム・タスク
亡国機業——ISを保有する、謎に包まれた世界的テロ組織。そのテロ組織か

ら、「お前達の隊長を取り戻してやるから付いてこい」と言われたのである。

そして、その時は来た。

部屋のドアが開かれ、一人の男が入ってくる。

赤いISスーツを身にまとった、一人の少年。

その顔を見違える筈もなく、彼らは歓喜した。

『隊長、やっと戻って来たア!!』

「いやあ、しかしさすがは隊長です。まさかこんな短い間に学園中の雌共を洗脳してテロを起こすなんて」

「俺らも参加したかったですぜ！」

亡国機業の基地にある宴会室で、まるではしゃぐ子供のようにアインに話しかける傭兵達（実際、アインと同じ位の年頃の少年傭兵も混ざっているが）。

ニュースで、IS学園でテロが起こったと知った時、彼らはすぐに自分達の隊長であるアインの仕業だと分かった。

ブリュンヒルデを神に見立て、学園中の女子生徒達の信仰心を煽って紛争を起こすその手口から、百パーセントアインの仕業であると彼らは確信していた。

「隊長、よくご無事で！」

「これでまた戦争を楽しめますね！」

アインにそう言い寄る何人かの男たち。

尊敬していた隊長が更に女にしか乗れない筈のISを動かした事で、彼らの眼差しは余計に眩しいものとなっていた。

「フツ、命あつての物種ってな」

そんな彼らの眼差しを横に流すような余裕の表情で、アインはスポーツドリンクを飲む。ISスーツの上に、半袖のシャツ一枚で肩の入れ墨を晒した状態でリラックスイていた。

（しかし……）

ボトルをテーブルの上に置き、ソファーに座り込みながらアインは考える。

まさかこのタイミングで自分が率いていた傭兵部隊を引き合わせてくれたのは予想外であった。

(このタイミングでこいつ等呼び寄せるたあな、しかも俺に何の連絡も寄越さないで大将は一体何を……)

自分を驚かせてやろう、という魂胆かとアインは考えたが、雇い主であるスコールはそもそもそんなサプライズを好む性格ではないと思いなおし、その考えを改める。よしんばサプライズをするにもそれは身内限定であつて、自分のような傭兵ごときにそんな真似を彼女しないだろう。

(となりやあ、そろそろ大将から一仕事貰えるか。ああ、楽しみだぜ……!!)

はしやく部下達を眺めながら、アインはボトルのスポーツドリンクを一気に飲み干した。



日本の病院。

そのの病室にて、寝起きの千冬の口から語られた真実に、真耶は真顔だった。

一人の科学者の癩癩と、一人の姉のエゴから起こった白騎士事件、その全貌を千冬は

真耶に語った。

絶交、絶縁、そんなものは覚悟の上だ。

あの事件を起こした者の一人として、世界を歪ませた大源の一人として、千冬は語らなければならなかった。いや、もしくは己の友人以外である誰かに知ってほしかったのかも知れない。

誰か、信頼できる人物に、たとえ嫌われると分かっているとしても、それでも千冬は一人くらいには本当の事を話しておきたかった。

「これが、白騎士事件の真実だ。一人の束と、一人の愚か者のエゴバカによつて引き起こされ、結果として世界を歪めた。そして、とうとうこうなってしまった」

「……」

「今まで目を逸らし続けていた。弟と別れてしまつて、自分が変えた世界が今どうなつてしまっているのかに気付いていながら、気付かない振りをしていた。外から目を背け、この学園の内側の生徒達の笑顔だけを見つめて、その学園すら己が生み出した歪みに巻き込まれて、こうなる可能性があつた事を考えずに……私は……」

「織斑、先生……」

「見ただろう、山田先生。私はブリュンヒルデなどと崇められているが、私のした事も、私の存在も、白騎士も、ブリュンヒルデという名も、その全てが歪みを生み出す温床で

しかないんだ。今回だって、ブリュンヒルデの名を奴に利用されて、聖戦が引き起こされた」

「……」

「これが私だ。世界をめちゃくちゃにした元凶。自分一人だけを信じて、その道が正しいと信じて突き進んだ。自分の道だけを見て、周りがどうなっているかを省みずここまで来てしまった愚か者だ」

世界を歪め、多くの人間を無意識の内に傷つけた。

その業から目を逸らし、結果として今回のようなテロを引き起こしてしまった。

「全部、私が引き金なんだ。いや、私が引き起こした事なんだよ、山田先生」

「そうですね」

全てを話した直後、真耶から返って来たその一言は、ひどく呆気なかった。

絶縁される事を覚悟していた千冬であったが、そのあまりにも感情のない声に、千冬は別の恐怖を覚えてしまう。

「山田、先生？」

「全部、貴女と、篠ノ之博士の仕業であったと。……正直、突然そんな事を言われても、何が何だか分からなくて、頭の中で整理が追いつかないんです」

「……」

感情を感じさせないその声こそ、今の真耶の戸惑いを表していた。

無理もない。いきなりそんな事を言われたところで誰が信じるのか。白騎士の正体が千冬である事は真耶もなんとなく察していたのだが、白騎士事件自体が千冬と束によつて引き起こされた「茶番」でしかなかったことには、さしもの真耶でも容量を得れない。

「ですが、一つだけショックを受けました」

「………何？」

「ISが世に台頭してからは、織斑先生、私も貴女に憧れて代表候補生になりました。多くのライバルを刎ね除けて、ようやくその座を手に入れたのに……そのISのせいで今回のような事件が起こって、あまつさえその元凶が自分の身近にいる人物で……」

「………ッ」

真耶の声に段々と力が入っていくのに、千冬は思わず身震いしてしまった。

「こういうのも何ですが、私、頑張つて来たんですよ？ それなのに……それなのに、こうしてISを否定しなければならぬ立場に立たされて、一番否定しなきゃいけない人物がすぐ傍にいて、今までの自分すらも否定しなくてはならなくなつて!!」

「………」

「こんなの、やりきれませんよ。どうすればいいんですか、このタイミングでそんな話を

されて、私はどうすればいいのですか!? 今までの私を否定すればいいのですか!? 今までのあの学園で教師をやってきた意味は!? 今まで生徒達に教えてきた事は!? 空に憧れて、必死にＩＳを学び、教えてきた事は!? 何故、今になってそんな話をするのですか!!?!!」

「——ツ!!」

慟哭ともいえる真耶の叫びに、千冬は己の軽率さを自覚した。

真耶とて千冬が認める程のＩＳ乗りである。その裏にどれだけの努力があったかは想像を絶する。

なのに、千冬の懺悔のような言葉は、その実真耶の今までの努力を否定しているにも等しいのだ。

「もつと……もつと早く話してくれれば、こんな思いをせずに済んだのにツ、貴女という人はアツ!!」

飛んでくる拳。

千冬は、その拳から目を逸らす事なく受け入れようとした。

彼女の怒りは正当なものだ。

千冬の懺悔を受け入れてしまつては、それこそ今までの彼女の人生は、千冬と東の掌の上という事になる。

実際、そんな事はない。

真耶が手にした成果は、紛れもなく真耶自身の努力の贈り物なのだ。

しかし、今の自分にそれを言える資格はありはしない。ただ大人しく彼女の拳を受け入れる……それが千冬が今できる事だった。

しかし、拳は千冬の顔面に当たる直前に、ピタリと止まった。

「……ッ！」

真耶が何とか思いとどまった。

千冬が人が人であるという事実が、真耶の理性を引き戻したのだろう。それに彼女自身、他人に暴力を容易く振るえる人物ではない。

その甘い性格こそが、彼女が代表候補になれなかった理由なのだから。

「山田、先生ッ」

そんな彼女を見て、千冬は余計に罪悪感に身を絡められてしまった。

最早、懺悔の言葉すら、今の千冬には許されない。

そんな甘えなど、今の自分には許されないのだと千冬は自覚した。

「……一つだけ」

拳を引っ込めて、真耶は何とか耐えるように身体を震わせながら言う。

「一つだけ、聞かせてください」

真耶が顔を上げる。

その目には殺気のような鋭さこそないものの、強烈な怒りが灯っているのが分かる。

「織斑先生、貴女は今、何がしたいのですか？　こんな事を私に話してまで、貴女は何がしたいのですか？」

「……それは……」

その真つ直ぐな視線を突き付けられて、千冬は言い淀んでしまう。

この一か月以上もの間、己が目を逸らしてきた多くの歪みを目にしてきた。

それらを目にし、己の中で出した結論を、千冬は言い出せない。

「私に氣遣う必要はありません。さっきの懺悔で散々心をやられましたので、もう慣れました。だから、貴女が今したい事を言いなさい、織斑千冬！」

「ッ!？」

自身のフルネームを大声で叫ぶ真耶の迫力に、千冬は気圧されてしまう。

普段は優しく、滅多に怒る事のない彼女だからこそ、その中の怒りがどれほどのものか进行い知ってしまう。

普段滅多に怒らない人物が怒るのは、ここまで怖いものなのか。

「私は……破壊したい、正したい……」

俯きながらも、千冬は言う。

「ずっと、考えていた。この身体に多くの傷を刻まれる間、ずっと。私は、私が引き起こした歪みを正したい。この歪みを破壊して、元の世界に戻りたい！」

「……」

「いや、戻すだけでは駄目だ！ 私や一夏、円夏が捨てられるなんて事がないような、男女が平等で笑っていられるような、皆が分かり合えるような、そんな、世界を……」

それは、到底実現不可能な夢物語だった。

そもそも、千冬や東が何かをしなくたって、世界は常に歪むものである。

千冬自身が引き起こした歪みをなかつた事にしたところで、歪みそのものはなくならない。

千冬は、その歪みすらも取り除きたいと宣った。

「だけど、どうすればいいか分からない。私も……奴と同じだ。戦う事しかできない破壊者……何処まで行っても、私という存在そのものが世界を歪める。だから、どうしていいのか、もう……」

どうすればいいのかわからない、それが今の千冬の全てだった。

世界を歪める事はこうも簡単であったというのに、それを正す手段を千冬が知らない。いや、そんな術など誰も知らない、持っていない。

「……………ハア」

そんな千冬に、沈黙を置いた後に、真耶がゆっくりとため息を吐く。

それは呆れでもあり、失望であるように聞こえた。

「織斑先生。私は貴女を決して許しません」

「……」

その言葉を、千冬は黙ったまま受け入れる。

許されるものならそれこそ「歪み」というものだろう。

「ですが、それ以上に私は、私自身が許せません」

「……山田先生？」

真耶の想定外の言葉に、千冬は思わず顔を上げる。

「私も貴女と同じです。空に憧れ、自分の夢を見続けて、周りの歪みから目を逸らした」

「山田先生……だがそれは——」

「悔しいんです、私」

まるで己にも罪があるかのような真耶の言葉に千冬は思わず声を上げるが、その声は再び真耶によって遮られた。

「貴女の事を白騎士だと薄々感づいていながら、今の関係が壊れる事を恐れて、貴女に一歩踏み出そうとしなかった。結果として、貴女から真実を聞くのが遅くなってしまい、今回のような事態を招いた」

自分というIS乗りの存在もまた、間違ひなく世界を歪めている原因であると気付きもしないまま、ここまでできてしまった。

真耶も千冬の懺悔を聞き入れ、ようやく彼女自身の罪を自覚した。

「私は、貴女の事も、私自信の事も許せないんです。だから、織斑先生」

真耶の、暖かい瞳が千冬を射抜く。

——やめろ、やめてくれ。

その瞳を直にうけた千冬は、心の中でそう叫ぶ。

真耶が何を言わんとしている事が分かってしまった千冬は、思わずその声を耳で塞ぎたくなった。

——私は、貴女のような優しい者が傍に在るべき人間ではないんだ、だから、やめて、どうか……。

「共に世界を変える方法を考えましょう」

——やめろ、聞きたくない。そんな事を言われたら、私は貴女に甘えてしまう。

「貴女が、一人で背負い込む事なんて、ないんです」

その言葉に、千冬の涙をせき止めていたダムが決壊した。